

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集

# 石崎 曲り田 遺跡

— III —

1985

福岡県教育委員会

# 正 誤 表

ページ・行	誤	→	正
P. 35 Fから5行目	「夜白式I」		「夜白I式」
P. 37 図の下	11~14		11~13
P. 58 上から7行目	突起もつもの		突起をもつもの
P. 83 Fから13行目	稲が存在た		稲が存在した
P. 88 Fから3行目	1cmあたり6~10本		1cmあたり経糸6~10本
P. 123 1行目 ※	辻田遺跡、 以下「辻田遺跡」はすべて「門田遺跡辻田地区」に訂正 P.123オ58図下, P.165 P.173の3行目		門田遺跡辻田地区 P.166図の下, P.169図の下
P. 134 16行目	文を含む土製紡錘車が		文を含む土製・石製紡錘車が
P. 135 図の下	「第64図」の小Captionに		(3・10・26のみ石製)を付け加える
P. 154 Fから8行目	三万期の特徴であり		三万田期の特徴であり
P. 176 註24の後	に付け加える		(本報告書中 P.35,オ17図など)

(今宿バイパス 11集)

〈曲り田遺跡Ⅲ〉

## お詫び

第12・13図に掲載した夏井浜貝塚出土資料については、かねてから小田富士雄氏を中心として報告書作成の準備が進められていたところであります。ところが、小田氏に了承を得ることなく本報告書に掲載するという不手際を生じ、小田氏に多大の御迷惑をおかけしました。衷心からお詫び申し上げるとともに、今後このようなことのないよう留意いたします。

橋口 達也

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集

# 石崎 曲り田 遺跡

— III —

1985

福岡県教育委員会

# 序

「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第11集 石崎曲り田遺跡—Ⅲ—が刊行の運びとなりました。今回の報告は1980年度に調査を実施しました。我国の水稲耕作開始期の遺跡として注目を集めた、糸島郡二丈町曲り田遺跡の埋蔵文化財の調査記録の一部で、とくに問題となります稲作開始期の諸問題に焦点をあてた考察編であります。

鉄器は新日本製鉄の佐々木稔・村田朋美・伊藤薫先生による金属学的調査が行なわれ、その結果を本書に収録させていただいたことは望外の喜びであります。

地元・建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所をはじめ数多くの方々の御協力によって調査と整理・報告が順調に進んだことを心からお礼申し上げます。

本書が文化財の保護と活用に広く利用され、又我国の稲作開始期の諸問題を深める上で一助ともなれば幸甚に存じます。

昭和60年3月31日

福岡県教育委員会

教 育 長 友 野 隆

# 例 言

1. この報告は1980年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道202号線今宿バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財の調査記録である。
2. 16号住居跡出土の鉄器については新日本製鉄の佐々木稔・村田朋美・伊藤薫氏による金属学的調査が行なわれ、その玉稿を頂いた。
3. 本報告の執筆分担は下記のとおりである。
  - I ……………橋口達也
  - II - 1 ……………橋口達也
  - 2 ……………中間研志
  - 3 ……………中間研志
  - 4 ……………佐々木稔・村田朋美・伊藤薫
  - III ……………橋口達也
4. 土器の製図は豊福弥生が、紡錘車・穿孔具の製図は中間研志が行なった。
5. 本書の編集は橋口達也が行なった。

# 本文目次

I. はじめに	1
II. 考察	5
1. 日本における稲作の開始と発展	5
1) はじめに	5
2) 稲作開始前後の土器編年	15
—御領から亀の甲まで—	
a. 研究史	15
b. 土器編年	19
c. 曲り田出土土器の分析	45
イ. 器種構成	45
ロ. 曲り田出土土器の編年的位置	69
d. 小結	76
3) 縄文晩期農耕論の再検討	77
a. はじめに	77
b. 最近の調査における後・晩期の遺跡・遺物の実態	81
c. 小結	86
4) 稲作の開始	88
a. 稲作の開始	88
b. 稲作の波及	90
5) 農耕社会の確立	94
6) まとめ	102
2. 紡錘車の研究	105
—我国稲作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開—	
1) はじめに	105
2) 研究小史	106
3) 日本の縄文時代～弥生時代の紡錘車	108
4) 朝鮮半島の原始紡錘車	129
5) その他周辺地域の紡錘車	143
6) 紡錘車の問題点	149

7) 日本の稲作開始期における紡錘車の歴史的意義	153
3. 磨製穿孔具集成	161
1) はじめに	161
2) 各地の出土例	161
3) 穿孔技術の復原	170
4) 打製石錐との関係	172
5) 環状石斧用穿孔具をめぐって	173
6) 磨製穿孔具の歴史的意義	174
4. 出土鉄斧の金属学的調査 (II)	177
1) はじめに	177
2) 鉄器試料と調査方法	177
3) 調査結果と考察	177
4) まとめ	178
III. おわりに	185



# 挿 図 目 次

第 1 図	広田Ⅰ式の土器 (縮尺1/6) .....	20
第 2 図	広田Ⅱ式の土器(その1) (縮尺1/6) .....	21
第 3 図	広田Ⅱ式の土器(その2) (縮尺1/6) .....	22
第 4 図	広田Ⅲ式の土器(その1) (縮尺1/6) .....	23
第 5 図	広田Ⅲ式の土器(その2) (縮尺1/6) .....	25
第 6 図	広田Ⅳ式の土器 (縮尺1/6) .....	26
第 7 図	黒川洞穴出土土器 1 (縮尺1/4) .....	27
第 8 図	黒川洞穴出土土器 2 (縮尺1/4) .....	28
第 9 図	礫石原遺跡出土土器 (縮尺1/4) .....	折込
第 10 図	高原遺跡出土土器 (縮尺1/4) .....	29
第 11 図	長行遺跡出土土器 (縮尺1/4) .....	30
第 12 図	夏井浜貝塚出土土器 (縮尺1/4) .....	31
第 13 図	夏井浜貝塚出土アワビ貝製穂摘具 (縮尺1/2) .....	32
第 14 図	原山遺跡出土土器 1 (縮尺1/6) .....	33
第 15 図	原山遺跡出土土器 2 (縮尺1/6) .....	34
第 16 図	原山遺跡出土土器 3 (縮尺1/4) .....	34
第 17 図	原山遺跡出土の磨製石器 (縮尺1/3) .....	35
第 18 図	板付Ⅰ～Ⅱ式(古)の高坏の分類 (縮尺1/6) .....	37
第 19 図	今川遺跡出土土器 1 (縮尺1/6) .....	39
第 20 図	今川遺跡出土土器 2 (縮尺1/6) .....	40
第 21 図	今川遺跡出土土器 3 <夜臼系土器> (縮尺1/6) .....	41
第 22 図	大島遺跡出土の夜臼系土器 (縮尺1/4) .....	43
第 23 図	曲り田出土の壺 1 丹塗り磨研壺 (縮尺1/3) .....	46
第 24 図	曲り田出土の壺 2 丹塗り磨研壺 (縮尺1/3) .....	47
第 25 図	曲り田出土の壺 3 丹塗り磨研壺 (縮尺1/3) .....	48
第 26 図	曲り田出土の壺 4 黒色磨研壺 (縮尺1/3) .....	49
第 27 図	曲り田出土の壺 5 粗製品 (縮尺1/3) .....	50
第 28 図	曲り田出土の壺 6 無文土器系 (縮尺1/3) .....	51
第 29 図	曲り田出土の甕 (縮尺1/3) .....	51

第 30 図	曲り田出土の高坏 (縮尺1/3) .....	52
第 31 図	曲り田出土の浅鉢 1 (縮尺1/3) .....	53
第 32 図	曲り田出土の浅鉢 2 (縮尺1/3) .....	54
第 33 図	曲り田出土の浅鉢 3 (縮尺1/3) .....	55
第 34 図	曲り田出土の浅鉢 4 (縮尺1/3) .....	56
第 35 図	曲り田出土の深鉢 (縮尺1/3) .....	57
第 36 図	曲り田出土の鉢 (縮尺1/3) .....	57
第 37 図	曲り田出土の甕 1 (縮尺1/3) .....	59
第 38 図	曲り田出土の甕 2 (縮尺1/3) .....	60
第 39 図	曲り田出土の甕 3 (縮尺1/3) .....	61
第 40 図	曲り田出土の甕 4 (縮尺1/3) .....	62
第 41 図	曲り田出土の甕 5 (縮尺1/3) .....	63
第 42 図	曲り田出土の甕 6 (縮尺1/3) .....	64
第 43 図	曲り田出土の甕 7 (縮尺1/3) .....	65
第 44 図	曲り田出土の甕 8 (縮尺1/3) .....	66
第 45 図	曲り田出土の甕 9 (縮尺1/3) .....	67
第 46 図	曲り田出土の甕 10 (縮尺1/3) .....	68
第 47 図	曲り田出土土器の編年図 1 (縮尺1/8) .....	70
第 47 図	曲り田出土土器の編年図 2 (縮尺1/8) .....	71
第 47 図	曲り田出土土器の編年図 3 (縮尺1/8) .....	72
第 47 図	曲り田出土土器の編年図 4 (縮尺1/8) .....	73
第 47 図	曲り田出土土器の編年図 5 (縮尺1/8) .....	74
第 48 図	早良平野における弥生早～前期の遺跡 (縮尺1/50,000) .....	95
第 49 図	三沢丘陵における弥生前期の遺跡 (縮尺1/25,000) .....	98
第 50 図	縄文後期末三万田期の紡錘車 (縮尺1/3) .....	109
第 51 図	縄文後期末～晩期前半の紡錘車 1 (縮尺1/3) .....	110
第 52 図	縄文後期末～晩期前半の紡錘車 2 (縮尺1/3) .....	111
第 53 図	縄文晩期中葉～後葉の紡錘車 (縮尺1/3) .....	114
第 54 図	曲り田・夜白期の紡錘車 1 (縮尺1/3) .....	116
第 55 図	曲り田・夜白期の紡錘車 2 (縮尺1/3) .....	117
第 56 図	夜白～板付 I 式期の紡錘車 (縮尺1/3) .....	119
第 57 図	夜白～弥生前期各地の紡錘車 (縮尺1/3) .....	121
第 58 図	弥生前期の紡錘車 (縮尺1/3) .....	123

第 59 図	弥生前期末～中期前半の紡錘車 (縮尺1/3) .....	124
第 60 図	貝の花貝塚出土紡錘車 (縮尺1/3) .....	126
第 61 図	西広貝塚出土紡錘車 (縮尺1/3) .....	127
第 62 図	東北朝鮮の紡錘車 1 (縮尺1/3) .....	131
第 63 図	東北朝鮮の紡錘車 2 (縮尺1/3) .....	133
第 64 図	西北朝鮮の紡錘車 (縮尺1/3) .....	135
第 65 図	コマ形土器に伴う紡錘車 (縮尺1/3) .....	137
第 66 図	南半朝鮮無文土器に伴う紡錘車 1 (縮尺1/3) .....	140
第 67 図	南半朝鮮無文土器に伴う紡錘車 2 (縮尺1/3) .....	142
第 68 図	中国新石器時代の紡錘車 (縮尺1/3) .....	145
第 69 図	穿孔具集成 1 (縮尺1/2) .....	163
第 70 図	穿孔具集成 2 (縮尺1/2) .....	166
第 71 図	穿孔具集成 3 (縮尺1/2) .....	168
第 72 図	穿孔具集成 4 (縮尺1/2) .....	169
第 73 図	穿孔具使用想定図.....	171

# I. はじめに

建設省九州地方建設局から福岡県教育委員会が委託を受けた一般国道202号線今宿バイパス関係の埋蔵文化財の発掘調査の進行状況は第2表に示すとおりである。これらの発掘調査の成果は現在まで「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」として第1～第11集が刊行されている(第1表)。

第1表 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧

番号	副題	収録した遺跡	報告者	備考
第1集	福岡市大字拾六町所在の遺跡群	湯納遺跡 宮の前遺跡・E地点 高崎古墳群 大又遺跡	浜田 信也 酒井 仁夫 浜田 副島 邦弘	1969年調査 1970年報告
第2集	福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡	若八幡古墳 飯氏馬場遺跡 飯氏鏡原遺跡	柳田康雄、浜田、副島、 永井 昌文 柳田、副島、浜田	1970・71年調査 1971年報告
第3集	福岡市西区大字拾六町所在の遺跡	高崎古墳群 大又遺跡	栗原 和彦 上野 精志	1971年調査 1973年報告
第4集	福岡市西区大字拾六町所在 湯納遺跡の調査	湯納遺跡	青峰重範、松本 昂 林 弘也、山本輝雄 栗原、上野、馬田弘稔	1971・72年調査 1976年報告
第5集	福岡市西区・糸島郡前原町所在 遺跡の調査	湯納遺跡 今宿大塚南遺跡 今宿高田遺跡 今宿小塚遺跡 糸島平野条里及び古 野遺跡 上籬子遺跡	沢村 仁 松本、林 細川 隆英 粉川 昭平 弓場 紀知 栗原、柳田 上野、馬田、	1971・72・73年 調査 1977年報告
第6集	糸島郡前原町大字波多江所在 「波多江遺跡」	波多江遺跡	松本、林、大澤正己 丸山雍成、橋口達也 高橋 章、馬田	1978年調査 1982年報告
第7集	糸島郡二丈町深江・大入地区所在 遺跡の調査	塚田遺跡 鎮懐石八幡宮裏古墳 赤岸遺跡	大澤、橋口、中間 橋口達也 中間研志	1979年調査 1982年報告
第8集	石崎・曲り田遺跡Ⅰ	曲り田遺跡	橋口達也、中間研志 上原周三、長 哲二	1980・81年調査 1983年報告
第9集	石崎・曲り田遺跡Ⅱ	曲り田遺跡	佐々木稔、大澤正己 東村武信、藁科哲男 船越公威 橋口達也、中間研志	1980・81年調査 1984年報告
第10集	今宿・高田遺跡	今宿高田遺跡	大澤正己、橋口達也 佐々木隆彦	1982年調査 1984年報告
第11集	石崎・曲り田遺跡Ⅲ	曲り田遺跡	橋口達也、中間研志 佐々木稔、村田朋美、伊藤薫	1980・81年調査 1985年報告
第12集	東・太田遺跡	太田遺跡	橋口達也、佐々木隆彦	1983年調査 1985年報告

第2表 今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査の実績及び予定一覧

地点 番号	遺 跡 名	所 在 地	調査所要区間			44年度	45年度	46年度
			長 さ	幅	面 積			
			m	m	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>
1	遺物散布地	福岡市西区大字拾六町	34	28	520	45		
2	〃	〃	52	50	2,600	63		
3	湯納遺跡	〃	280	40	11,200	168		1,200
3'	〃	〃	30	20	600			
4	宮の前遺跡	〃	110	40	4,400	400		
5	高崎1・2号墳	〃	36	15	540	160		
6	大又遺跡	〃	57	20	1,140	300		900
6'	高崎3・4・5号墳	〃	40	15	600	200		249
7	須恵器散布地	〃	55	20	1,100	27		
8	弥生散布地	〃	33	39	1,287			
9	若八幡古墳	福岡市西区徳永	50	40	2,000		1,100	
10	馬場遺跡	福岡市西区飯氏	70	70	4,900		290	
11	鏡原遺跡	〃	70	50	3,500		550	
12	条里遺跡	福岡市西区大字飯氏 ～糸島郡前原町篠原	3,000	40	120,000			136
13	古野遺跡	糸島郡前原町大字有田・篠原	150	40	6,000			482
14	上籬子遺跡	糸島郡前原町大字有田	70	30	2,100			304
15	遺物散布地	〃	300	30	9,000			
16	古墳2基	糸島郡前原町	30	30	900			
17	遺物散布地	〃	100	30	3,000			
18	〃	〃	40	30	1,200			
19	今宿高田遺跡	福岡市西区大字今宿字高田	50	40	2,000			
19'	今宿大塚南遺跡	福岡市西区大字今宿	100	40	4,000			
20	今宿小塚遺跡	福岡市西区大字今宿女原	30	40	1,200			
21	遺物散布地	糸島郡前原町	250	20	5,000			
22	〃	〃	50	40	2,000			
23	〃	〃	100	20	2,000			
24	〃	〃	230	20	4,600			
25	〃	〃	150	20	3,000			
26	〃	〃	200	20	4,000			
27	太田遺跡	糸島郡前原町東	300	30	9,000			
28	石崎曲り田遺跡	糸島郡二丈町大字石崎字曲り田	200	30	6,000			
29	遺物散布地	糸島郡二丈町大字上深江	100	40	4,000			
30	〃	糸島郡二丈町大字深江	100	40	4,000			
31	〃	〃	100	30	3,000			
(32)	鎮懐石八幡宮裏古墳	〃						
(33)		糸島郡二丈町大入						
(34)	赤岸遺跡	〃						

既 調 査 面 積										残 調 査 予 定 面 積	備 考	
47年度	48年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	計			
m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	
4,612	450									45	0	調査不要
										63	0	〃
										5,980	0	発掘調査終了, 報告書既刊
										450	0	〃
										400	0	報告書既刊
										160	0	発掘調査終了, 報告書既刊
										1,200	0	〃
										449	0	〃
										27	0	調査不要
										0	0	消滅
										1,100	0	保存確定, 報告書既刊
										290	2,000	一部調査終了, 報告書既刊
										550	2,000	〃
		3,360								3,496	0	調査終了, 報告書既刊
										482	0	〃
630										934	0	〃
										4,500		
										0		路線変更のための調査不要
										0		〃
										1,000		旧追1
							2,000			2,000	0	旧追2, 58年度
	650									650	0	旧追2, 調査終了, 報告書既刊
	500									500	0	旧追3,
										1,000		
										400		
										400		
										900		
										600		
										800		
							2,700			2,700	0	58年度調査, 59年度報告
					2,000					2,000	0	調査終了, 57~58年度一部報告
					100					100	0	遺構なし
			3,000							3,000	0	調査終了, 56年度報告
										0		調査不要
										100	0	調査終了, 56年度報告
										30	0	(二丈浜玉道路)
										30	0	調査終了, 遺構なし
										350	0	(二丈浜玉道路)
			224									

第11集でとりあげるのは第28地点、糸島郡二丈町石崎所在「曲り田」遺跡の調査であるが、遺構・遺物については第8集・第9集で既に報告しているので、今回は特に曲り田遺跡出土の我国における稲作開始期の遺物をとりあげて、その考察を行なった。

調査関係者は下記のとおりである。

総括	福岡県教育委員会	教育長	友野隆
	〃	文化課長	前田栄一
庶務会計	〃	文化課主任主事	川村喜一郎
調査担当	〃	文化課技術主査	橋口達也
	〃	文化課主任技師	中間研志

なお、遺物整理・図面整理・浄書等に大野由美子・蓑原鈴美・大田育子・原カヨ子の諸姉には多大の協力を受けた。記して感謝する。

## Ⅱ. 考 察

### 1. 日本における稲作の開始と発展

#### 1) はじめに

板付遺跡における板付Ⅰ式と夜臼式単純層の水田遺構の確認という成果にひきつづき、唐津市菜畑遺跡、福岡県二丈町石崎曲り田遺跡等の発掘調査による多量かつ良好な夜臼期資料の出土は、考古学をはじめ各分野から稲作の開始つまり弥生文化の成立の問題に、きわめて重大な関心と呼びおこしている。水稻栽培を基礎としたこの農耕社会の成立こそが、日本における古代国家の形成とその後の社会、ひいては現代日本の特殊性をも規定づけた最も直接的な第一歩であったことからいえば当然のことといえよう。

弥生文化の内容は、米・紡錘車・織布・定形化された土器・大陸系磨製石器を含む農耕具・金属器・支石墓等にもとめられ、これらの要素が積み重ねられていき、緊密に組合わされて、完全な形を備えた時が弥生文化の成立であるとされ、板付Ⅰ式土器をもって弥生時代の始まりとされてきた。板付・菜畑・曲り田遺跡等における調査成果からすれば、稲作の開始は確実に板付Ⅰ式よりも遡り、従来縄文晩期とされてきたこの時期に、弥生文化を構成する諸要素も既に整っているといえる。したがってこれらの時期が縄文文化であるのか、弥生文化であるのかの詳細な検討が必要と考える。

又弥生文化は大陸・朝鮮からの影響のもとに成立したといわれている。そして今までの研究ではこの一面だけが強調される立場が多数を占めてきた。弥生文化は縄文文化のなかからの内部的発展と、大陸・朝鮮からの外的要因が緊密に絡みあって成立したといえる。したがって内部的発展すなわち縄文後晩期の萌芽的農耕の発生と発展という日本側での条件の醸成にも正当に目を向けるならば、すでに体系化された高度の文化を受け入れ、在来的要素と融合させながら、日本独自の弥生文化をつくり出していく過程が、より鮮明になるものと思われる。

いま、稲作の開始つまり弥生文化成立についての研究史を簡単にふりかえりながら問題点を整理し、本論にはいって行くことにしよう。

1884年（明治17年）に東京都文京区弥生町遺跡から出土した1個の壺が契機となって、弥生式土器が認定された後、しばらくは使用人種・民族論にその論議の重点がおかれた。その後大



正期にはいるとヨーロッパの研究方法を導入した京都帝国大学の浜田耕作による科学的調査法が確立され、又日本列島周辺民族の調査に従事し、民族論の一方の旗頭であった鳥居龍蔵も近畿地方の弥生遺跡の調査から、弥生土器に伴う石器は大陸系の石器であると指摘した。<sup>(2)</sup> 中山平次郎は北部九州の甕棺を中心とする弥生遺跡の調査から、甕棺は弥生土器であり、<sup>(3)</sup> 甕棺に青銅器・鉄器の副葬されることから金属器時代への過渡期であるとし、金石併用時代を提唱した。<sup>(4)</sup> 又中山平次郎は福岡県八女市岩崎の堅穴より出土した炭化米を報告した。このようにこの時期は、弥生土器には米・石器・金属器が伴うことが確認され、弥生文化の実態がより鮮明になりつつある時代であった。<sup>(5)</sup>

しかしながら弥生時代が稲作に立脚した農耕社会であるとの認識と本格的な研究は、1930年代にはいつてから山内清男の指摘と森本六爾等の精力的な活動に負うところが大きかった。山内清男は弥生時代には大陸との交渉が生じ、農業が伝来し、一般化したと説き、『この時代に入ってはじめて食料が「生産」されるに至ったのである。栽培された植物は主として稲であったらしく、黒焦げの米・粃殻が当時の住居から発見され、又土器の底部等にその圧痕が残っていることもある。これと同時に農具と見るべき器具も亦出現して居るのは偶然ではない。…』としている。<sup>(6)</sup> 森本六爾は弥生文化と農業に関する一連の論文を発表し、弥生時代は水稻耕作による原始農業社会に生まれた文化と規定し、石器も農業という新経済生活に適する形態を示すと同様、土器も貯蔵の形態としての壺・煮沸の形態としての甕が、農業生活に伴う食料の貯蔵・煮沸に密接に結ばれているとし、そして供献の器として高杯があらわれ、貯蔵と供献の器には、丹色美しく塗り飾られるものが多いとした。<sup>(7)</sup>

これらの論考の発表される直前(1931年)福岡県遠賀郡水巻町立屋敷において、名和羊一郎によっていわゆる遠賀川式土器が発見され、中山平次郎等によって紹介された。<sup>(8)</sup> 中山平次郎はこれらの土器を第二系、須玖式土器を第一系とし、第一系よりも後出するものと考えた。<sup>(9)</sup> 小林行雄は安満遺跡および播磨吉田遺跡の土器を検討するなかで、この考えを逆転させ、遠賀川式土器はまず北九州に第一歩を印して、西から東へと文化伝播することを論じた。<sup>(10)</sup> さらに小林は「先史考古学における様式問題」を発表し、森本六爾等とともに聚成した「弥生式土器聚成図録」<sup>(11)</sup> を東京考古学から刊行した。<sup>(12)</sup> 又同じころ行われた奈良県唐古遺跡の調査と、その報告書で展開された小林行雄の編年観は戦前における到達点ともいえるものであった。又少量ではあるが縄文系土器の出土と、第一様式土器の一片に縄文の存在が認められ、縄文土器との交渉が留意されたことは注目値する。さらに唐古の調査による多量の木製農具・石器その他は、弥生文化が水稻栽培に立脚した農耕社会であるという認識を飛躍的に高めた点で特筆すべきであろう。<sup>(13)</sup>

一方北部九州では、森貞次郎が遠賀川式後期から須玖式前期へかけての立岩文化期を論じるなかで、遠賀川式土器を東菰田式・下伊田式・立屋敷式に分類した。これはほぼ今日の板付Ⅰ

式・Ⅱ式に相当するもので、東菰田式が最古の弥生土器と認識され、戦後の板付遺跡・夜臼遺跡等の調査へと大きく飛躍する、これまた北部九州における戦前の到達点を示したものであった。<sup>(14)</sup>

敗戦直後から遠賀川式の最古の土器と、縄文系統の土器の接点を遺跡の上でとらえようとする動きが始まった。その中心となったのは森貞次郎・岡崎敬の両氏であった。縄文系統の土器は福岡県中間市下底井野で刻目凸帯文をもつ甕が報告され、又唐津市の龍溪頭亮の蒐集資料中に遠賀川式土器とともに刻目凸帯文土器があり、柏崎貝塚と注記されており、注目されていた。<sup>(15)</sup> 1950年夏、森貞次郎等による福岡県粕屋郡新宮町立花貝塚第二次調査の際、最下層から縄文系の土器が発見され、近接する夜臼遺跡の調査も行われた。その際、弥生土器として最古型式の土器とともに条痕のある縄文系の土器が発見された。これがこの遺跡名をとって名付けられた夜臼式土器であった。<sup>(16)</sup> 同じ頃、板付遺跡において弥生土器や縄文系の土器が出土することが中原志外顕によって注意され、1951年1月、岡崎敬・中原志外顕の両氏によって板付遺跡の試掘が行われた。<sup>(17)</sup> かくして柏崎・夜臼・板付三遺跡の本格的調査が期待されることとなり、日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会の事業の一環として調査が実施されることとなった。その成果は周知のとおりであって、最古の弥生土器である板付Ⅰ式に縄文系統の夜臼式土器が伴い、炭化米・大陸系磨製石器等が出土し、稲作農耕を基盤とする文化であることが確認されたのであった。

これらの調査成果を契機として、板付Ⅰ式に伴う縄文系土器が注目され、弥生文化がそれ以前の縄文文化のなかからどのようにして成立してくるのが追求された。これらは島原半島および唐津市上場地帯の縄文晩期遺跡が対象とされ、日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会によって1960～1961年にかけて、日本農耕文化の起源に関する研究として調査が行われた。<sup>(18)</sup> これらの調査成果は、縄文晩期のなかに弥生文化を構成する諸要素のいくらかが認められ、大陸・朝鮮からの影響のみでなく、縄文晩期の内的諸要因の発展にも正しく眼を向けられていったという点で、戦後日本考古学の大きな成果の一つであったと考えられる。

1965～1966年に九州大学によって唐津市宇木汲田貝塚の調査が行われた。この調査では夜臼式土器の単純層が確認され、同層中より炭化米2粒が発見され多大の成果を得ることができたが、この事実関係には疑義も示され考古学会全体の成果とするまでには至らなかった。<sup>(19)</sup> 1967～1968年には福岡市教育委員会・九州大学によって福岡市早良区有田遺跡で、板付遺跡と同様のV字溝が調査され、夜臼式・板付Ⅰ式の共伴が確認された。<sup>(21)</sup>

又1968年から日本考古学協会農業史部会によって板付遺跡の再調査が開始され、その後、福岡市教育委員会（1969年）、福岡県教育委員会（1970年）と調査が行われ、この頃より激しくなった開発に対応するため1971年より福岡市教育委員会によって板付およびその周辺遺跡の調査が継続されることとなった。1978年、夜臼式と板付Ⅰ式の水田遺構の調査を担当した山崎純<sup>(22)</sup>

男は板付遺跡を中心としながら「弥生文化成立期における土器の編年的研究」を発表し、夜臼式～板付Ⅰ式の編年を試みた。<sup>(23)</sup>

唐津市教育委員会によって1979年12月に発見され、翌1980年1月にかけて試掘、1980年12月～1981年9月にかけて本調査が行われた唐津市菜畑遺跡は、良好な資料に恵まれ多大な成果を収めた。調査報告書は既に刊行され、又多くの報文によってその調査成果は既に周知のところとなっている。中島直幸は晩期中頃黒川式（菜畑13層）、晩期後半山の寺式（菜畑9～12層）、晩期終末夜臼式（菜畑8層下層）<sup>(24)</sup>と土器を層位的に分類し、山の寺式期には弥生的な農耕文化の姿をみるが、他方では縄文晩期の伝統を受けつぐ最後の時期であるとし、まさに縄文晩期と弥生前期との橋渡しの時期であるとする。又山の寺式期には玄界灘沿岸の唐津～福岡にかけての地域では水稻農耕が始まっているが、その他の地域では水稻耕作を示す証拠は何一つないとしている。

菜畑と同じ頃1980年11月～1981年3月にかけて、ここで報告する福岡県二丈町石崎曲り田遺跡の調査が福岡県教育委員会によって行なわれた。菜畑と同様多くの成果を得た。特筆すべきは住居跡・支石墓等の多くの遺構を伴ったことである。遺構・遺物の詳細については先に報告しているので参考にされたい。<sup>(25)</sup>

その後1984年10月～12月にかけて九州大学が、再び唐津市宇木汲田貝塚の調査を行っている。稲作の開始（弥生文化の成立）をめぐる現在までの状況は以上のとおりである。

板付・菜畑・曲り田における調査成果があらわれる以前、1973年に春成秀爾は「弥生文化はいかにして始まったか」という論文を発表し、その後も抜歯風習・婚姻形態等この時期をテーマにした論考を発表している。「弥生時代はいかにしてはじまったか」<sup>(26)</sup>で春成の提起した問題は重要と思われるので、ここでとりあげてみたい。氏はまず「弥生時代にはじまる「水稻栽培の播種から収穫、さらに調理までの一連の技術は、単なる模倣によっては得られないと考えられる」ので「朝鮮南部から、一群の人々の移住があったと考えるのが適切で」、したがって弥生文化の成立は、「縄文時代の人びとが一方ではこれまでのように狩猟と漁撈と採集の原始的な性格を残しながらも、朝鮮南部からの渡来集団の影響のもとに、みずからの社会を質的に変化させていったもの」という今日「学界で支配的な所説」を紹介し、次のような問題を設定する。『もしそう考えるのであれば、次のような素朴な疑問が当然でてくるだろう。すなわち、縄文時代の人びとは「渡来集団」といかなる社会的な関係を結び、彼らから「影響を受け、みずからの社会を変革させていったのか、そのいっぽう朝鮮南部の人々はいかなる必然性があった日本列島に渡海移住してきたのか、何を単位とする集団でその規模はどの程度であったのか、そして彼らはその後いかなる途を歩んでいったのか等々。』そして、この問題に関する「これまでの議論」は、『あくまでも「縄文時代の人びと」の主体的条件、つまり稲作技術体系その他生活変革をうけいれる体制にあったことが強調され、「朝鮮南部からの一群の人々の移住」

は、新しい「文化」を伝達した契機としてのみ問題にされることが特徴的であったように思う。」とし、これに対置して『しかし、いったん私たちの立脚点を「渡来集団」の側にうつすならば、はたしてどうか』という氏の立論の出発点を提示する。氏はこの大前提のもとに、「従来の所説と既出資料を再検討」し、とくに「夜臼式・板付Ⅰ式土器の諸要素の分析を通して、朝鮮南部からの移住者集団の存在を浮びあがらせ」という手法をとっている。さきにもたように板付遺跡等の発掘によって最古の弥生式土器である板付Ⅰ式と縄文系統の土器である夜臼式土器の共伴が確認され、それを契機として日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会によって行われた島原半島・唐津等の縄文晩期遺跡の調査において、縄文晩期のなかに弥生文化を構成する諸要素のいくらかが認められ、朝鮮からの影響のみでなく、縄文晩期の内的諸要因にも正しく眼を向けられていったという点で、これらの調査は戦後日本考古学の大きな成果の一つであったと私は理解している。しかしながら弥生時代の開始（水稻耕作の開始）に関するこれまでの議論は、春成の説くところとは逆に、縄文時代の人びとの主体的条件を強調する説はおもに北部九州の研究者を中心としてむしろ少数に属しており、氏が注で代表的な各氏の見解を要約しているのをみてもわかるように、朝鮮からの影響を重視する説が現在でも多数を占めているように思われる。氏の問題提起は、朝鮮からの影響と縄文晩期からの発展という、弥生文化の開始をめぐる二つの側面のうち、朝鮮からの影響のみを強調する、というよりはむしろ朝鮮からの渡来集団によって弥生文化が開始されたという結論にまで問題が拡大されている。このような問題の設定自体が、縄文晩期のなかに認められる弥生時代へと連続する諸要素を否定し、あるいは無視するという点で、一つの方法上の弱点をさらけ出していると思われる。また外的要因のみを一面的に重視することによって、問題を移住者と縄文人との関係又は夜臼式土器と板付式土器との関連だけに矮小化し、弥生文化の成立（稲作の開始）という重要な画期をめぐる社会発展の問題を客観的には軽視していると考える。さらに重要なことは、この時点で調査の未だ不十分であった朝鮮側の資料を、憶説に憶説を重ねることによって、事実から出発するという基本的観点が欠落している。土器論等具体的内容は本論でさらにふれることになろうから省略するが、氏の問題提起そのものは重要ではあるが、氏の所説の内容には以上のような重大な問題が含まれていると考える。

岡本勇は「稲と金属器による新しい文化は、それをたずさえた人種が大挙渡来し、先住民つまり縄文人を淘汰しつつ拡散していったようなものでは決してない。新しい文化を主体的に受け入れたのは、この島国に以前から住む人々であったことは、もはや確実であろう。ただ新しい文化とともに若干の人々が移住したとする可能性は、十分に考えられることである。」としながら、板付遺跡等での夜臼式と板付Ⅰ式土器の個別別の割合から、板付Ⅰ式では壺がはるかに多く、甕が少ないという点を、夜臼式の甕でおぎないあい貯蔵形態の壺と煮沸形態の甕とがセットをなすと考え、「夜臼式が縄文式土器の伝統をもつものであったことはうたがいないが、

この両者のからみあった混沌とした姿こそ、成立期の弥生式土器の姿であり、ここにこそ大きな謎が秘められている」とする。この岡本の夜臼式と板付Ⅰ式がセットをなすという考えが、先の春成の見解に一つの示唆を与えたものとも考えられる。さらに岡本は弥生時代成立のメルクマールとして「貯蔵形態の土器として、農耕生活の必要から生れた」定形化した大形壺の出現をあげている。

<sup>(28)</sup>  
近藤義郎は「西日本においても、縄文式土器の伝統の上に弥生式土器が成立したものであることは当然である。」「さきだつ縄文文化の主体的条件が、後にもふれるように、稲作という生産経済やその他新しい種々の全面的な変革をうけ入れる状態にあったといえるだろう。」「一つの文化（ここでは新たに成立した板付式文化）が、異質でまた組み<sup>セット</sup>合わせを異にする二つの土器群を同時に製作したと考えることはできないから、少なくとも夜臼式土器の製作は板付式土器の確かな誕生にさきだつてなされたと考えてよい。」というすぐれた見解を示している。

<sup>(29)</sup>  
佐原真は、弥生時代は「日本で食糧生産を基礎とする生活が開始された時代」とであると定義づける。そして「現在では、縄文土器・弥生土器・そして古墳時代の土師器を製作技術の上で区別することは、ほとんど不可能な段階にまでたちいっている。」「なぜかという、日本の窯業史上、これらの土器は技術的に一系であって、(1)ロクロを使用せずに造り（土師器の一部を例外とする）、(2)窯を使用することなく、(3)1000度未満の酸化焰で焼き上げる、という基本的技術を共有しているからである。」「したがって現状では縄文時代・弥生時代・古墳時代を土器と無関係に定義し、酸化焰で焼成した一系の土器のうち、縄文時代の土器を縄文土器、弥生時代の土器を弥生土器、古墳時代の土器を土師器とよぶほうが実情に適しているといえよう。冒頭の定義にしたがって、弥生土器は、日本で食糧生産を基盤とする生活が始まった時代の土器であって、前方後円墳の出現をもって土師器と名を改めるのである。」とする。又「食糧生産民のうち、農民の土器は、火にかける土器・捧げる土器、盛りつける土器、水をくむ土器、たくわえる土器等、数器種から出発している。」とし、弥生土器は「壺・甕・鉢など数器種から成り立っている点は、農民の土器としての性格をそなえている。」としている。氏は縄文後晩期の農耕論にはどちらかという否定的な立場をとっている。「縄文をほどこしていた時期以来の深鉢・浅鉢という、縄文土器の基本的器種の組み合わせが、縄文の消失にかかわらず、晩期末にいたるまで間断なく伝えられている事実は、さほど重視されていない。しかし、西日本の縄文土器がその器種構成を変えずに終末まで継続したことは、縄文の消失にもまして重視すべきことと考える。西日本でなんらかの農耕が後晩期に開始されていたことをみとめるとしても、それは調理具・食器の内容をとくに変えるほどのものではなかったのであって、これは、食生活に大きな変動がなかったためにほかなるまい。ヒエ・アワ・キビなどの雑穀や米を食べる生活にきりかわってはいないことの反映とよみとりたい。」とする。

<sup>(30)</sup>  
次に稲作開始にとって最も基本をなす米の伝播経路の問題を簡単にみてみよう。米が弥生土

器に伴うことは、弥生土器認定直後から知られ、その後大正時代には炭化米・土器についての粃圧痕等の報告も中山平次郎・山内清男らによってなされた。森本六爾らは炭化米および粃圧痕資料を集成して、弥生文化を稲作農耕社会としてとらえた戦前の研究については、先にその一端を紹介した。戦後においては九州大学農学部育種学教室・同文学部考古学研究室による九州出土古代米の集成、森貞次郎・岡崎敬による縄文晩期および板付遺跡出土の炭化米および粃圧痕の計測等がすすみ、佐藤敏也は全国的に出土古代米の集成を行っている。その後、先にみてきた稲作開始期の遺跡の調査では炭化米・粃圧痕土器の資料が増加してきている。これらは短粒でいわゆる日本型の米に属している。このことからしても日本型、インド型の両者の存在する華中より朝鮮半島および北部九州へ直接米が伝播したとする考えは説得性にかける。ましてやかつて出された北方説（華中→朝鮮→北部九州）、南方説（華中→南島→九州）は現在では論議する必要はなからう。岡崎敬は中国先史時代～漢・魏代における稲作農業をとりあげ、淮水以北での稲の栽培を認め、つまり華中から華北にもたらされ一定の訓育をうけて品種改良をされた日本型の米が、山東半島から西朝鮮に伝えられ、さらに日本に流入したという見解を提示している。弥生時代の炭化米・粃圧痕が短粒に属するいわゆる日本型であること、稲作がその開始当初から体系化された形態をもっていることからすれば、現在のところこの岡崎の見解が米の伝播経路については最も妥当と考える。

先ほどからみているように、弥生文化成立にとって、大陸・朝鮮からの影響は又重要な側面であることは誰でもが認めるところであり、これには常に渡来人の問題をも伴っている。したがって今ここで、弥生人について人類学的研究について簡単にみておこう。南関東の縄文時代から現代における人骨の形質的特徴の時代的变化を追求した鈴木尚は、弥生人は縄文人と古墳人との中間的な性格を有し、関東地方の人骨に関する限り、縄文人が弥生人を経て古墳人になったとする可能性が強いとする。そして明治維新の頃の人骨の例をひき、弥生時代と明治維新で、急激な形質の変化が起こったとし、その原因として、環境、それも栄養状態・光の刺激などが関係していることをあげた。北部九州および山口県において多くの弥生人骨を発掘した金関丈夫は、北部九州、山口に限ってと断ったうえで「縄文時代の晩期に、北九州（山口）では、朝鮮新石器時代人、ことにそのⅡタイプ〔頭骨長が比較的大きく、頭骨幅が小さいタイプ〕のごとき体質的要素が、より高級な新しい文化とともに渡来した。この渡来者は身長においてもおそらく現代南朝鮮のごとき比較的長身者であったかとおもわれる。これが従来の縄文人の体質に影響をあたえて、土井ヶ浜人のごとき体質を生みだした。しかしその渡来は一時的であり、その数は在来の縄文人に比してはるかに少数だったために、さきに引用したごとき逆行現象がその後におこった。」そして国府遺跡発掘の長身人骨の例をあげて「しかも近畿地方人の身長は、北九州山口の例のごとくその後も縄文期の低身長に逆行することなく、現代までその大きさを保持したと考えられる。これは弥生時代からひきつづき古墳時代以後にわたって

も、ある程度大陸要素の渡来が持続したことを想像させる。」とする。又「弥生人の渡來說(36)に対する反駁として、ときどき聴かされるのは縄文土器と弥生土器とに連続があり、文化はとぎれていない、という説である。この大変革中の小連続は、その社会の土器作りが、女性の仕事であったことを考えると問題でなくなる。初期の移住者は、世界各国どこでも同様であるが、そのほとんどが男性で、彼らはゆくさきの女性を容れて新しい社会を作るのである。」として(37)いる。近年内藤芳篤・松下孝幸は、西北九州弥生人の研究から「三津・土井ヶ浜両弥生人は、縄文人と比較して、脳頭蓋の諸径および顔面頭蓋の幅径では著しい差がなく、顔面頭蓋の高径が著しく高い。」「西北九州人は、脳頭蓋の諸径に関しては三津・土井ヶ浜両弥生人および津雲縄文人との間に、それぞれ多少の差はあるが、男性骨のみでなく、女性骨の成績も考え合わせると、明らかな差異は認められない。顔面頭蓋については、西北九州人は三津・土井ヶ浜両弥生人と比較して幅径では著しい差がなく、高径では著名に低くなっており、……津雲縄文人との比較では……幅径でやや小さく、高径では僅かに高く、したがって示数値ではいくらか大きい値を示しているが、その差は著しいものではなく、むしろ類似の傾向が強いようである。眼窩示数・鼻示数についても、顔型の場合と全く同様の傾向が認められる。」身長は「低身長で、津雲縄文人と近似している。」とし、「上記の、西北九州弥生人と北九州（山口）弥生人との差異は、地方差と解釈することができる。」「縄文時代中期以降の人骨形質については、時代差や地方差を越えた縄文人共通の性状をもっているようである。そうだとするならば、西北九州弥生人は、これに先行した当地方の縄文時代人の形質をそのまま残していた可能性が高いものとする。」とし、その後佐賀平野の甕棺内人骨群、大友弥生人の調査からもこれを追認している。そして地域を限定することを前提として金関説は否定できないとしている。(38)永井昌文は古墳人骨についての報告で「南九州と九州山手の人たちは縄文以来、身長が低くて眼窩が横に長い、眼窩も低いといった傾向があるのに、北九州の古墳人は身長・顔高・眼窩高ともにバラエティに富んでいるといえましょう。」「かれらの出土地域や考古学的背景をよく考慮してまとめ方を変えたら、相当な地域性が出てくるのではないかと思います。古墳時代人と弥生時代人をズラリとならべて概観しますと、やはり南北の差があり、そういった違いは弥生時代から古墳時代までひき続いた傾向といわざるを得ない。」として弥生時代以来の地域性を認めている。(39)池田次郎は「異説弥生人考」を発表し、「非環境要因としてもっとも注目されているのは混血・通婚圏の拡大などによるヘテロシス（雑種強勢）の効果」だとして、ヨーロッパあるいは日本からのアメリカ・ブラジル等への移住者、日本内での移住者の多くの例からヘテロシス効果について述べ、「私は自説に固執するつもりは毛頭ないが、日本人の時代的变化を具体的に説明する原理として、環境要因より非環境要因の方がより適切であると見え、弥生人の問題も遺伝的变化として理解したいのである。」とし「縄文時代終末に北九州の一角に到達した大陸系種族の遺伝的効果は、縄文人グループを第Ⅱ軸の上方に移動させ弥生人の出現を見る

ことになった。混血の効果は地域によって異なり、短頭、高顔のいずれか、もしくはその双方によって特徴づけられる。弥生人グループの中に近畿古墳人が含まれているのは、弥生時代における近畿地方への渡来を示唆している。また西日本古墳人が縄文人と同じグループに属しているのは、金関のいう逆行現象によるものかもしれない。」として、結論的には金関説を補強したといえる。以上みたように弥生文化成立にとって渡来人の問題はさけては通れないものであるが、いずれも弥生前期末頃から以後の人骨が対象とされ、縄文後晩期から弥生前期の大形甕棺発生の頃までの人骨が未だ皆無に等しく、又朝鮮側における同時代の資料も極めて少なく、今後検討すべき課題も多いといえる。

稲作問題については、花粉分析、プラント・オパール分析、埋蔵種実の水洗法による微量種子分析による水田雑草等からの追求等自然科学の分野からの研究もすすんでいるが、ここでは省略する。

以上、稲作の開始つまり弥生文化の成立についての研究史を簡単にみてきた。いまここで、これらを念頭におきつつ、稲作開始前後の土器編年から始め、次に稲作を受容する主体的条件となった縄文後晩期農耕論に再検討を加え、稲作開始から、稲作を基盤とする農耕社会の確立期までを取りあげることにして、本論にはいりたい。

- 註1 森貞次郎「おわりに」 日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会『日本農耕文化の起源に関する研究 島原半島(原山・山の寺・礫石原)及び唐津市(女山)の考古学的調査』 1960
- 2 浜田耕作「河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告・河内国府石器時代人骨調査」京都帝国大学文学部考古学研究報告4 1920  
浜田耕作「薩摩国出水郡出水町尾崎貝塚発掘調査報告・出水貝塚獣骨及び人骨・薩摩国揖宿郡指宿村遺跡調査報告」 京都大学文学部考古学研究報告6 1921
- 3 鳥居龍蔵「畿内の石器時代に就いて」人類学雑誌32-9 1917
- 4 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて」 考古学雑誌7-10~8-3 1917~1918
- 5 中山平次郎「土器の有無未詳なる石器時代遺跡」下 考古学雑誌10-11 1920  
中山平次郎「焼米を出せる竪穴址」 考古学雑誌14-1 1923
- 6 山内清男「日本遠古の文化」IV-2 ドルメン1-8 1932
- 7 森本六爾「日本農耕文化の起源」1941 所収
- 8 中山平次郎「福岡地方に分布せる二系統の弥生式土器」考古学雑誌22-6 1932  
山本博「九州地方出土の有紋弥生式土器」考古学雑誌22-9 1932  
田中幸夫「筑前遠賀郡水巻村立屋敷の遺跡」考古学3-4 1932
- 9 中山平次郎「福岡地方に分布せる二系統の弥生式土器」 考古学雑誌22-6 1932
- 10 小林行雄「安満B類土器考」 考古学3-4 1932  
小林行雄「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」 考古学3-5 1932
- 11 小林行雄「先史考古学に於ける様式問題」 考古学4-8 1933
- 12 小林行雄編「弥生式土器聚成図録」 東京考古学会 1939
- 13 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」 京都帝国大学文学部考古学研究報告16 1943
- 14 森貞次郎「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」 古代文化13-7 1942
- 15 福岡県高等学校教職員組合「北九州古文化図鑑」 第1輯 1950に「縄文式晩期の完形



- 土器」として報告されている。森貞次郎「縄文晩期および弥生初期の諸問題」 六興出版刊『末盧国』1982によれば、この項は岡崎敬氏の執筆になるとしている。
- 16 森貞次郎「2 福岡県夜臼遺跡」 日本考古学協会『日本農耕文化の生成』1961
  - 17 森貞次郎・岡崎敬「1 福岡県板付遺跡」 日本考古学協会『日本農耕文化の生成』1961
  - 18 日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会「日本農耕文化の起源に関する研究 島原半島（原山・山ノ寺・礫石原）及び唐津市（女山）の考古学的調査」1960  
日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会「日本農耕文化の起源に関する研究 島原半島（礫石原・百花台・小ガ倉・小浜・原山）の考古学的調査 第二次概報」1961
  - 19 九州大学「北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査—昭和40年度 日仏合同調査概報—」1966  
小田富士雄・賀川光夫・永井昌文・田中良之・岡崎敬「V-2 宇木汲田貝塚」 六興出版刊『末盧国』1982
  - 20 佐原真「日本農耕起源論批判—『日本農耕文化の起源』をめぐる—」 考古学ジャーナルN°23 1968・8に「その層位には疑問があるという風聞もある」として疑義が出ていることを紹介している
  - 21 福岡市教育委員会「有田古代遺跡発掘調査概報」1967  
福岡市教育委員会「有田遺跡—福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告—」1968
  - 22 福岡市教育委員会「板付遺跡調査報告」福岡市報8 1970  
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」1 福岡市報29 1974  
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」2 福岡市報31 1975  
福岡市教育委員会「板付一市営住宅建設に伴う発掘調査報告書—」福岡市報36 1976  
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」3 福岡市報36 1976  
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」4 福岡市報38 1977  
福岡市教育委員会「板付—県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書—」福岡市報39 1977  
福岡市教育委員会「板付—県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書—」2 福岡市報48 1979  
福岡市教育委員会「板付遺跡調査概報—板付周辺遺跡調査報告書（5） 1977～8年度—」福岡市報49 1979  
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」6 福岡市報57 1980  
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」7 福岡市報65 1981  
福岡市教育委員会「板付—板付会館建設に伴う発掘調査報告書—」福岡市報73 1981  
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」8 福岡市報83 1982  
福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」9 福岡市報98 1983
  - 23 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究—板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合—」 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会『鏡山先生古稀記念古文化論攷』1980 所収
  - 24 唐津市「菜畑」1982  
中島直行・渡辺誠・大村武「V-1 菜畑遺跡」 唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末盧国』 六興出版 1982  
中島直幸「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農工具」 歴史公論N°74 雄山閣1982. 1
  - 25 福岡県教育委員会「石崎曲り田遺跡」I 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集 1983  
福岡県教育委員会「石崎曲り田遺跡」II 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 1984
  - 26 春成秀爾「弥生時代はいかにしてはじまったか」考古学研究77 1973

- 27 春成秀爾「抜歯の意義(2) 考古学研究79 1974  
春成秀爾「縄文晩期の婚後居住規定」 岡山大学法文学部学術紀要40 (史学編) 1979  
春成秀爾「縄文合葬論—縄文後晩期の出自規定—」 信濃32-4 1980
- 28 岡本勇「V-1 弥生文化の成立」 日本の考古学Ⅲ 弥生時代 河出書房新社 1966
- 29 近藤義郎「弥生文化論」 岩波講座 日本歴史1 原始および古代1 1962
- 30 佐原真「農業の開始と階級社会の形成」 岩波講座 日本歴史1 原始および古代1 1975
- 31 九州大学農学部育種学教室・九州大学文学部考古学研究室「九州出土古代米一覽」九州考古学15 1962
- 32 森貞次郎・岡崎敬「縄文晩期および板付弥生式初期遺跡出土の土器上の粳および炭化粳計測表」九州考古学15 1962
- 33 佐藤敏也「日本の古代米」 雄山閣考古学選書1 1971
- 34 岡崎敬「コメを中心としてみた日本と大陸—考古学的調査の現段階—」 古代史講座13 学生社1966  
岡崎敬「日本における初期稲作資料—朝鮮半島との関連にふれて—」 朝鮮学報49 1968
- 35 鈴木尚「日本人の骨」 岩波新書 1963
- 36 金関丈夫「V-3 弥生時代人」 日本の考古学Ⅲ 弥生時代 河出書房新社 1966 他
- 37 金関丈夫「人種論」 新版考古学講座10 特論下 雄山閣 1971
- 38 内藤芳篤「西北九州出土の弥生時代人骨」 人類学雑誌79-3 1971  
内藤芳篤・松下孝幸「IV 弥生時代人骨」【(シンポジウム) 骨から見た日本人の起源】季刊人類学12-1 1981
- 39 永井昌文「Ⅲ 古墳時代人骨」 【(シンポジウム) 骨から見た日本人の起源】 季刊人類学12-1 1981
- 40 池田次郎「異説弥生人考」 季刊人類学12-4 1981

## 2) 稲作開始前後の土器編年

——御領から亀の甲まで——

### a 研究史

九州における縄文晩期の土器編年は森貞次郎・乙益重隆・賀川光夫・河口貞徳等によって代表されていた。森貞次郎は晩期を黒川式・山の寺式の二期に分け、これを近畿の滋賀里式と榎原式・中国地方の黒土B I式と黒土B II式に対応するものとし、弥生初頭の土器に伴う縄文系土器として夜臼式を位置付けた。最近では広田遺跡出土の土器を晩期初頭に、山の寺遺跡出土のかつて黒川式と呼んだ土器を山の寺式として晩期中葉に、かつて山の寺式と呼んだ土器を夜臼I式としたほうが合理的であるとしている。<sup>(1)</sup>乙益重隆は御領式→黒川式→山の寺式→夜臼式(原山式)という編年を行ない、まだ黒川式の段階までは遺跡や遺物のうえにも縄文文化本来

の姿をとどめているが、山の寺式からつぎの原山式の段階になると様相は一変するとした。<sup>(3)</sup> 賀川光夫は1960年に後期末の御領式を祖形として展開する晩期土器を1式→2式→3式に分け、九州各地の編年観を示しているが、それは黒川式→山の寺式→原山・神宿式に対応するものである。そして賀川は晩期に出土する有足土器をとりあげ、晩期には中国先史文化の影響を受けているとした。<sup>(4)</sup> 1965年には後期末および晩期初頭に位置づけられる御領・三万田式土器は伝統的な縄文による施文がうしなわれ、黒色研磨の土器が盛行し、これは大陸黒陶土器の影響とみたいとしている。これにつづくものを大石式→黒川式→田村式→山の寺式→原山式とし、大分県神宿出土土器を山の寺・原山式に併行する土器とする。又田村式を晩期中葉の土器とし、有足土器が伴うことをあげ、これは中国大陸の鬲に対比できるとした。<sup>(5)</sup> さらに1969年には晩期をⅠ・Ⅱ・Ⅲ式に分類した。Ⅰ式は大石式、Ⅱ式は黒川式・礫石原式、Ⅲ式は山の寺式・原山式に相当する。<sup>(6)</sup> 河口貞徳は鹿児島県黒川洞穴を発掘して黒川式を設定し、その後上加世田遺跡の発掘を機に、晩期初頭上加世田式、黒川式に先行し上加世田式に続くものとして入佐式を設定し、次に黒川式、夜臼式に対応する土器を井手下式土器として南九州晩期土器を体系づけた。<sup>(8)</sup> 以上のなかで御領式を後期末としたり晩期初頭としたり若干の混乱がみられるが、これについて坪井清足は西日本の全体的立場から九州の御領式・近畿の宮滝式の成立する過程を述べ、御領式を後期末と位置付け「近畿地方以西のいわゆる西日本晩期文化の形成は、その研究史にみられるように、亀ヶ岡式の影響をうけた時期を晩期の開始時期と考えている。」としている。<sup>(9)</sup> 板付遺跡の調査を担当した山崎純男は夜臼式土器を夜臼Ⅰ式・夜臼Ⅱa式・夜臼Ⅱb式に分類し、夜臼Ⅰ式は「その祖形を縄文時代晩期中葉の黒川式土器（併行期）に求めることができるが、器形的差異や柏田遺跡に例をみるように、同一平野においても壺形土器をセットに組み入れない突帯文土器が存在することを考慮すれば、黒川式と夜臼Ⅰ式の間には壺形土器を伴わない突帯文ないしは突帯文出現期の土器型式の介在が認められる」とし夜臼Ⅱb式は板付Ⅰ式とほぼ併行するとする。そして山の寺式は夜臼Ⅰ・Ⅱa式に併行する土器で、原山は板付Ⅰ式・Ⅱa式に併行する可能性が強いとしている。さらに山崎は島津義昭と共同して九州晩期土器の<sup>(10)</sup>

第3表 山崎・島津(1981)による九州縄文晩期土器編年表

時期	地域	I地域	II地域		III地域	諸要素
前半期	前葉	広田式	天城式	大石式	上加世田式	頸部蝶ネクタイ
	中葉	(+)				
後半期	後葉	宮の本式	礫石原式	田村上層式 (上管生B式)	黒川式 黒松添式	刻目突帯文土器 壺
後半期		夜臼Ⅰ式	山ノ寺式  (原山式)	下黒野式	井手下式	
		夜臼Ⅱa式				
		夜臼Ⅱb式				

分類を地域別に分けて行なった。土器の分類は刻目凸帯文の出現を一つの画期として認め、それ以前を晩期前半、それ以後を晩期後半としている。地域はⅠ地域、北部九州（筑前・肥前の北半・豊前）Ⅱ地域、中部九州（筑後、肥前の南半、肥後・豊後・日向の北半）Ⅲ地域、南部九州（日向の南半、大隅・薩摩）に分けて第3表のように分類した。<sup>(11)</sup>家根祥多は近畿の晩期土器の論考のなかで、刻目凸帯文土器の成立と展開についてふれ、近畿の滋賀里Ⅲa式、瀬戸内の岩田第4類から刻目凸帯文土器が成立するとし、九州では刻目凸帯文土器を成立させる要素の一つである刻目を施す手法の受容が遅れ、北九州の一部をのぞいては、汎西日本的な刻目凸帯文の成立にやや遅れをとる傾向があるとし、その後「九州地方では、瀬戸内、近畿地方のように口縁端部の刻目は一般化せず、突帯に刻目を水平方向から施す意識の延長として突出した肩部にも施すようになり、これが突帯へと変化して2条の刻目突帯文が生まれ」「夜臼Ⅰ式において一般化した2条の刻目突帯文土器は、刻目突帯文土器の成立期とは逆に九州地方から他地域へ広がり、近畿地方ではこれによって船橋式が成立する」としている。<sup>(12)</sup>高橋徹は東九州における晩期土器を前葉の大石式、中葉の浦久保式、後葉の上菅生B式、終末の下黒野式に分け、上菅生B式は刻目のない凸帯文土器を含み、刻目凸帯文出現前夜の土器であるとし、この時期までは多量の扁平打製石斧をはじめ、磨製石斧・石皿・石ノミ・石庖丁形石器・石匙・打製石鏃・紡錘車様土製円盤・紡錘状管玉など石器その他の遺物のセットが基本的に一致し不変であるが、夜臼式に対応する下黒野式では石器は半月形の横長剝片利用の削器（石庖丁形石器？）と磨石の2点のみで、他に扁平打製石斧を欠くこと、壺の出現、黒色磨研の浅鉢の急激な減少等、晩期前葉～後葉との間に一種の断絶を認めるとし、この断絶を水稻耕作の開始すなわち弥生時代の開始としてとらえている。又氏は東九州弥生前期に成立する刻目凸帯文系土器である下城式の問題にもふれ、下黒野式と下城式との間の夜臼式～板付Ⅱ式併行期の刻目凸帯文土器の存在にも注意している。<sup>(13)</sup>中島直幸は菜畑の報告のなかで晩期土器の編年を次のように行った。晩期初頭（大石式）→晩期前半（古閑式）→晩期中頃（黒川式）→晩期後半（山の寺式）→晩期終末（夜臼式単純）→板付Ⅰ式と共伴する夜臼式（菜畑Ⅳ式）。<sup>(14)</sup>氏の分類する晩期中頃（黒川式）、晩期後半（山の寺式）の土器は曲り田出土土器とほぼ併行するものであり、後に詳しくみることになる。小池史哲は福岡県二丈町広田遺跡出土の土器を、広田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式に分類し、広田Ⅰ式は後期末として御領式併行に、広田Ⅱ・Ⅲ式を晩期初頭として広田式土器を設定し、Ⅳ式は古閑式・浦久保式・入佐式に対比されるとしている。<sup>(15)</sup>広田遺跡は曲り田遺跡と同町内にあり、距離的に最も近接した晩期前半の遺跡なので、後に詳しくとりあげたい。

弥生前期の土器は板付遺跡の報告で森貞次郎によって板付Ⅰ・Ⅱ式が設定された。<sup>(16)</sup>その後板付Ⅱ式が細分され、前期中頃から後半にかけての夜臼系土器の存在とその地域性が問題にされ、<sup>(17)</sup>この時期の編年の体系は同氏によって基礎づけられた。春成秀爾は先に紹介した論文によって板付Ⅰ式と夜臼式との関係を前後の問題としてとらえず、渡来人の土器と在来人の土器

として同時存在のものとしてとらえ、夜臼系統の土器である亀の甲型の土器が板付Ⅱ式に出現することをその一つの論拠とした。<sup>(18)</sup>伊崎俊秋は福岡県宗像郡津屋崎町今川遺跡の発掘報告でV字溝から出土した土器群を夜臼式土器を含まない板付Ⅰ式の新段階のものとする見解を示した。筆者は先に甕棺の編年を行ない前期の大形甕棺をKⅠ式として「壺が大型化し、壺から発展した特徴をよく示し、残しているもの」とした。<sup>(19)</sup>柳田康雄はここで筆者が前期末としたKⅠc式いわゆる金海式甕棺の墓壇内よりこの亀の甲型の口縁片と上げ底の底部が出土したことを根拠にして、これらの土器を中期初頭の土器であると認識し、いわゆる金海式甕棺を中期初頭に位置づけた。<sup>(20)</sup>藤尾慎一郎は最近福岡平野の弥生前期土器の編年を行ない、板付系統、刻目突帯文系統・折衷系統の土器に分類し、次のⅣ期に大別している。

Ⅰ期 編年論的に板付Ⅰ式の成立を指標に設定でき、夜臼Ⅱb式は残存現象として認識できる。両系統の存続幅が一致するか否かは今後の課題である。

Ⅱ期 板付系土器の単純段階で、玄界灘沿岸地域以外に板付系土器の出現が認められそれに伴い各地で折衷系が成立する。従来の板付Ⅱ式前半相当。

Ⅲ期 刻目突帯文系、それに伴う折衷系の成立をもって設定できるが今のところ甕形土器のみに認められる現象である。板付Ⅱ式後半相当。福岡平野における刻目突帯文系統が全甕形土器に占める割合は一割にみえず、亀の甲遺跡や佐賀平野における現象とは全く逆の様相を呈している。

Ⅳ期 三系統とも存続するが刻目突帯文系、折衷系の比率がⅢ期に比べ増す。従来の前期末を上限とし画期と見做しうるほどの社会現象が指摘されてはいる。編年論的には壺形土器における肩部貼り付け突帯の出現、城ノ越的甕形土器の出現などが挙げられるが城ノ越式との型式学的分離にやや問題があるため、城ノ越式の再検討を含め今後の課題とし、現状では下限を中期初頭と幅をもたせて据えておく。<sup>(22)</sup>

以上、縄文晩期から弥生前期における土器編年の代表的見解をみてきた。いずれにしても稲作開始前後の土器編年と銘うつ以上は、御領式から、夜臼系統の土器である亀の甲型の土器まであつかわねばなるまい。

- 註1 森貞次郎「Ⅱ—1 九州」日本の考古学Ⅲ 弥生時代 河出書房新社 1966
- 2 森貞次郎「縄文晩期および弥生初期の遺跡の概況」森貞次郎『九州の古代文化』六興出版 1983
- 3 乙益重隆「Ⅱ—10 九州西北部」日本の考古学Ⅱ 縄文時代 1965
- 4 賀川光夫「中国先史土器の影響——九州縄文後晩期の一問題——」古代学研究25 1960
- 5 賀川光夫「Ⅱ—11 九州東南部」日本の考古学Ⅱ 河出書房新社 1965
- 6 賀川光夫「縄文晩期文化——九州——」新版考古学講座3 先史文化 雄山閣 1969
- 7 河口貞徳「黒川洞窟発掘報告」鹿児島県考古学会紀要2 1952
- 8 鹿児島県考古学会「上加世田遺跡発掘調査概要—第5次—」1972

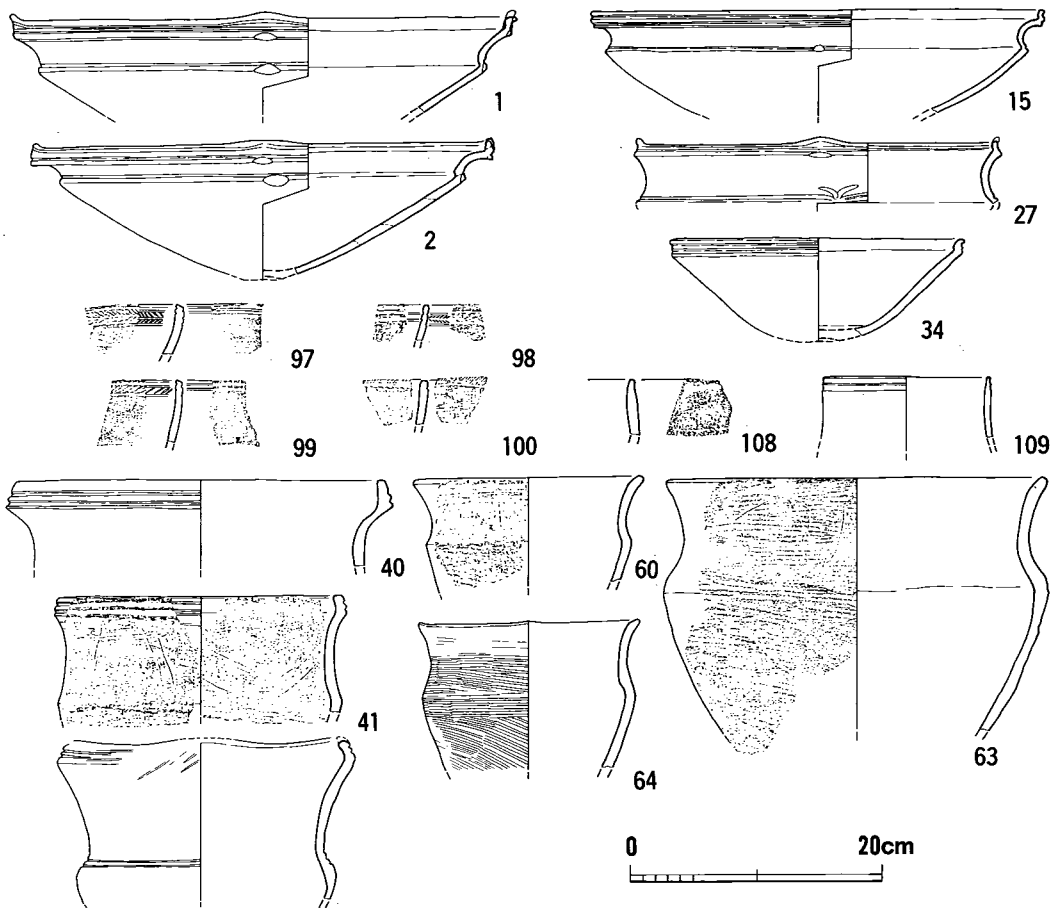
- 9 坪井清足「縄文晩期の土器——西日本——」縄文土器大成4 晩期 講談社 1981
- 10 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究——板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合——」鏡山猛先生古稀記念『古文化論攷』1980
- 11 山崎純男・高津義昭「4 晩期の土器——九州の土器——」縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ 雄山閣 1981
- 12 家根祥多「4 晩期の土器——近畿地方の土器——」縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ 雄山閣 1981
- 13 高橋徹「大分県考古学の諸問題—刻目突帯文土器の出現とその展開について—」大分県地方史98 1980  
高橋徹「東九州における突帯文土器とその周辺」古文化談叢12 1983  
高橋徹「四 縄文時代から弥生時代へ」大分県史 先史編 第三章 縄文時代 1983
- 14 中島直幸「Ⅵ—1 土器について」唐津市『菜畑——佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査——』分析・考察編 1982
- 15 小池史哲「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器——晩期初頭広田式の設定——」森貞次郎博士古稀記念古文化論集 1982
- 16 森貞次郎・岡崎敬「1 福岡県板付遺跡」日本考古学協会『日本農耕文化の生成』1961
- 17 森貞次郎「Ⅱ—1 九州」日本の考古学Ⅲ 弥生時代 河出書房新社 1966
- 18 春成秀爾「弥生時代はいかにしてはじまったか」考古学研究77 1973
- 19 伊崎俊秋「Ⅴ—1 弥生時代の遺構と遺物」津屋崎町教育委員会『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第4集 1981
- 20 橋口達也「甕棺の編年的研究」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XXXI—中巻 1979
- 21 柳田康雄「第3節 柿木地区の調査 4 小結」福岡県教育委員会『三雲遺跡』Ⅱ 1981
- 22 藤尾慎一郎「Ⅶ—2—1） 弥生式土器」福岡市教育委員会『諸岡遺跡——第14・17次調査報告——』福岡市報108 1984

## b 土器編年

御領式から晩期前半にかけての土器は曲り田遺跡西方約8kmの福岡県二丈町広田遺跡で良好な資料が得られており、これらの土器は小池史哲によって広田Ⅰ～Ⅳ期に分類されている。<sup>(1)</sup> いま氏の分類に沿ってその詳細をみてみよう。

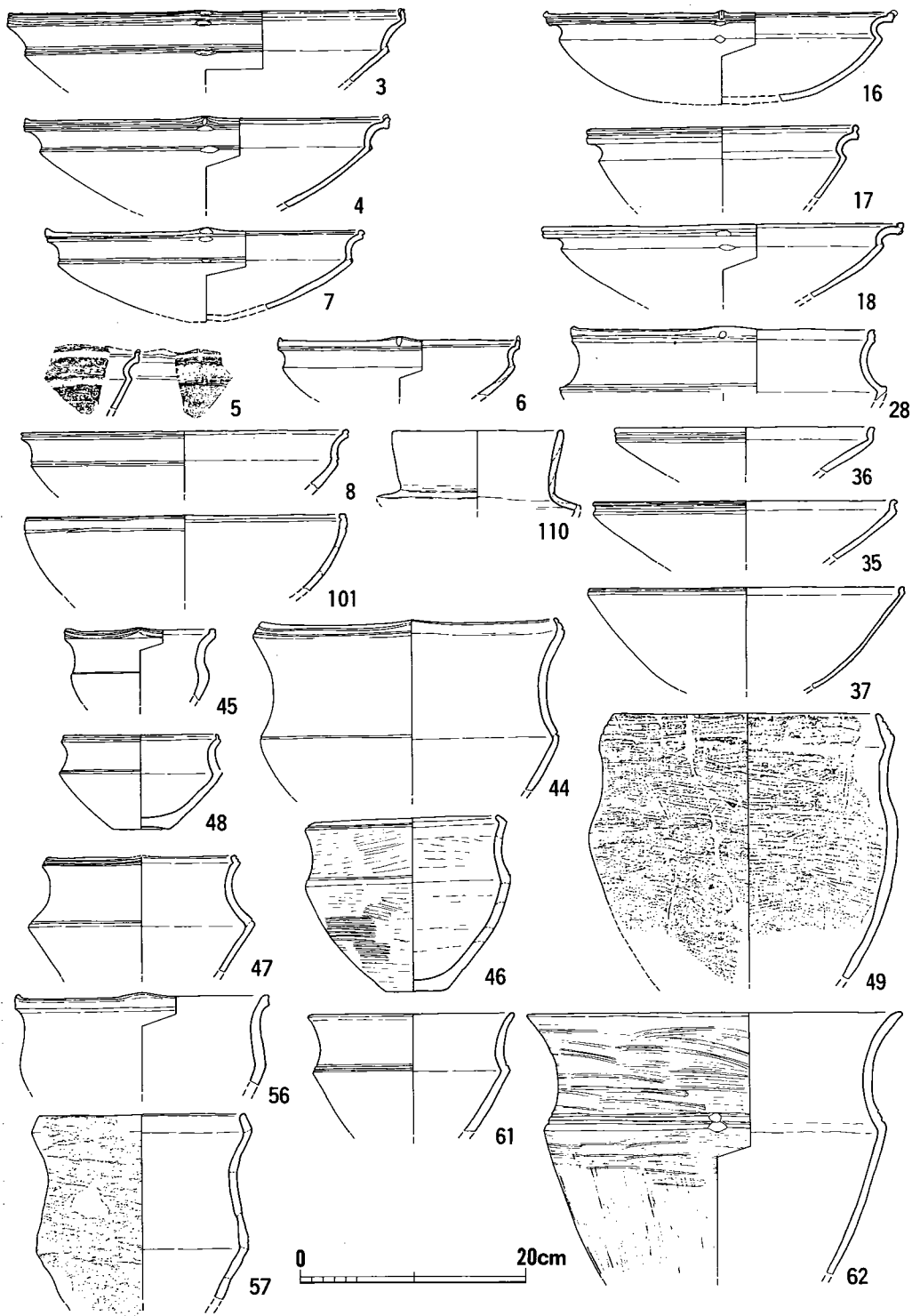
広田Ⅰ期(第1図) 精製深鉢の口縁は幅が広く、稜をもって内傾する。口縁部には凹線や太目の沈線が2～3条めぐる。胴の屈曲部にも稜を有する。粗製の深鉢は、胴の屈曲部に丸味をもち、頸部の下位に内彎の中心があり、外面にはアナダラ条痕が施される。浅鉢は精製深鉢と同様に幅広の口縁に2～3条の凹線・太目の沈線をめぐらし、口縁部・胴部ともに突出気味に屈曲し、口縁部は内傾する。浅鉢の一部(27)および碗(97・98・99)に羽状文・斜線文等を有する等三万田系統の古い要素が残るが、御領式併行期とする。

広田Ⅱ期(第2・3図) 深鉢の口縁部は幅広から幅狭くなり、突出する屈曲部から稜に幾分



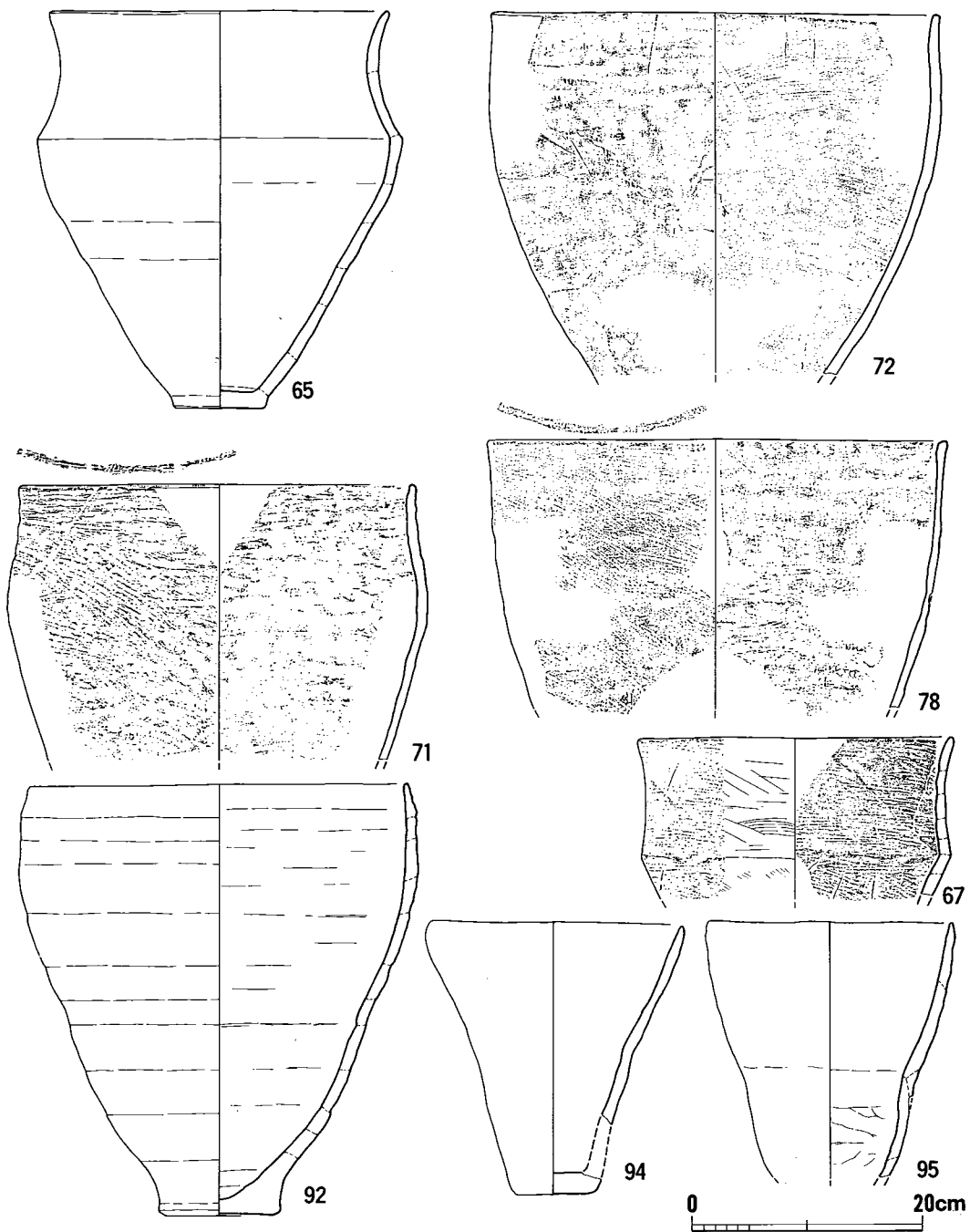
42 第1図 広田I式の土器 (縮尺1/6)

丸味を帯びる屈曲部へと変化し、口縁には1~3条の沈線をもつものと、沈線をもたないもの、精製、粗製の差がある。肩で屈曲する深鉢には肩部に2条の沈線をめぐらし、頸部の中ほどからやや下位に内彎の中心があり、口縁部が大きくひろがるもので精製と粗製とがあり、又頸部内彎の中心は中ほどにありやや上すぼまりになるもので内外ともにアナガラ条痕が施される粗製のものがある。又直立する深鉢は器面調整には条痕を施すものとナデのものがあり、又口唇部に小さな瘤状突起があり、これを中心として沈線と小さな刻目による疑似縄文を施しているものもある。これらのなかで61の精製土器は曲り田で分類した深鉢へと連なるもので、他は曲り田の分類ではすべて甕とした。<sup>(2)</sup>他に底部から反りかえり気味に胴部がひらき、口縁部のみ内傾する深鉢94・95等がありⅢ期へと続く。浅鉢の口縁は幅広から幅狭へと移行し、突出する屈曲部から、稜に幾分丸味を帯びる屈曲部へと変化し1~3条の沈線をめぐらす特徴は深鉢と変わらないが、浅鉢の口縁部は内傾から直立へと変化している。甕には口唇部面取りが踏襲

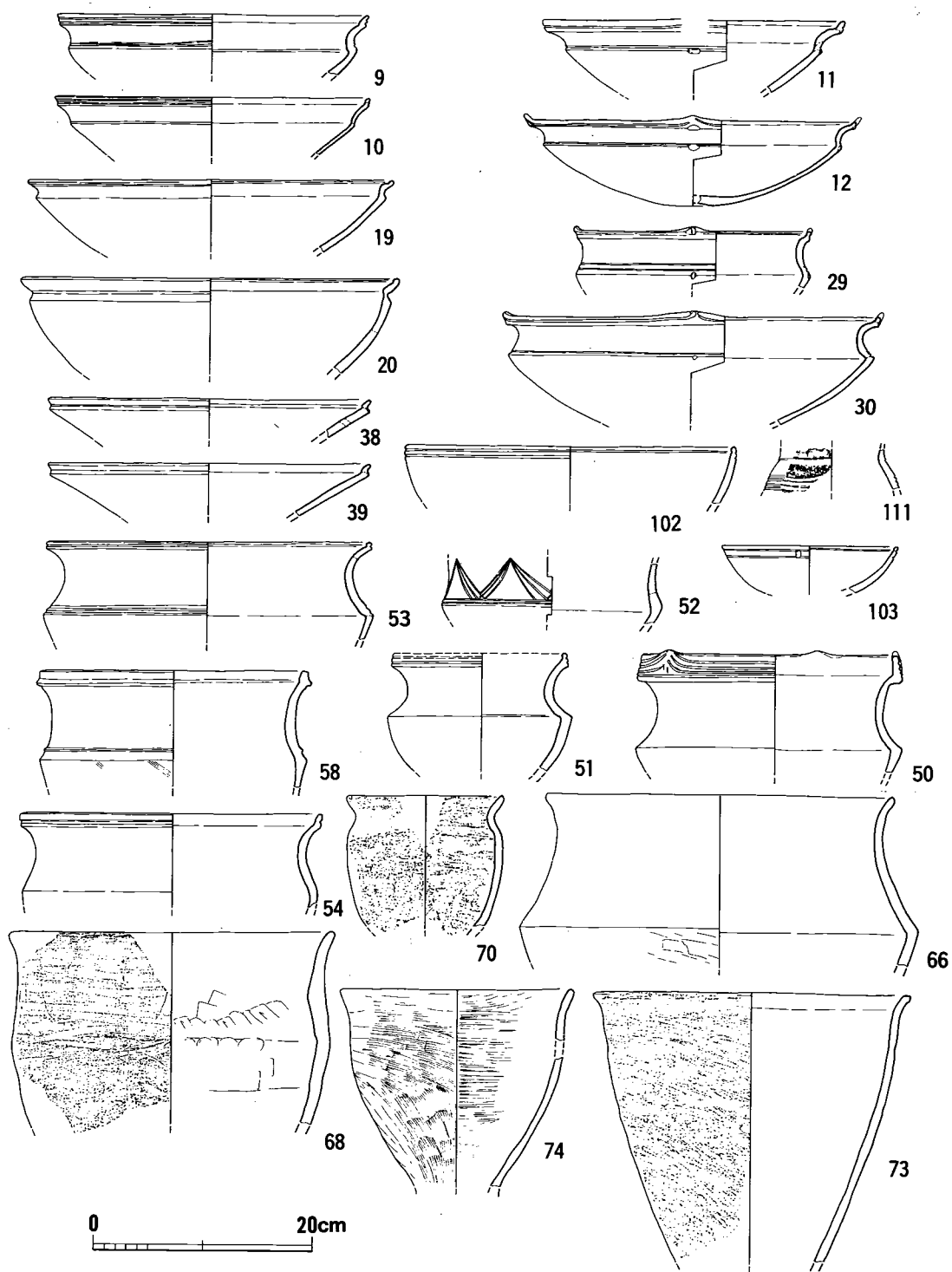


第 2 図 広田Ⅱ式の土器(その1) (縮尺1/6)





第 3 図 広田Ⅱ式の土器(その2) (縮尺1/6)



第4図 広田Ⅲ式の土器(その1) (縮尺1/6)

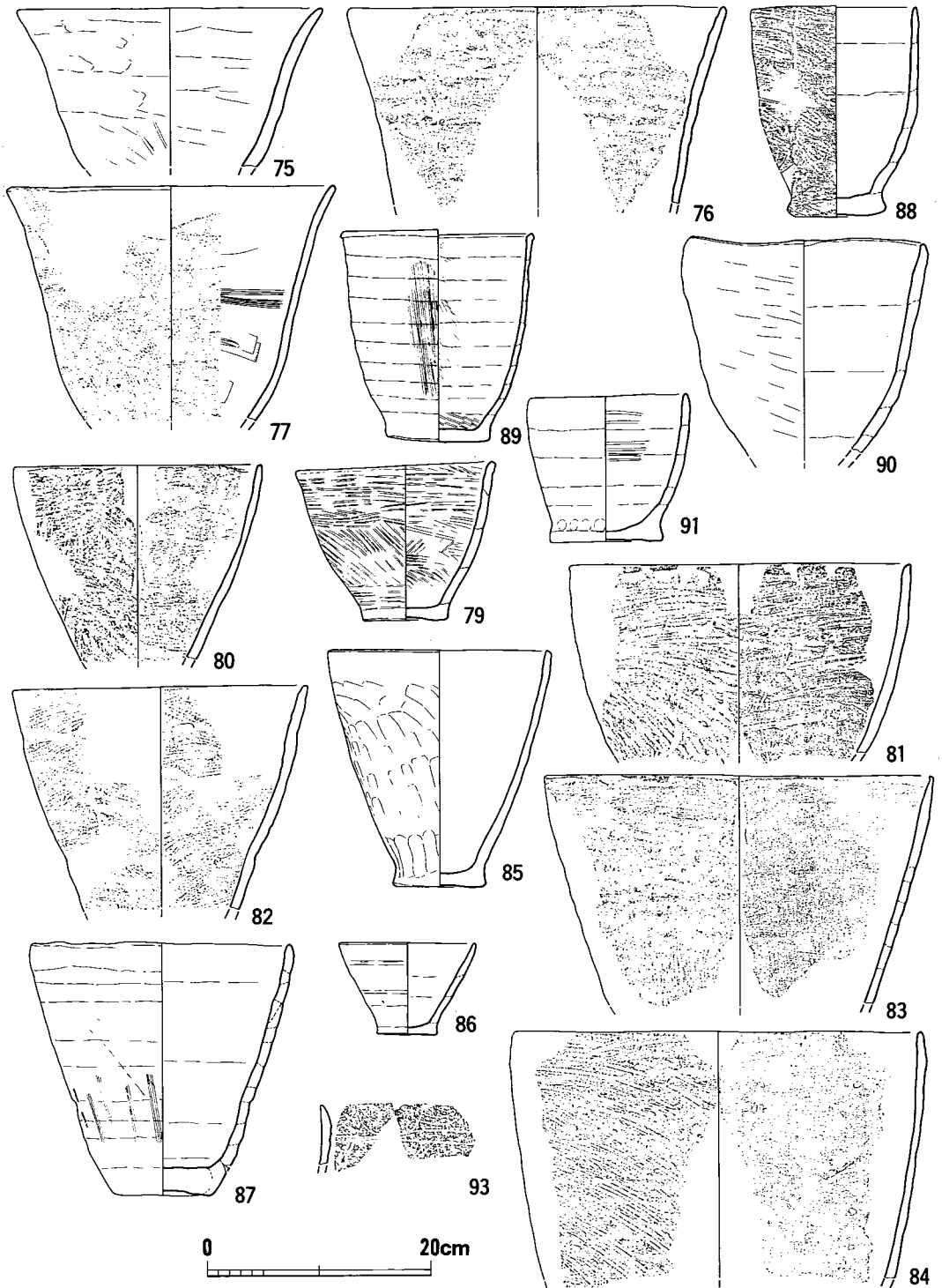
され沈線のみが施文される。

広田Ⅲ期（第4・5図） 深鉢は口縁部が直立ないしは外開き気味の屈曲へと変化し、浅鉢の口縁部も外開き気味で共通する。又口縁部の凹線・太目沈線から細目沈線への退化現象は沈線の本数減少の傾向とも一致する。又この段階より滋賀里式系統の弧状沈線文や、断面V字形のヘラ描き沈線文が出現する。壺は沈線文を施すが、口唇部が丸くつくられ、Ⅱ期との差が認められる。肩で屈曲する深鉢は上すばまり気味で、直立する深鉢はⅡ期との大きな差は認められない。

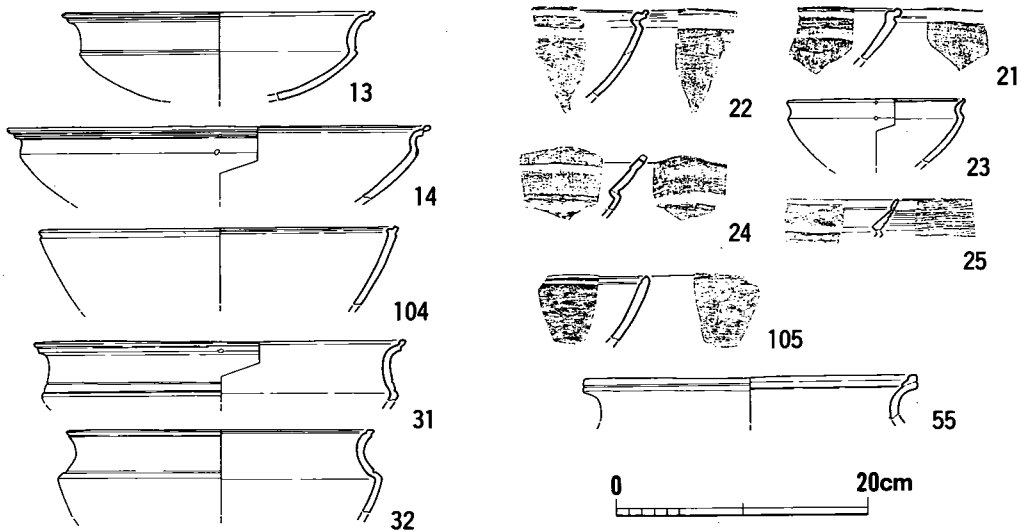
広田Ⅳ期（第6図） 深鉢の口縁部内面が肥厚し、浅鉢にも共通して段状の沈線をなすもの、口縁部屈曲の省略形態ともいえる内面沈線をもつもの、又外開き口縁がさらに間のびしたもの等がある。

小池は以上のように広田の土器を4期に分類しⅠ期は御領式併行期で後期末に、Ⅳ期は賀川光夫のⅠ式Bに相当し、古閑式・浦久保式・入佐式に対比されるとした。Ⅱ期は大石式の古いタイプに、Ⅲ期は古閑式・浦久保式に近い段階ではあるが先行する次期が考えられるとし、広田Ⅱ・Ⅲ期をもって晩期初頭の土器として広田式を設定した。深鉢・浅鉢・壺の形態的变化等は氏の分類するところに別段異論はない。したがってここでは氏の分類に準拠する。ところで、御領式を後期末とする問題は前項でみたごとく御領式と宮滝式が併行関係にあり、又近畿地方以西のいわゆる西日本縄文晩期文化の形成は、その研究史にみるように、亀ヶ岡式の影響をうけた時期を晩期の開始時期と考える坪井清足の見解に拠るところが大きい。しかしながら亀ヶ岡式土器は北部九州にまで及んでいるとはいえず、又北陸を通じての亀ヶ岡式の影響とそれ以前の伝統的な文様から出現したとされる滋賀里式系統の土器も小池の広田Ⅲ期以後でないど北部九州では出現しない。縄文晩期の開始と終末が西日本全域で横一線にならぶ併行的なものでないことはいうまでもないことであって、晩期の開始期における西日本全域での併行関係は今後の検討課題であろう。縄文後期後半以後に出現している地域性、九州でいえば、縄文の消失の傾向に焦点をあてるならば、御領式における縄文の消失をもって新たな時期の開始、つまり晩期の開始ととらえて問題はないと考える。したがってここでは広田Ⅰ～Ⅳ期をすべて晩期の所産と考えたい。

広田Ⅳ期の土器はいわゆる黒川式に直結する要素をもっており、この後に黒川式が来ることはまちがいない。しかしながらいままで黒川式の代表的遺跡とされてきた鹿児島県黒川洞穴、長崎県礫石原遺跡等の出土土器（第7～9図）をみると、第7図9、第9図5・7のように口縁に1～2条の沈線をもつもの、第7図13等のように広田Ⅳ期頃に位置づけられるものから黒川式と呼ばれてきた形態のものを含み、いずれも単純な要素を示すとはいえない。したがって現在では黒川式を晩期中頃の土器とすることには変りはないが、研究者によって各人各様の見解を示し、実際には広田Ⅳ期から曲り田（古）式（第47図）まで幅広く考えられている。



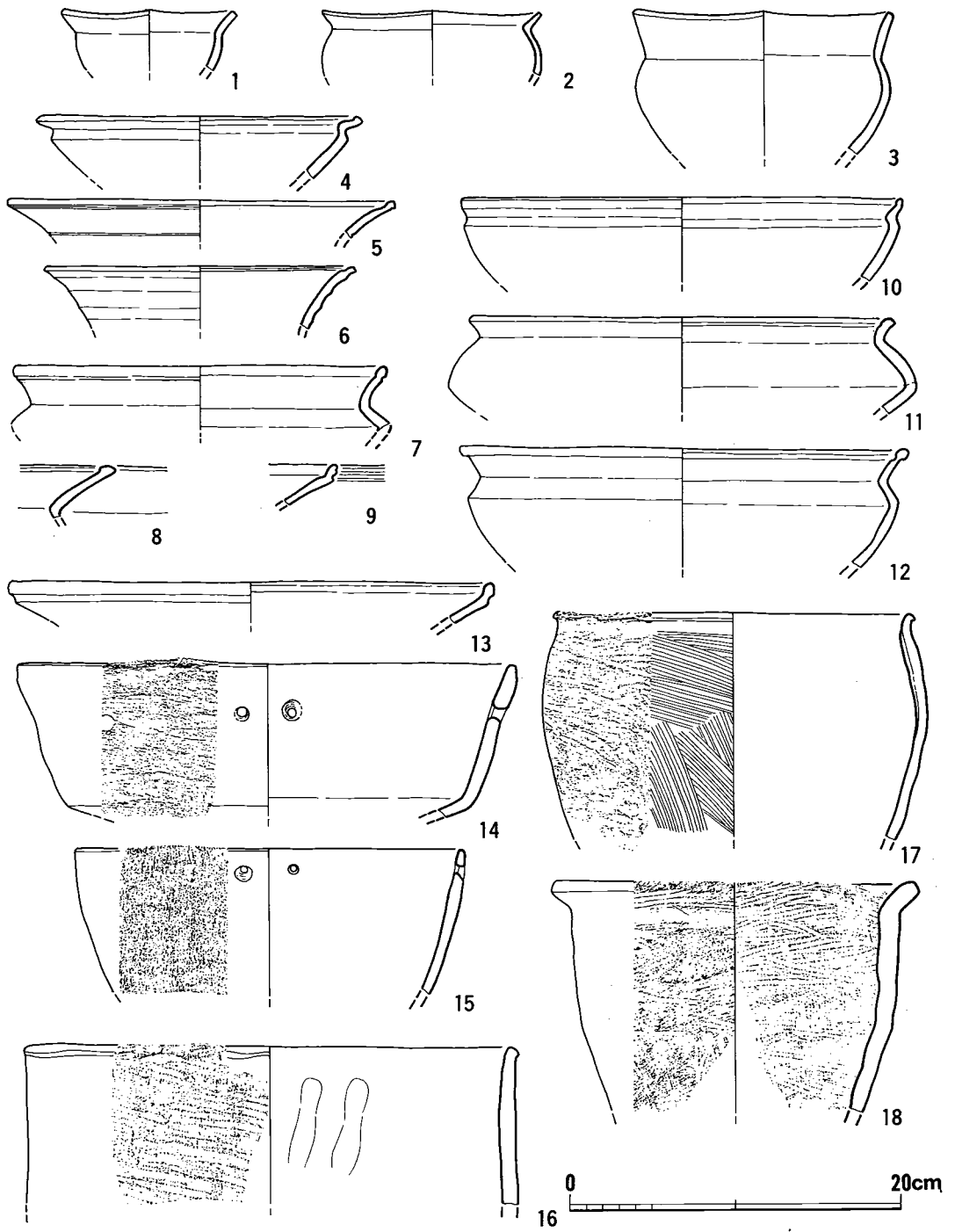
第 5 図 広田Ⅲ式の土器(その2) (縮尺1/6)



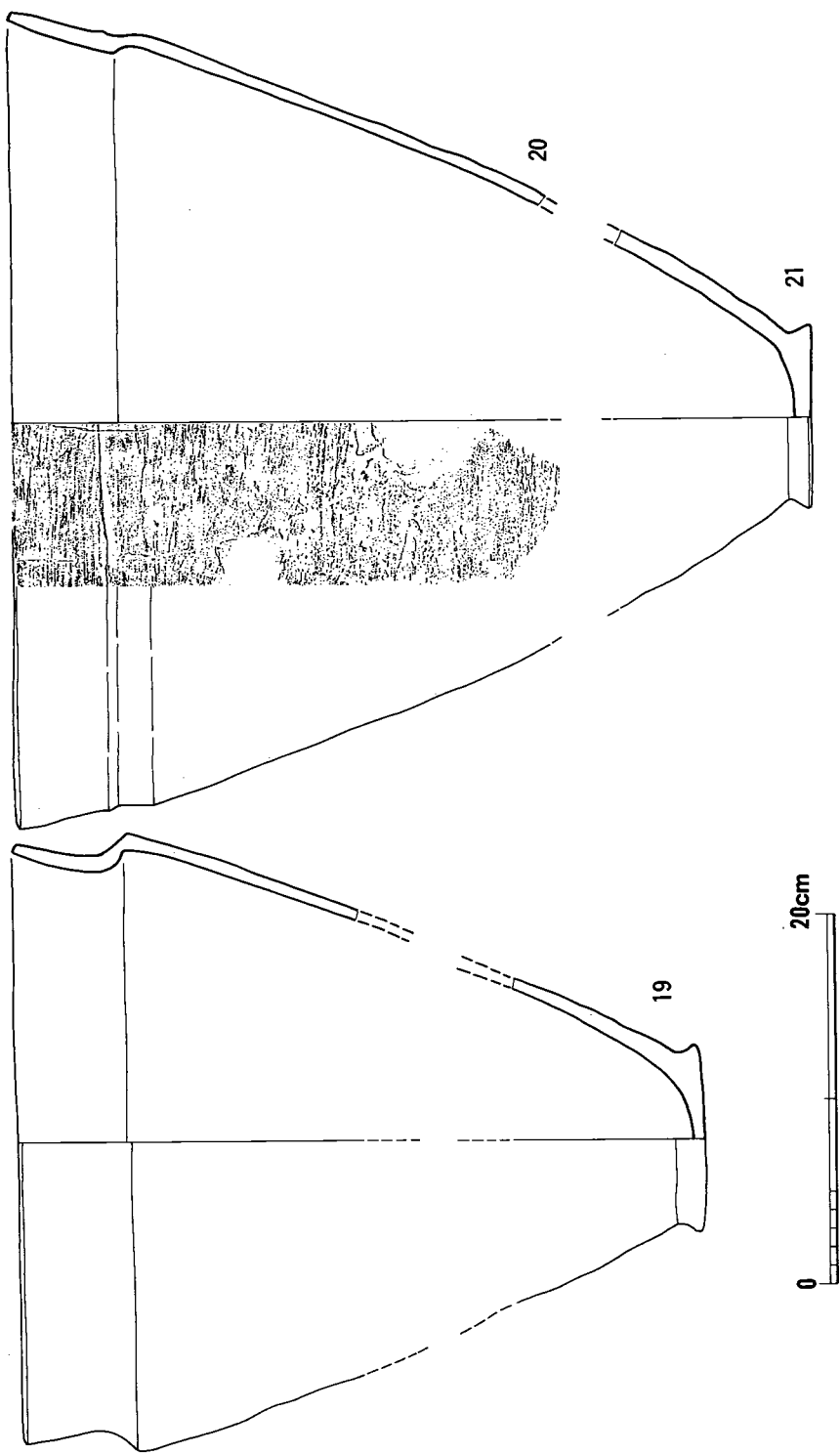
第 6 図 広田Ⅳ式の土器 (縮尺1/6)

この混乱した状況を払拭するような良好な遺跡に恵まれているとはいえないが、近年散発的ではあれ、この時期の土器が各地で出土している。いまこれらを取りあげて私見を述べてみたい。広田Ⅳ期の直後に位置付けられるものとして福岡県浮羽郡吉井町塚堂遺跡B地区より出土した晩期土器のうち精製土器の外面に沈線をもつもの(塚堂遺跡Ⅰ 第86図10~15)<sup>(4)</sup>、福岡県筑紫郡那珂川町松木遺跡第5層出土の晩期土器等<sup>(5)</sup>があげられる。松木遺跡では甕口唇部に条痕工具原体による刻目を施したのもみられる。この時期には精製深鉢はほとんどみられない。これらに相当する土器は黒川洞穴・礫石原遺跡で出土している口縁内外に沈線を有し、口縁端を丸く仕上げる浅鉢(第7図7・12, 第9図1~3, 6・8~10)であり、これがかつて黒川式の典型として位置付けられたものと私は理解している。

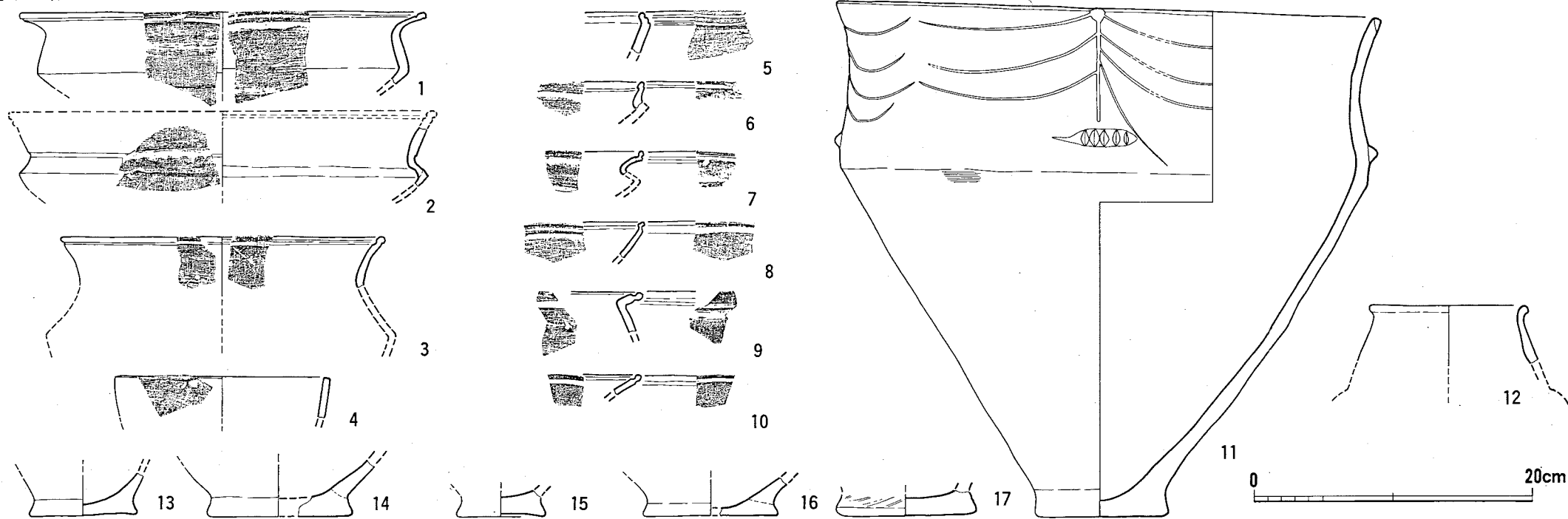
これに続くものとして北九州市小倉南区長行遺跡出土の晩期土器(第11図)<sup>(6)</sup>、福岡県甘木市高原遺跡出土の晩期土器の一部(第10図8~12)<sup>(7)</sup>、塚堂遺跡B地区出土晩期土器のうち口縁部外面に沈線を施さないもの(塚堂遺跡Ⅰ 第86図9・10~12)<sup>(7)</sup>、松木遺跡4層・3層出土の晩期土器<sup>(4)</sup>、福岡県筑紫野市野黒坂遺跡出土の晩期土器<sup>(5)</sup>、福岡県芦屋町山鹿貝塚出土の晩期土器等<sup>(8)</sup><sup>(9)</sup>があげられる。この時期には前段階と同様精製深鉢はほとんどみられない。直立する甕・肩で屈曲する甕は両者ともに存在するが、広田Ⅱ期以来の形態を踏襲し、その前後の時期で形態的に大きな差は認められないが、直立する甕のなかには甘木市高原出土例のように口縁直下に凸帯状につくり出されるもの(第10図9)、肩で屈曲する甕には礫石原例のように刻目をもつ凸起を有するもの(第9図11)等があり、刻目凸帯へと連なる要素がみられる。又甕口唇部の刻目は前段階でもみられたが、野黒坂例のように既にこの段階で瀬戸内の影響を受けない地域で



第 7 図 黒川洞穴出土土器 1 (縮尺1/4)

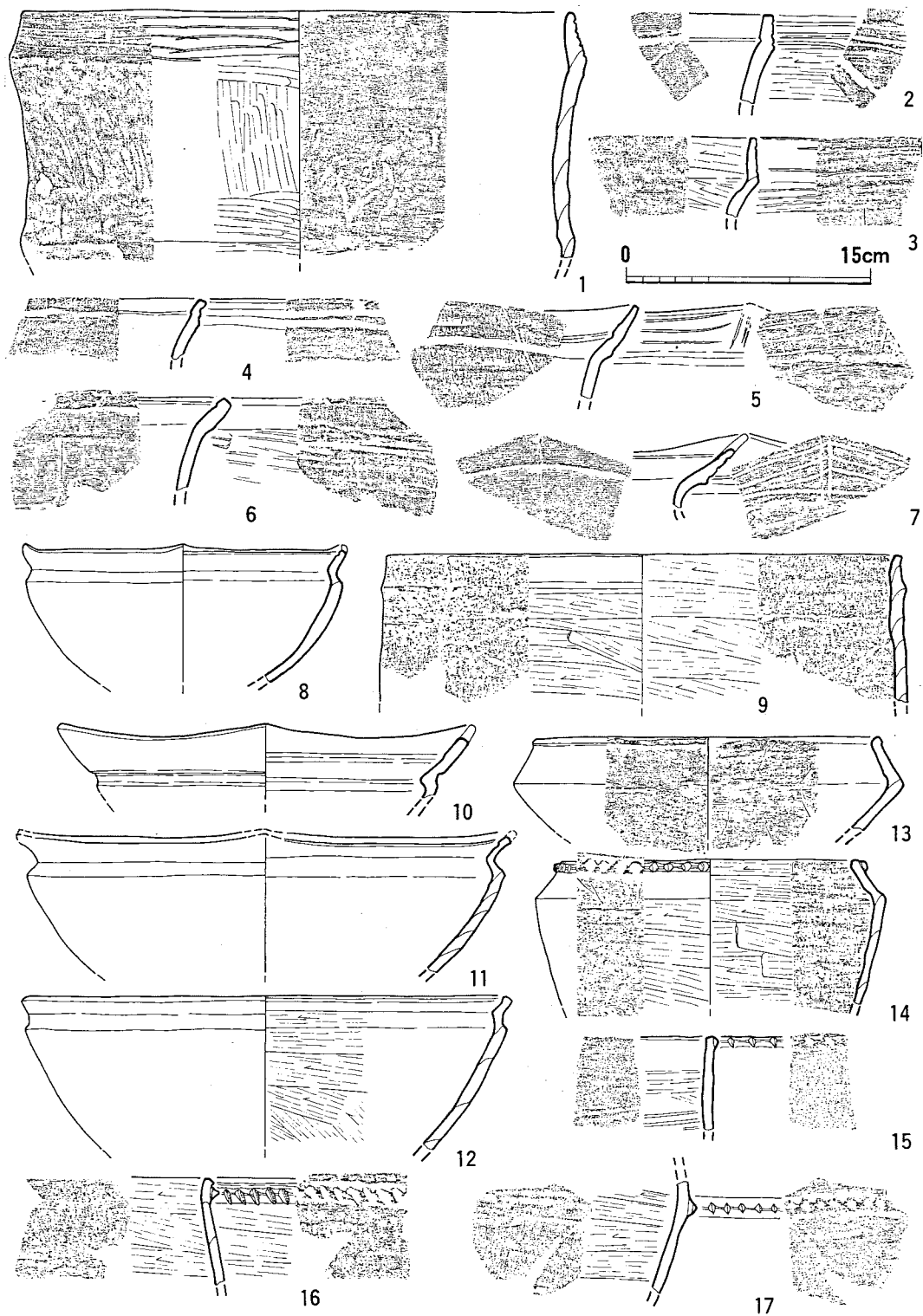


第 8 図 黒川洞穴出土土器 2 (縮尺1/4)

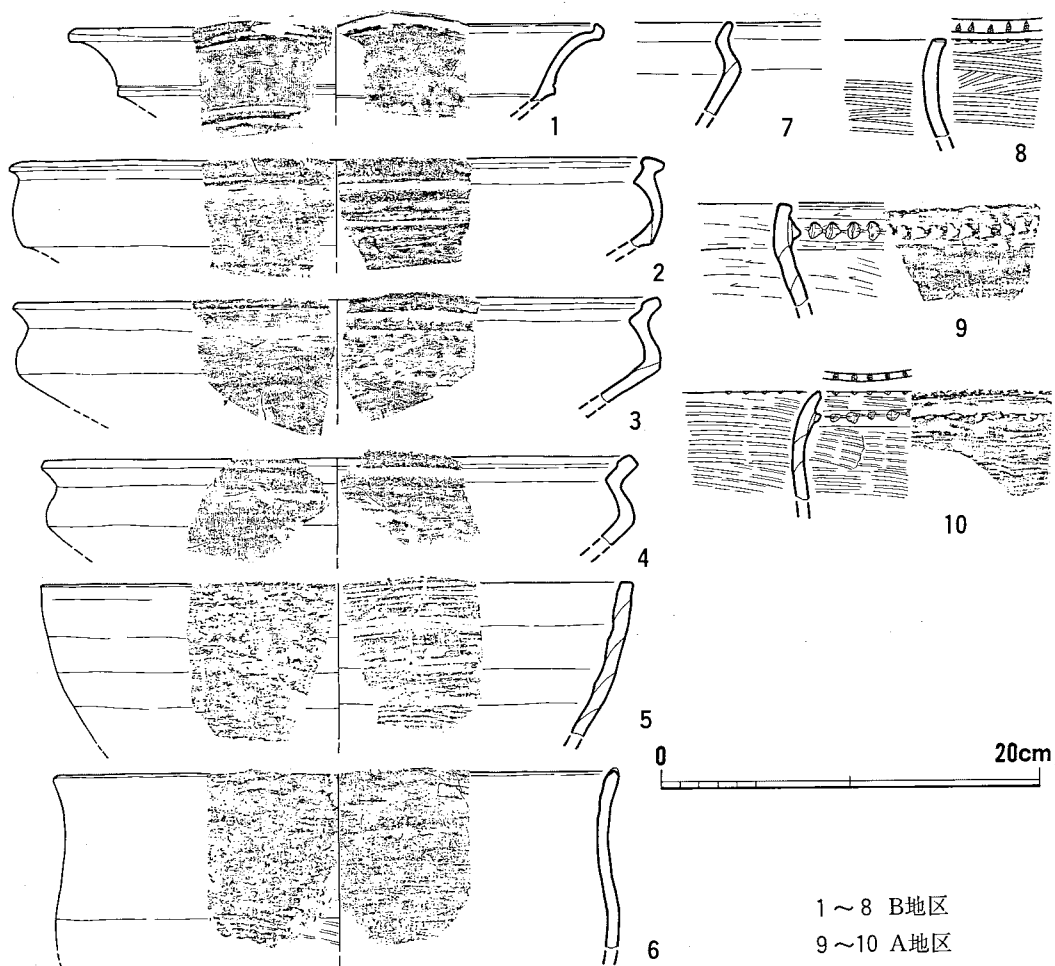


第 9 図 礫石原遺跡出土土器 (縮尺1/4)



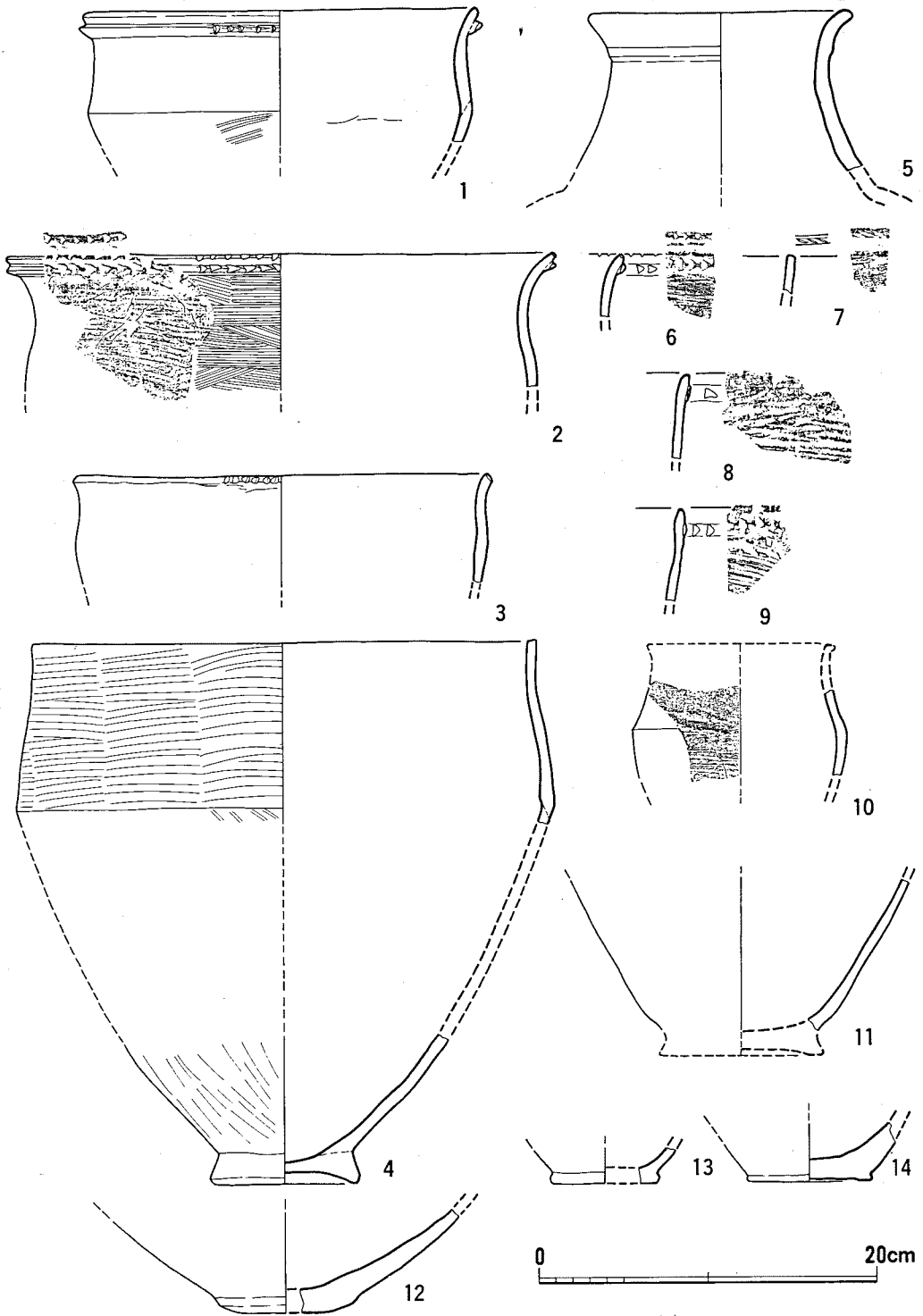


第 10 図 高原遺跡出土土器 (縮尺1/4)

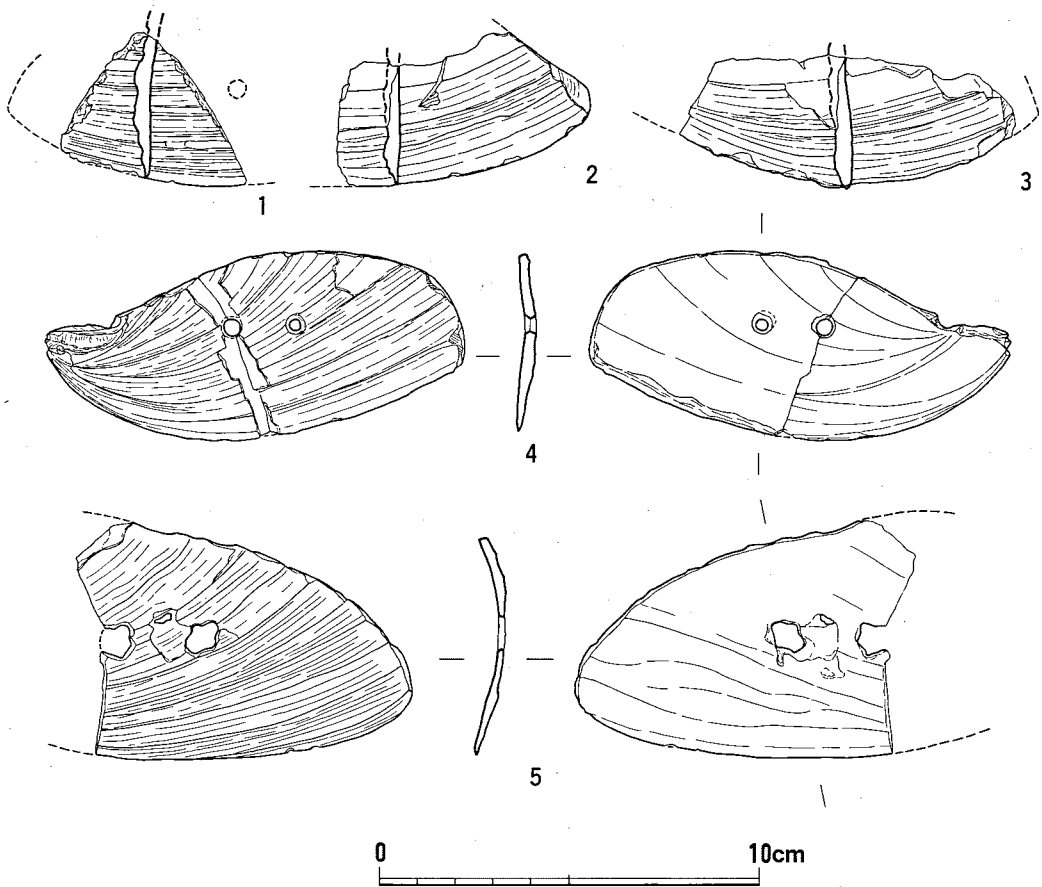


第 11 図 長行遺跡出土土器 (縮尺1/4)

も成立している。これは口唇部に斜線・小さな刻目による疑似縄文で飾る系列のもので北九州でも独自に成立するものと考えられる。この系列がさらには口縁外側に刻目を施文する曲り田(新)式の甕へと続き、夜臼式を経て板付Ⅰ式の甕へと発展するものとする。したがって家根祥多の説のごとく、九州地方では刻目凸帯文土器を成立させる要素の一つである刻目の受容が遅れるというのは妥当ではなく、刻目凸帯文土器の出現が瀬戸内・畿内地方に遅れるという点においても今後の検討を必要とする。<sup>(10)</sup> 浅鉢は口縁内側に段をつくり、くの字に屈曲し、口縁は波状を呈するものと、そうでないものが存在する。曲り田出土土器のなかで26号住居跡出土の浅鉢(26住22)および17号住居跡出土の碗又は鉢(第29図52・53)の口縁内面に段をつくり又は沈線状をなすものが存在する。これは曲り田出土土器のなかに残った古い要素と解されるので、これらの土器が曲り田(古)式の直前にくるものと理解される。曲り田には11号住居跡

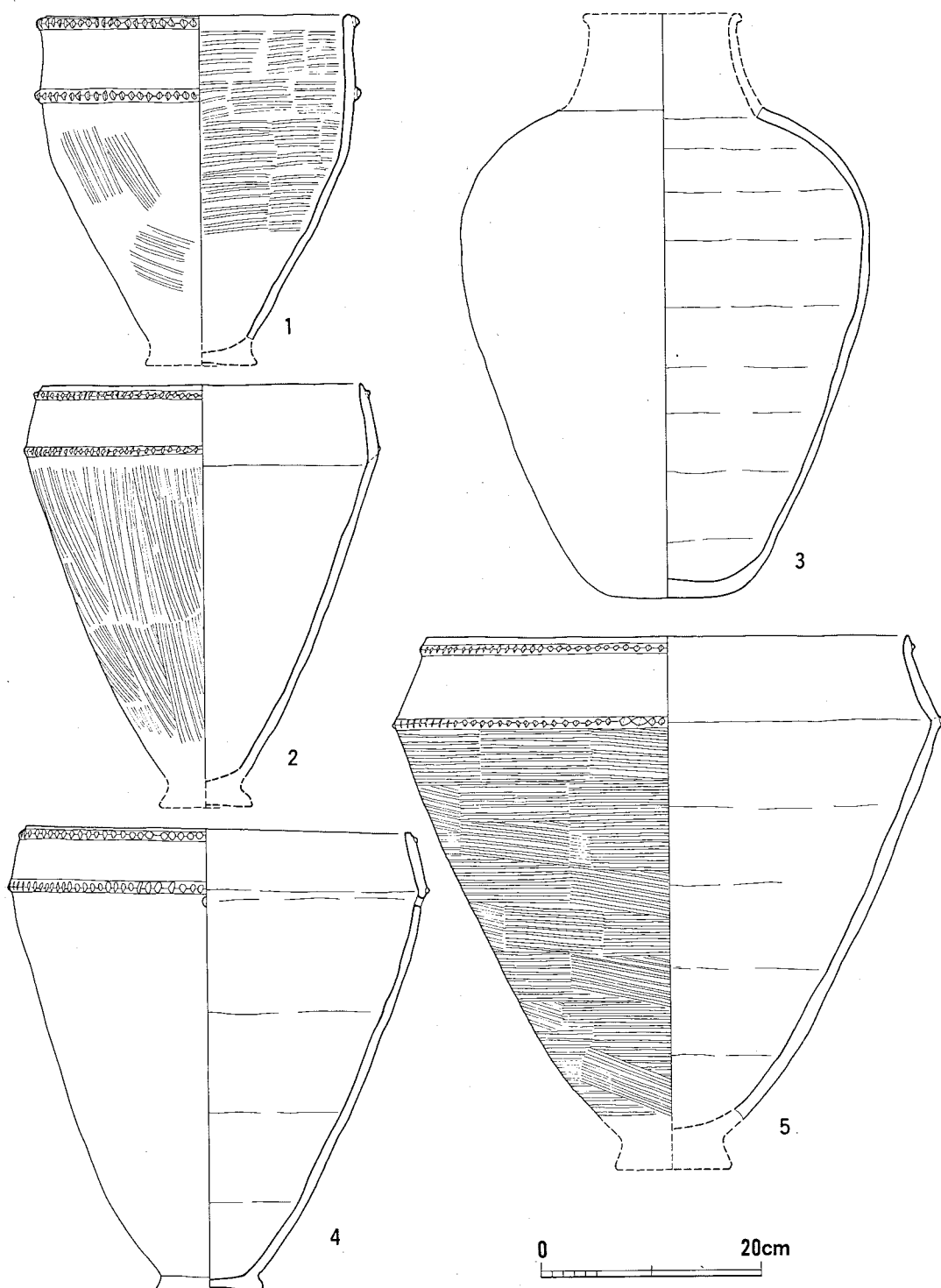


第 12 図 夏井浜貝塚出土土器 (縮尺1/4)

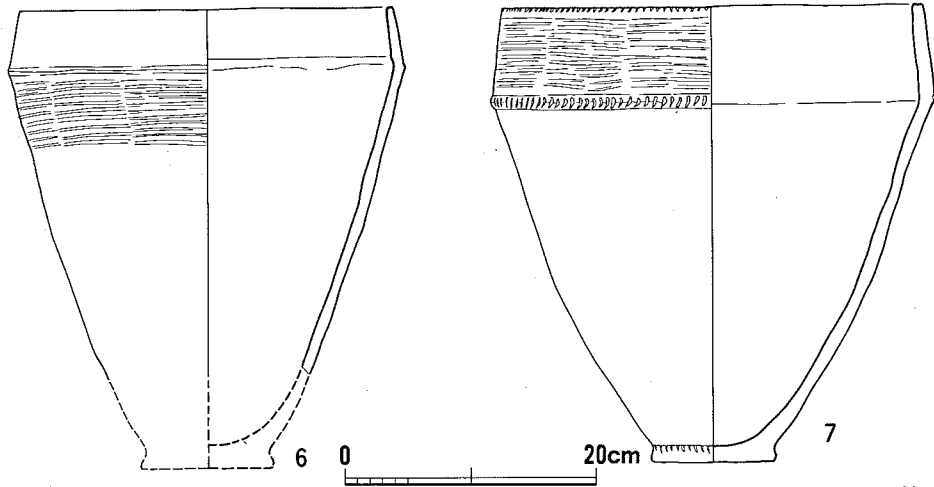


第13図 夏井浜貝塚出土アワビ貝製穂摘具（縮尺1/2）

19, 13号住居跡30（第32図）のようにくの字の屈曲をよく残す浅鉢があり、これを口縁内側の段がなくなったものと解すれば、又、この段階の直後に曲り田（古）式が位置することは疑いないものである。これと同様の浅鉢は長行遺跡にも1点ではあるが存在する（第11図7）。長行ではこの浅鉢をのぞけば、他はほぼ単純な要素を示している。長行のこの段階においては福岡・糸島・唐津等の玄界灘沿岸地域では刻目凸帯文土器は伴わないことは明らかである。長行で伴う刻目・刻目凸帯文土器は瀬戸内系の土器であるが、これからすれば家根のいうように瀬戸内・畿内地方が刻目凸帯文の成立ははやいといえよう。しかしさきにあげた浅鉢にみるようにわずかではあるが新出の要素がみられ刻目凸帯文土器が出現した段階で古い要素の浅鉢が主体を占めていたと解することもできるので、今後響灘沿岸部から遠賀川流域まで、つまり瀬戸内の影響を受ける地域で良好な遺跡を探して検討を要しよう。夏井浜貝塚はその候補地として最適と考える。いま夏井浜貝塚における採集品を参考資料として第12・13図に示したが、この遺跡では、刻目凸帯文土器の出現前夜と思われる肩で屈曲する甕（第12図4・10）、口唇部に斜線文を施すもの（第12図7）、刻目凸帯文出現の頃の甕と思われる粗っぽい横条痕に粗い

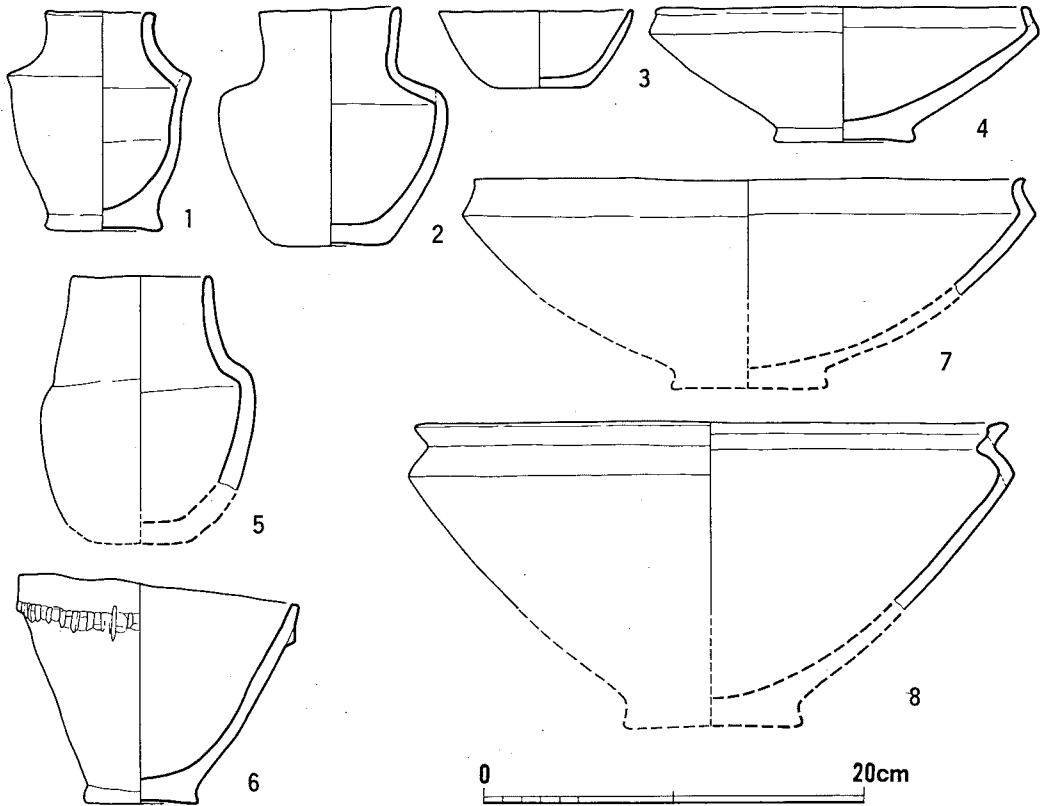


第 14 図 原山遺跡出土土器 1 (縮尺1/6) 1・2・3…1号支石墓下の甕棺  
4・5 …1号支石墓東側甕棺



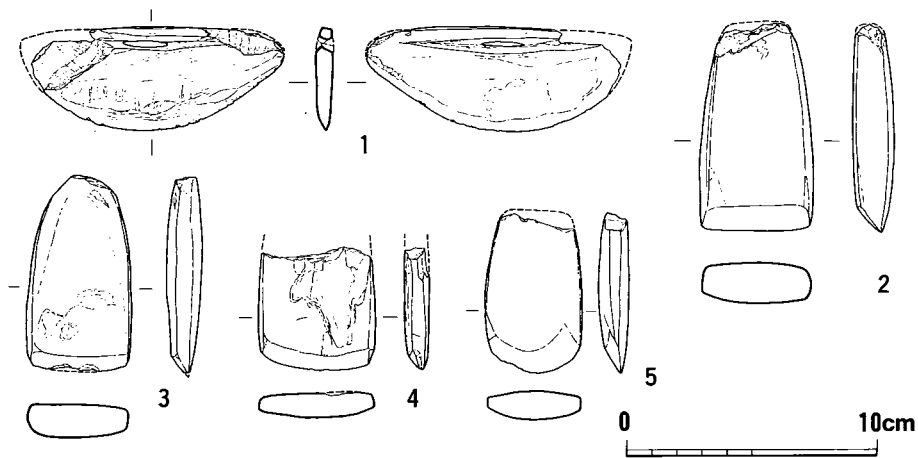
6・7…2号支石墓下の甕棺

第15図 原山遺跡出土土器 2 (縮尺1/6)



第16図 原山遺跡出土土器 3 (縮尺1/4)

1・2…2号支石墓上石直下 3…11号支石墓 4…13号支石墓  
5…15号支石墓 6…36号支石墓 8…採集品



第 17 図 原山遺跡出土の磨製石器 (縮尺1/3)

刻目を施したもの (第12図 8・9), 夜臼式に併行するものと思われる黒土BⅡ系の刻目凸帯文甕 (第12図 1・2・6), 夜臼式土器 (第12図 3・5) 等とともにアワビ貝製の穂摘具等が出土している。アワビ貝製穂摘具は夜臼式土器に伴うものと考えられる。

この後に続くのは曲り田 (古) 式である。曲り田出土土器は後に詳述するが, 長行・高原・松木 4・3 層・野黒坂等の段階の要素, つまり先にあげた口縁内面に段を有する浅鉢, 碗又は鉢, 刻目を施さない直立する甕・肩で屈曲する甕, それと口縁内外に沈線を施し, 口縁端部を丸くつくる丹塗り磨研碗等が少量ではあるが残存した段階で, 直立する甕に上方から刻目を施文したもの, 肩で屈曲する甕の口縁直下又は肩部の一方だけに刻目凸帯をめぐらすものを基調とし, 新たに壺・高坏が加わり, この段階で壺・碗・高坏・浅鉢・深鉢・鉢・甕のセットが成立している。刻目は爪・棒状工具・ヘラ等で施され, 大きく力強いものである。この型式に相当するものは菜畑13層出土土器があげられる。<sup>(11)</sup>

曲り田 (新) 式としたものは曲り田遺跡で主体をなすもので壺・碗・高坏・浅鉢・深鉢・鉢・甕のセットはもちろんのことであるが, 直立する甕の口縁外側に刻目を施すもの, 口縁直下に刻目凸帯をめぐらすもの, 肩で屈曲する甕の口縁と肩部の両方に刻目を施すもの又は刻目凸帯を施すものを主体とする。刻目の施文具は棒状工具・爪・板木口・ヘラ等多様であり前者同様大きくて力強いものが多い。この型式は菜畑 9~12 層出土の土器および山崎純男の分類による夜臼式Ⅰに対比される。<sup>(12)</sup>

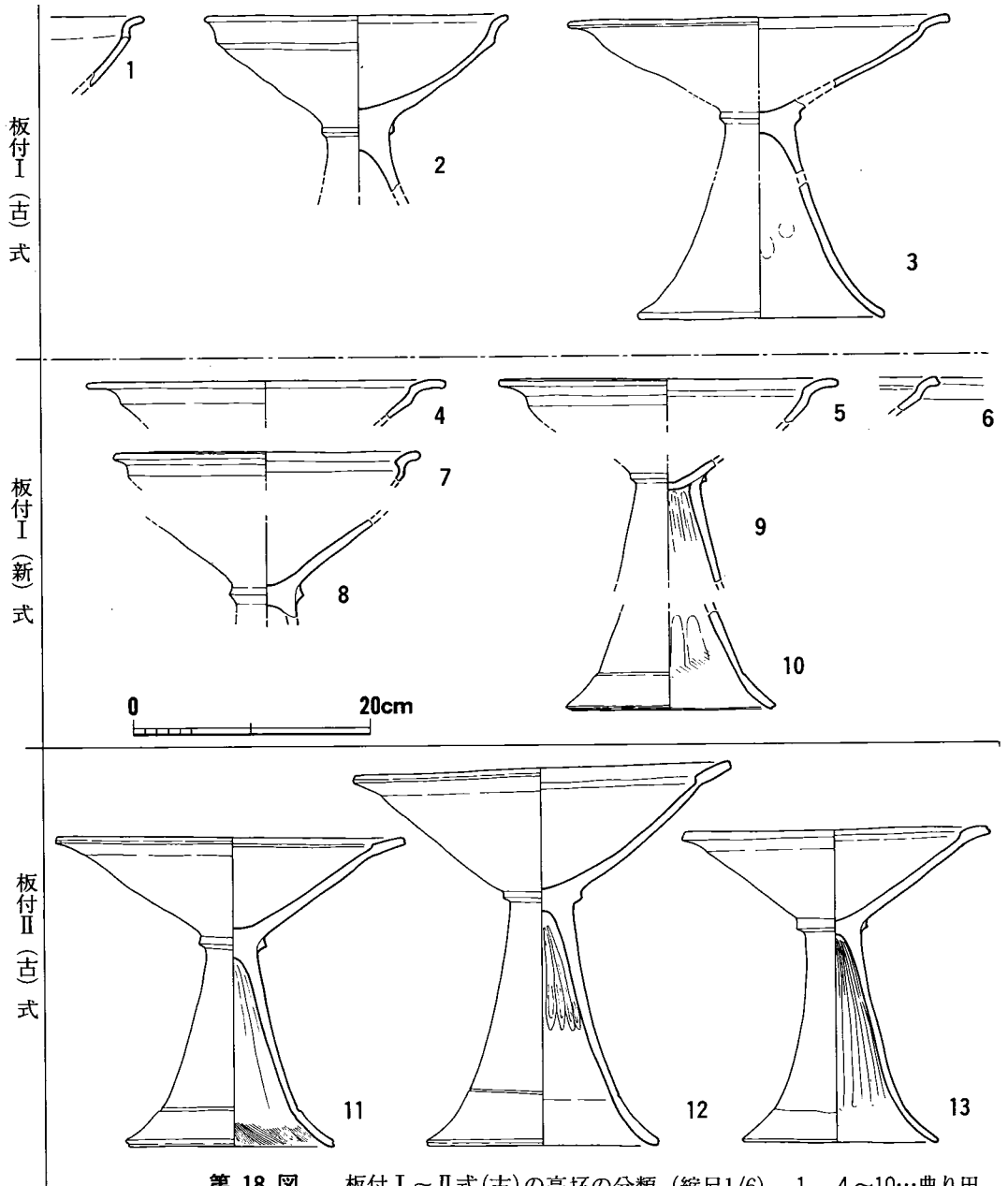
次に位置付けられるものはいわゆる夜臼式土器である。夜臼式土器を山崎は夜臼Ⅱ a 式・夜臼Ⅱ b 式に分類しているがその大きな根拠は板付Ⅰ式に伴なうところとみられ, 形態的にはたいては差はなく一型式のもののみなしたほうが妥当であろう。板付Ⅰ式併行期の夜臼系土器については後に詳述するが, 甕の肩部に刻目を施す凸帯・段等を有するものが存在するので, 板

付Ⅰ式に伴う夜臼Ⅱb式とされたものは、板付Ⅰ式よりも一時期古い夜臼式土器が残存したと考えるのが妥当である。又山崎が板付遺跡の至近距離にありながら異質な土器であり他地域から搬入された土器の可能性が強いとして夜臼Ⅱb式に位置付けた諸岡遺跡F調査区出土の土器は直立する刻目のない甕と刻目凸帯文甕を主体とするが、これは山崎のいうような搬入された土器<sup>(13)</sup>ではなくむしろ夜臼Ⅰ式に位置付けられるべきものである。口縁外側に1条の沈線をもち口縁端が丸く仕上げられた碗の存在等からもこのことはいえる。山崎は又、諸岡F調査区出土の土器が最も近い関係にあるのが山の寺式土器であり、山の寺式は夜臼Ⅰ式・Ⅱa式、後続する原山式土器は板付Ⅰ式あるいはⅡa式に併行する可能性が強いとしているので、ここで原山遺跡の土器を簡単にみてみよう。原山遺跡の出土土器および磨製石器を第14～17図に示した。第16図8の浅鉢は長行遺跡・高原遺跡等のものと同様口縁内面に段をもちくの字に屈曲するものであるが、他の支石墓から出土したものは曲り田(古)式から夜臼式までのものを含んでいるといえる。第17図に示した石庖丁・扁平片刃石斧は採集品であるが、石庖丁はすりきりの一孔をもつもので、扁平片刃石斧は全体に丸味をもっている。詳細については別稿で中間研志が論ずる予定であるがこれらの石器は曲り田(古)式、曲り田(新)式の段階の発生期の大陸系磨製石器の特徴に相通じるものがあって、このことから原山遺跡出土土器が玄界灘沿岸のものと同通しており、時期的にもたいした遅れはないものと考えられる。ただ背振山系を介して佐賀県南部では丸山遺跡・礫石遺跡・佐織遺跡等・原山遺跡に類似する遺跡・遺物が出土しており、土器には古い手法を残しながらも板付Ⅰ式土器を伴う遺跡はなく、すぐに板付Ⅱ式へと直結するところをみれば、板付Ⅰ式の段階に併行する夜臼系の土器が存在し、これが亀の甲型土器の発生とも関連することは明らかである。佐賀県南部・島原半島におけるこの時期の土器の抽出は丸山遺跡の報告等に期待するところであるが、原山遺跡の下限が板付Ⅱa式併行期まで下がることは考えられない。

以上が現在まで晩期といわれてきた土器の分類であるが、縄文後期以来の精製深鉢は広田Ⅳ期の段階で基本的に消滅し、辛うじてその系譜が曲り田(古)式から板付Ⅰ式にまで残る肩で屈曲する黒色磨研・丹塗り磨研の深鉢へ連なっているといえよう。粗製の深鉢すなわち私のいう甕は御領式の段階から存在するが、広田Ⅱ期以後急激に増加し、直立する甕と口縁で屈曲する甕の基本系は夜臼式まで大きな変化を示さずに連なる。精製の碗は夜臼式まで続くが、曲り田(古)式の段階ではそれまでの黒色磨研から丹塗り磨研へと変化し、夜臼式までつづく。黒色磨研の浅鉢は御領式以来夜臼式に至るまで、この時期を特徴づける土器として続いている。曲り田(古)式では新たに壺・高環が成立・定着し、黒色磨研に加えて特に壺に丹塗り磨研土器が急増する。このようにみても曲り田(古)式の段階で壺・碗・高環・浅鉢・深鉢・鉢・甕のセットが成立し、丹塗り磨研という新しい手法が出現している。この画期をはたして単に刻目凸帯文土器の出現を契機に晩期の前半と後半に分かつようなものであろうか。この点



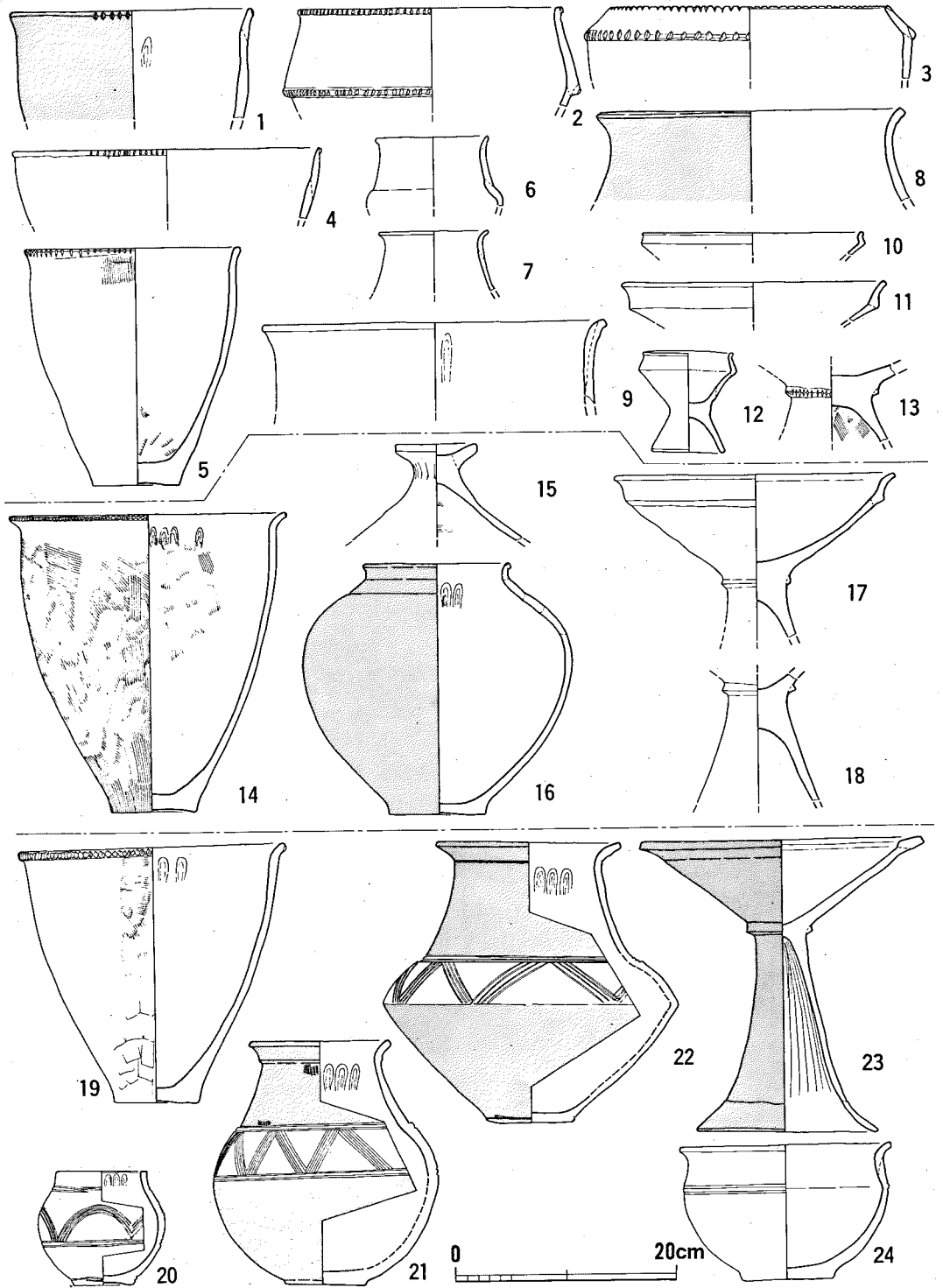
については後に詳しくふれるつもりではあるが、稲作の成立、石器組成の変化・紡錘車の小形化と形態の確立、支石墓の導入等々いずれをとってみても、森貞次郎が定義づけた弥生文化を構成する諸要素は整っており、「日本で食糧生産を基礎とする生活が始まった時代」とする佐原真の弥生文化の規定、大形壺の成立をもって弥生文化の成立の指標とする岡本勇の見解<sup>(16)</sup>については後に詳しくふれるつもりではあるが、稲作の成立、石器組成の変化・紡錘車の小形化と形態の確立、支石墓の導入等々いずれをとってみても、森貞次郎が定義づけた弥生文化を構成する諸要素は整っており、「日本で食糧生産を基礎とする生活が始まった時代」とする佐原真の弥生文化の規定、大形壺の成立をもって弥生文化の成立の指標とする岡本勇の見解<sup>(16)</sup>



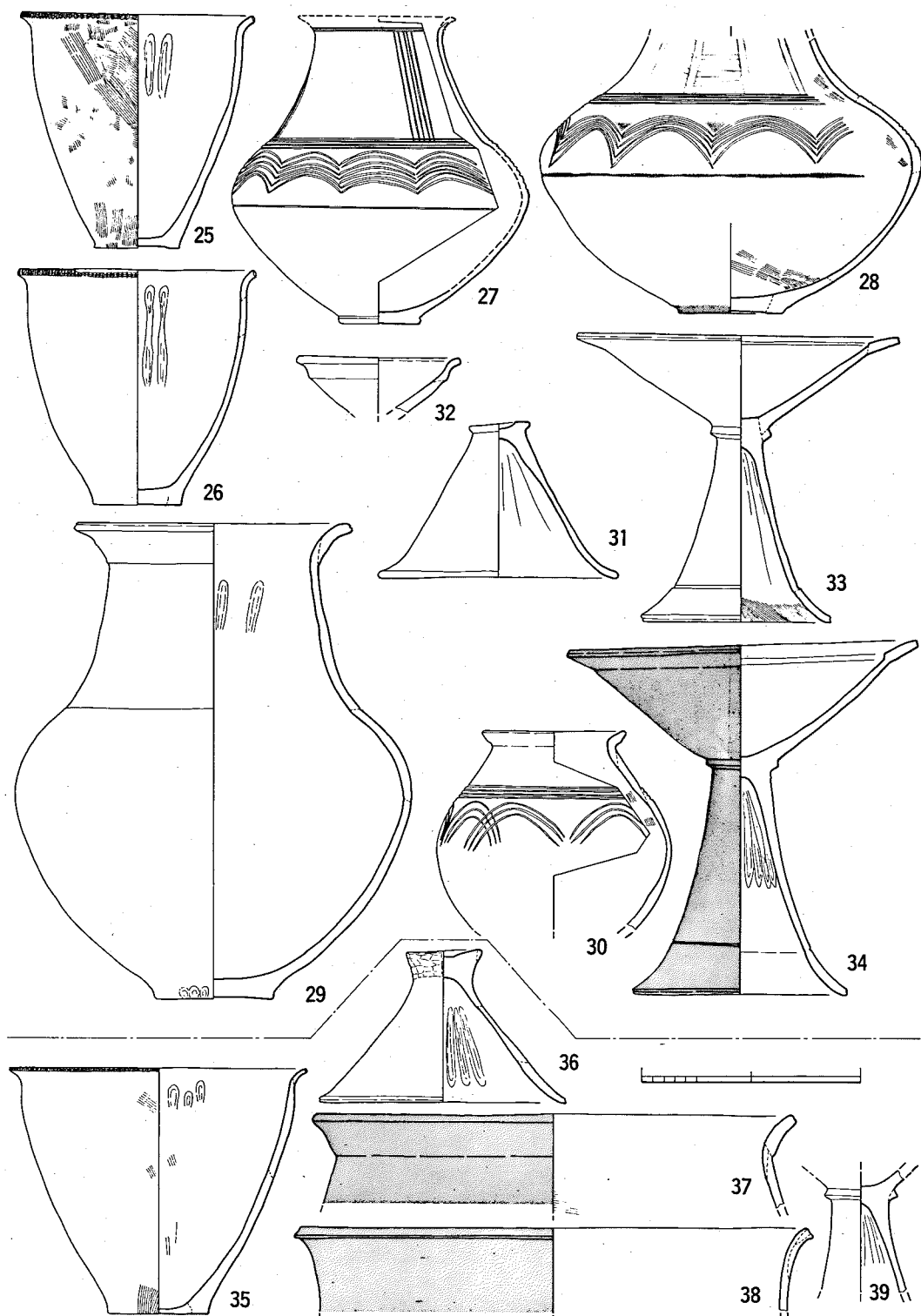
第 18 図 板付Ⅰ～Ⅱ式(古)の高坏の分類 (縮尺1/6) 1, 4～10…曲り田 3 …菜畑 2, 11～14…今川

ずれを援用しても、既に弥生文化と規定すべき内容をもっており、曲り田（古）式以後夜臼式までは弥生時代早期と位置付けられるべきものである。したがってその前段階までが縄文時代晩期と位置付けられる。広田の場合は別として、いわゆる黒川式と呼称される段階は北部九州で型式名を設定すべき良好な遺跡に現在のところ恵まれていない。前半・後半の二期に分けるのは適当とは考えられず、広田Ⅰ・Ⅱ期を晩期Ⅰ、滋賀里系の弧状文のみられる広田Ⅲ・Ⅳ期を晩期Ⅱに、いわゆる黒川式を晩期Ⅲにとも考えてみたがこれも適切とは思われない。したがって広田Ⅰ～Ⅳ期をそれぞれ晩期Ⅰ～Ⅳ式とし、塚堂B地区出土の古相のもの、松木5層出土の晩期土器、黒川洞穴で設定された本来の黒川式をもって晩期Ⅴ式、高原・長行・松木4・3層・野黒坂・山鹿等で出土している曲り田（古）式の直前の土器を晩期Ⅵ式として設定したい。今後良好な遺跡に恵まれた段階でしかるべき型式名が与えられよう。

板付Ⅰ式土器に夜臼系土器が伴うことは周知のことであるが、これは本来同時存在のものではなく夜臼式が板付Ⅰ式の段階に残存するものと解される。ところで福岡県宗像郡津屋崎町今川遺跡の発掘結果に基づいて伊崎俊秋は夜臼式を伴わない板付Ⅰ式の新段階を設定した。<sup>(17)</sup>氏は3号住居跡・包含層下層の土器を今川Ⅰ式、V字溝は下・中・上層に分かれ下層から中層へと先後関係があるが、V字溝3層の土器を合わせて一型式とし、層序毎の変化は一型式内での推移としてとらえV字溝出土土器を今川Ⅱ式とし、これを板付Ⅰ式の新段階のものとした（第19～21図）。今川Ⅰ式は夜臼式と板付Ⅰ式が共伴する段階であり、図示された板付Ⅰ式甕（第19図5）の口縁の外反度は弱く板付Ⅰ式のなかでは古相を呈している。V字溝出土の土器は地域性もあろうが甕・壺ともに古い形態を残しているとはいえ、高坏に特徴的にみられるように口縁内側に粘土帯を貼付する手法が出現しており板付Ⅱ式と把握されるものである。<sup>(18)</sup>高坏で板付Ⅰ式としてよいものは溝下層より出土したもの（第19図17）であり、あるいは溝下層は板付Ⅰ式のものとしてもいいかもしれない。今川Ⅰ式の板付Ⅰ式の甕と比較して今川Ⅱ式の甕は口縁の外反度が強く明らかに新出の要素である。今川遺跡V字溝出土土器の大部分を板付Ⅱ（古）式として位置付けるならば、板付Ⅰ式（古）・新式はいかなるものか高坏を例にとってみよう（第18図）。板付Ⅰ（古）式の高坏は夜臼式の高坏から発達したもので口縁は短かく、夜臼式の高坏口縁がほぼ直立していたのに比し大きく外反する。脚・坏接合部には凸帯を貼付するが刻目は施さない。脚は短く、裾で開くタイプのものである。板付Ⅰ（新）式のものとは大きく外反する口縁の中途に屈曲部を設け、鋤先口縁へと発展する祖形が看取される。脚・坏接合部は凸帯を貼付し刻目は施さないが脚は長大化し、裾近くで段を形成する。この段は今川遺跡のものが沈線状をなすのと異なる。これは又壺口縁外側の段と対応するもので沈線状をなすものとは時間差をしめすものと考えられる。板付Ⅱ（古）式は先にのべたように口縁内側に粘土帯を貼付する手法が発生している。これは壺口縁内側の粘土帯貼付とも共通する要素であり、これをもって板付Ⅱ式の指標としたい。脚・坏接合部は凸帯を貼付し、脚が長大化しているのは



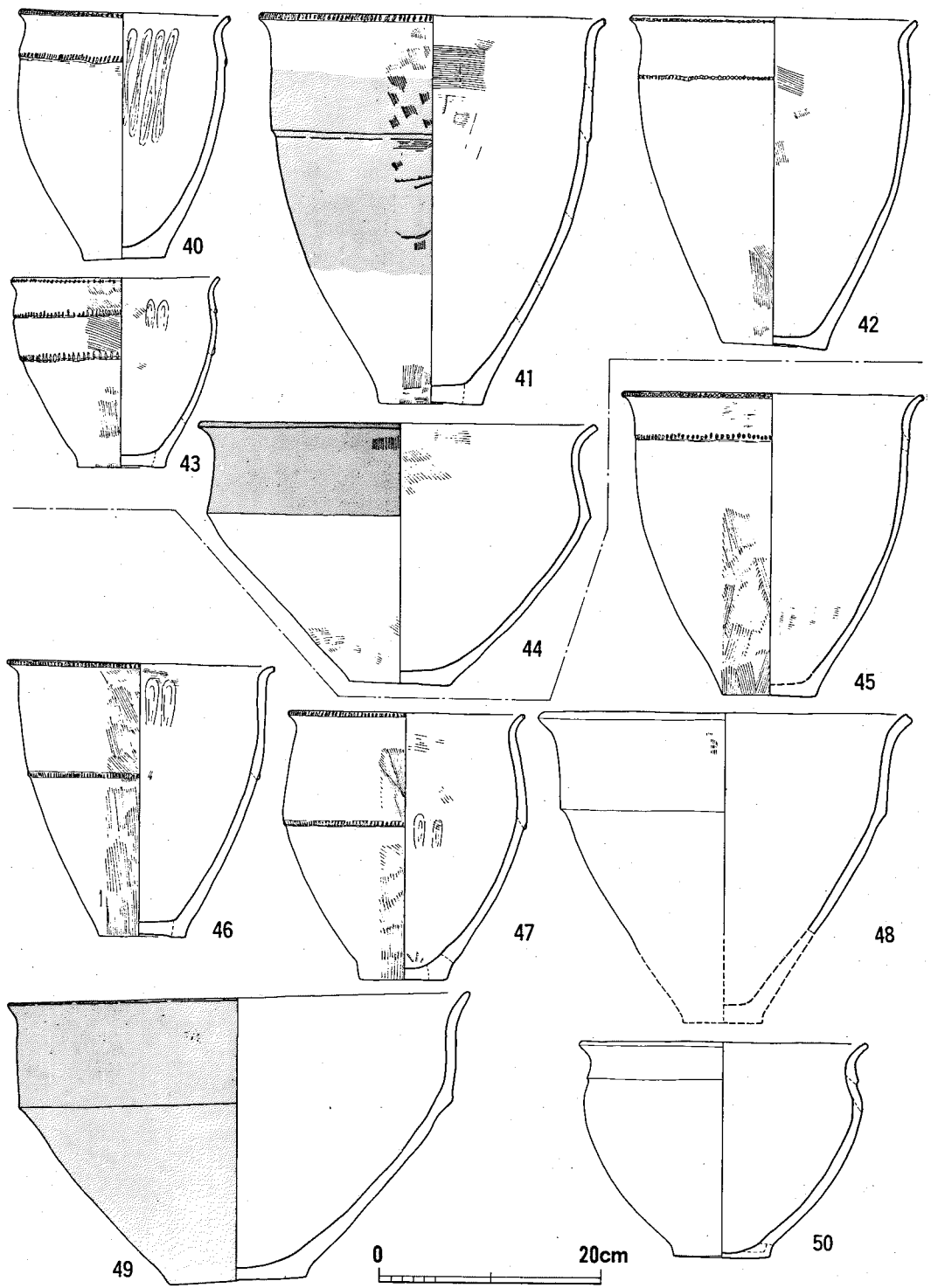
第 19 图 今川遺跡出土土器 1 (縮尺1/6) 1…3号住居跡 2~13…包含層下層  
14~18…V字溝下層 19~24…V字溝下層・中層



第 20 図 今川遺跡出土土器 2 (縮尺1/6)

25~34.....V字溝中層

35~39.....V字溝上層

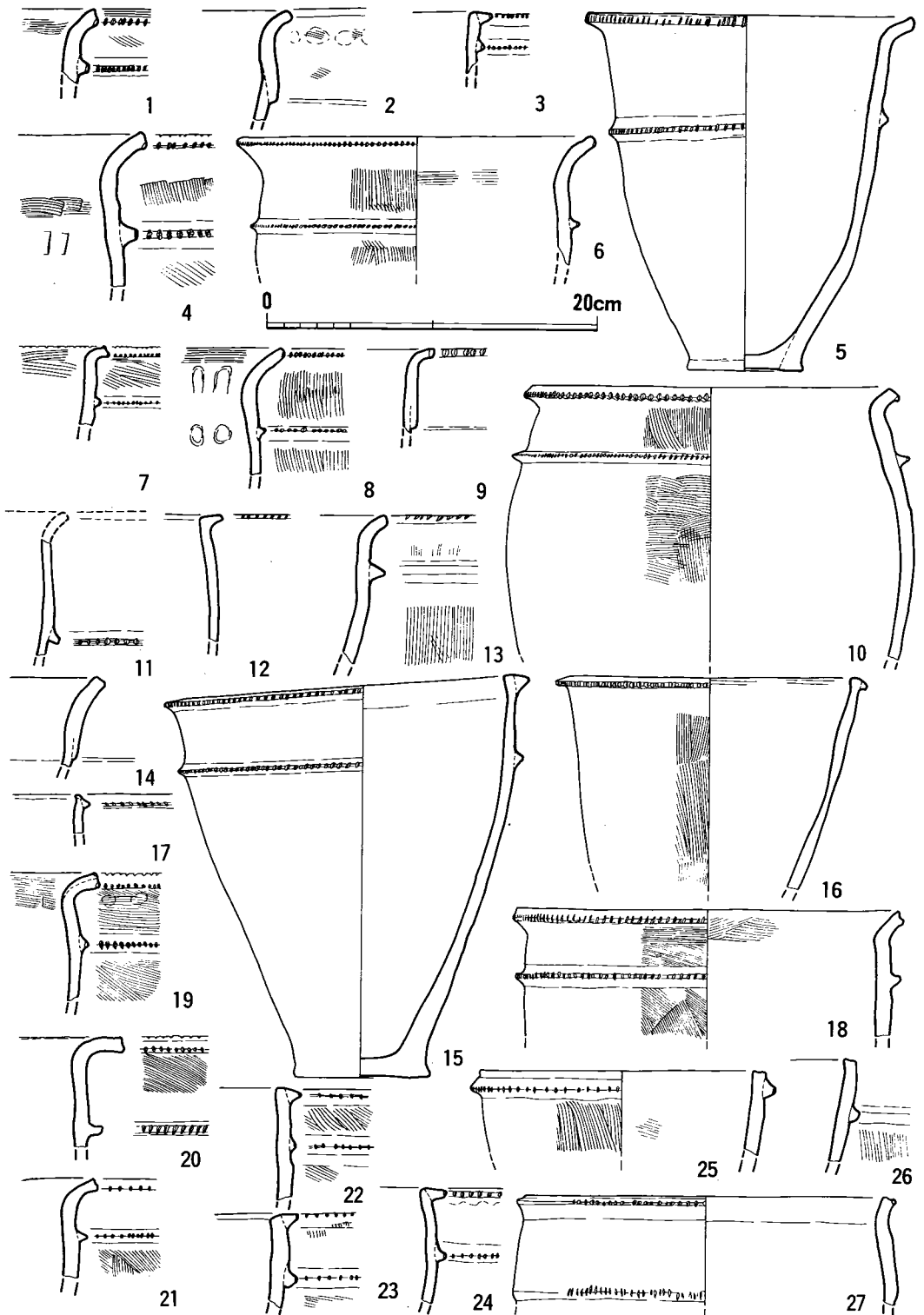


第 21 図 今川遺跡出土土器 3<夜白系土器> (縮尺1/6) 40~44.....包含層下層・中層 45~50.....包含層・中層

前者と変わらないが、脚裾部の沈線が前段階の段と異なる。高坏では以上のように分類し得たが、壺・甕等の変化は各地域各様でとくに甕の変化が乏しいように思われる。しかし甕は口縁端一坏に刻目を施したものを板付Ⅰ式に、口縁端下端に刻目を施したものを板付Ⅱ式とされてきた分類を妥当なものとして踏襲したい。そして板付Ⅰ式の新・古の差は口縁の外反度が弱く、口縁から底部まで直線的なものが古く、口縁の外反度が強く胴部は次第に張りをもってくるのが新しいものと一般的にはいえよう。

板付Ⅱ式は古・中・新の三段階に分類できるが、ここでは詳細について述べる時間的余裕がないので、先に私が甕棺の編年で分類したKⅠa式・KⅠb式・KⅠc式とそれに併行する土器が板付Ⅱ(古)式、板付Ⅱ(中)式、板付Ⅱ(新)式に対応するものであり大筋としてはまちがいないもの<sup>(19)</sup>と考えるので、この点はそちらにゆずって、ここで亀の甲型土器の発生についてみることにしよう。

亀の甲式、南九州の高橋Ⅱ式・東九州の下城式土器等は夜臼系の土器であることは明らかで、板付Ⅰ式の波及が遅れた地域で発生し、分布の主体をもつものである。板付Ⅰ式の甕自体も前段階の曲り田(古)式・曲り田(新)式・夜臼式の直立する甕の系譜のなかから発生するものであるが、板付Ⅰ式の発生した玄界灘沿岸部にも、主として肩で屈曲する甕の系譜を引く夜臼系土器がみられる。これは最近藤尾慎一郎が板付系統と刻目凸帯文系統との折衷系統としたものであるが、福岡地方から遠賀川流域にかけての板付Ⅰ式以後にみられる夜臼系の土器であるといえる<sup>(20)</sup>。そしてこの種土器は各地域によってかなり顕著な地域差を示している。福岡地方においては如意形口縁の肩部にあたる位置に刻目凸帯を貼付するものを主体にし、肩に段をつくり刻目を施すものは少ない。さらに東にいくと今川遺跡(第21図)付近から遠賀川流域にかけては肩部に段をつくり刻目を施すものが主体となる<sup>(21)</sup>。さらに今川遺跡では板付Ⅱ(古)式の段階まで夜臼系の深鉢が残存している。しかしこれらの夜臼系甕は筑前・筑後・肥前三国境付近より南部で発生した夜臼系甕いわゆる亀の甲型土器が刻目凸帯文系土器であることがあまりにも明瞭であることによって注意されることが少なくあるいは無視されてきたのが実態といえる。板付Ⅰ式発生地の玄界灘沿岸地域にこのような甕がみられるからには当然のこととして板付Ⅰ式の波及していない筑後・肥前南部等には亀の甲型土器が発生する以前つまり板付Ⅰ式併行期まで夜臼系甕の伝統を引くというよりは夜臼系そのものに近い形態のものが存在し、これから直接的に筑後・肥前南部では亀の甲型土器に継起していくものとみられる。先に丸山遺跡・礫石遺跡等で夜臼系から板付Ⅱ式に直結することをみたが、このことから板付Ⅱ(古)式の段階で亀の甲型土器が発生することは容易に想定できよう。いまここで福岡地方と筑後地方の夜臼系甕の両者が出土した福岡県筑紫野市大島遺跡の土器をみてみよう(第22図)。大島遺跡では夜臼系の甕としては如意形口縁の甕の肩に刻目凸帯を貼付する甕を主体とし、肩に段を付すものがわずかに存在する福岡地方的要素に、刻目を施す三角口縁と肩に刻目凸帯を貼付する筑



第 22 図 大島遺跡出土の夜白系土器 (縮尺1/4)

1・2…1号住居跡 3…2号住居跡 4…2号貯蔵穴 5…9号貯蔵穴

6・7…12号貯蔵穴 8…14号貯蔵穴 9・10…16号貯蔵穴

11…35号貯蔵穴 12・13…38号貯蔵穴 14…39号貯蔵穴

15・16…44号貯蔵穴 17…4号土壌 18…5号土壌 19~27 溝下層

後系のいわゆる亀の甲型甕が少量はいり、この地域の性格を表わしている。これらに伴う土器は板付Ⅱ（古）式のものが存在し、亀の甲型甕がこの段階で発生していることは確実である。亀の甲型土器はその後板付Ⅱ式の全期間に及び、又この系統の刻目をもたない中期初頭の甕も存在するので、この種土器の細分は今後の課題となろうが、三角口縁に刻目を施し、上底を呈する甕が中期に下るものとは考えられず、ましてやKⅠc式いわゆる金海式甕棺が中期に下るものでないことはいうまでもない。

- 註1 小池史哲「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器——晩期初頭広田式の設定——」森貞次郎博士古稀記念 古文化論集 1982
- 2 橋口達也「Ⅱ—2—a—1）イ、器種——とくに甕と深鉢について——」福岡県教育委員会『石崎曲り田遺跡』上巻 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 1984
- 3 坪井清足「縄文晩期の土器——西日本——」縄文土器大成4 講談社 1981
- 4 福岡県教育委員会「塚堂遺跡」浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 1983
- 5 那珂川町教育委員会「松木遺跡」Ⅰ 上巻 那珂川町文化財調査報告書第11集 1984
- 6 財団法人北九州市教育文化事業団「長行遺跡——北九州市小倉南区大字長行所在——」北九州市埋蔵文化財調査報告書第20集 1983
- 7 福岡県教育委員会によって1983～1984年度に調査が行なわれた。未整理であるが、調査担当者の木下修・伊崎俊秋両氏の御好意によってその一部を使用させていただいた。
- 8 松岡史・前川威洋・副島邦弘「野黒坂遺跡」福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1970
- 9 芦屋町教育委員会「山鹿貝塚——福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚の調査——」1972
- 10 家根祥多「4 晩期の土器——近畿地方の土器——」縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ 雄山閣 1981
- 11 唐津市「菜畑——佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査——」1982
- 12 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年の研究——板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合——鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』1980
- 13 福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」3 福岡市報36 1976
- 14 森貞次郎「おわりに」日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会『日本農耕文化の起原に関する研究——島原半島（原山・山の寺・礫石原）及び唐津市（女山）の考古学的調査』1960
- 15 佐原真「農業の開始と階級社会の形成」岩波講座 日本歴史1 原始および古代1 1975
- 16 岡本勇「V—1 弥生文化の成立」日本の考古学Ⅲ 弥生時代 河出書房新社1966
- 17 伊崎俊秋「V—2 弥生時代の遺構と遺物」津屋崎町教育委員会『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第4集 1981
- 18 橋口達也「曲り田甕棺の編年の位置」福岡県教育委員会『石崎曲り田遺跡』Ⅰ 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集 1983
- 19 橋口達也「甕棺の編年の研究」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』——X X X I——中巻 1979
- 20 藤尾慎一郎「Ⅶ—2—1）弥生式土器」福岡市教育委員会『諸岡遺跡——第14・17次調査報告——』福岡市報第108集 1984
- 21 福岡市教育委員会「板付——市営住宅建設にともなう発掘調査報告書——1971～1974」福岡市報第35集 1976 他
- 22 浜田信也・中間研志「7 大島遺跡」福岡県教育委員会『冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1982



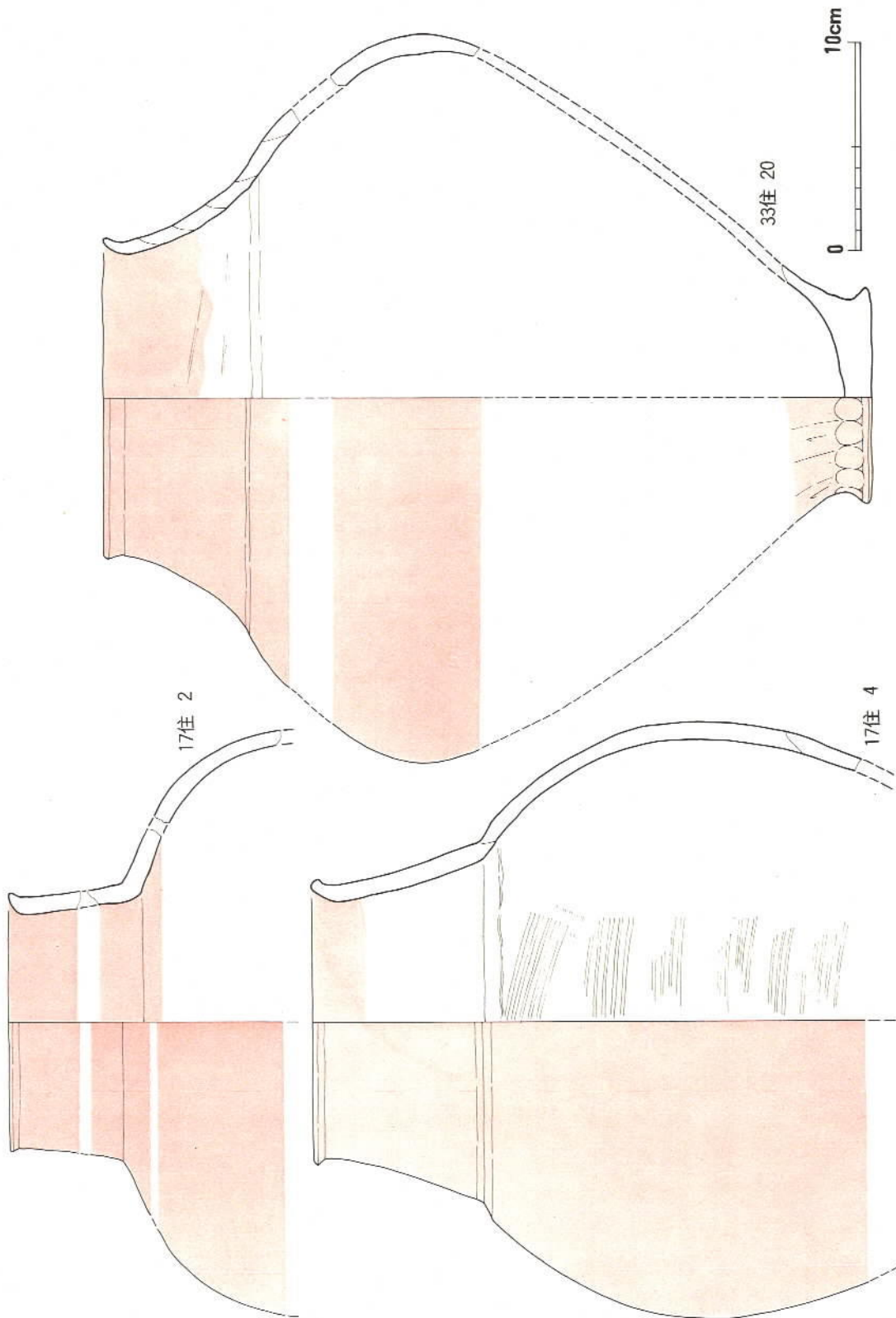
## c 曲り田出土土器の分析

縄文晩期から弥生前期までの土器編年を簡単にみてきたが、ここで曲り田出土土器の器種構成、編年的位置等についてさらに立ちいてみることにしよう。

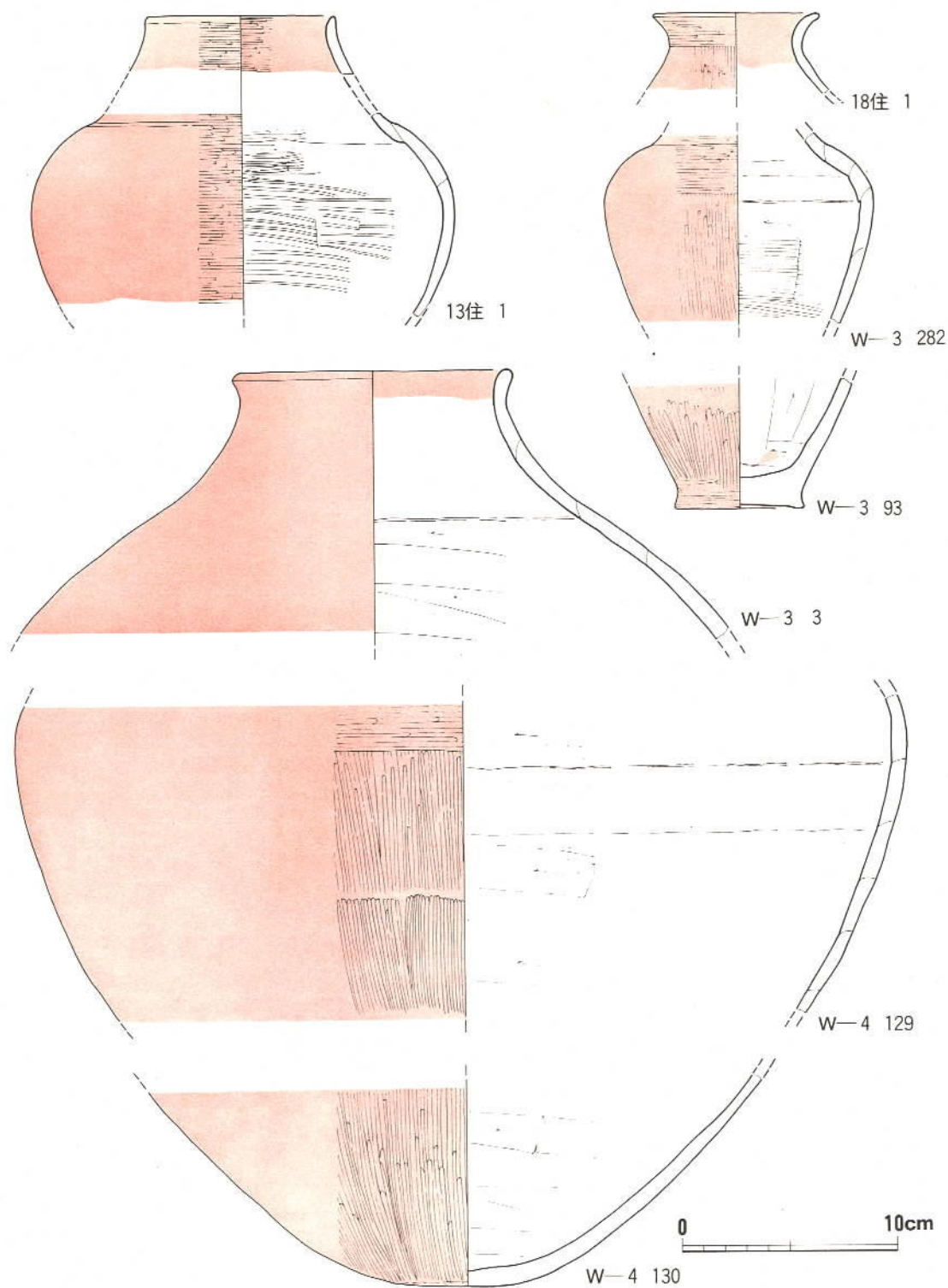
### イ 器種構成

曲り田出土土器は壺、碗、高坏、浅鉢、深鉢、鉢、甕がある。

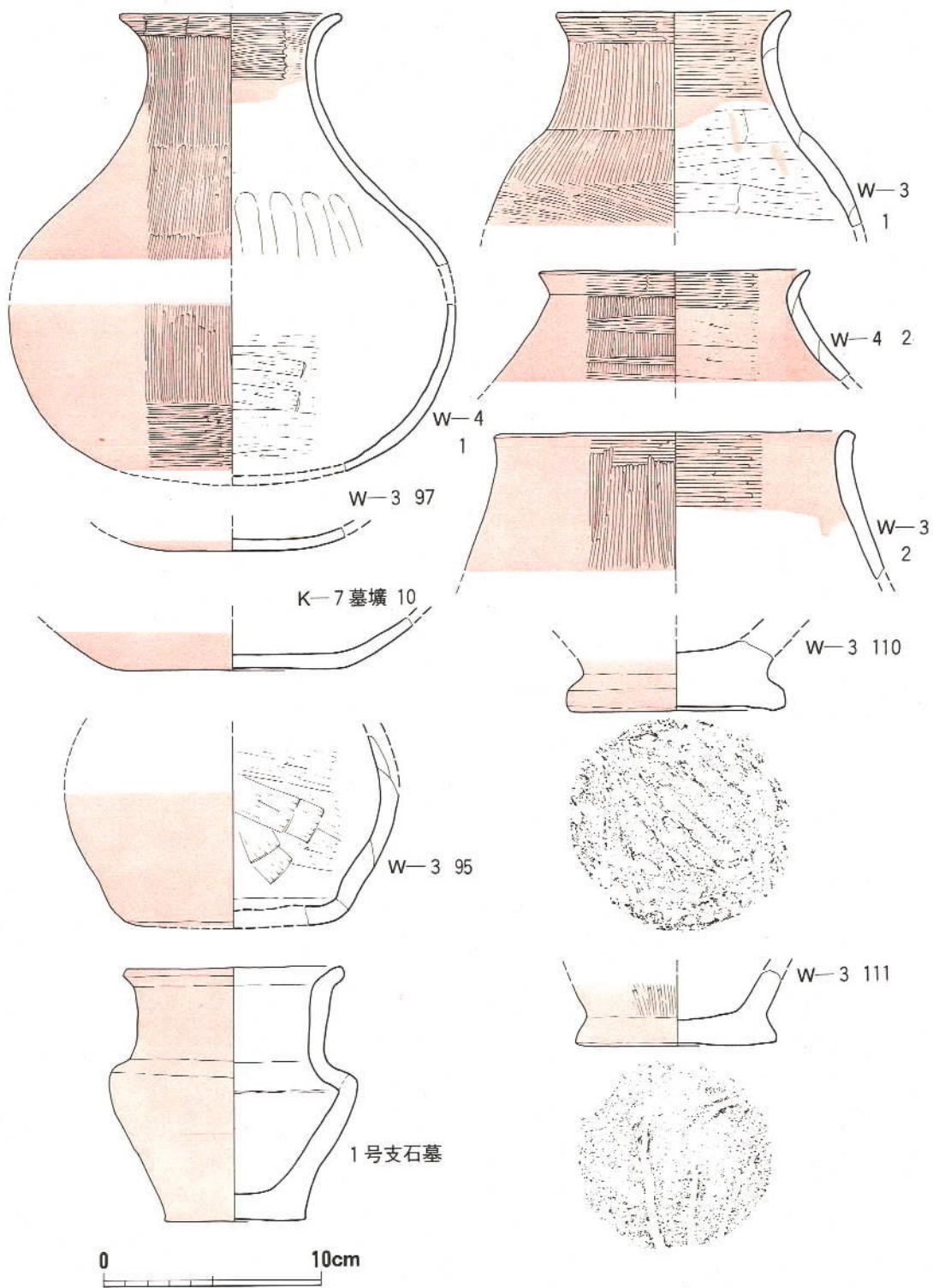
壺（第23～28図）は丹塗り磨研、黒色・黒塗り磨研、粗製品、無文土器系の壺が存在し、それぞれに丸底、平底のものがある。量的に最も多いのは丹塗り磨研壺（第23～第25図）で大、中、小各種あり、頸、肩部、胴下半部等に縦方向ミガキを施すもの、全体に横方向ミガキを施すものがある。縦方向ミガキは朝鮮無文土器壺にみられる手法であってこれとの関連が注意されるが、器壁がうすく仕上げられかつ焼成のきわめて良好なW-3の1、W-4の1等は無文土器としてもさしつかえないものとする。この種壺の底はW-3の97のような丸底のものと思われる。しかし他の縦方向ミガキを施したもの、W-4の129、130、K-7墓塚の10、W-3の95等の丸底を呈するものは別に無文土器との関係を見る必要はなく、これらの丸底壺は壺としては古い要素を示すものとして把握してよい。17住2の頸部が短くかつ直立し肩の張りが強いもの、W-3の3みたいに頸部が短く肩、胴へとつづく壺は丸底になるものと思われ古い要素をもつものと考えられる。1号支石墓の副葬小壺の形態は玄界灘沿岸部のものとしては一般的ではなく、原山支石墓の副葬品等に共通する要素がみられるが、むしろ発生期の壺の形態として古いものと考えたい。黒色磨研壺（第26図）は器形的には丹塗り磨研壺と変るところはないが、縦方向ミガキを施すものは少なく、横方向ミガキを施すものが大部分である。33住21みたいに頸が直立ぎみのもの、W-4の269の丸底のもの等が古い要素を示すものと考えられる。粗製の壺（第27図）は量的にはきわめて少なく条痕のみられるもの（28住3）板状工具による擦過（W-4の116）指によるナデ（33住1）等の調整法がみられる。W-3の1、W-4の1等の他に無文土器系の壺と思われるものにW-3の132、211があげられる。これは口縁が直立する短頸の壺で胴部を欠くが同一個体と思われる。内外ともにナデ風の横方向ミガキを施し、黄白色を呈し、胎土、焼成ともにこの時期のものとしてはやや異質である。W-2の15は丹塗り磨研壺で、口縁部は内傾して短く、すぐ肩、胴部に連なる。全形としてはW-3の132と同様短頸で長胴形をなす無文土器系の壺と考えられる。39住5は丹塗り磨研壺であるが、器形が通常壺と異なり、あえていえば無文土器にみられるフラスコ形をした壺の系統かと考える（第28図）。



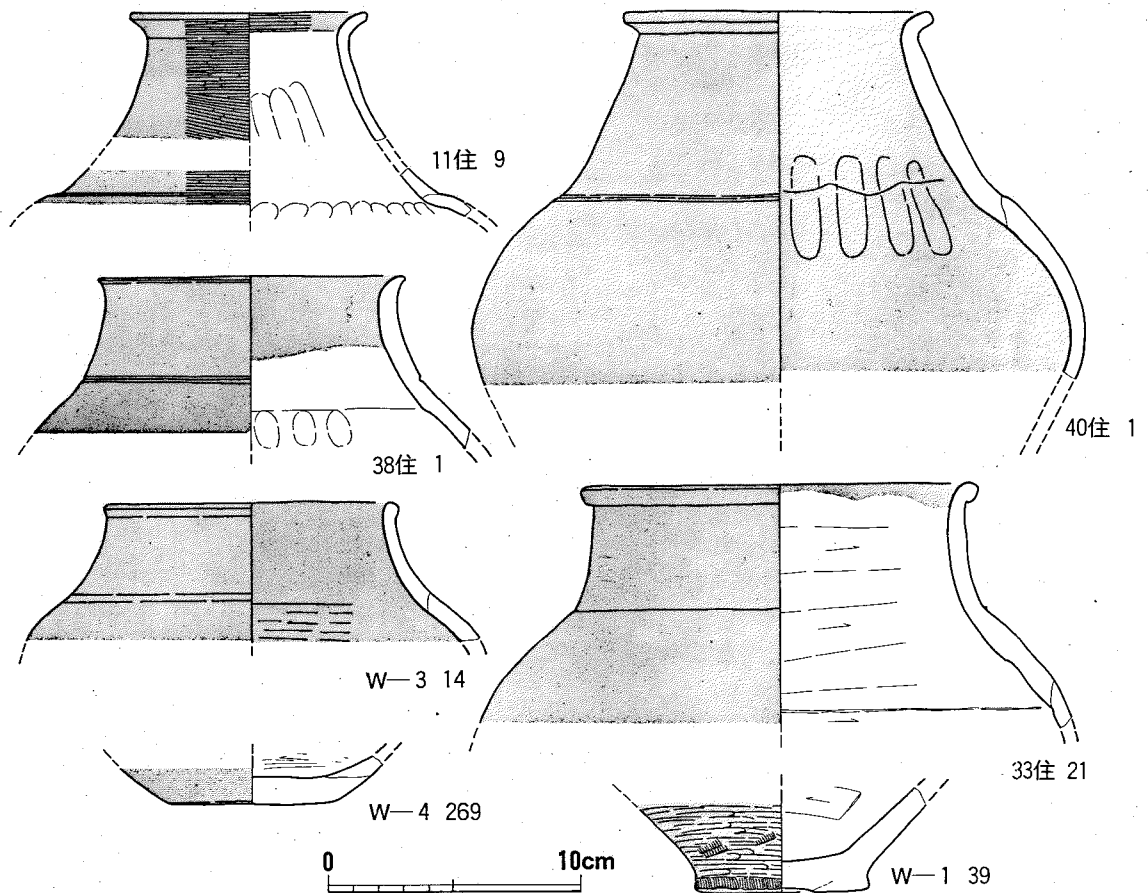
第 23 図 曲り田出土の壺 1 丹塗り磨研壺 (縮尺1/3)



第 24 図 曲り田出土の壺 2 丹塗り磨研壺 (縮尺1/3)



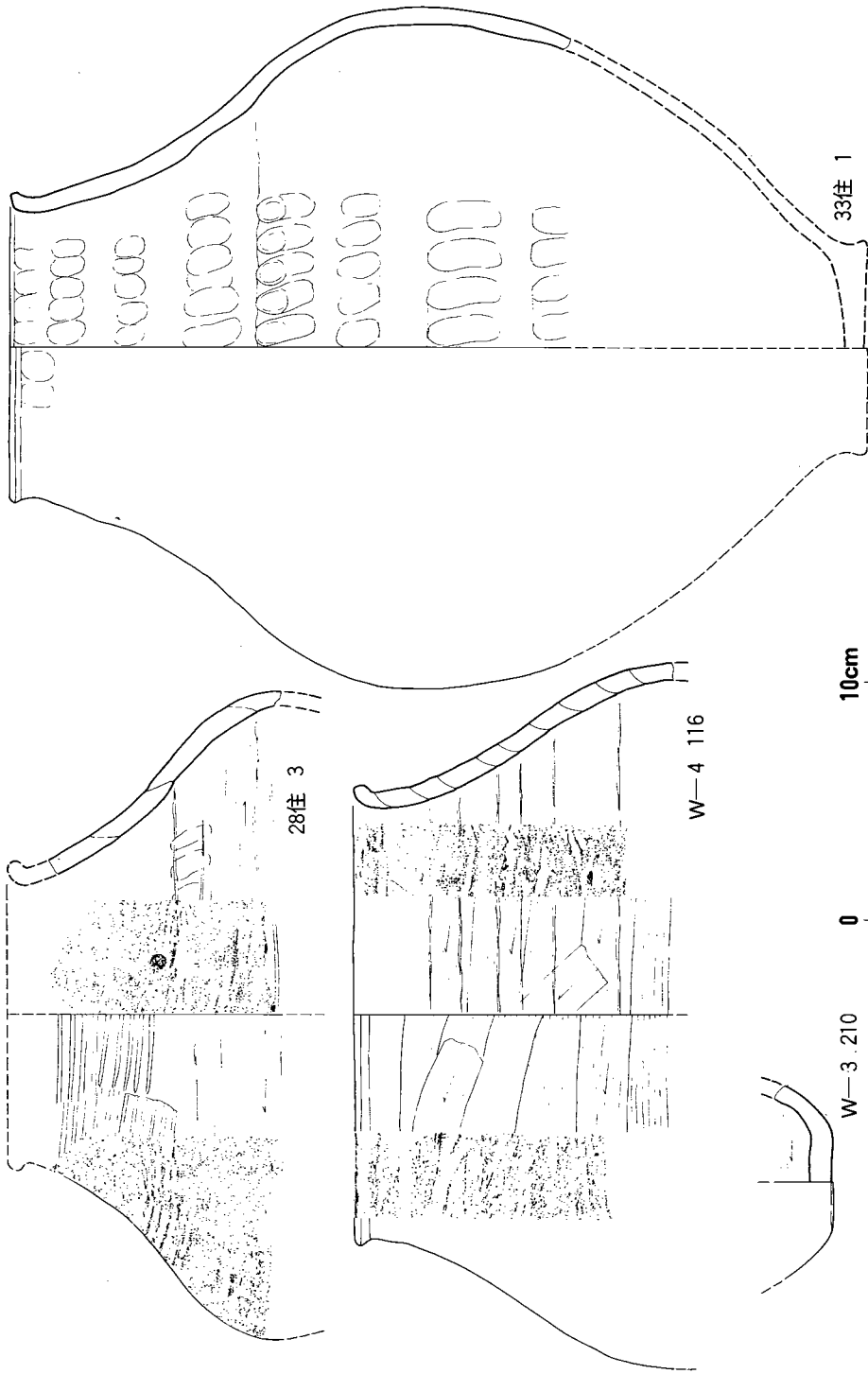
第 25 図 曲り田出土の壺 3 丹塗り磨研壺 (縮尺1/3)



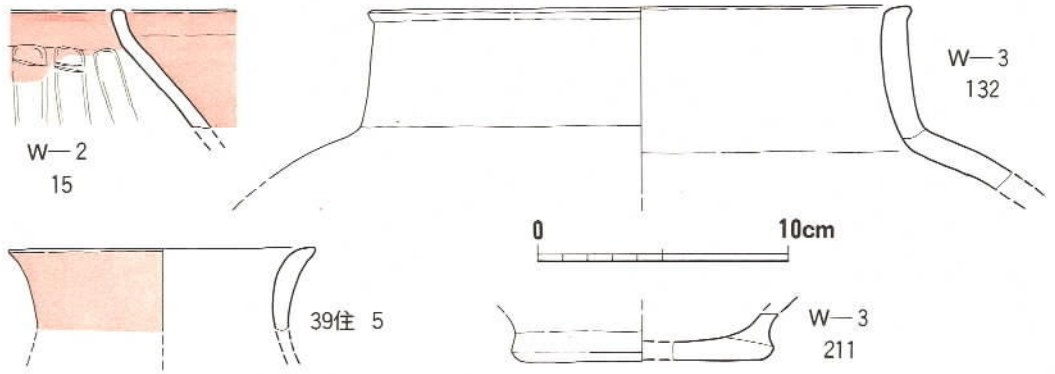
第 26 図 曲り田出土の壺 4 黒色磨研壺 (縮尺1/3)

碗 (第29図) は丹塗り磨研、黒色、黒塗り磨研、粗製品とある。丹塗り磨研碗には口縁内外に沈線をめぐらし口縁端を丸く仕上げるもの、口縁外側に沈線をめぐらし口縁端を丸く仕上げるもの口縁外側に沈線の省略形態のような段をつくるもの、沈線、段のないもの等がある。当然のこととして内外に沈線をめぐらすものが古く、口縁外側の沈線、口縁外側の段へと続くものとする。黒色磨研のものにはここでは沈線、段をつくるものはなかった。W-3 の143は粗いミガキを加えた一応精製品であるが丹塗りも黒塗りも認められない。W-3 の144は口縁内外はナデ他は内外とも横方向擦過の粗製品である。17住52, 53は一応碗としたが鉢とも考えられる。52は口縁内側に段をつくり、53は口縁内側に沈線状のものがみられ古い要素を残している。52は横方向ミガキ、53は不明。

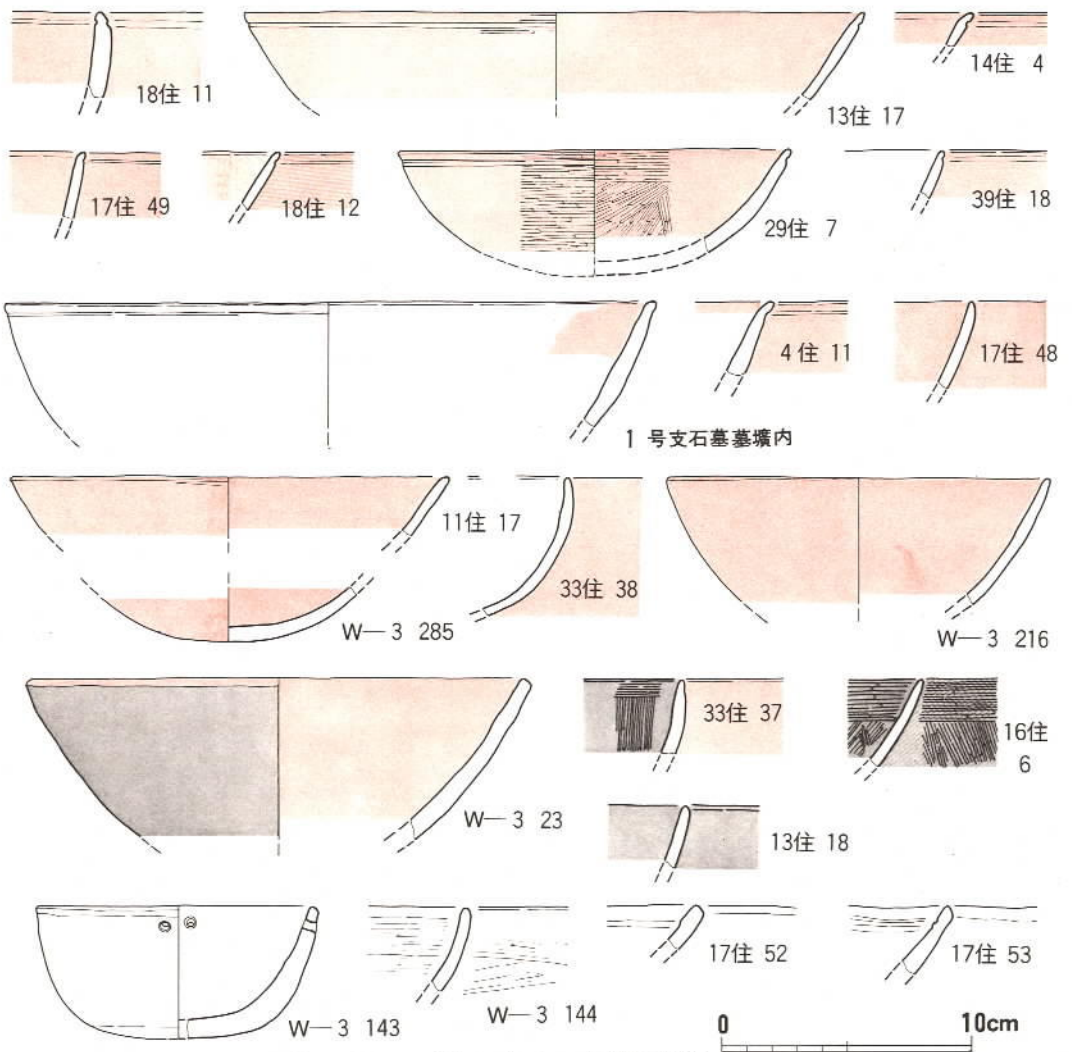
高坏 (第30図) は浅鉢との区別がむずかしいが浅鉢に比べると小形のものが多い。その大部分は黒色、黒塗り磨研のものであるが、W-3 の32は黒色磨研の上にさらに口、頸部内外に鮮



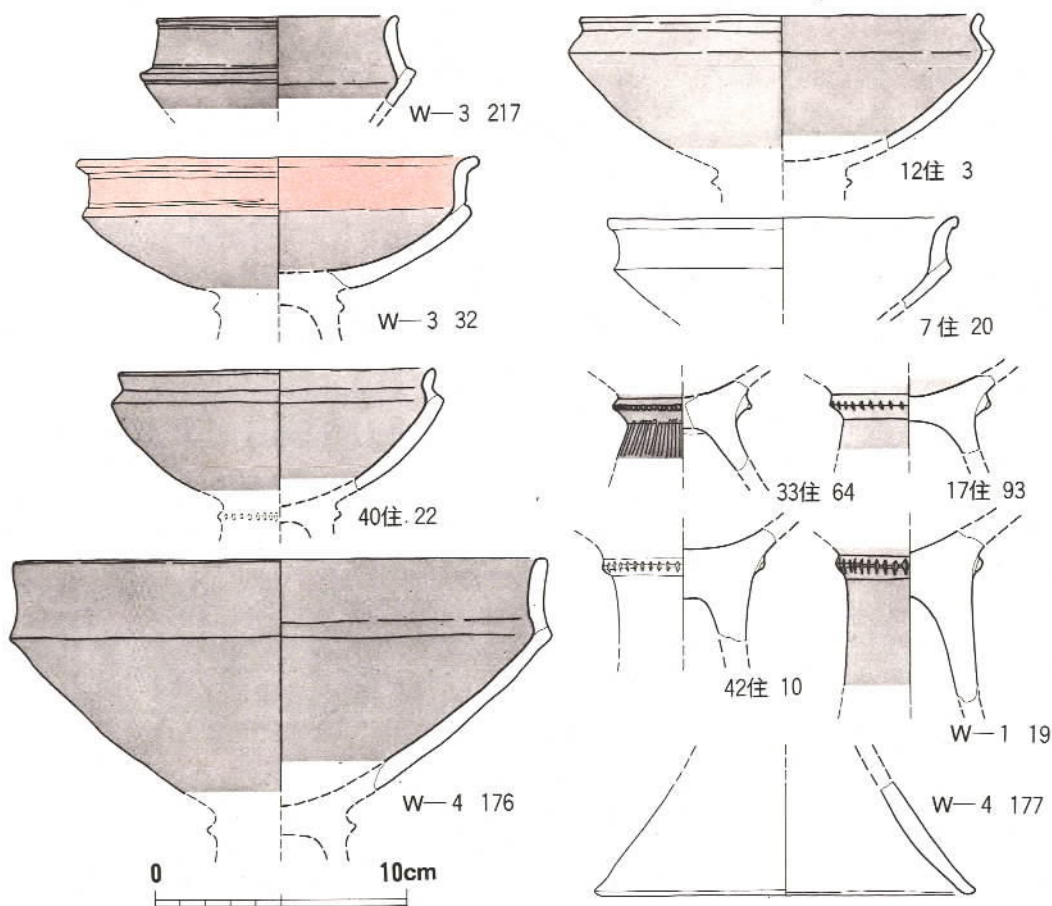
第 27 図 曲り田出土の壺 5 粗製品 (縮尺1/3)



第 28 図 曲り田出土の壺 6 無文土器系 (縮尺1/3)



第 29 図 曲り田出土の甕 (縮尺1/3)

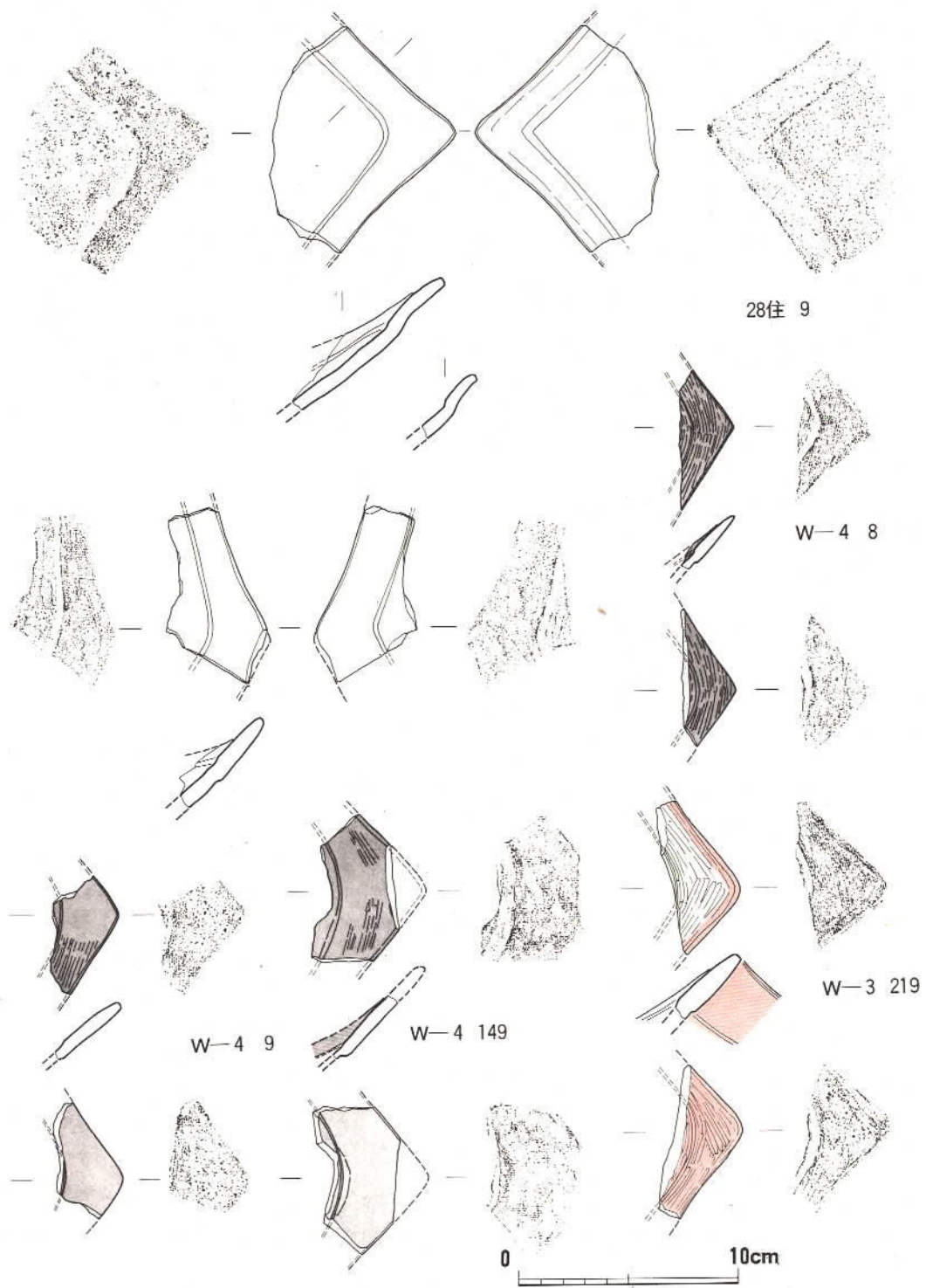


第 30 図 曲り田出上の高坏 (縮尺1/3)

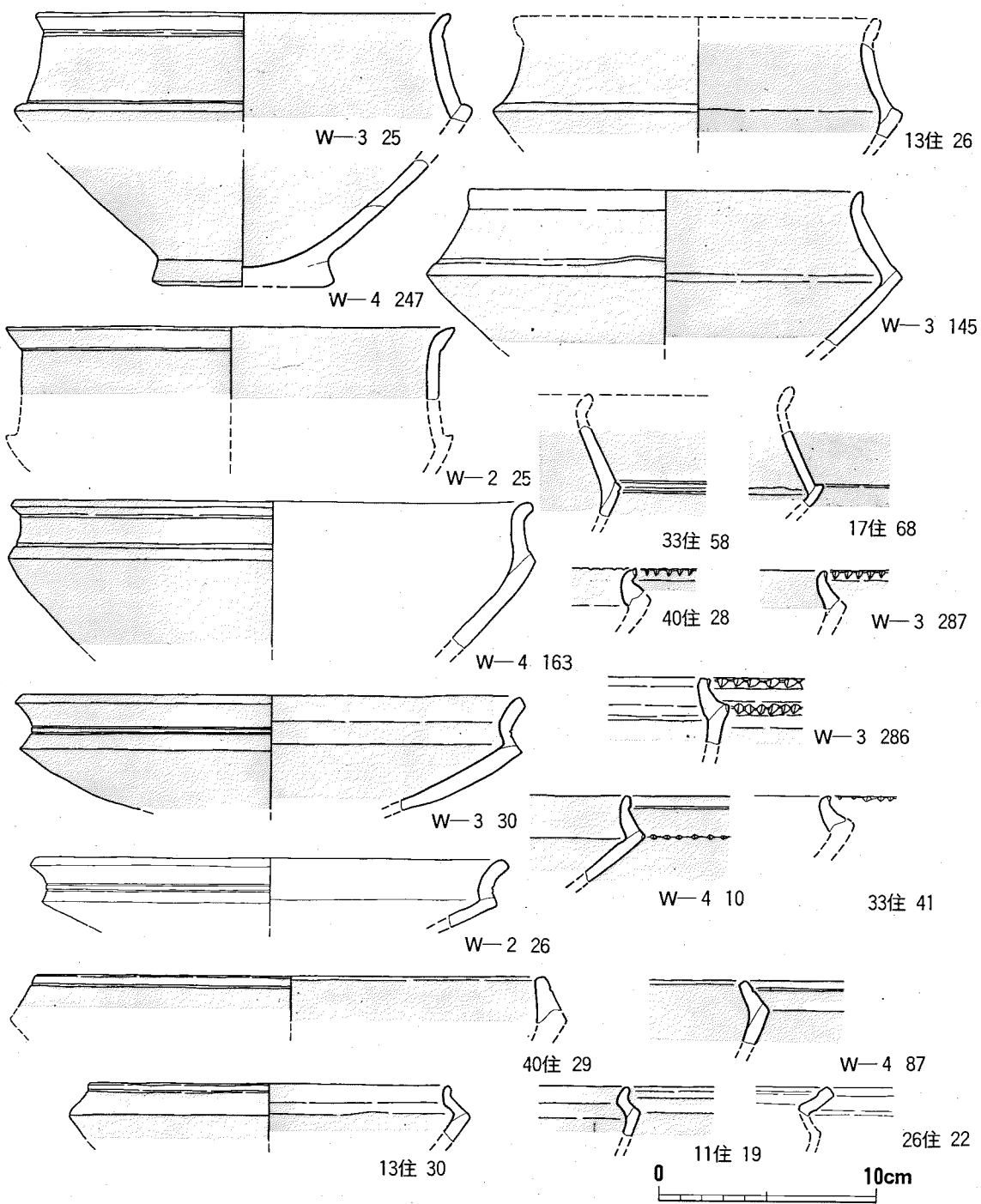
やかな丹塗りが施されている。浅鉢と同様に頸部が長く口縁下、肩部の上下等に沈線等をめぐらし、又肩部が強く突出するものが古い要素といえる。脚、坏接合部には凸帯を貼付し刻目を施す。脚は完形品はないが短脚で裾にむかってひろがる形態のものとする。

**浅鉢** (第31~34図) は方形浅鉢を含め形態的に多様である。方形浅鉢は完形品はないが、菜畑等と比較するときわめて単純化された形態である。あえていえば口縁内外に段をもつものが古い要素をもつといえる。丹塗り磨研、黒色磨研、単なるミガキだけのものがある。浅鉢は口縁内面に段をつくるものが1点みられ (26住22) 晩期VI式の要素をもつものが残存したものと考えられる。口縁が外反し、口縁下に沈線、段をつくり、頸が長く、肩部が強く突出し、肩の上下等に沈線をめぐらすもの (W-3の25, W-3の145, 17住68, 33住58等), 同様の特徴を示すが頸が短いもの (W-4の163), 以上の両者は古い要素と考える。口・頸部がくの字に屈曲し、頸部の屈曲部に沈線2条をめぐらすもの (W-2の26, W-3の30等), これは山鹿只

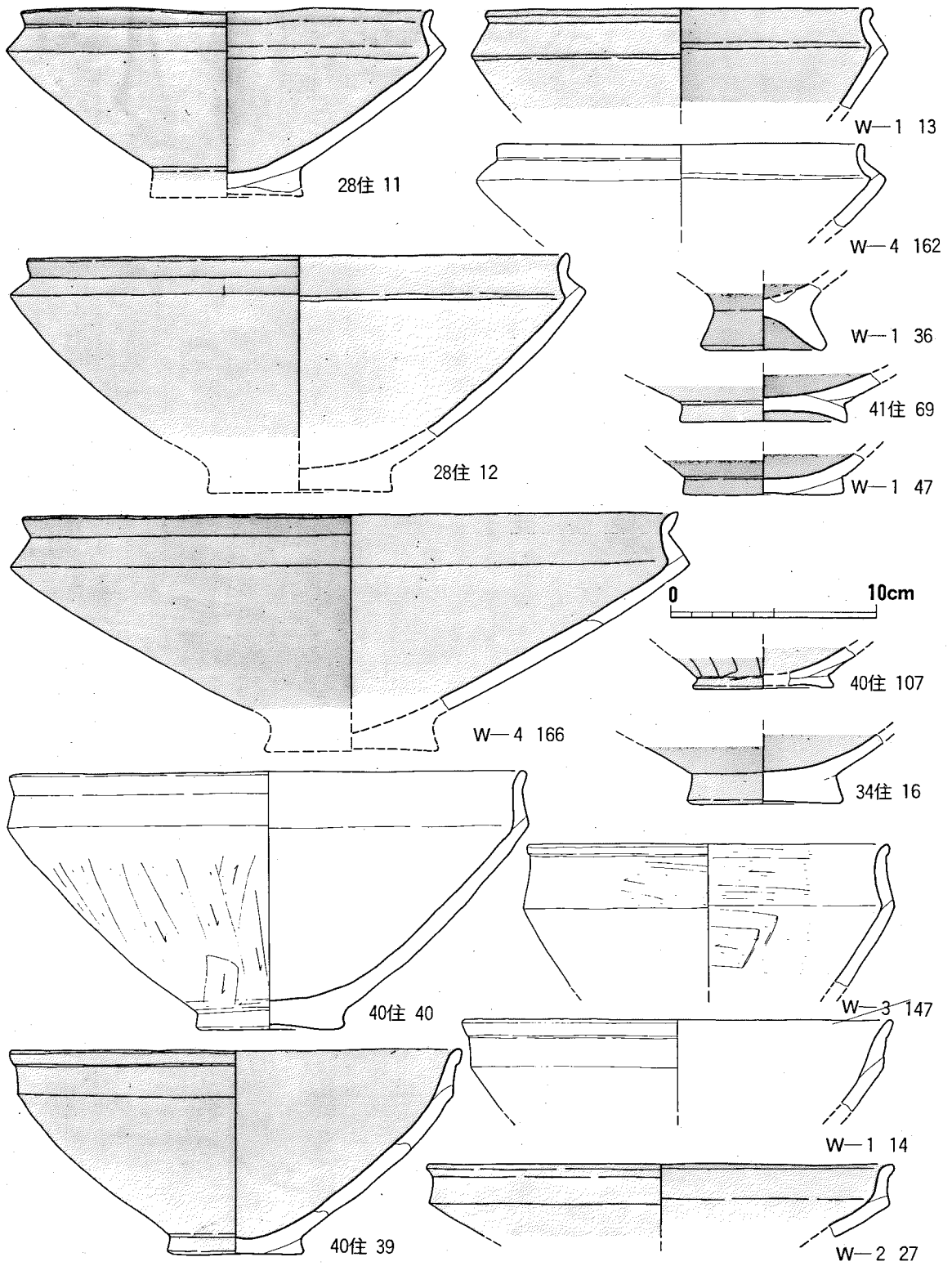




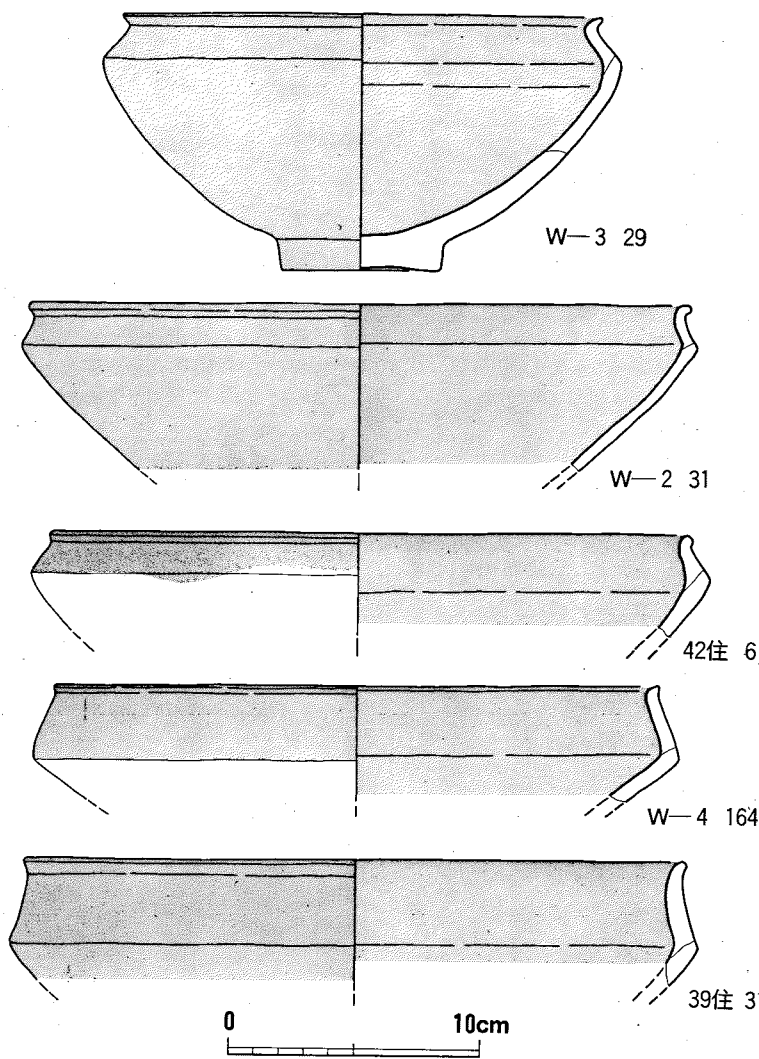
第 31 図 曲り田出土の浅鉢 1 (縮尺1/3)



第 32 図 曲り田出土の浅鉢 2 (縮尺1/3)



第 33 図 曲り田出土の浅鉢 3 (縮尺1/3)



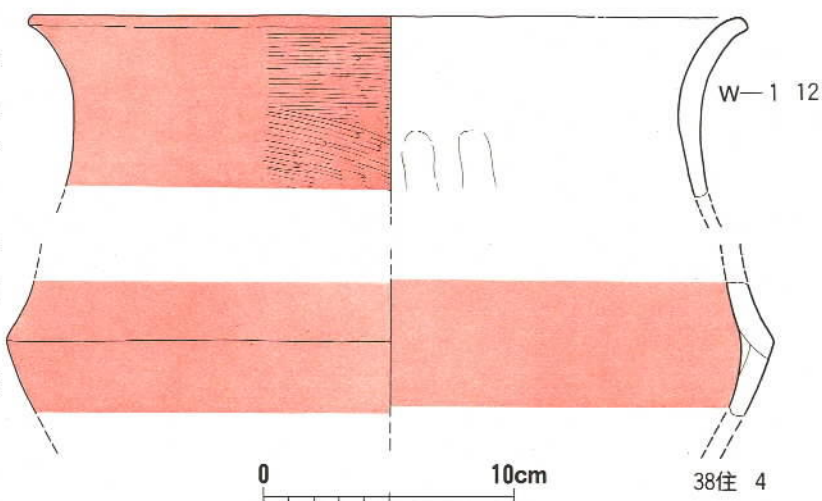
第 34 図 曲り田出土の浅鉢 4 (縮尺1/3)

塚出土の浅鉢等からつな  
がる要素をもち古いが、  
前二者と同列とは考えら  
れない。口・頸部は屈曲  
せず肩につづき口縁下に  
沈線をめぐらすもの (40  
住29, W-4 の87等)、  
口縁は外反し頸部でくの  
字に屈曲し、頸部内面に  
稜を有するもの (11住19,  
13住30)、これは口縁内  
面に段をつくる晩期VI式  
の浅鉢の段がなくなった  
ものと考えられ古い要素  
をもつといえる。口縁は  
外反し頸は短いタイプで  
口縁又は肩部に刻目を施  
すもの (33住41、40住28、  
W-3 の286、W-3 の  
287、W-4 の10等)、口  
縁は外反又は直立し肩の  
屈曲度は強いが頸部内面  
には稜をつくらないもの  
(28住12、40住40、W-  
1 の13、W-2 の31、W-

-3 の147、W-4 の166等) で曲り田の浅鉢はこの種が最も量的には多い。この変形としてW-3 の29みたいに肩の屈曲部が丸味を帯びるのがある。口頸部は外に開き、口縁下に段をつくり肩の屈曲の弱いもの (40住39, W-1 の14, W-2 の27等)、口縁は短く外反し、口縁下には段をつくり肩の屈曲度もそれほど強くないもの (39住31, 42住6, W-4 の164等) がある。これはいずれかというとな曲り田出土浅鉢のなかでは新出の要素といえよう。黒色、黒塗り磨研を基本とするが、単なるミガキだけのもの、粗製品がわずかではあるがみられる。

深鉢 (第35図) は晩期初頭以来の精製深鉢の系譜をひくもので、晩期V、VI式頃にほとんど消失したといってよいほど量的には少ない。曲り田 (古) 式以後板付I式までみられるが、今

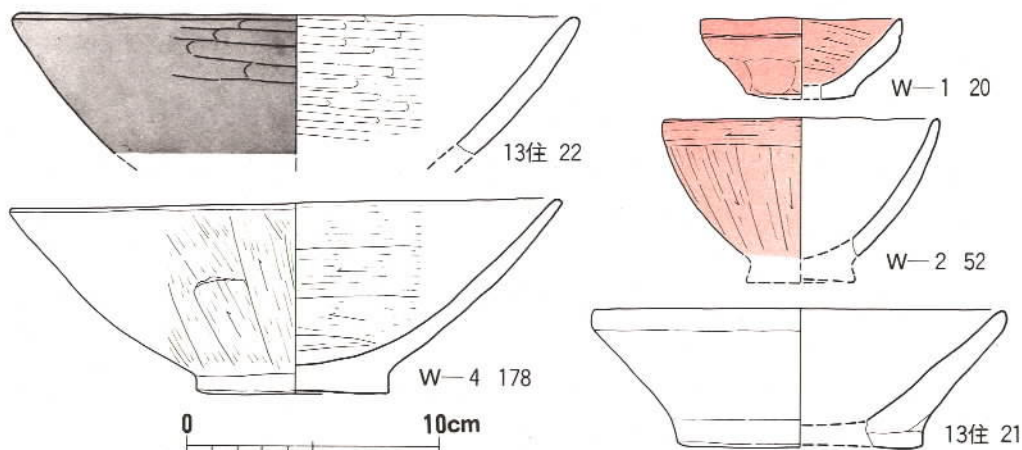
川遺跡では板付Ⅱ  
 (古)式まで残存  
 している。曲り田  
 でも量的にはわず  
 かである。38住4  
 は丹塗りを内外に  
 施し外面は横方向  
 ミガキの精製品。  
 W-1の12は口径  
 27.8cmを測る。  
 頸部内面はナデ、  
 口縁内外は横方向  
 ミガキ、頸部外面



第35図 曲り田出土の深鉢 (縮尺1/3)

は斜方向ミガキで、外面には丹塗りを施す精製品である。他に黒色磨研、ミガキだけの精製品  
 がわずかではあるが存在する。

鉢 (第36図) は碗が丸底を呈するのに対し、すべて平底をなしている。W-1の20は丹塗りの  
 小鉢で器高は3.2cm、復原口径は8.0cm。口縁下に1条の沈線をめぐらし、丹塗り磨研碗の  
 口縁下沈線と対応するものであろう。内面は擦過、外面はナデ調整である。W-2の52も丹塗  
 りの小鉢である。調整法は板状工具による擦過。13住22は黒色磨研で、内外ともに粗い横方向  
 のミガキを施している。13住21は内面ナデ調整の鉢。W-4の178は器高7.5cm、口径21.4cm、  
 底径7.6cmの鉢で内面は横方向擦過、外面は縦方向の条痕の上から縦方向擦過で条痕をかき消  
 す粗製品である。量的には少ない。



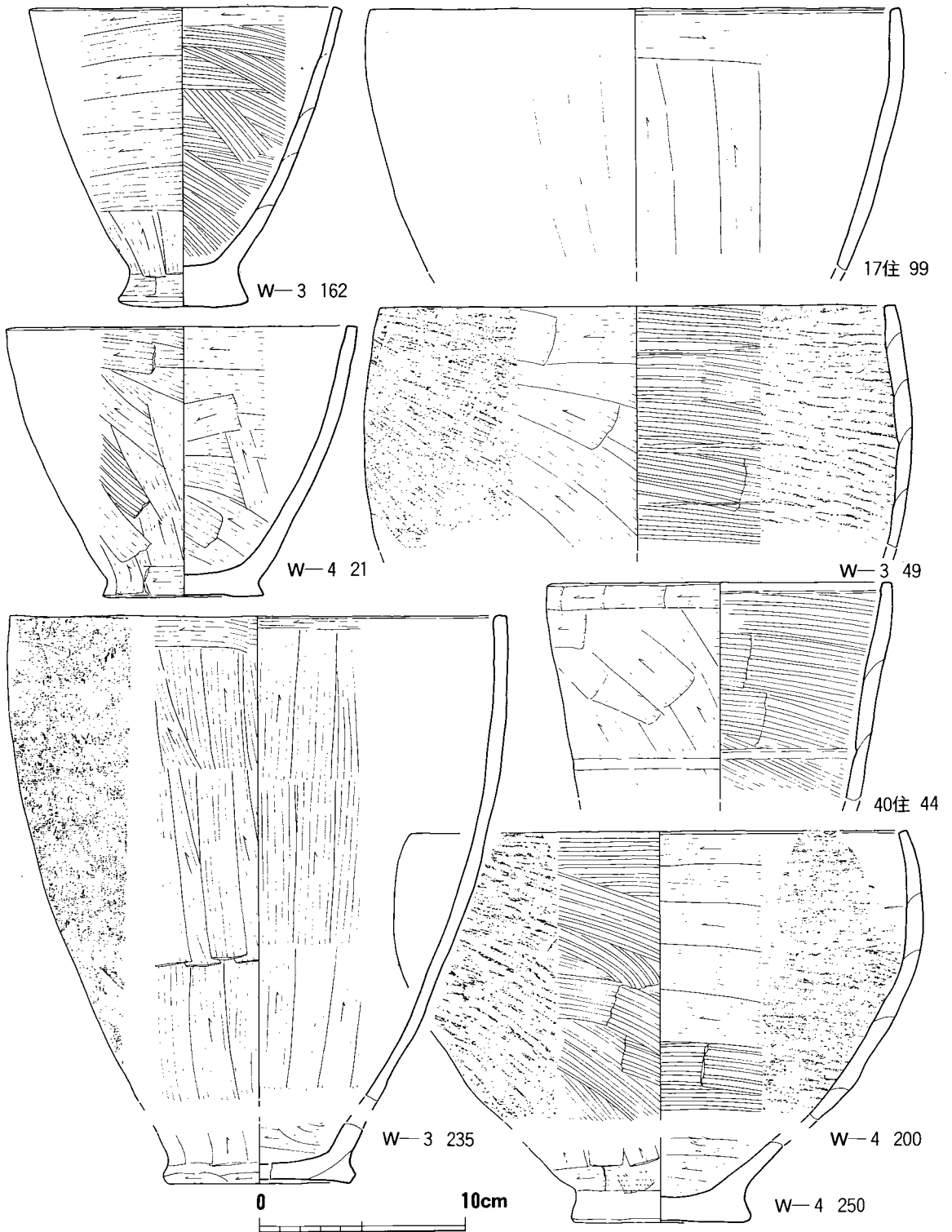
第36図 曲り田出土の鉢 (縮尺1/3)

甕（第37～46図）が量的には最も多く、器種にも富む。大きくは直立する甕と肩部で屈曲する甕に分け、それが刻目のないもの、刻目を施すもの、刻目凸帯を貼付するものにわけられる。ここでは甌も一緒にとりあげたい。これらの他に口縁が直に外反する小甕も存在する。順を追って説明する。

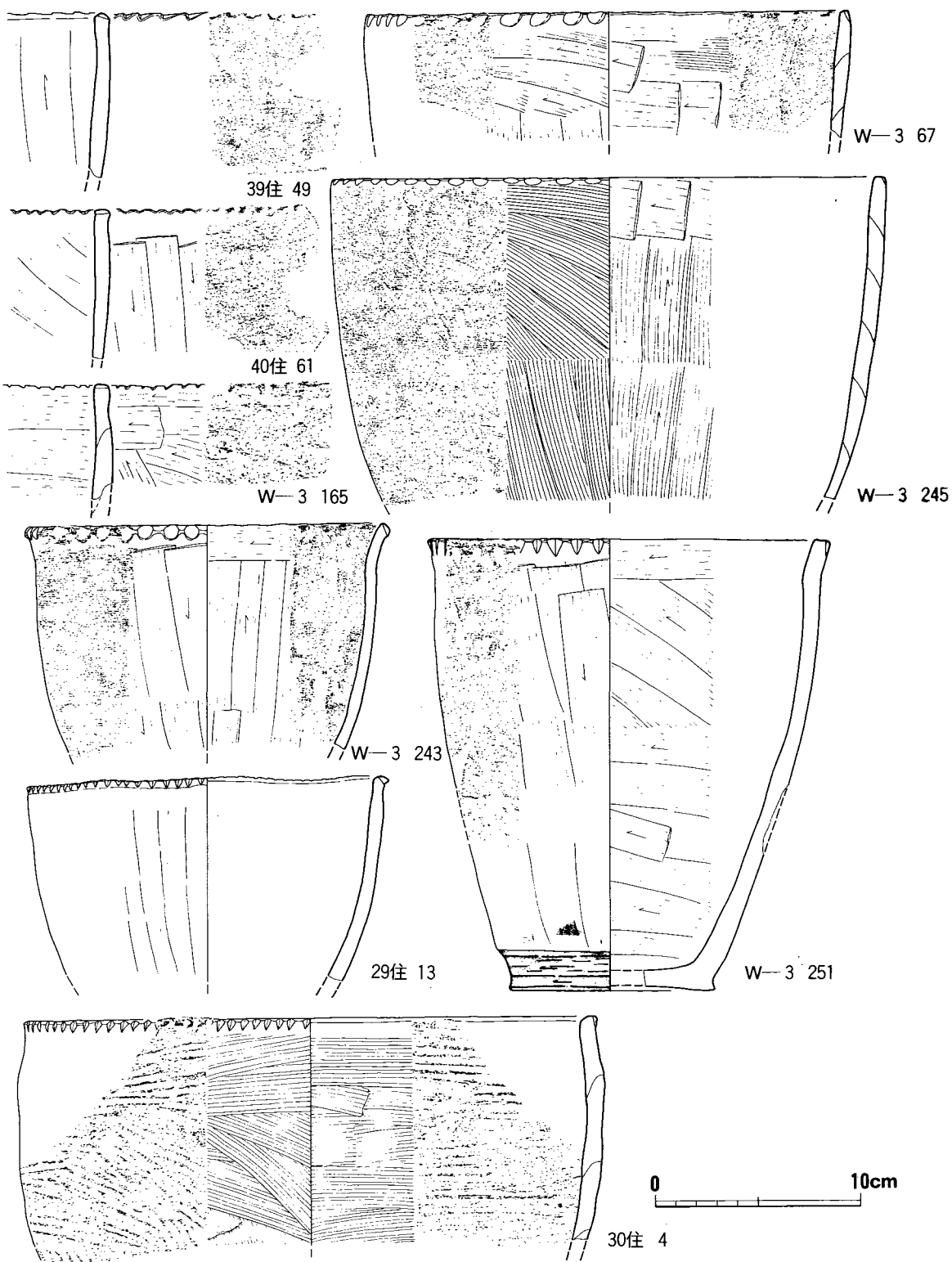
直立して刻目のないもの（第37図） 口縁が直立するもの、やや外反するもの、やや内彎するもの等があるが別に分類する必要はなからう。口縁がやや波状を呈するもの、口縁下に瘤状の凸起もつもの（W-4の183）等がある。器面調整は条痕もあるが板状工具による擦過が主体である。この種甕は晩期Ⅱ式以後形態的にはほとんど変化をみせずこの時期まで続くが、刻目を施すもの、刻目凸帯を貼付するものより古いもので本来は晩期Ⅵ式におかれ、曲り田（古）式では残存した状態とみるのが妥当であろう。

直立して刻目を施すもの（第38、39図） 垂直方向から口唇部に刻目を施すものと口縁外側に刻目を施すものがある。刻目は棒状工具、ヘラ、板木口によるものが多く爪によるものはないといってよい。垂直方向より口唇部に刻目を施す手法は晩期Ⅴ、Ⅵ式の頃にも散発的にみられ、それはさらに斜線文、小さな刻目による疑似縄文の流れから出現すると解することができ、古い要素であることはいうまでもない。しかしこの段階のものは晩期Ⅴ、Ⅵ式のものに比べて整った刻目となっている。口縁がわずかに外反して口縁外側に刻目を施すW-3の243・W-3の251等は板付Ⅰ式の如意形口縁の甕へと発展する祖形ともいえるものである。ただ刻目の大きさ、力強さ、板状工具による擦過等が異なるのみであって、夜臼式を経て板付Ⅰ式へと続く流れは支障なく理解されよう。調整法には条痕、擦過、ハケ目があるが擦過が主体である。口唇部に刻目を施し口縁下に刻目を施す大きな凸起をもつW-4の208は、刻目凸起の点だけを取りあげると、礫石原の刻目凸起をもつ甕（第9図）からのながれがあり、さらに33住114の刻目をもつ把手へとつながるものと考ええる。33住114はおそらく甌であろうと考えるが、この把手は日本でも独自に発生し得ることをいま述べたが、26住55等の刻目をもたない把手もあり、前段階に類例のないものであるだけに日本側だけで解決するものでもなさそうである。礫石原の甕の刻目凸起、W-4の208の刻目凸起は形態上は朝鮮の新岩里Ⅱの「にわたりのトサカのような」凸起に類似するが、これがはたしてやや先行もしくは同時代のものであるのか、南部朝鮮にも類例があり北部九州へ<sup>(1)</sup>とつながるものなのか、慎重さを要するとともに今後の課題とすべき問題である。

直立して刻目凸帯を貼付するもの（第40図） 口縁よりわずかに下ったところに刻目凸帯を貼付するものが一般的であるが、8住17、W-3の81などは2cmも下った位置にあり、W-2の85、W-4の57等は口縁外側に刻目凸帯を貼付している。8住17は口唇部に垂直方向から棒状工具による刻目を施し、凸帯にはヘラによる刻目を施す。口唇上端に刻目を施すこと、凸帯の位置が低いことなど古い要素をもつといえる。34住9は口縁端、凸帯の両者に刻目を施して

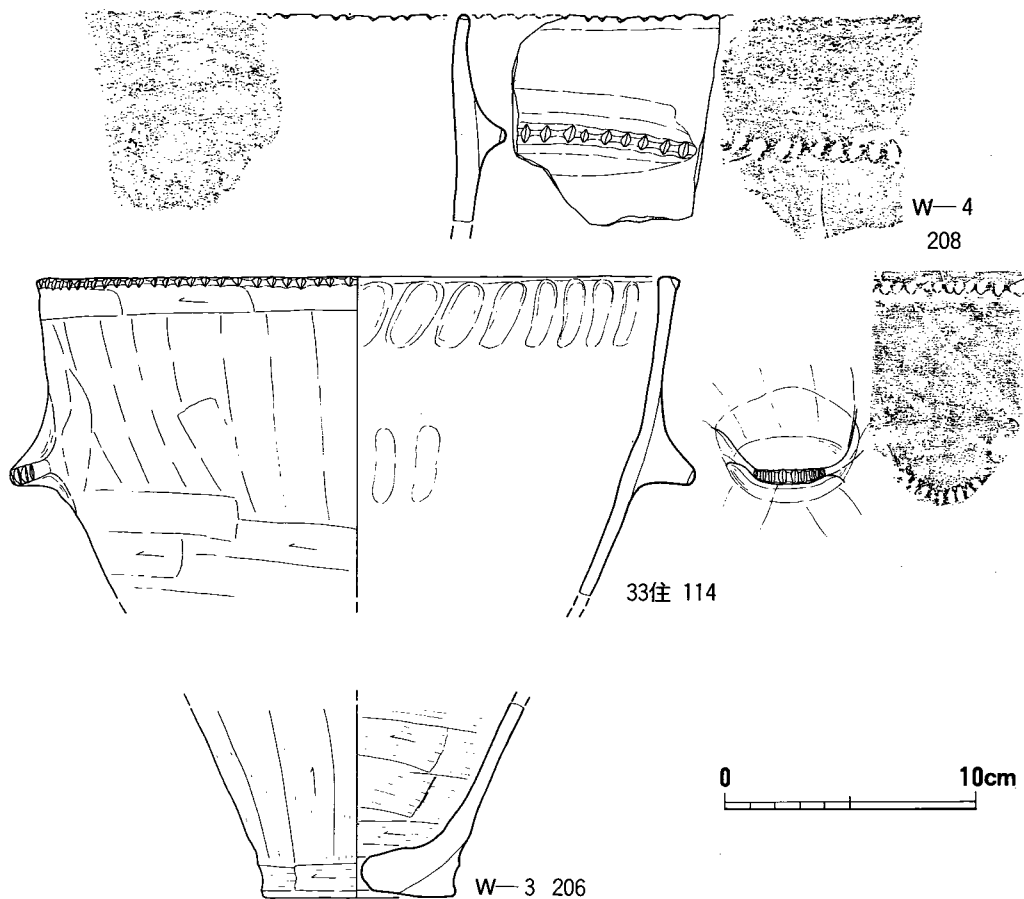


第 37 図 曲り田出土の甕 1 (縮尺1/3)



第 38 図 曲り田出土の甕 2 (縮尺1/3)



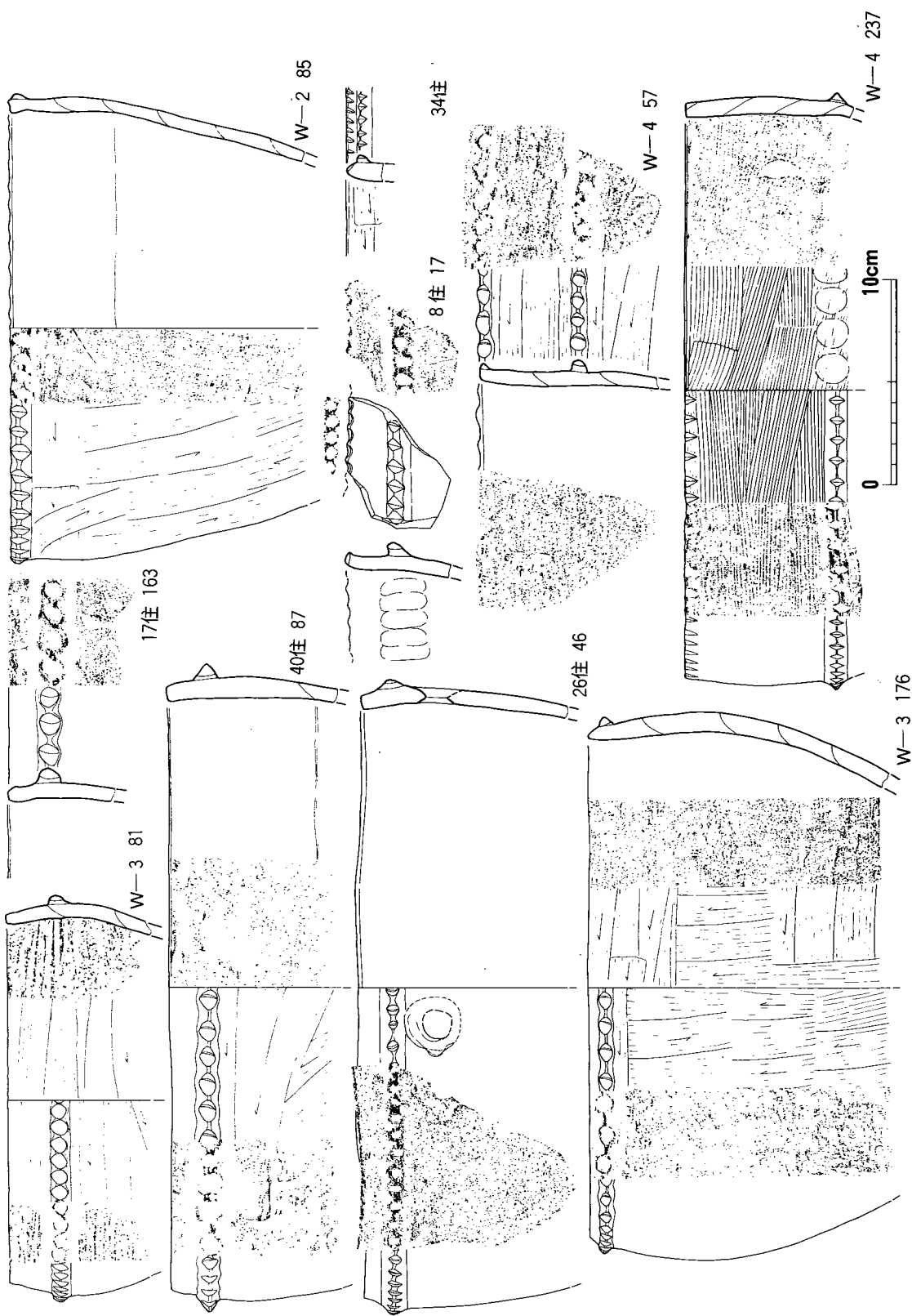


第 39 図 曲り田出土の甕 3 (縮尺1/3)

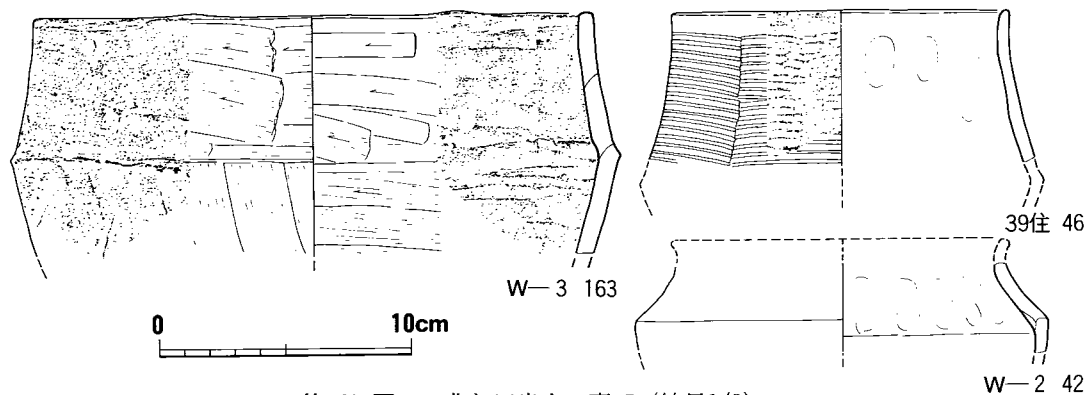
いる。W-4 の57は口縁外側と肩に凸帯を貼付し爪による刻目を施している。直立する甕で肩の位置に刻目凸帯を貼付する例はきわめて少ない。W-4 の237は口縁外側にはヘラによる刻目を、肩には凸帯を貼付しヘラによる刻目を施し、内外ともにハケ目を施している。刻目は棒状工具、爪、ヘラによるもので、器面調整は板状工具による擦過が主体で、一部条痕およびハケ目が存在する。

肩で屈曲して刻目のないもの (第41図) この種の甕の量は曲り田ではきわめて少なかったが、これは直立して刻目のない甕と同様本来は晩期Ⅶ式におかれるべき古い要素をもつものが曲り田 (古) 式の段階まで残存したものと解するべきであろう。39住46の外表面は条痕、W-2 の42は内表面はナデで外表面は不明、W-3 の163は板状工具による擦過を施している。

肩で屈曲して口縁、肩ともに刻目を施すもの (第42図) 量的には直立して刻目を施す甕あるいは肩で屈曲して刻目凸帯を貼付する甕に比して多いわけではないが普遍的な形態といえる。口縁から肩の屈曲部まではほぼ直線的なのが多いが40住84のように口縁で外反するものもあ



第 40 図 曲り田出土の甕 4 (縮尺1/3)

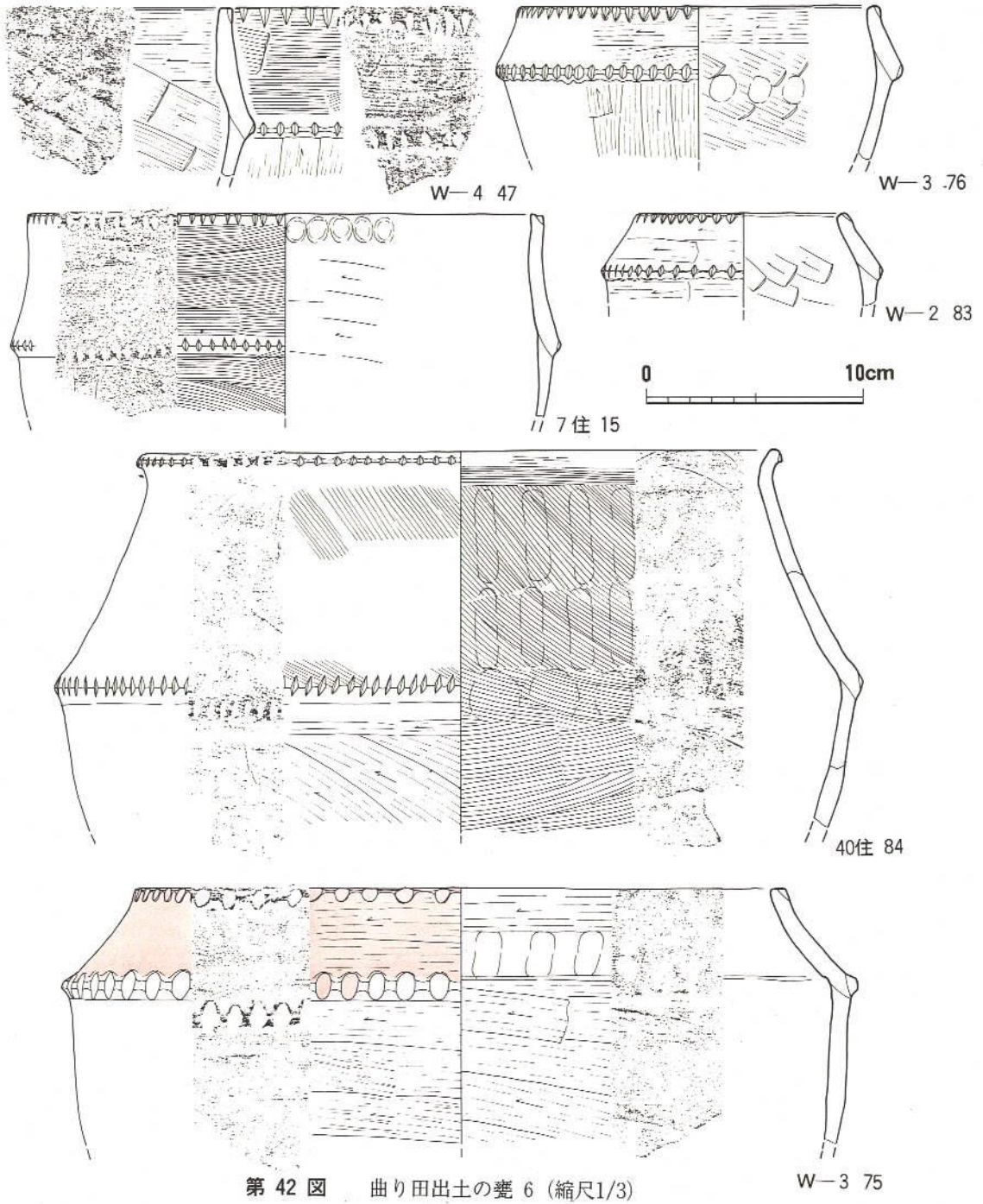


る。又特にこの種甕にはハケ目を施すものが目についた。器面調整は他に板状工具による擦過がある。刻目はヘラによるものを主体とし、棒状工具によるもの、爪によるものは少ない。肩で屈曲して肩部だけに刻目凸帯を貼付するもの(第43図) 量的にはきわめて少ない。28住26の内面は横方向の粗い擦過、口・頸部外面は条痕風の粗い擦過、胴部外面はナデ風の擦過。36住20の口縁は波状を呈する。内外ともに横方向の粗い擦過。W-3の182は内面の頸部下半に横方向条痕を施し、他の部分は横方向擦過。刻目はいずれも爪による大きなものである。刻目凸帯文の発生期のものと考えられる。

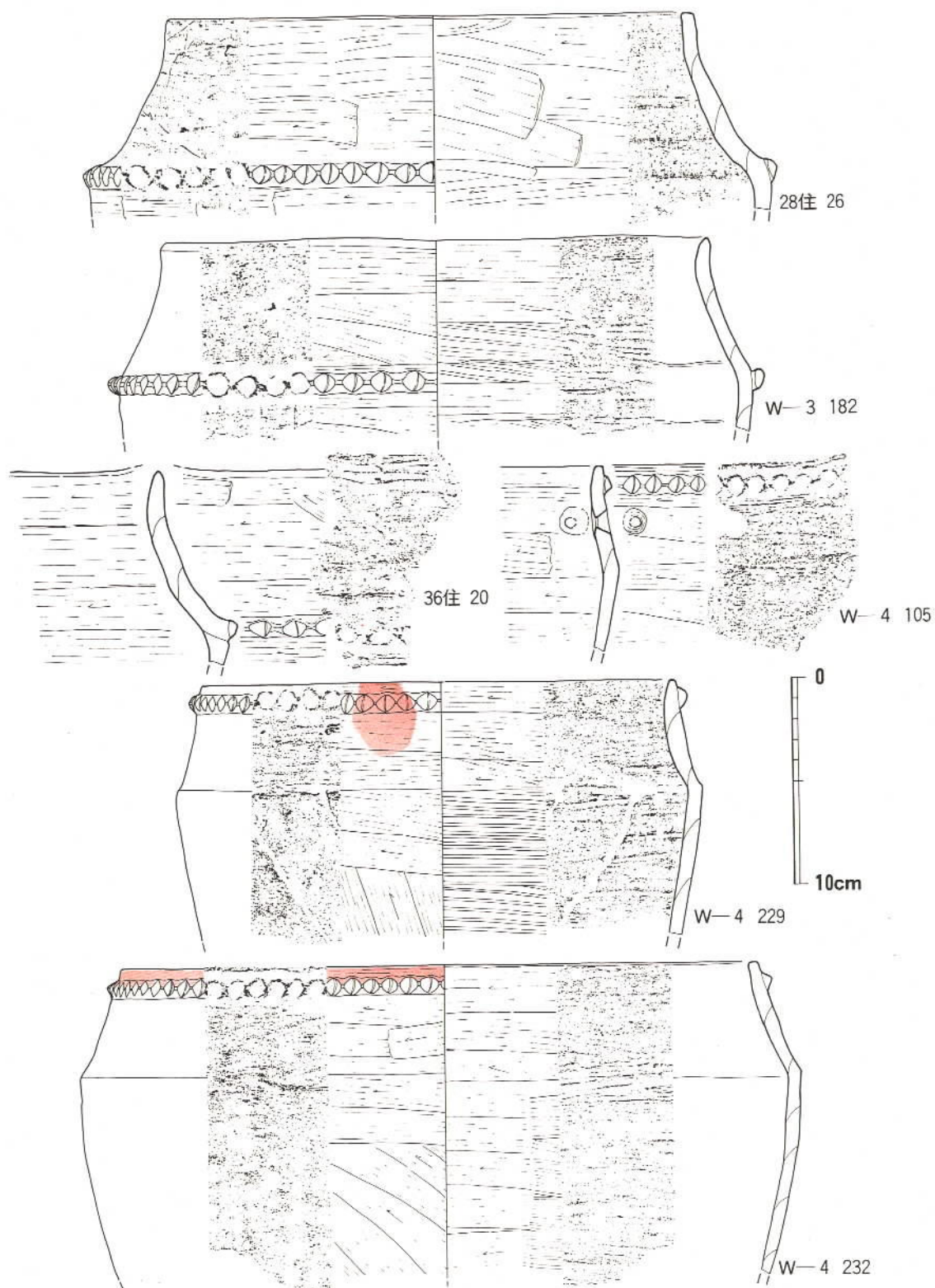
肩で屈曲して口縁下だけに刻目凸帯を貼付するもの(第43図) この種の甕も量的にはきわめて少ない。刻目は爪による大きなもので、器面調整はW-4の105が横方向擦過、W-4の229の内面は横方向条痕で頸部はさらに擦過を加え条痕をかき消す、外面は擦過、W-4の232は内面に一部条痕が認められるが主体は内外ともに擦過を施す。前者と同様刻目凸帯文の発生期のものと考えられる。

肩で屈曲して口縁下、肩部ともに刻目凸帯を貼付するもの(第44、45図) この種の甕は量が多い。W-4の64は口縁部を丸く仕上げ、口縁下凸帯は上向きでやや異質な感じがする。黒色包含層17も深鉢とでもいべき器形でやや異質であり、いずれかという遠賀川以東の要素とでもいえる。又W-4の231は甕というより器形的には鉢というべきであろう。口縁下の凸帯はやや下った位置から口縁外側に貼付するものまであり、刻目は爪、棒状工具、ハケ目によるもので、器面調整は板状工具による擦過を主体とし一部条痕がみられる。図示したもの以外で口縁下には刻目凸帯を貼付し、肩部には刻目を施すもの(W-3の87、263)があるが一応この部類に入れておく。

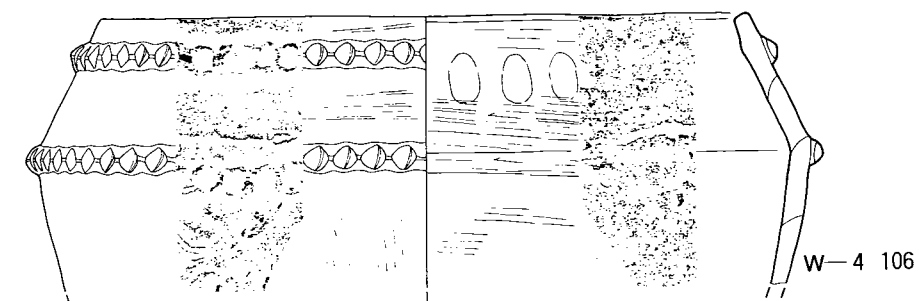
口縁が直に外反する小甕(第46図) 量的にはきわめて少ない。口径が13-15cm程のもので内面はナデ、外面は縦方向のヘラナデを施すものが多い。これに類した器形で高環の脚と思われるものが佐賀県丸山遺跡30号墓より出土しており、高環の脚ではないかとの疑念があり(2) いる



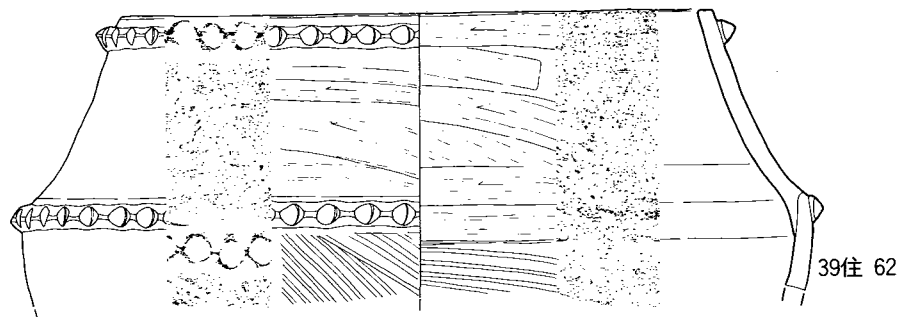
第 42 図 曲り田出土の甕 6 (縮尺1/3)



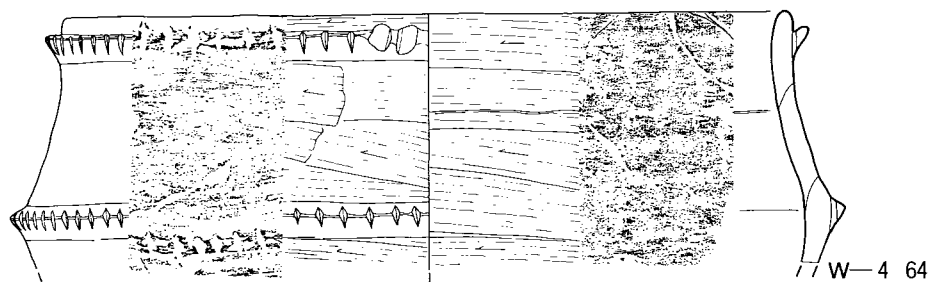
第 43 図 曲り田出土の甕 7 (縮尺1/3)



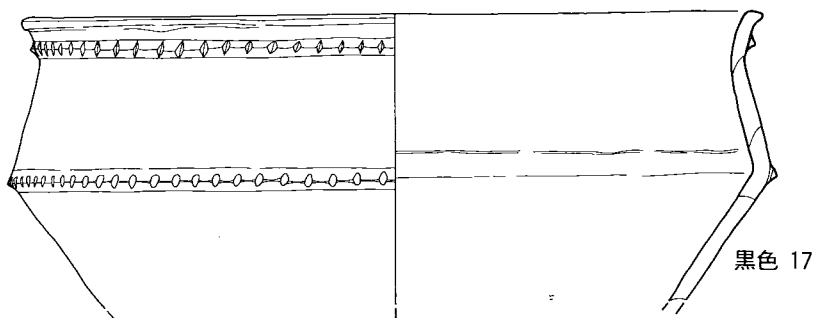
W-4 106



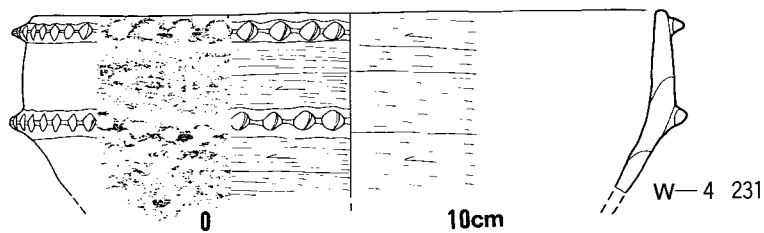
39住 62



W-4 64



黒色 17

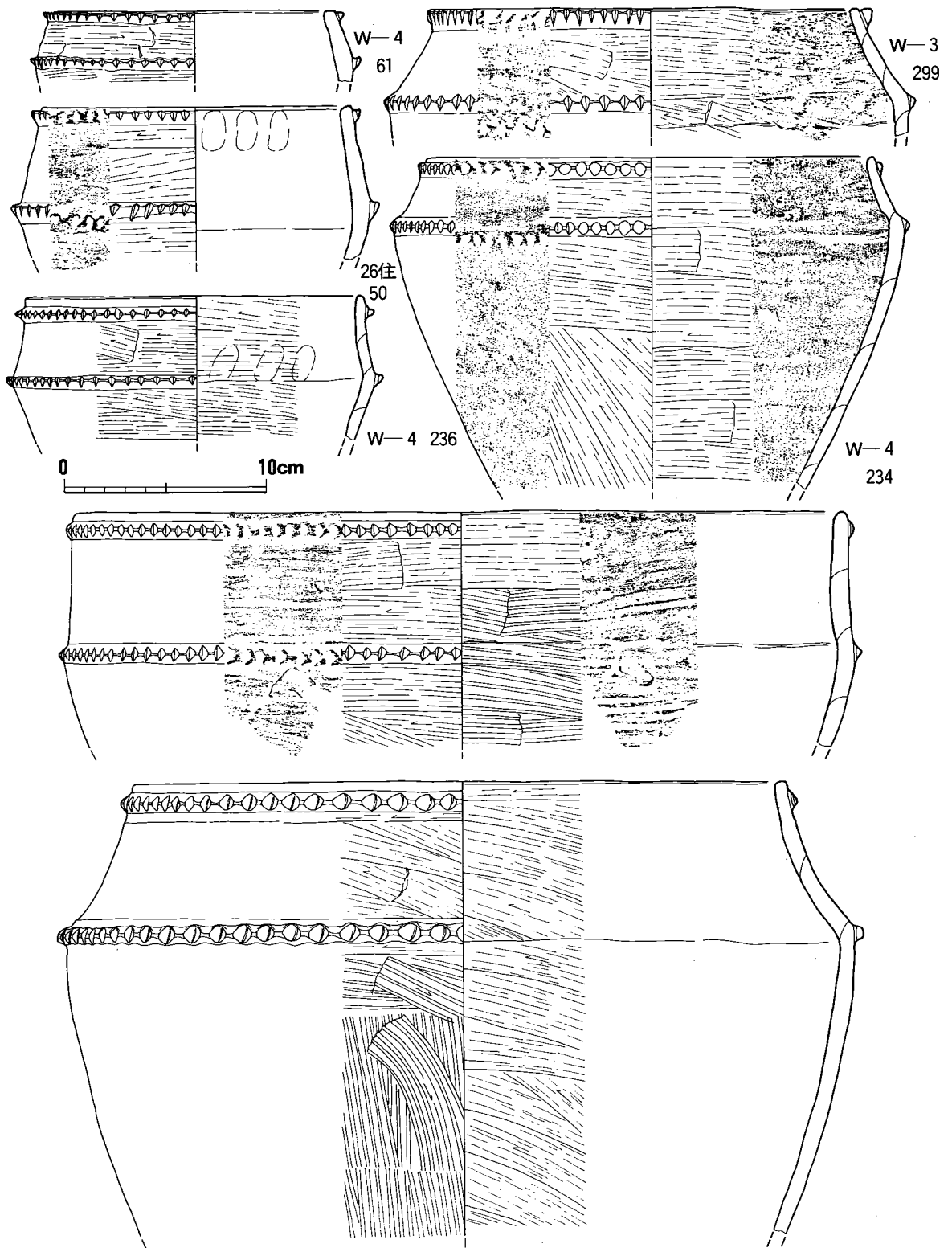


W-4 231

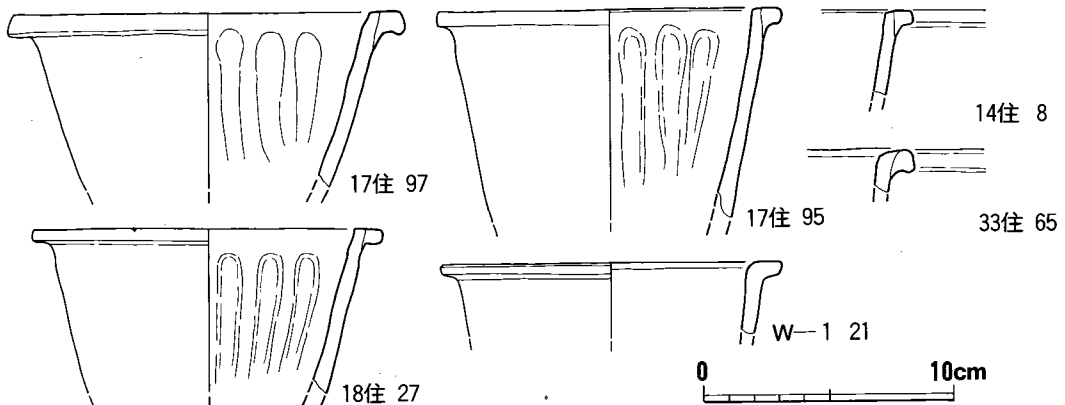
0 10cm

第 44 図 曲り田出土の甕 8 (縮尺1/3)

いろいろ検討したが、丸山遺跡のものは口縁の外見上は類似するが外反した口縁外側に粘土帯を貼付しており曲り田のものとは口縁の作りが異なる。又曲り田のものを高坏の脚として第30図に示した高坏の脚・坏接合部と合わせて復原を試みてもかなりの長脚になり、現在のところ類例を見いだし得ない。傾斜および径も再度検討したがまちがいないものと思われる



第 45 図 曲り田出土の甕 9 (縮尺1/3)



第 46 図 曲り田出土の甕 10 (縮尺1/3)

ので、当初のとおり小甕としておく。もし将来類例が出土したら訂正するにやぶさかではない。今川遺跡の採集品に類品がある (今川遺跡 第22図124)<sup>(3)</sup>

ところでこの時期から夜臼式を特徴づける土器として刻目凸帯文土器という名称がよくつかわれている。いま曲り田出土の甕をみると刻目を施すものがかなりの量を占め刻目凸帯文土器をもってこの時期の土器を代表させるのは適切でないを考える。いま甕を直立する甕と、肩で屈曲する甕、刻目なし、刻目あり、刻目凸帯他に分類して比率を出したのが第4表である。17号住居跡のなかでは直立する甕で刻目のあるもののなかに口唇上端に刻目を施すもの1、肩で屈曲する甕で刻目凸帯のうちに刻目小凸起のもの1を含む。33号住居跡では直立する甕で刻目

第4表 甕の分類と比率

	17号住居跡	33号住居跡	39号住居跡	40号住居跡	41号住居跡	W-3区	W-4区
直立する甕	刻目なし	45 41.28%	15 18.29%	7 20.59%	17 26.56%	8 32.00%	34 24.82%
	刻目	8 9.17%	29 35.37%	6 17.65%	19 29.69%	8 32.00%	31 22.63%
	刻目凸帯	31 28.44%	25 30.49%	7 20.59%	11 17.19%	6 24.00%	32 23.36%
肩で屈曲する甕	刻目なし	1 0.92%	2 2.44%	6 17.65%	2 3.13%	0 %	2 1.46%
	刻目あり	12 11.01%	7 8.54%	0 %	5 7.81%	2 8.00%	6 4.83%
	刻目凸帯	10 9.17%	3 3.66%	8 23.53%	10 15.63%	1 4.00%	32 23.36%
小甕	2 1.83%	1 1.20%	0 %	0 %	0 %	0 %	0 %
直立する甕	84 77.06%	69 83.13%	20 58.82%	47 73.44%	22 88.00%	97 70.80%	95 71.43%
肩で屈曲する甕	23 21.10%	12 14.46%	14 41.18%	17 26.56%	3 12.00%	40 29.20%	38 28.57%
刻目なし	46 42.20%	17 20.48%	13 38.24%	19 29.69%	8 32.00%	36 26.28%	48 36.09%
刻目あり	20 18.35%	36 43.37%	6 17.65%	24 37.50%	10 40.00%	37 27.01%	25 18.80%
刻目凸帯	41 37.62%	29 39.94%	15 44.12%	21 32.80%	7 28.00%	64 46.72%	60 45.11%
小甕	2 1.83%	1 1.20%	0 %	0 %	0 %	0 %	0 %



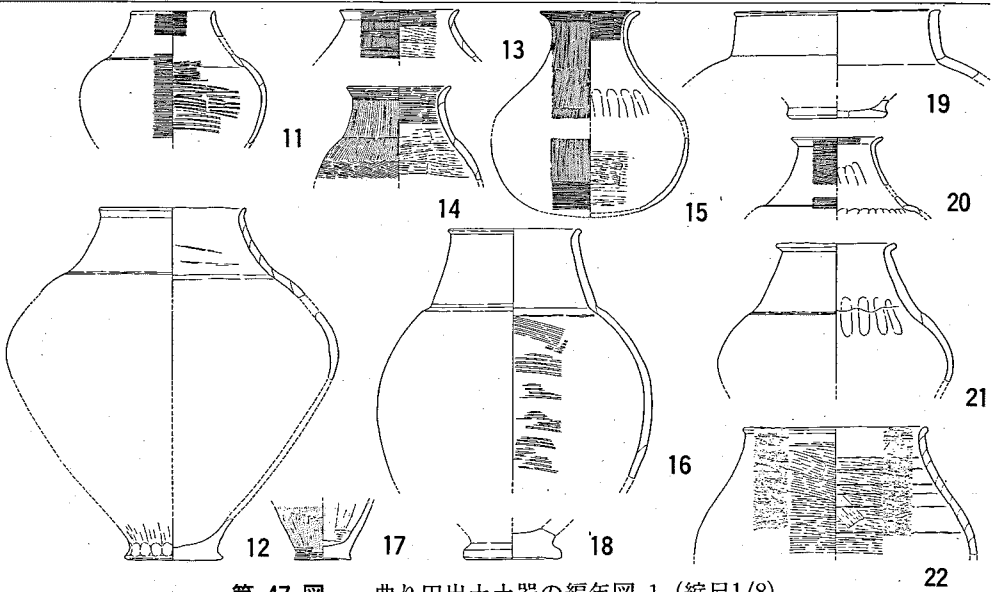
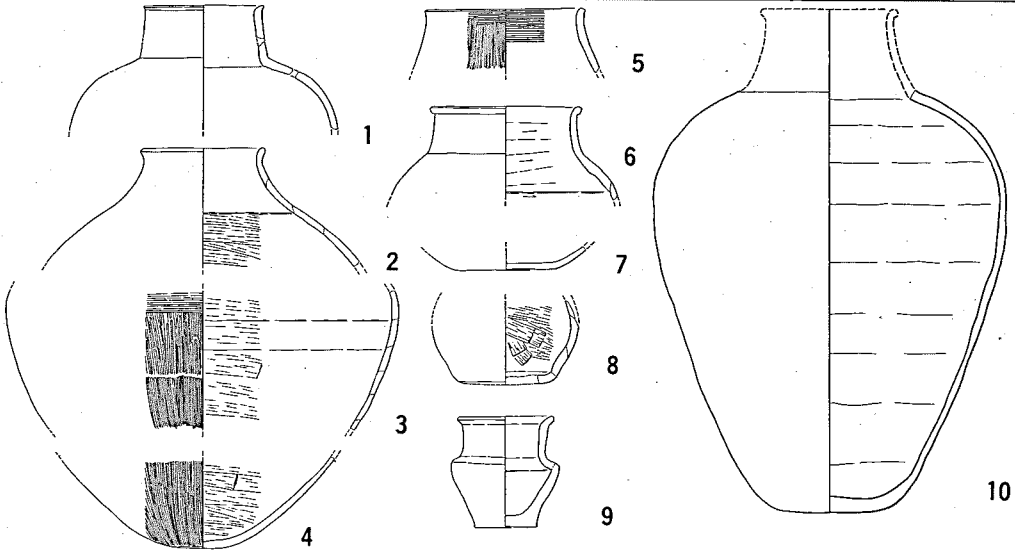
のあるもののなかに口唇上端に刻目を施すもの4、39号住居跡では同じく3、40号住居跡では同じく2がある。41号住居跡では直立する甕で刻目凸帯をもつもののなかに口縁は刻目、口縁下刻目凸帯1を含む。W-3では直立する甕で刻目ありのなかに口唇上端に刻目を施すもの6、肩で屈曲して刻目凸帯のものなかに口縁だけ刻目凸帯のもの1、W-4では直立する甕で刻目なしのなかに瘤状凸起をもつもの1、刻目ありのなかに口唇上端に刻目を施し、口縁下に刻目凸起をもつもの1、肩部で屈曲する甕で刻目凸帯をもつものなかに口縁部だけで肩部にないもの3を入れてある。このなかで刻目を施さないもの、口唇部上端に刻目を施すもの、刻目凸起等は古い要素のものと考えてよい。刻目なしと刻目あり・刻目凸帯の比率をみると、刻目、刻目凸帯文を主体とする段階に刻目のない古いものが1/3程残った状態であり、刻目と刻目凸帯は全体でみると半・半の比率といえる。以上のことから刻目凸帯文と呼称するのは適切ではない。又直立する甕で刻目をもちものが板付I式の如意形口縁の甕へと発展することをみてもこのことはいえよう。

## ロ 曲り田出土土器の編年的位置

以上器種構成をみてきたなかで、各器種毎の古い要素をもつものについてはその都度言及してきた。したがってこれら古い要素を抽出して一型式を設定することができる。これを曲り田(古)式とし、主体を占めるものを曲り田(新)式とする。そしてきわめて少量ではあるが26住22の浅鉢、17住52・53の鉢口縁の如く口縁内面に段をつくり又は沈線状をなして晩期VI式に属し得るものが残存してしていることからみれば、曲り田(古)式が晩期VI式の直後に来るものであることは確実である。曲り田(古)式は菜畑の13層に、曲り田(新)式は菜畑9～12層、山崎の夜白I式に対応するものであることは既に述べたところである。では第47図に編年表を掲げたのでそれによって説明を加えよう。

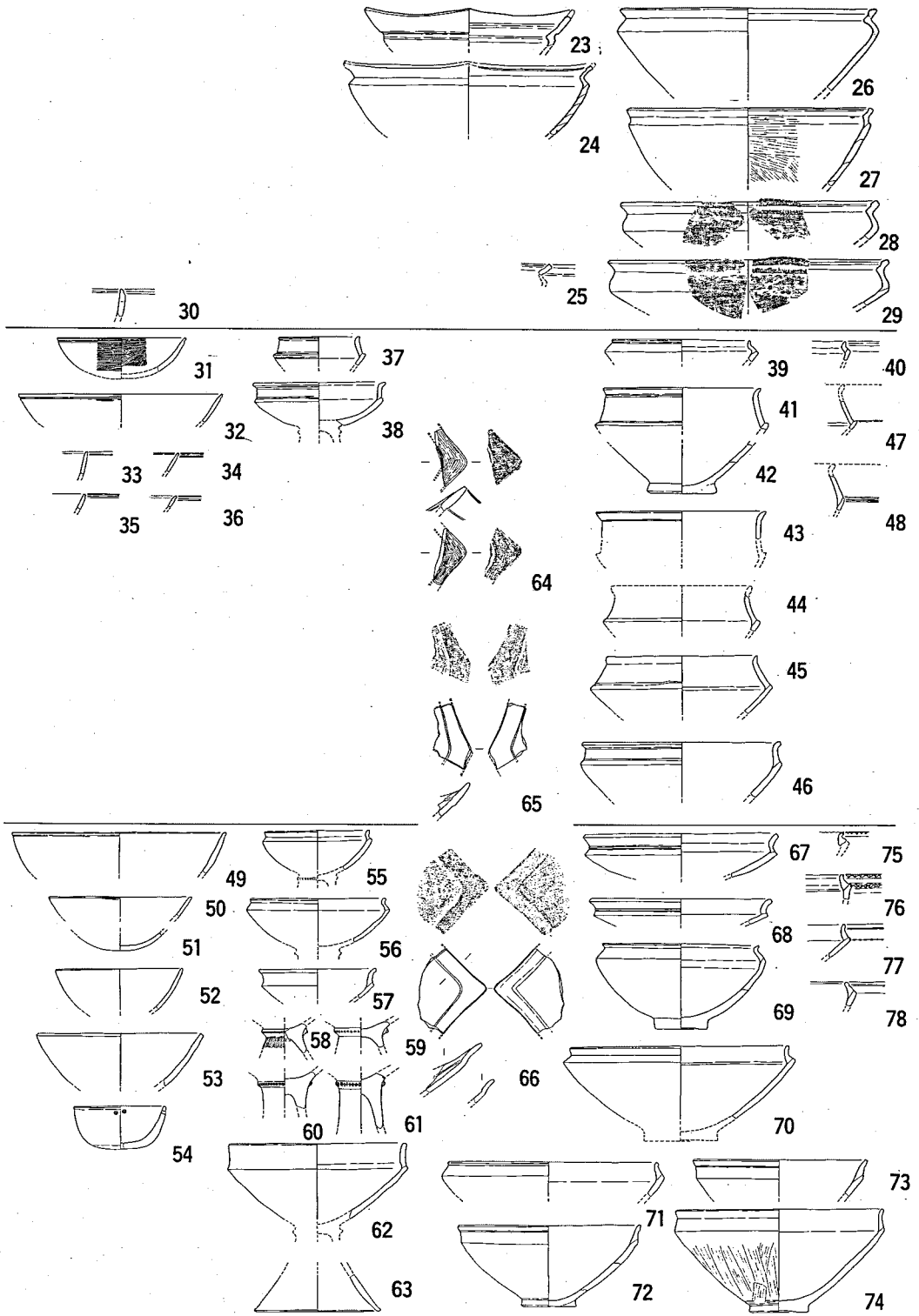
壺は頸部が短くかつ直立し肩の張りが強いもの(1・6)、頸が短く肩・胴へ連なり長胴で丸底となるもの(2・3・4)、丸底のものは無文土器系丹塗り磨研壺のものをのぞき古い要素と考えられる(7・8)。1号支石墓の壺(9)は平底を呈するが発生期の壺の様相を示すものとして古い要素のものとする。原山出土の丹塗り磨研大形壺はこの段階にいれられるものである。曲り田(新)式のもの(古)式のものに比して頸はやや長めになり内傾度が強く肩は張り、長胴で基本は平底をなすと考える。14・15等は無文土器系の丹塗り磨研壺と考えられ丸底を呈するが、(古)式に位置付けた丸底とは性格を異にする。19も無文土器系の短頸壺で長胴になるものと考えられる。

碗は口縁内外に沈線をめぐらし口縁は丸く仕上げるものから、口縁外側に沈線をめぐらし口縁は丸く仕上げるものへと変化し、この口縁外側の沈線が退化して段状を呈するものになると



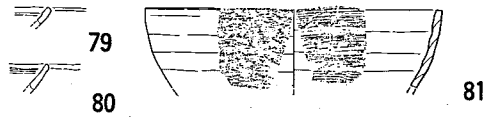
第 47 図 曲り田出土土器の編年図 1 (縮尺1/8)

10…原山遺跡

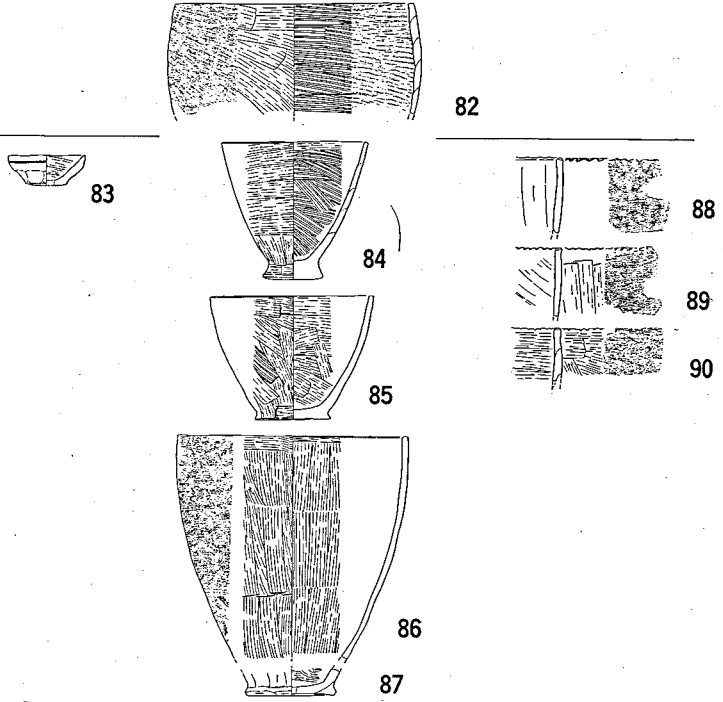


第 47 図 曲り田出土土器の編年図 2 (縮尺1/8)  
 23・24・27…高原遺跡, 26…原山遺跡, 28・29…長行遺跡

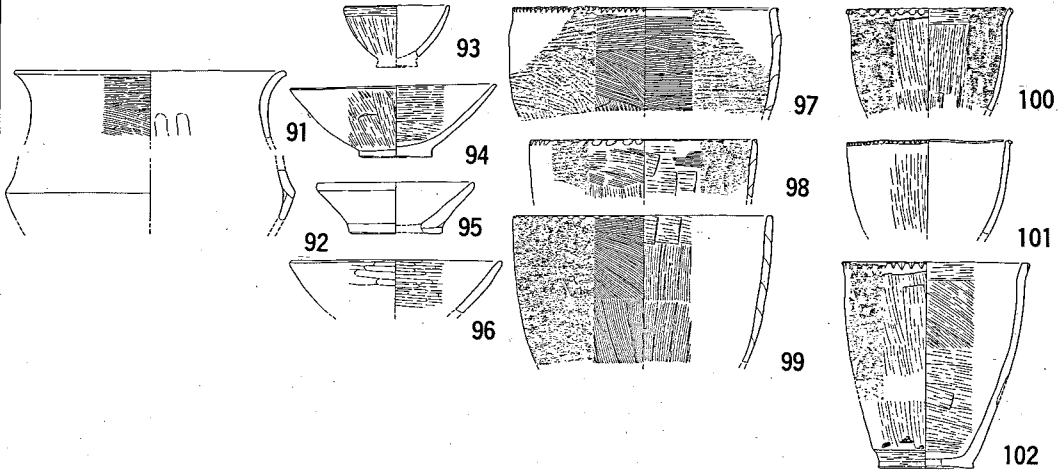
晩期Ⅵ式



曲り田(古)式

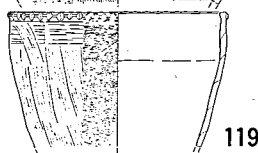
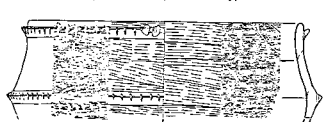
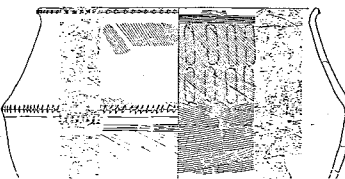
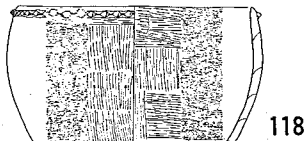
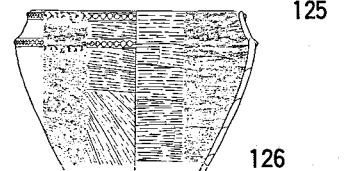
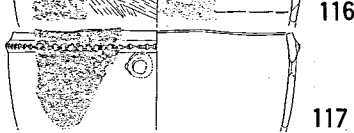
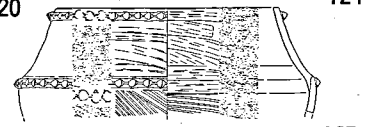
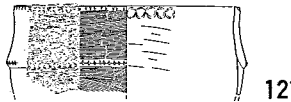
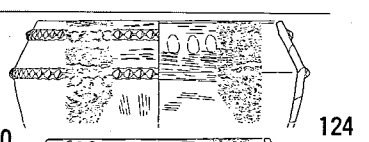
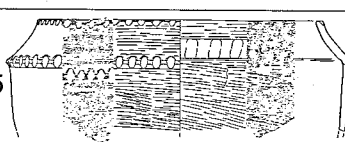
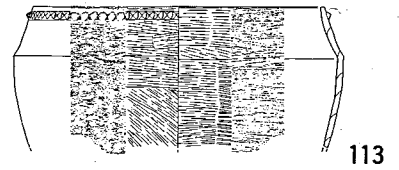
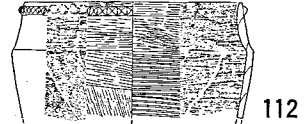
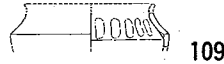
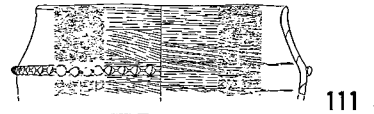
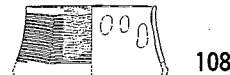
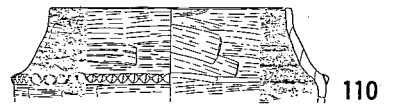
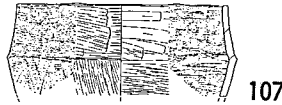
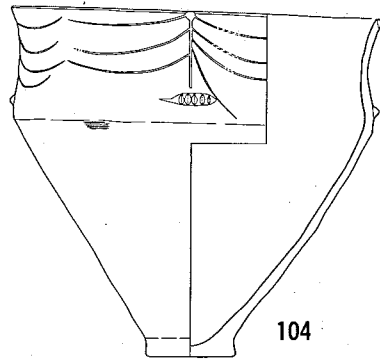
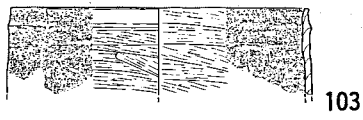


曲り田(新)式



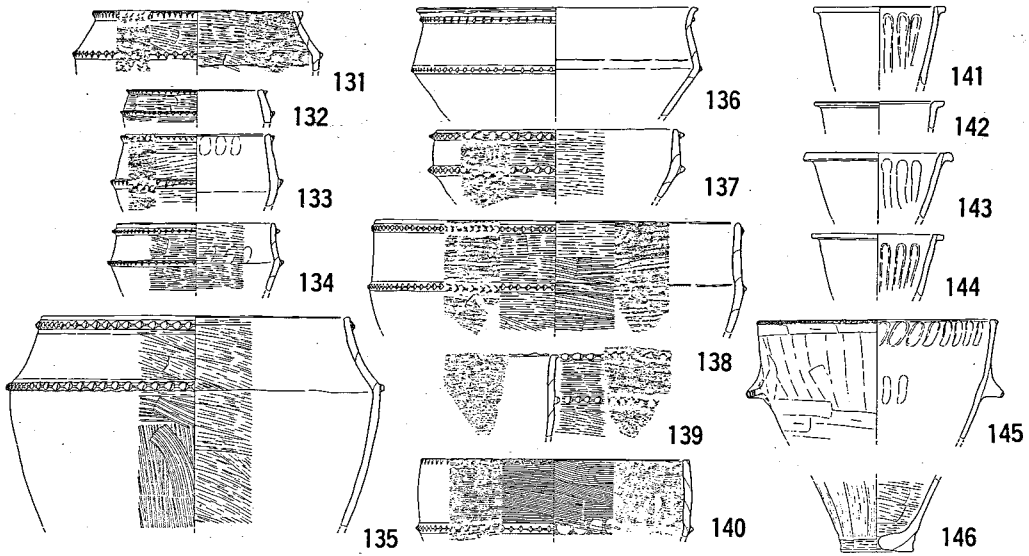
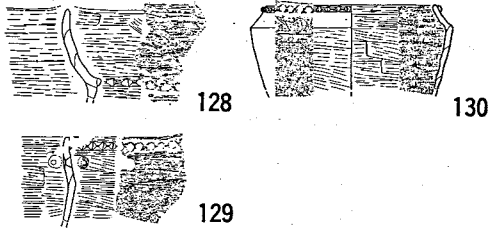
第 47 図 曲り田出土土器の編年図 3 (縮尺1/8)

81…長行遺跡



第 47 図 曲り田出土土器の編年図 4 (縮尺1/8)

103...高原遺跡  
104...礫石原遺跡



第 47 図 曲り田出土土器の編年図 5 (縮尺1/8) 130…高原遺跡

思われる。口縁内外に沈線をめぐらすものは晩期Ⅵ式へ遡ぼらせていいものであるが一応曲り田(古)式に残ったものと理解したい。口縁外側に段をつくるものと沈線・段ともにないものを曲り田(新)式としたい。

高坏は浅鉢と同様頸部が長く口縁下・肩部の上下等に沈線等をめぐらし肩部が強く突出するものが古い要素をもつことは確実で、これらを曲り田(古)式に位置付ける。

曲り田出土の方形浅鉢はいずれも単純化された形態であり古・新の差を判断するのは困難であるがあえていえば口縁内外に段をつくるものが古い要素といえよう。そしてこれは23・24のような波状を呈する晩期以来の浅鉢の流れのなかから発展するものであり。存在するのは曲り田(古)・(新)式の段階までで、夜臼式の段階では基本的に消失しているものといえる。

浅鉢は1点のみ口縁内面に段をつくるものが出土している(25)。これは原山・高原・長行出土のもの等と同類のものであり晩期Ⅵ式のもものが残存したものであることはまちがいない。曲り田(古)式に位置付けられるものとして39、40に示した口縁が外反し頸部でくの字に屈曲し頸部内面に稜を有するもの、口縁が外反し口縁下に沈線・段をつくり頸が長く肩部が突出し肩の上下等に沈線をめぐらすもの(41～45、47・48)同様の特徴を示すが頸が短いもの(46)等があげられる。67・68等の口・頸部がくの字に屈曲し頸部の屈曲部に沈線2条をめぐらすものも古い要素と思われるがこれは曲り田(新)式のなかの古いものとして位置付けたい。曲り田(新)式の典型的なものは70のように口縁は外反又は直立し肩の屈曲度は強いが頸部内面には稜をつくらぬものである。

深鉢は量的にわずかであって分類し得ない。したがって曲り田(新)式に位置付けておく。

鉢は79・80に示した口縁内側に段をつくり又は沈線状をなすものは晩期Ⅵ式のもものが残存したものと理解した。83は口縁外側に沈線をめぐらしており、碗と共通するものとして曲り田(古)式に位置づけ、93等を(新)式とした。

直立する甕の刻目のないものはすべて曲り田(古)式としたが、これは晩期Ⅵ式からの流れとしてつづくものであるので一部晩期Ⅵ式のところに配列した。晩期Ⅵ式のものとしては鉢であるが長行遺跡のものを示した(81)。又口唇上端に刻目を施す甕も(古)式として位置付けた。口縁外側に刻目を施すものは(新)式としたが、口縁がやや外反するもの(100・102等)は板付Ⅰ式の如意形口縁の甕へと発展する祖形といえる。

直立する甕で刻目凸帯を貼付する系列のもので、刻目のはいる前段階つまり晩期Ⅵ式として高原出土の口縁下に凸帯状につくりだす甕(103)を位置付けたい。曲り田(古)式のものとしては口唇部に垂直方向の刻目を施し、口縁下に刻目凸起をもつもの(105)、同じく口唇部に刻目を施し口縁下はかなり低い位置に刻目凸帯を施すもの(106)等がある。曲り田(新)式のものとしては口縁下に刻目凸帯を施すものを位置付けるが、凸帯の位置は口縁下2cm程のものから口縁外側まで多様である。

肩で屈曲する甕は刻目を施さないものを前段階の晩期Ⅵ式からの流れとして曲り田（古）式に位置付けるとともに肩部だけでもしくは口縁下だけに刻目凸帯を貼付するものを同じく（古）式とした。口縁部・肩部の両者に刻目を施しあるいは刻目凸帯を貼付するものは（新）式として位置付けた。礫石原出土の甕は刻目凸起をもち、刻目凸帯文出現に先行するものとして晩期Ⅵ式に位置付けた。145は甗と考えられ刻目付きの把手をもっている。この把手の発生過程として礫石原の刻目凸起（104）から、口唇部に刻目をもち口縁下に刻目凸起をもつ105を経て145の把手へと発展することをみた。

口縁が直に外反する小甕はすべて曲り田（新）式にした。

以上のように曲り田出土土器のなかで古い要素をもつものを抽出して曲り田（古）式とし、主体をなすものを曲り田（新）式として設定した。そして曲り田（古）式はわずかに残存する浅鉢の口縁内面に段をつくるもの等から晩期Ⅵ式の直後に来るものであることは確実といえる。又曲り田（古）式は菜畑13層出土土器に、曲り田（新）式は菜畑9～12層出土土器又は山崎の夜白Ⅰ式に対応するものであるが、菜畑は層位によって分類され、曲り田では土器の形態的・分類による。したがって菜畑9～12層の土器のなかでも古い要素をもつものを曲り田（古）式に対応させてもいいと私は考える。

註1 後藤直『西朝鮮の「無文土器」について』考古学研究68 1971

2 佐賀県教育委員会文化課東中川忠美氏の御好意によって丸山の遺物を見せていただいた。

3 津屋崎町教育委員会「今川遺跡」津屋崎町文化財調査報告書第4集 1981

## d 小結

縄文後期後半以後の縄文の消失傾向から、御領式における縄文の消失は新たな時期の開始すなわち晩期の開始ととらえて問題はないものと考え。そしてこの頃より大形の紡錘車の出現・扁平打製石斧の多量の出現等晩期を特徴づける現象が顕著になることもこのことを裏付けている。これ以後精製深鉢・精製浅鉢・精製の碗・粗製の甕が晩期土器の組み合わせとして続くが、これは広田Ⅳ期までであって、いわゆる黒川式の段階では精製深鉢はほとんど消滅し、精製浅鉢と精製の碗・粗製の甕が組み合わせの基本となっている。

曲り田（古）式の段階になるとこの組み合わせに壺・高坏が新たに出現し、甕には刻目文・刻目凸帯文が出現し、壺・碗には丹塗り・磨研の手法が多く用いられる。壺・碗・高坏・浅鉢・深鉢・鉢・甕の新たな組み合わせは、稲作農耕を契機とした貯蔵・煮沸・供献の土器の組み合わせの成立であり、又この時期より大陸系磨製石器群の出現・紡錘車の小形化と形態の確立・支石墓の導入等弥生文化を構成する諸要素は既に整っており、この段階をもって弥生文化の開始とした。したがって御領式より、曲り田（古）式の前段階までを縄文晩期として晩期Ⅰ～Ⅵ



式に分類した。

曲り田（古）式から夜臼式までは従来縄文晩期とされてきたが以上のことから弥生時代早期として位置付けたい。

弥生前期の板付Ⅰ式は夜臼式の残存する（古）式の段階と夜臼式を伴わない（新）式の段階に分類し、高坏を例にとってその分類の基準を示した。また亀の甲型甕の発生の問題をとりあげ、玄界灘沿岸部でも刻目凸帯文系ではない夜臼系土器が板付Ⅰ式以後に存在し地域性があることを述べた。同時に筑後・肥前南部地域で、板付Ⅰ式併行期に刻目凸帯文系を主体とする夜臼系土器が存在し、それが亀の甲型土器へと連続すること、その出現の時期は板付Ⅱ（古）式の段階であることに言及した。中九州以南あるいは東九州でもこのことは言えるのであって、高橋Ⅱ式、下城式の甕の発生には板付Ⅰ式以後の段階まで続く各地の夜臼式系統の土器が直結していることはいうまでもない。

### 3) 縄文晩期農耕論の再検討

#### a はじめに

かつては縄文晩期の遺跡は阿蘇山麓、雲仙山麓、唐津の上場地帯等の火山灰台地および、福岡県瀬高町坂田遺跡<sup>(1)</sup>および熊本市周辺、鹿児島県上加世田遺跡<sup>(2)</sup>等の比較的低地の洪積台地に立地するのが主体であり、これらに土掘具と想定される扁平打製石斧等が多量に伴うことから原始的農耕の存在、すなわち縄文後晩期農耕論が展開された。と同時に稲作開始期の遺跡は低地にあり、火山灰台地を基盤にした後晩期の農耕は夜臼式頃に低地へと進出して弥生文化へ発展したものと理解されることが多かった。ところで近年大規模開発、圃場整備等に伴う平野一円にもおよぶ大規模な水田地帯の調査も行われ、それによって、板付、菜畑、曲り田等の稲作開始期の遺跡をはじめ、未だ良好な遺構には恵まれないが、縄文晩期の遺物はかなりの量発見されてきている。したがって近い将来この時期の良好な遺跡にも恵まれる事が予想されるとともに、同一地域、同一平野における縄文晩期から弥生時代への連続性が追求できる展望もひらけてきた。そこで縄文晩期農耕論の主要な問題点を検討して、最近の低地での晩期遺跡の実態をみて、稲作開始前夜の様相をみてみたい。

大石遺跡など大分県大野川流域の縄文晩期遺跡等の調査成果を基に縄文晩期農耕論を積極的に推進したのは賀川光夫であった。賀川は大石遺跡等で多量に出土する打製石器の製作工程から用途を類推するという方法によって、剝離技法で大量生産された石器を必要とするのは農耕社会であり、したがってこれらの石器は農具であるとして次のように分類した。<sup>(3)</sup>

石鋤形石器……………耕具

石鋤・石鋤・手鋤

石庖丁形石器（石刀）……收穫具

（石鎌も含む）

石鋤は扁平石器のなかで最も大形のもので扁桃形をしており磨製・打製ともに存在する。磨製石鋤は硬質砂岩の扁平な礫の一部を磨研して扁桃形に形成し、反りのある撓形に調整する。打製石鋤は安山岩の厚材から縦剝技法で剝離した大形の剝片を使用し、全面打製で刃部は両面から剝離調整してつける。石鋤は多少横長な円礫から長15cm、厚さ2cm程の剝片をとり、細部調整を行ない短冊形に整形し、刃部は片刃につける。これは中国西安半坡遺跡出土の石鏃に比定している。手鋤は磨製・打製があり、磨製のは扁平な礫の先端を両面から研いで刃部をつける。打製のは角礫・円礫から扁平な剝片をとり両面から剝離調整して刃部をつける。半坡遺跡の石鏃に比定し、用途は手持ちの鋤形石器とし「ふぐし」「いしょくごて」のようなものを考えている。

收穫具として石鎌・石庖丁形石器をあげ、石鎌は安山岩の角礫から縦剝技法によって長手の剝片をとり刃部は少し内彎するように剝離調整し、片刃のものが多。石庖丁形石器は磨製・打製があり、磨製のは扁平な礫を研いで梯形に調整し刃部は両面からつける。打製のは厚さ5～10cm程の角礫の下方の角を落し、上から打撃を加え半月状の扁平な剝片をとり、直刃とする。横剝ぎ技法であるが石鎌のような縦長の良好な剝片を必要とせず製作技法も容易なので量産できるとした。石材は頁岩・砂岩・玄武岩等を使用しているとする。

これらのことから賀川は「縄文晩期の耕作は、斧・石鋤等で開墾し、手鋤を使用する程度の規模でおこなわれたものと推定」し、石鎌・石庖丁形石器等が多量に出土することから相当広範囲に禾本科植物の栽培が行われたとし、その場合土製庖丁（陶刀）を加えて收穫時に随時製作され消耗廃棄されたものであろうとし、又食糧加工具としての石皿・磨石等も出土していることから、中国西安半坡遺跡のような粉食をもとにした焼畑農耕社会であらうと考え、生産技術としては未だ幼稚ながら大石遺跡等の聚落規模の大きさから「当時の農耕社会が相当な段階に到達していた」とした。又賀川は大陸との文化的接触は縄文各時代にわたって何らかの形でたれており、中国における狩猟時代につづく農耕牧畜の社会に相当するものがあるはずであり、それを九州縄文晩期Ⅰ、Ⅱ期（大石式・黒川式）に求めた。

潮見浩は中・四国の縄文晩期を「農耕社会を広範にしかも急速に成立させた主体的条件が、西日本の縄文晩期文化のなかにかに内包されているか」という観点から、晩期を前半（晩期Ⅰ）、後半（晩期Ⅱ）に大別し、立地の問題とともに石器、とくにこの時期に大量に出土する打製石斧をとりあげ、これが単なる土掘具という一般論では解決せず、新しい生産の方法つまり農耕に根ざしたものであらうとして次のように結論づけた。「晩期Ⅰの段階では打製石斧を

中心とした農耕、それはいままで各地で問題とされながら一般的な見解として受け入れられていないが、縄文社会のおそらく最初の段階から何らかの形で持続したものの拡大という形であらわれたものと推測され、晩期Ⅱの段階では晩期Ⅰの状態を母胎としながら、とくに遺跡の立地からすれば、すでに弥生時代の基本的な生産様式である水田耕作がこの段階から開始されたものと考えざるをえないのである。」これらの縄文晩期農耕論に乙益重隆、佐原真等からの批判がなされ特に賀川の晩期農耕論に批判が集中した。賀川の見解は時代のかけはなれた中国仰韶期の西安半坡遺跡あるいは竜山期と日本の縄文晩期を直接的に関連づけて考察したり農耕の存在即農耕社会であると断定するような重大な問題をかかえていたので批判が集中したのはある意味では当然であった。いまこの批判を要約してみよう。乙益はまず縄文後晩期の黒色磨研土器と中国大陸の黒陶との関連という問題をとりあげ、黒色磨研という技法は鐘ヶ崎式以来の現象でかつ全国的な現象でもあること、有脚土器は縄文中期の竹崎式、後期の出水式、市来式等、起原を外国に求める前に九州在来文化の所産に求めるべきこと、たとえ大陸と関連があったとしても絶対年代の矛盾があることをあげた。又賀川の石器製作技法の上からの鏟・鋤・斧等の分類に疑問をなげかけ、半坡遺跡・竜山文化等との対比は実年代の隔差があり、もし大陸から農法が伝来したとすれば、少なくとも竜山文化以後のもっと進んだ形態がとり入れられたとみるべきとし、「とにかく管見では、賀川氏のいわれる九州縄文晩期の、黒川式の段階までは少なくとも農耕文化とよべる要素は見出だしがたく、大勢は在来文化そのままの姿を露呈しているものと考え。」とし「そこでわが国における厳密な意味での農耕が開始された時期は、やはり縄文在来文化に新しい大陸文化の所産が出現する時期をもってきめるべきであろう。とくに遺物の面では有孔磨製石庖丁・太形蛤刃状石器・扁平片刃石器・磨製石剣形石鏟・有柄式磨製石剣などの出現などがあげられよう。とくにその時期には鉄器も出現した。これらの大陸的要素がセットとして完成するのは、北部九州の夜臼式板付式併行期の段階であった。」「しかるに夜臼式の文化がセットとして発足するのは山の寺式の段階にある。故に縄文時代に農耕生産が開始されたとすれば、この山の寺式の後半期にもとめられるのではなかろうか」とした。<sup>6)</sup> 佐原の賀川に対する批判は痛烈なものであった。まず賀川の打製石斧の分類、斧・鏟・鏟・鋤について「『西安半坡』の本文を十分に消化することなしに到達した、大石遺跡の打製石斧の分類は混乱を極めている」とし、大石遺跡の資料自体を根本的に再検討してほしいとし、その方法として「着柄の有無・着柄方法・用途を論じるためには、使用痕の研究こそ優先すべきだろう」とする。穂摘具形石器については「石庖丁形石器」「石刀」とも呼んだ賀川の用語の使用を批判し、当初は形態上の類似から穂摘具として、使用痕は一顧だにできなかったこと、使用痕について論じてからは、賀川のいうように使用痕は刃部に対して直交せず、ほぼ45°をなすことを指摘し、「『晩期の石刀は確実に穀類などを摘む農具と考えてよいと思う』（賀川68B）などと宣言する前に、使用痕を、頭によってではなく、目によって観察してほしいものであ

る。』と批判した。さらに黒陶との比較をとりあげ、「仰韶から周に至る長い年代・土器の製作・焼成技術、土質、土器様式の構成などの差異を越えて大陸の土器と縄文式土器とを比較することの学術的意義は、文法を知らず比較言語学の素養なしにレブチャ語と日本語とを比較する意義に劣るとも優らないであろう。その上、賀川氏の中国考古学文献の引用方法にはしばしばその内容を変造するという学問以前の問題が横たわっているのである。」とし、賀川が縄文後晩期を「完全な農耕による依存社会」と規定したことについて、『農耕存否の論議と合わせて農耕の概念についての吟味、農耕があったとすれば、それは「いかにあったか」についても大いに討論すべきである』とした。<sup>(7)</sup>

以上のような批判が賀川に集中したのはさきに指摘したように当然ではあり、佐原らの指摘はもっともであった。しかしながら扁平打製石斧を土掘具として認定するのには異論はなかろう。そして中部山岳地帯における縄文中期農耕論、九州、中・四国の晩期農耕論等の大きな根拠とされ、農耕に関係ある遺物としてとりあつかわれることが多かったが、その当否は別としても扁平打製石器の製作技法からその大量生産が可能であり、それを必要とした社会は農耕を行っていたとする賀川の考え方は縄文晩期農耕論にとっては一定の前進をもたらしたものと私は理解したい。いずれにしても晩期になると急増する打製石斧は原始的萌芽的農耕に関連するものと考えたほうがよさそうである。今回は私自身は使用痕の観察等をせずにこのようにしている。したがって批判を受けるかも知れないが、この点は他日を期すことにして、最近の調査における後、晩期の遺跡、遺物の実態を、土器だけでなく石器組成にも重点を置いてみていくことにしたい。

- 註1 鏡山猛「筑後坂田の土器」九州考古学2 1957  
2 加世田市教育委員会「1971年 上加世田遺跡発掘調査概報」1971  
鹿児島県考古学会「1972年 上加世田遺跡発掘調査概報」1972  
3 賀川光夫「縄文晩期農耕の一問題——いわゆる扁平石器の用途——」考古学研究52 1967  
4 賀川光夫「中国先史土器の影響——九州縄文後晩期の一問題——」古代学研究25 1960  
賀川光夫「縄文式後晩期における大陸文化の影響」歴史教育9-3 1961  
5 潮見浩「中・四国縄文晩期文化をめぐる二、三の問題」考古学研究会『日本考古学の諸問題』考古学研究会十周年記念論文集 1964  
6 乙益重隆「弥生時代開始の諸問題」考古学研究55 1967  
7 佐原真「日本農耕起源論批判——『日本農耕文化の起源』をめぐる——」考古学ジャーナル 1968

## b 最近の調査における後晩期の遺跡・遺物の実態

前項でみたように最近の大規模開発・圃場整備事業等に伴う調査によって弥生時代遺跡と共通する低地における後・晩期の遺跡・遺物等がかなり明らかとなりつつある現状である。それらのいくつかをとりあげ後・晩期の実態にせまってみたい。

### 1. 福岡県糸島郡二丈町広田遺跡<sup>(1)</sup>

調査は二丈・浜玉道路建設に伴う事前調査として福岡県教育委員会によって行なわれた。

広田遺跡は曲り田遺跡の存在する二丈町深江一貫山地区より8 km程西へいった福吉川の形成する小規模な沖積地の中央に突出する低台地の西側裾部に存在する。沖積地の北側は吉井浜の砂丘があり、砂丘上にはかつて細形銅剣や銅鐔のある異式鉄剣(鉄鎗)等を出した甕棺等がかつて報告され、著名である。晩期の遺構・遺物が検出された西側裾部は標高11m程で、西側は一段落ちて水田となっており、立地的には曲り田遺跡等ときわめて共通する。土器については既に詳しくみているので他の遺物をみることにしよう。打製石斧は総数161点のうち完形品25点が出土している。報告者の小池史哲は形態から8種類、製作技法から大きくは横剥ぎ縦剥ぎに分類し、「刃部には使用による摩耗痕が大半の資料にみられ、特に厚みを有す面に顕著に観察される。石材が玄武岩質の場合は明瞭な条線となり、安山岩の場合は条線とともに光滑面を有し局部磨製石斧を想起させるものもある。摩耗痕は、刃部先端に対し直角方向に力が加わったことによる、石斧の長軸方向に沿った縦位の条線が大半を占め、斜行する例としては16・23・29・36の一部にみられるが少ない。刃部以外の例としては、胴部に縦位の摩耗痕をみとめるものがあり、胴部側面には多くの資料に摩耗を観察することができる。胴部側面では19に斜行する摩耗痕、36に横位の摩耗痕をみとめるが、大半の資料では観察しえなかった。また、3・8・10の資料では頭部にも縦位の摩耗痕が観察され、12にはやや風化した面に摩耗痕がある。」と使用痕の観察結果を記し、「打製石斧は、安山岩を素材とした例でも刃部に明瞭な使用痕がみられることから土掘具以外の用途は考え難く、対象物は砂質の土壌と考えられる。使用痕を観察すると打製石斧刃部でも厚味を有する側に広くみとめられ、法量からみて掌中に直接握り得ない大形例等は柄を装着したと想定すべきであろう。ただしこの種打製石斧には柄との摩擦によって生じる擦痕は顕著ではない。」とした。削器・搔器(総数99点)としたものの中には、いわゆる石庖丁形・石鎌形を呈する穂摘形石器も含まれるが、これらについては使用痕の観察はなされていない。この他に石皿13点、すり石20点、打製石鏃111点、石錘13点、磨製石斧43点、砥石14点、石錐4点他石刃・つまみ形石器・石核等、異形石器・石核・石棒・御物石器・石刀・版状石製品・十字形石器・円盤状石製品・玉類等の石製品25点、土偶3点、版状土製品2点の他、特記すべきことは15点の大形の土製紡錘車が出土したことである。花粉分

析も行なわれたが、地形的な条件から採取された試料からは花粉は検出されなかった。植物種子は、粉川昭平によってなされ、「そのほとんどはカシ属の木炭化子葉であり、保存がよくなり同定もむづかかった。4のE5区9b層のものにみられたマメ科で、アズキの様にみえるものは注目に値する。この様な試料はよく似た時期の福岡市四箇遺跡からも出土している。」と報告されている。

## 2. 福岡県糸島郡前原町三雲遺跡

青柳種信の「柳園古器略考」<sup>(3)</sup>によって江戸時代から著名な遺跡である。調査は圃場整備事業に伴う事前調査として福岡県教育委員会によって行なわれ、文政5年に出土した南小路菴楯の位置確認と副葬遺物の再確認等、とくに弥生古墳時代の遺構・遺物の調査に多大の成果をおさめた。縄文時代のものは、加賀石・仲田・柿木・石橋・サキノ・屋敷・堺・上覚・ヤリミゾ等の三雲遺跡の各地区から出土しているが、それらのほとんどは遺構に伴うものでなく、その後のとくに三雲で主体をなす弥生終末頃から古墳前期の住居跡等造成時に遺構が削平された状況が想定される。いま出土量の最も多い、石橋・サキノ地区の縄文時代遺物を取りあげてみたい。この地区では石橋Ⅱ-11、サキノⅠ-1より後期と思われる埋壘が、サキノⅠ-5では晩期前半の隅丸方形の住居跡が検出されている。出土土器は後期の西平式・三万田式および晩期Ⅰ～Ⅵ式の各期を含んでいる。石器は打製石斧・石皿・すり石・打製石鏃・切目石錘・サイドブレード・石錐・削器・搔器類・磨製石斧・敲石・研磨痕のある石器・石刃状剥片・つまみ形石器・石核他等とともに大形の土製紡錘車片が出土している。打製石斧は玄武岩製のものが主で刃部に直交する条線状の摩耗痕がみられるものが多いが、1点のみ主軸方向とやや斜行するものがあり、それには頭部にも摩耗痕がみられる。他の地区より出土した土器・石器ともにはほぼ同様である。

## 3. 福岡市早良区四箇遺跡

住宅公団による宅地造成およびその周辺の開発事業に伴う事前調査として福岡市教育委員会が調査を行なっている。J-10i地点・L-11c地点（四箇東遺跡）等を中心として縄文時代の遺物が出土している。J-10i地点は磨消縄文・沈線文・刺突文等を主体とする三万田式土器を主体とし、L-11c地点では凹線文の宮内克己の分類によるいわゆる三万田Ⅲ式を主体とし、一部沈線文の土器が存在する。J-10i地点では打製石鏃67点・石錐6点・つまみ形石器10点・尖頭器6点・彫器3点・楔形石器35点・サイドブレード87点・刃器108点・石匙2点・削器・搔器38点・縦長剥片48点・剥片342点・碎片46点・石核29点の打製石器、磨石1点、砥石4点等とともに石斧15点が出土しているが、全磨製・半磨製の蛇紋岩製のものがその大半を占め11点、打製石斧は4点のみで、広田等に比べてその点数が少ないことが指摘される。使用痕については記述はない。L-11c地点では石鏃69点、楔形石器11点、彫器様石器2点、石錐3点尖頭器6点、つまみ形石器23点、サイドブレード57点、刃器131点、剥片34点、石匙4

点、削器・搔器23点、サヌカイト製剥片石器10点、石皿5点の石器とともに38点の石斧が出土するがJ-10i地点と同様大半は蛇紋岩の磨製石斧で、打製石斧は12点と少ない。使用痕については記述はない。削器、搔器としたもののなかにいわゆる穂摘形の石器があるが、これも使用痕の記述はない。この他に土偶3点、土製紡錘車、十字形土製品・石製品、勾玉等が出土しており注目される。

#### 4. 福岡県筑紫郡那珂川町松木遺跡<sup>(7)</sup>

調査は区画整理事業に伴う事前調査として那珂川教育委員会によって行われた。縄文時代のものとしては中期・晩期の包含層が検出された。晩期V式のものとして第5層出土土器が晩期VI式として第4・3層の出土土器が良好な資料であることは既にのべた。石鎌・縦長剥片・石錐・すり石・砥石等とともに打製石斧も出土している。うち1点は頭部の一部に摩耗痕がみられる。

#### 5. 福岡県春日市上白水柏田遺跡<sup>(8)</sup>

調査は山陽新幹線車輛基地造成に伴う事前調査として福岡県教育委員会によって行われた。縄文時代のものとして中期、後期、晩期および夜臼式のものまで出土し、晩期のものとしては晩期V式、晩期VI式に属するもの少量が出土し、これらに伴うと考えられる緑泥片岩の打製石斧40点余があるが、使用痕の観察はない。削器搔器としたなかにいわゆる穂摘具形石器も存在し、そのなかの1点についてはかなり使用した刃つぶれ現象が指摘されている。又花粉分析・プラント・オパール分析が行われた。花粉分析の結果は「縄文時代晩期の稲作農耕を裏付ける積極的な証拠を得ることはできなかった。しかし、晩期の包含層からわずかではあるがイネ型花粉 (Oryza type) が検出されていることは注目されよう。」とされ、プラント・オパール分析では後期前半 (北久根山式) にイネが存在したという確認は得られていない。

#### 6. 福岡県筑紫野市御笠地区

阿志岐シメノグチ遺跡は古墳の盛土内から曲り田 (古) 式と思われる刻目凸帯文の甕・住居跡から晩期VI式土器が出土したことは既に報告されているが、最近御笠地区圃場整備事業に伴う事前調査で、吉木所在のA地点から晩期I式の浅鉢と粗製土器片・同じく吉木所在のB地点から晩期前半に属すると思われる条痕文の粗製の甕が検出されている。さらに吉木小賀谷では晩期V・VI式および板付I式土器等が採集されている。圃場整備で検出された土器は古墳前期<sup>(10)</sup>又は奈良時代の遺構によって削平を受けて辛うじて残った状態で発見されているが、今後晩期の遺跡が検出される可能性もあろう。現在のところ晩期の石器は発見されていない。

#### 7. 福岡県甘木市屋永高原遺跡<sup>(11)</sup>

九州横断自動車道建設に伴う事前調査として福岡県教育委員会が調査を行なっている。現在未整理の段階であるが第10図にその一部を示したように晩期の各期・曲り田 (古) ・ (新) 式、夜臼式土器等が出土している。1は晩期II式、2～4は晩期III式、5・7は晩期IV式、6は晩

期Ⅴ式、8～12は晩期Ⅵ式、14は曲り田（古）式、16は刻目凸帯文土器としてはやや古い要素をもち曲り田（新）式、13、15、17は夜臼式に比定してよからう。石器は黒燿石製品多数、勾玉2点等とともに扁平打製石斧が出土しているという。

#### 8. 福岡県浮羽郡吉井町塚堂遺跡<sup>(12)</sup>

国道210号線浮羽バイパス建設に伴う事前調査として福岡県教育委員会が調査を行っている。塚堂古墳の周溝、古墳時代前期の住居跡等を主体とする遺跡であるが、A地点では小ピットおよび包含層から、B地点では包含層から後晩期の遺物が出土している。A地点の第1次調査で出土した縄文土器は晩期Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ式頃の土器を主体にし、一部後期、夜臼式土器等を含む。石器はすり石・打製石鏃等とともに扁平打製石斧がある。使用痕は分銅形をなす打製石斧の刃部と外彎する体部中央付近にみとめられるが擦痕の方向まで確認しえないとしている。第2次調査では後期、晩期Ⅰ式、夜臼式土器等が包含層から出土しているが、P-3からは刻目のない凸帯を口縁下にもつ甕、肩部に刻目凸帯をもち口縁にはリボン状のつまみをもつ浅鉢、口縁下に刻目凸帯をもつ甕等が出土し、曲り田（古）式の段階に晩期Ⅵ式が残った様相を呈している。石鏃3点が共伴した。B地点では西平式・三万田式の後期の土器、晩期Ⅰ・Ⅱ式の他、晩期Ⅴ・Ⅵ式の土器および夜臼式土器が出土している。石器は打製石鏃、削器、搔器の他、扁平な磨製石斧1点、扁平打製石斧10点のほか穂摘具形石器1点が出土している。

#### 9. 北九州市小倉南区長行遺跡<sup>(13)</sup>

長行遺跡は学校建設に伴う事前調査として北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室によって調査が行われた。A地区、B地区の包含層およびB地区の土壌より晩期Ⅵ式の土器を主体として出土しており、その一部は第11図に示している。晩期Ⅵ式に瀬戸内系の刻目凸帯文土器を伴い、報告者および家根祥多等は同時期のものとしていること、第11図7の浅鉢は曲り田（古）式に位置付けられるもので、曲り田（古）式の段階に古い要素が残ったものとも考えられるので刻目凸帯文の出現の問題とも合せて今後の検討を要する課題であることは既にのべたところである。ところで晩期Ⅵ式に属する甕の外面と、肩部に刻目凸帯をもつ甕の内面に靱圧痕をもつもの2点が検出されており注目される。石器は磨石・凹石・敲石・砥石・石鏃・剥片石器等とともに磨製石斧9点、打製石斧75点が出土している。扁平打製石斧は短冊型（Ⅰ・Ⅱ型）、長楕円型（Ⅲ型）、撥型（Ⅳ型）に分類し、Ⅰ～Ⅲは刃部に直交する使用痕と基部に摩擦痕がみられ、Ⅳは刃部に45°の傾斜をもつ使用痕が観察されている。又6号土壌出土の剥片石器1点を刃部の片端の損耗が著しく、刃に対してやや傾く線条痕が多数観察できることから、収穫用石器としての機能が考えられるとしている。

以上最近の調査のなかから低地にあり、弥生時代開始期の遺跡と立地が共通するものを取りあげて説明を加えてきた。多くは主に弥生時代終末から古墳時代前期にかけての聚落の激増と規模拡大という現象のなかで削平を受けており、遺構を伴わないものである。しかしこのよう



な遺物の存在から、かつて考えられていたように台地上の遺跡だけでなく、低地に立地する遺跡が存在し、弥生時代へ継続する状況を把握できる展望がひらけてきている。ところでさきに問題視した扁平打製石斧は晩期Ⅰ式頃から急増することは台地上の遺跡だけでなく、低地の遺跡でも一般的なものであることはいまみてきたことで理解できよう。この扁平打製石斧が土掘具であり、晩期の段階で急増することからさらに進んで農耕具であるとするのが晩期農耕論の大きな根拠であるが、曲り田（古）式で水稻耕作が確立した以後は大陸系磨製石器群がほぼそろっており、晩期の段階としては、黒燿石、サヌカイト製の従来の打製石器は残るとはいえ大きな変革期をむかえたといつてよい。晩期の段階で出現する大形紡錘車が小形化し形態的にも確立し、紡織技術の上でも一つの画期をなしている点からもこのことは補強できる。晩期の段階で粃痕のある土器が熊本県ワクド石、北九州市長行等で知られているが、これらはかつて黒川式と認識され晩期中頃の所産と考えられていたものである。しかしながらこれらは、既に稲作が確立された曲り田（古）式の直前に位置付けられ、この時期で米が知られていることはある程度当然といえよう。晩期Ⅱ、Ⅲ式頃の段階で稲作が行われたか否かは広田遺跡等で注意深く調査されたが確認されるまでに至っていない。低地でもこのような状態であり、台地上では当然未だ稲作を行っているとは言い難い。晩期農耕論の大きな根拠とされた大石遺跡等でも禾本科の栽培植物は発見されていない。しかし佐原真が紹介した土器破片の表面を詳細に検討して、種子の圧痕の疑いのある小さなくほみすべてに粘土をおしつけ、これを顕微鏡で観察するという方法を、<sup>(15)</sup>採用して実施するならば栽培植物が明らかとなり、この段階での原始的萌芽的農耕の実態にせまることも可能と考える。そして米も含めた各種の穀物が晩期の段階で栽培され、一定の試験的段階を経て、体系化された水稻農耕を受け入れる基盤をなしたのと考えれば、すべてのものを外来文化に帰すこととなり、後、晩期、稲作開始期の遺構・遺物の出土の実態に合致しない。

- 註1 福岡県教育委員会「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告——糸島郡二丈町所在遺跡の調査——」1980
- 2 中山平次郎「筑前国糸島郡福吉村吉井発見物と推定すべき銅剣及び異式の鉄剣」考古学雑誌15-4 1925
- 3 福岡県教育委員会「三雲遺跡」Ⅰ 福岡県報58 1980  
 福岡県教育委員会「三雲遺跡」Ⅱ 福岡県報60 1981  
 福岡県教育委員会「三雲遺跡」Ⅲ 福岡県報63 1982  
 福岡県教育委員会「三雲遺跡」Ⅳ 福岡県報65 1983
- 4 青柳種信「柳園古器略考」1882
- 5 福岡市教育委員会「四箇周辺遺跡調査報告書」(1) 福岡市報42 1977  
 福岡市教育委員会「四箇周辺遺跡調査報告書」(2) 福岡市報47 1978  
 福岡市教育委員会「四箇周辺遺跡調査報告書」(4) 福岡市報63 1981  
 福岡市教育委員会「四箇周辺遺跡調査報告書」(5) 福岡市報100 1983

- 6 宮内克己「三万田式土器の研究」古文化談叢 8 1981 私自身は宮内氏の三万田Ⅲ式は御領式の古い要素のものとして位置付けてもいいのではないかと感覚的には思っているが、現在のところそこまで手を出す余裕はないので一応報告書および宮内氏の分類にしたがっておく。
- 7 那珂川町教育委員会「松木遺跡」Ⅰ上巻 那珂川町文化財調査報告書第11集 1984
- 8 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告——春日市・柏田遺跡の調査——」第4集上巻 1977
- 9 筑紫野市文化財調査室「阿志岐シメノグチ遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第1集 1972 遺物は筑紫野市教育委員会山村淳彦・奥村俊久両氏の御好意によって実見させていただいた。
- 10 遺物は筑紫野市教育委員会の山村淳彦・奥村俊久両氏の御好意によって実見させいただいた。
- 11 調査担当者の木下修・伊崎俊秋両氏の御好意によって未整理、未発表のものを使用させていただいた。
- 12 福岡県教育委員会「塚堂遺跡」Ⅰ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 1983  
福岡県教育委員会「塚堂遺跡」Ⅱ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集 1984
- 13 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「長行遺跡——北九州市小倉区大字長行所在——」北九州市報20 1983
- 14 川上勇輝「米の圧痕ある縄文末期の土器——菊池ワクド石出土の土器報告——」熊本史学14 1958
- 15 佐原真「農業の開始と階級社会の形成」岩波講座 日本歴史 1 原始および古代 1 1975

## c 小結

視点を变えて自然的条件はいかに変化しつつあったかということのみてみよう。福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚より出土した貝類を分析した前川威洋は、古遠賀湾の自然環境の変化を類推した。それによると縄文前期には「ハマグリやイソシジミが多く、主に細砂地に棲息していることから、当時は美しい遠浅の砂質の内湾であったことがうかがえ」「縄文中期になるとイソシジミが姿を消し、ハマグリが割合が減少し、かわってマガキ、オキシジミの占める割合が増加している。これらの貝は砂泥地～泥地に主に棲息することから、内湾に沖積土が堆積し、泥海化しはじめた様子がうかがえる。」「後期になると圧倒的にマガキが多くなり、ごくわずかではあるがアサリ、マシジミなどもあらわれて、イボウミニナ、フトヘナタリ、カワアイが多くなっていることから、内湾は泥海化していることがわかる。」とし、「なおイボウミニナ、フトヘナタリ、カワアイなどは泥地～砂泥地の淡水の流れ込む河口付近に多く、マシジミのようにすでに淡水産の貝も出現していることから、遠賀川という大河が流れこむこの内湾が急速に泥土でうまり淡水化の傾向にあったことも推測できる。なおこの頃、古遠賀湾の奥の方では、古月・寿命・楠橋貝塚などで、淡水産のマシジミなどが優位になっていて、満潮時の汀線がこの

近くまで来ていたことがうかがえる。」とした。そして魚骨の分析から内湾の環境変化によって漁法の変化がみとめられ、「縄文後期においては鹿の肩甲骨製のヤスの発達がみられる。しかし縄文後期における石銛や石鋸という大形漁撈具の出現は、内湾の変化にともなう漁業のいきづまりの打開と漁業の発達とがあいまって、外洋に出かけてサメやイルカなどの大形の獲物をとりはじめたであろうことを推定させる。」としている。このような内湾の泥湿化は晩期にもさらに進行したであろうことはまちがいない。

井関弘太郎は奥唐津湾で同様の状況をボーリング結果によって明らかにしている。縄文海進後、海面がやや下降傾向をたどり、海進時には湾奥の旧河口付近に限られていた河川の掃流物質（砂礫）の堆積範囲を急速に拡大させ、おそらく縄文後期のころまでに現在の平野の概形がつくられたとする。又縄文中期～後期頃に形成された鏡山西麓から徳武までの旧砂丘および、唐津市街南部の旧砂丘の後背地には汽水性の潟が形成されたとしている。そしてこれらの後背湿地に面して宇木汲田遺跡、菜畑遺跡が営まれており、後背湿地のこのような泥湿化が稲作を受け入れる自然的条件を醸成しつつあった。これは五反田支石墓のある玉島川の形成する小平野、広田遺跡のある福吉川の形成する小平野、曲り田遺跡の存在する深江、一貫山地区、三雲遺跡の存在する瑞梅寺川の形成する怡土平野、現在でも泥湿化の進行しつつある、長浜貝塚のある今津地区、有田遺跡、十郎川遺跡のある早良平野、福岡地区でも那珂川・御笠川の形成する小平野等の小単位で、この旧砂丘の形成と後背地の泥湿化現象は進行していた。したがってこのような内湾の環境変化による漁業のいきづまりと打開の方法は、漁法の変化にも求められたであろうが、新たな食糧獲得の方法、つまり植物性食物の採取から一歩すすんで、大地へ働きかけ植物性食物を栽培する方向へも向けられた。その具体的あらわれが、晩期に急増する土掘具としての扁平打製石斧であろう。そしてこのようにして発生した原始的萌芽的農耕の発達が、体系化された水稻農耕を受容する主体的条件となったことはいうまでもない。

註1 前川威洋「貝種並びに魚骨から見た内湾の変化について」芦屋町教育委員会『山鹿貝塚』 1972

2 井関弘太郎「Ⅱ 末盧の地形と地質」六興出版『末盧国』 1982

3 鏡山猛「甕棺累考(三)——甕棺の源流再考——」史淵62 1954

## 4) 稲作の開始

### a 稲作の開始

晩期におけるコメの発見例は熊本県上の原遺跡において晩期Ⅱ式の住居跡床面直上の覆土から水選法により、イネ・オオムギ等を含め8種類の植物が発見されたと報告されている。<sup>(1)</sup>これは出土当時から物議をかもしたが、その後広田遺跡等の発掘ではコメおよび土器上への粃圧痕等は発見されていない。したがって可能性は否定しないが、今後さらに精密な調査によって、コメがどの時期まで遡るのかは検討を要する課題である。晩期の確実な例としてはさきにもあげた熊本県ワクド石の浅鉢内面の粃圧痕、北九州市長行遺跡の晩期Ⅵ式の甕の外面の粃圧痕<sup>(2)</sup>のみで、長行の肩部に刻目凸帯をもつ甕は曲り田(古)式以後に下る可能性も残されており、<sup>(3)</sup>今のところ晩期の確実な例としてはあげられない。他の粃圧痕資料はすべて曲り田(古)式以後の資料である。したがって晩期Ⅵ式の上記二者は、稲作開始期における周辺現象とも解する見解もあろうが、曲り田(古)式の段階で稲作が確立する以前に晩期Ⅵ式には既に萌芽的ではあれ稲作が東は周防灘沿岸にまで、南は中九州まで波及していたと考えることもできる。

曲り田(新)式の段階では稲作が開始されており、それは現在まで弥生時代の開始期と考えられていた板付Ⅰ式の段階とそうたいして変わるものでないことが近年の板付遺跡・菜畑遺跡・曲り田遺跡の調査成果からいえよう。したがって曲り田(新)式と混在して出土する曲り田(古)式の段階でも内容的には同様であることは確実である。曲り田(古)式の段階で壺・埴・高坏・浅鉢・深鉢・鉢・甕の組み合わせが成立し、壺・埴に丹塗りが多用されるようになってくる。

石器は打製石鏃・石槍・石錐・スクレイパー使用剥片・石刃・石核等の縄文時代以来の黒耀石・サヌカイト製の打製石器に加えて、磨製石鏃・磨製石剣・扁平片刃石斧・挟入柱状片刃石斧・石庖丁・穿孔具・太型蛤刃石斧等の大陸系磨製石器が新たに加わっており、曲り田遺跡では晩期に盛行した扁平打製石斧は出土せず、縄文系の磨製石斧も皆無といってよいほどである。菜畑では扁平打製石斧、局部磨製の晩期に一般的な石斧も若干残ってはいるが、様相は曲り田とほぼ同様といってよい。<sup>(4)</sup>

曲り田(古)式になるとそれまで大形で分厚かった紡錘車が小形化して来ており、形態も整ってくる。菜畑遺跡では布圧痕土器も検出されているが、<sup>(4)</sup>組織痕文土器は晩期Ⅴ・Ⅵ式に最も盛行したもので、これらの圧痕に残る布目の経・緯糸数は、晩期のものは1cmあたり6～10本、緯糸5～9本でありかなり粗く、大形紡錘車と対応している。山の寺遺跡のものは経糸15本、緯糸7本、菜畑遺跡では経糸15～18本、緯糸8～10本と細くなっており織布技術に発

展があったことがわかる。山の寺遺跡出土の2個の紡錘車のうち1点は分厚いものであるが、他の1点はその形状、大きさともに曲り田・葉畑等のものと同様であり、この段階で紡績・織布技術に一つの画期があったことは、その時点では弥生時代早期という認識ではなかったが、かつて論じたところである。<sup>(5)</sup>

又曲り田(古)式の段階では支石墓も導入された。曲り田の支石墓は83cm×69cmの長円形の墓壙を掘り、その中央に径48cm程の円形の穴を深さ30cm程に掘り主体部をつくり、4個の支石の上に40cm×32cm厚さ17cmの花崗岩の上石を置き、小壺を副葬していた。<sup>(6)</sup>曲り田の支石墓は極端に小さいものであるが、この時期の支石墓は長崎県原山遺跡、佐賀県丸山遺跡等の例でわかるように小形で主体部には石棺・土壙墓・甕棺等を用いている。これは森貞次郎が原山遺跡の調査で総括したように「埋葬法も縄文文化にみる伝統が強烈で」「支石墓の墓壙は縄文の伝統である極端な屈葬が守られている」<sup>(7)</sup>ものであったのか検討に値する。縄文後期中頃の山鹿貝塚では土壙墓に伸展葬・屈葬の両者があるが、<sup>(9)</sup>後期後半以後になるとこのような墓制は知られず、甕棺等の小形の墓制が出現し、晩期にひきつづき、弥生時代早期まで残存する。弥生時代前期の板付Ⅰ式の段階では木棺墓、箱式石棺が新たに出現し、早期とは墓制の上では明確な差をもつ。ところでこの後晩期以来の小形の墓制は明らかに小児骨の出土した例もあるが、<sup>(10)</sup>福岡県苅田町浄土院遺跡出土の西平式の甕棺内より成人女性の火葬骨が出土し、<sup>(11)</sup>後晩期の葬法の一つとして火葬が行われていたことが判明したのである。曲り田の支石墓も炭片、焼骨片が検出され、火葬の可能性が高いことは既に述べたところである。この時期の箱式石棺・土壙・甕のすべてが小形であることはそのすべてが幼小児用であることはありえず、又そのすべてが成人の極端な屈葬ということも人骨が残存しないことから納得しかねる。火葬はこの時期のかなり一般的な風習であったと想定できる。したがってこの時期の支石墓は縄文後期後半以来の伝統的な要素と、導入された支石墓がむすびついて形成された、日本化した独自の支石墓であったと理解されよう。又内部主体としての箱式石棺も同じく導入されたものでありながら小形であることは、支石墓と同様に考えることができよう。

以上のように曲り田(古)式の段階になって、それまでの晩期の段階と大きな画期があることがわかる。水稻耕作によるコメの生産、土器の組み合わせの確立、大陸系磨製石器の出現、紡錘車の小形化と定型化つまり紡績技術の発展、日本化した支石墓の出現、それに16号住居跡出土の鉄器を加えて、弥生文化を構成する諸要素は既に整っている。したがって曲り田(古)式から夜臼式までの間を弥生時代早期として位置付けたい。<sup>(12)</sup>

いままでは板付Ⅰ式の段階での現象とみられていた、この大きな画期つまり弥生文化の成立は、磨製石器群にみられるように朝鮮からの影響は否定できない。これらのことから渡来人の問題は研究史でとりあげたようにさけて通ることはできない。しかし残念ながら日本側における後晩期および弥生早期の墓制は人骨の残りにくい状態であり、又大形甕棺の成立する以前つ

まり板付Ⅰ式の段階、又大形甕棺が成立してもその当初は人骨の残存状態はわるく、甕棺内人骨も前期末頃からの資料に限られているのが現状である。甕棺葬の盛行した周辺地域では砂丘遺跡の人骨が知られているが、これも甕棺とはほぼ同時期の前期末頃からの資料である。今後玄界灘沿岸部で良好な砂丘遺跡が発見されたとしても大形の木棺墓、箱式石棺の成立する板付Ⅰ式以後の人骨しか得られる見込はない。このような墓制上の制約をもって数百年近い空白の時間があり、後晩期からの人骨の形態変化の追求、朝鮮側との人骨の比較研究は困難をきわめるものと予想される。したがって現在北部九州・山口等でみられる高顔・高身長の人骨の特徴は、大量の渡来人による混血の結果であるのか、縄文後晩期には既に生じていた地域差の継続なのか現段階では如何ともし難い。考古学的遺物からみた場合、特に紡錘車にみられるように、後期末頃から徐々に朝鮮からの先進文化の流入があり、それを在来的要素と融合させながら受容しつつ弥生文化へ漸次発展していったというのが実態に近く、先進文化の窓口であった玄界灘沿岸には朝鮮からいくらかの人々の渡来もあったものと考えられる。しかしこれは持続はしたが土器、石器等の遺物からみて舶載されたものは極めて少なく、渡来人の量はそれほど多かつたものとは考えられない。このような結果として縄文晩期、弥生早・前期の間に形成された地域差ではあろうが、あくまでも弥生文化の成立については、主体は内部的条件の発展であり、外来的要素は従であったと考える。

- 註1 上の原遺跡調査委員会「熊本市健軍町上の原遺跡調査報告書」1971  
 2 川上勇輝「米の圧痕ある縄文末期の土器——菊池ワクド石出土の土器報告——」熊本史学14 1958  
 3 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「長行遺跡——北九州市小倉区大字長行所在——」北九州市報20 1983  
 4 唐津市「菜畑——佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査——」1982  
 5 橋口達也「甕棺内人骨等に附着せる布・蓆」鏡山猛先生古稀記念『古文化論攷』1980  
 6 福岡県教育委員会「石崎曲り田遺跡」Ⅰ 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集 1983  
 7 日本考古学協会北九州総合調査特別委員会「島原半島（原山・山の寺・礫石原）及び唐津（女山）の考古学的調査」1960  
 8 佐賀県教育委員会「丸山遺跡発掘調査概報」1972  
 9 芦屋町教育委員会「山鹿貝塚——福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚の調査——」1972  
 10 前川威洋「九州地方における縄文のカメ棺——福岡県の縄文時代カメ棺——」考古学論叢2 1974  
 11 浄土院遺跡調査団「浄土院遺跡調査概要」1972  
 12 佐原真「弥生土器入門」佐原真編『弥生土器』Ⅰ ニューサイエンス社 1983 で既に弥生時代早期あるいは先Ⅰ期と呼ぶことを言及している。

## b 稲作の波及

いままで稲作の波及をみると、弥生前期の土器いわゆる遠賀川式土器を追跡すればよかつ

た。いま曲り田（古）式～夜臼式のかつて縄文時代晩期と考えられていた段階で、水稻耕作が明らかにされ弥生時代早期と位置付けられるに至った。ここで各地のこの時期の状況から稲作の有無を確認し、稲作の波及の状態をみてみよう。

西健一郎は熊本県における刻目凸帯文の甕に代表される時期の土器をⅠ～Ⅳ期に分類し、Ⅰ期を上南部遺跡出土の土器とし、もっとも近い例は板付遺跡E—5. 6調査区8. 9層出土土器であるとし、Ⅱ期として水の山遺跡出土土器をとりあげ、山崎分類の夜臼Ⅰ式と同時期か若干先行する。同じくⅡ期とした苗代津遺跡の壺は板付遺跡E—5. 6調査区8. 9層に類似するもの、又は同区7層出土壺に類似するものがあるとして、これらの時期は夜臼Ⅰ式～板付Ⅰ式頃の間とし福岡における夜臼式単純層から弥生前期前葉の間に相当するとする。斉藤山遺跡出土土器はⅠ式・Ⅱ式に分け、それを各々凸帯文土器Ⅱ期の新しい段階とⅢ期に対比し弥生前期前葉の後半と弥生前期中葉とに位置付けた。第Ⅳ期として久保遺跡出土土器、沈目立山遺跡出土土器をあげ、弥生前期後葉に、同じく宇土城跡貯蔵穴内出土土器を前期末に、境目西原遺跡出土土器を中期中頭に編年した。<sup>(1)</sup>いまここで氏の編年の当否を検討する時間はないが、上南部遺跡の甕は古い要素をもち曲り田（古）、<sup>(1)</sup>（新）式に対応するが、浅鉢は新しい要素をもち夜臼式といえる。したがって曲り田（古）式～夜臼式とはほぼ併行するか若干下る頃のものと考えられる。これらに磨石3、打製石斧1、打製石鎌3、剥片石器2、三角形をなし片刃に近い形状の砂岩製の石庖丁1がある。石庖丁をのぞいては凸帯文系土器に伴うことは確実であろうが、<sup>(2)</sup>石庖丁については報告者は「突帯文系の土器に伴うものか、それ以降であるのか興味ある所ではあるが、それは明確でない」としている。しかし材質と形状からこの時期のものと考えてもおかしくない。江津湖苗代津遺跡の出土土器は夜臼式土器と対比されそれとほぼ同時期かやや下る頃に位置付けられよう。水の山遺跡の出土土器は西のいうように夜臼式Ⅰ式とは類似せず、むしろ佐賀県丸山遺跡出土の土器等と対比したほうが妥当で、<sup>(3)</sup>板付Ⅰ式の時期にまで残る夜臼系の土器と認識すべきものである。ともあれ苗代津遺跡では上記の土器とともに紡錘車2点、打製石斧、打製石鎌、三角形両刃の石庖丁2、大型蛤刃石斧2、扁平片刃石斧2、のみ状石器1、挟入石斧1等が出土している。紡錘車の1点は小形の定型化されたもの、1点は片面が突出し刺突文を3重に施した大形の紡錘車で古い要素をもっている。この遺跡では板付Ⅱ式以後に位置付けられる前期の土器も出土しており、報告者は出土状態からしてこれらを夜臼式～板付式に伴うものとみられるとしている。石器の形態からして打製石斧等とともに夜臼式に伴うものとしてもおかしくはない。

熊本県下では以上のように曲り田（古）～夜臼式に対比される段階で石庖丁等を伴うとみられる遺跡があり、この時点では稲作が行われていた可能性は強い。斉藤山遺跡以後の段階ではもはや稲作存否を論議する必要はなからう。<sup>(5)</sup>

鹿児島県下では日置郡金峰町下原遺跡からやや古い要素をもつ刻目、刻目凸帯の甕、浅鉢等

とともに短頸、長胴の丹塗り磨研壺等曲り田（新）式又は夜臼式の古い段階とでもいうべき土器群とともに、頁岩質の石庖丁、打製石鎌、扁平打製石斧、半磨製の石斧、石匙等の石器とともに、鉢と思われる土器の内面に靱圧痕が検出されており、この段階で明らかに稲作が行なわれていたことが検証された。このことによって同町内の高橋貝塚<sup>(6)</sup>への連続性が解明される契機<sup>(7)</sup>となろう。加世田市、日置郡金峰町、同吹上町等この地域は南九州においては異質といえるほど弥生中期前半までは北部九州に近似した様相を呈するところである。いずれにしても九州西岸を南下して熊本、鹿児島（薩摩半島）は北部九州からそうたいして遅れることもなく稲作が開始された状況のみとれよう。

大分県においては高橋徹が大石式→浦久保式→上菅生B式→下黒野式に分類し、上菅生B式を無刻目凸帯文土器として刻目凸帯文出現前夜の土器と位置付けた。<sup>(8)</sup>しかし上菅生B遺跡の図示された土器はたしかに刻目のない凸帯をもつ晩期Ⅵ式のものを含むが、晩期Ⅳ式のものも含んでいる。刻目凸帯文土器とした下黒野式土器は曲り田（古）、（新）式の両者を含み古い要素をもつといえる。高橋は「大石式から上菅生B式期までは多量の扁平打製石斧をはじめ、磨製石斧、石皿・石ノミ・石庖丁形石器・石匙・打製石鎌、紡錘車様土製円盤・紡錘状管玉など石器その他の遺物のセットが基本的に一致し不変であるが、下黒野遺跡では石器は半月形の横長剥片利用の削器（石庖丁形石器？）と磨石の2点のみで、他に扁平打製石斧を欠くこと、壺の出現、黒色磨研の浅鉢の急激な減少等、晩期前葉～後葉にみられる晩期縄文の生活文化との間に一種の断絶を認め得るのである。」とし、下黒野式を夜臼式に対比させ「この時彼地で水稻耕作が行われていることに思いをいたせば、上記の「断絶、を弥生時代の開始という観点で理解することもできよう」とした。伴出する石器等の点でやや脆弱な面もあるが、大分県でも曲り田（古）式頃から稲作を想定できる状況にあることは理解できよう。

中・四国においては潮見浩が縄文晩期文化の総括から「晩期Ⅰの段階では打製石斧を中心とした農耕、それはいままで各地で問題とされながら一般的な見解として受け入れられていないが、縄文社会のおそらく最初の段階から何らかの形で持続したものの拡大という形であられたものと推測され、晩期Ⅱの段階では晩期Ⅰの状態を母胎としながら、とくに遺跡の立地からすれば、すでに弥生時代の基本的な生産様式である水田耕作がこの段階から開始されたものと考えざるをえないのである。」<sup>(9)</sup>とした見解は今日でも有効性をもっている。それは広島県帝釈峠越岩蔭遺跡出土の晩期Ⅱ式の土器底部に付着した靱圧痕で証明された。

近畿地方では刻目凸帯文土器として船橋式・長原式が知られている。船橋式に伴う石器類は現在のところ明らかではない。長原遺跡では長原式土器とともに石錐、石鎌、削器、尖頭器、細部調整剥片、ピエス・エスキーエ、石核、斧形石器、石棒、凹石、磨石、細長ハンマー等が出土している。そして付録として弥生時代に属するものとして扁平片刃石斧をあげているが、<sup>(10)</sup>これはその形状からして北部九州の弥生早期に存在するものと共通する面もあり長原式に伴う



ものとしておかしくない。又これらの縄文土器とともに10数点の弥生土器細片と紡錘車1点が出土しており、それを弥生時代のものとしているが、<sup>(11)</sup>この紡錘車も長原式に伴うものと考えてもよい。しかし現状では近畿地方ではこの時期の石器組成は未だ明確とはいえないが、晩期前半から扁平打製石斧が存在する点は他の西日本地域と変わることはなく、また船橋式、長原式の時点では既に水田耕作を行っていたことはまちがいない。靱圧痕をもつ土器が古くは滋賀里IV式から出土し、長原式では一般的になっている点からもこのことは証明できよう。

東海地方においては五貫森式が<sup>(12)</sup>この段階に対比される。この時期になると西日本各地に比べると遅れるが扁平打製石斧が多くあらわれ一般化していくようである。五貫森式になると、より近畿的な影響が強<sup>(13)</sup>くあらわれており、この段階でやはり稲作を受入れたことは前後の事情からはほまちがいない。

いままで刻目凸帯文土器として認識された土器の共通性だけでなく、稲作を開始したという西日本全域における生産基盤の共通性が、板付Ⅱ式以後急速に北部九州以外の各地へ波及し、いわゆる遠賀川系土器として斉一性をみせることは周知の事実である。弥生時代早期と位置付けられる文化体系は現在のところ玄界灘沿岸部のきわめて限定された地域のみで解明されている段階であるが、きわめて近い将来西日本各地で同様の現象が証明され、縄文晩期後半とされているこの時期を、弥生時代早期として認識することになる。

- 註1 西健一郎「斉藤山遺跡出土刻目突帯文土器の再検討」九州文化史研究所紀要27 1982
- 2 富田紘一「上南部遺跡A地点発掘報告書」熊本市教育委員会『昭和53年度熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書』1979
- 3 熊本県教育委員会「江津湖苗代津遺跡——熊本市健軍町所在——」1974
- 4 隈昭志「熊本県水の山遺跡における配石墓群の一例」考古学雑誌50—1 1964
- 5 乙益重隆「5 斉藤山遺跡」日本考古学協会『日本農耕文化の生成』1961
- 6 発掘担当者である鹿児島県教育委員会文化課弥栄久志氏の御好意により遺物を実見させていただき、またその後御教示いただいた。感謝にたえない。
- 7 河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」九州考古学18 1963  
河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」考古学集刊3—2 1965
- 8 高橋徹「大分県考古学の諸問題1——刻目突帯文土器の出現とその展開について——」大分県地方史98 1980  
高橋徹「東九州における凸帯文土器とその周辺」古文化談叢12 1983  
高橋徹「第5節4、縄文時代から弥生時代へ」大分県史 先史編Ⅰ 1983
- 9 潮見浩「中・四国の縄文晩期文化をめぐる二・三の問題」考古学研究会十周年記念論文集『日本考古学の諸問題』1964
- 10 財団法人大阪市文化財協会「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告」Ⅱ 1982
- 11 松尾信裕「長原遺跡の発掘調査」帝塚山考古学研究所『縄文から弥生へ』1984
- 12 大野薫「大阪平野の縄文晩期終末の遺跡」帝塚山考古学研究所『縄文から弥生へ』1984
- 13 杉原莊介、外山和夫「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡——稻荷山遺跡五貫遺跡・大蚊里遺跡・水神平遺跡の調査——」考古学集刊2—3 1964

## 5) 農耕社会の確立

曲り田（古）式の段階で稲作が開始され前期末に至るまでの間に西日本一帯へ稲作が波及した。その間の北部九州における社会発展の動向は如何なるものであったろうか。

後背湿地の形成という自然現象にも恵まれて、稲作開始期の遺跡はこの低湿地にのぞんだ低台地に立地している。その後背湿地は唐津平野・糸島平野・福岡平野というような規模で形成されたものではなく、さらにその中の小規模な単位であり、菜畑・宇木汲田はこの小単位の後背湿地を背景として成立したことは井関弘太郎の唐津平野の地形発達と環境変化の考察でさきにみたところである。曲り田・有田・板付も同様であったことは又当然であるといえよう。このような観点からすれば玄界灘沿岸地域で稲作開始期の遺跡がさらに発見される可能性は強い。<sup>(1)</sup>

稲作は開始の当初より用排水施設をもち、各種木製農具をもち、その様相は板付Ⅰ式以後と変わらない体系化されたものをもっている。この稲作の採用によって生産力は急速に発展し、余剰生産物をうみ出し、人々の生活は安定し、人口も増加していった。人口の増加は新たな可耕地への進出（分村）の必要性をひき起した。当初はまだ自然に形成された低湿地への進出でことたりたが、板付Ⅱ（古）式以後には、狭隘な谷水田をひかえ、畑作も可能な丘陵地帯へも進出が開始された。前期末に至ると当時の可耕地のほぼすべてに集落が形成され、遺跡の分布は飽和状態に達した観を呈する。この丘陵部への進出はさらに中期前半まで継続される。いま調査が比較的多く行なわれている福岡市早良平野を例にとりて、その状況をみていくことにしよう。

### 1. 藤崎遺跡<sup>(4)</sup>

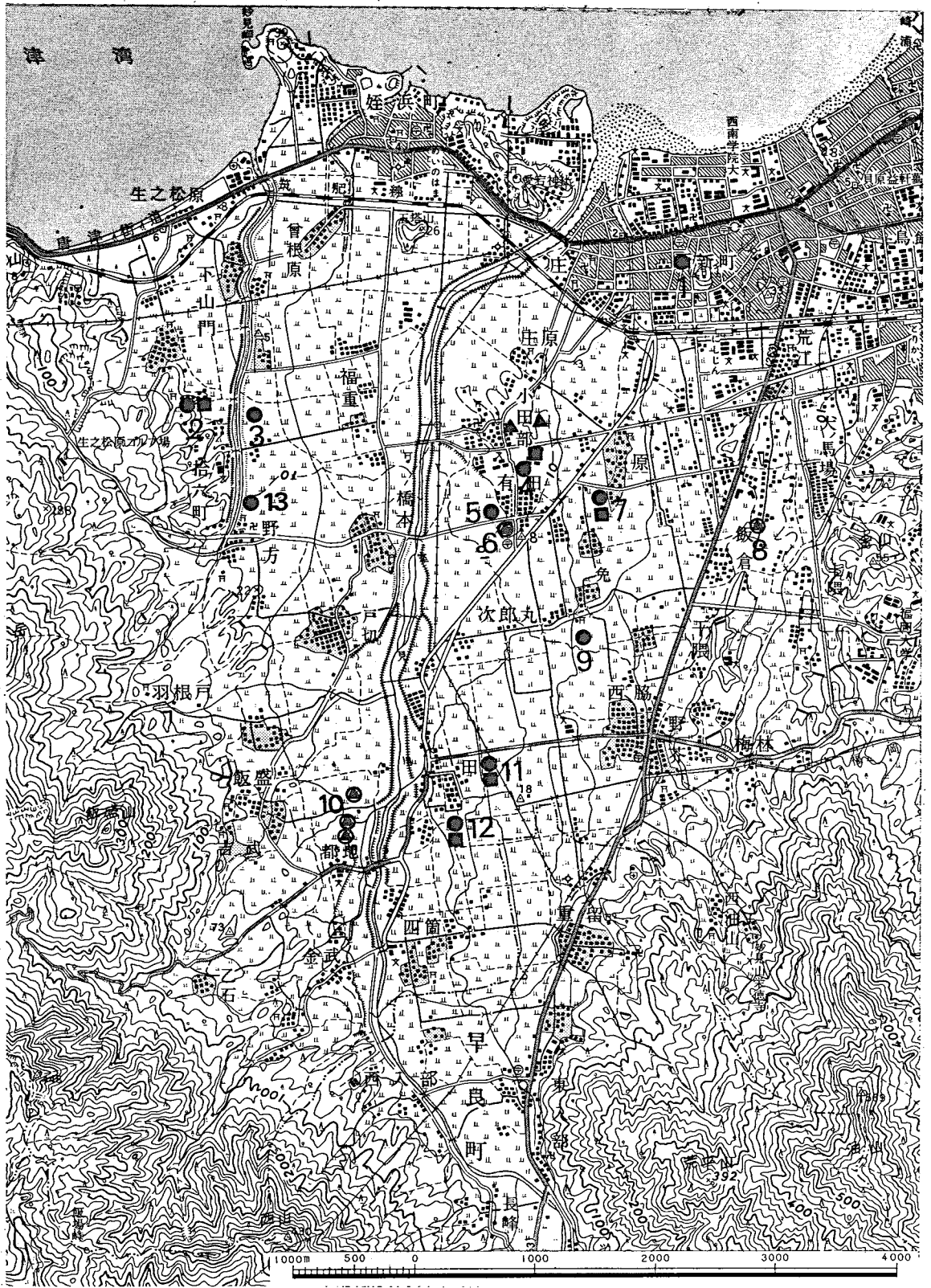
藤崎出土の土器は一部夜臼式を含むが、板付Ⅰ式壺の典型としてよく知られている。これらの壺は今考えると伯玄社遺跡、中・寺尾遺跡等の例<sup>(5)</sup>にみられる大形木棺墓の副葬小壺であることがわかる。板付Ⅰ式期の埋葬遺跡である。<sup>(6)</sup>

### 2. 湯納遺跡<sup>(7)</sup>

弥生時代から古墳時代前期までを主体とする遺跡であるが、一部縄文土器もある。夜臼式の壺・甕・浅鉢等、前期末頃と思われる刻目凸帯文甕・甕棺口縁片・壺等が出土しており、近辺にこの時期の遺跡の存在が推定される。

### 3. 十郎川遺跡<sup>(8)</sup>

包含層・土壙等より肩で屈曲する甕で口縁下のみ刻目凸帯を貼付し肩部にはないもの、又は肩部のみに刻目を施すもので曲り田（古）式に相当するものから板付Ⅰ式まで出土している。打製石鎌・石錐等の打製石器に加え石庖丁・石鎌・抉入石斧・扁平片刃石斧・大型蛤刃石斧・磨製石鎌・穿孔具等の磨製石器群に若干の扁平打製石斧があり、又紡錘車数点が出土している。その様相は菜畑・曲り田等と共通する。



第 48 図

早良平野における弥生早～前期の遺跡(縮尺1/50,000)

1. 藤崎遺跡
2. 湯納遺跡
3. 十郎川遺跡
4. 有田遺跡
5. 有田七田前遺跡
6. 有田(甕棺)遺跡
7. 原深町遺跡
8. 飯倉遺跡
9. 鶴町遺跡
10. 飯盛遺跡群
11. 田村遺跡
12. 四箇遺跡
13. 牟多田遺跡

- 曲り田・夜臼・板付Ⅰ式期の遺跡
- 弥生前期(板付Ⅱ式以後)の遺跡
- ▲ 弥生前期の甕棺遺跡
- ▲ 副葬品をもつ甕棺遺跡

#### 4・6. 有田遺跡<sup>(9)</sup>

有田遺跡は夜臼式・板付Ⅰ式を共伴するV字溝・炭化米を出土した板付Ⅰ式の竪穴等が知られ、又細形銅戈を副葬したKIc式の甕棺があり、その立地からもこの地域の中心的遺跡であることがわかる。その後福岡市によって調査が継続されているが、有田・小田部の台地上では前期の遺構、甕棺墓地数ヶ所が知られ、この台地上での遺跡の進出状況がわかる。

#### 5. 有田七田前遺跡<sup>(10)</sup>

有田・小田部台地の南西部に位置し、広い意味では有田遺跡の一角を構成するといえよう。包含層と川状遺構からなり、晩期Ⅴ・Ⅵ式の浅鉢を一部含むが、主体は曲り田（新）式～夜臼式である。一部板付Ⅰ式壺の小破片が出土しているが、その量はきわめて少なく全体の1%に満たないという。石鏃・石槍・石錐・石匙等の打製石器・磨製石鏃・磨製石剣・石庖丁・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・抉入石斧・太型蛤刃石斧等の磨製石器群の他、2点のみではあるが扁平打製石斧が出土している。その様相は菜畑・曲り田等と共通するが、ともあれ、晩期Ⅴ・Ⅵ式の段階に遺跡が形成されはじめたことが推定され興味深い。

#### 7. 原深町遺跡<sup>(11)</sup>

有田遺跡の東方約1kmの原の微高地に存在する。出土遺物は各時代にわたっているが夜臼式および板付Ⅰ式・板付Ⅱ式土器が少量ではあるが出土しており、この時期に遺跡が進出したことがわかる。

#### 8. 飯倉遺跡<sup>(12)</sup>

1963年8月に甕棺墓群が発見され、そのうちの1基に細形銅剣を副葬するものがあつた。甕棺型式はKIc式いわゆる金海式甕棺で前期末に位置付けられる。

#### 9. 鶴町遺跡<sup>(13)</sup>

溝状遺構等が発掘され、夜臼式・板付Ⅰ式土器が弥生中・後期の土器等とともに出土している。又三角形両刃で孔間にはすり切ったような小溝をもつ石庖丁があり、夜臼式に伴うものと考えられる。

#### 10. 飯盛遺跡群<sup>(14)</sup>

現在調査進行中であるがKIc式いわゆる前期末の甕棺墓群をはじめ各時代の遺構が検出されている。又KIc式の甕棺に細形銅剣を副葬したものはじめ中期の甕棺より前漢鏡・細形銅剣・鉄剣・素環頭太刀・素環頭刀子を副葬したもの等数列が知られており注目される。又、都地の北方約400mの水田でかつてKIc式いわゆる前期末の金海式甕棺の破片が採集されていた。この地点は都地高木遺跡と呼ばれていたがこの遺跡は現在福岡市教育委員会が調査を行っている飯盛遺跡群の一部を構成しており、1985年2月に前期末～中期初頭の本棺墓より多鈕細文鏡・銅剣・銅矛・銅戈を出土し、注目されている。

#### 11. 田村遺跡<sup>(16)</sup>

第1地点では杭列等が検出され、これらに晩期V式、夜臼式土器少量とともに板付Ⅱ式土器が伴い、第2地点からは晩期Ⅵ式の浅鉢等とともに、曲り田(古)式～夜臼式土器片少量が出土している。又石鎌・石錐・楔状石器・使用痕のある剥片石器・石核等の打製石器とともに扁平打製石斧・太型蛤刃石斧・砥石等が出土している。

#### 12. 四箇遺跡<sup>(17)</sup>

既に紹介したところで縄文後期末を主体とする遺跡である。わずかではあるが夜臼式および弥生前期の土器が知られている。

#### 13. 牟多田遺跡<sup>(18)</sup>

古墳時代の土器を主体としているが、弥生・歴史時代各期におよぶ遺物が出土している。量的には少ないが、古い要素をもつ弥生時代早期の遺物がみられる。つまり肩で屈曲する甕の口縁下のみに刻目凸帯を貼付するもの、又刻目も粗く力強いこと等から、これらは曲り田(古)式、(新)式に相当するものと思われる。

早良平野における後背湿地は有田・小田部以北に形成されたことは明らかである。そして荒江から有田・小田部台地の北端、下山門の集落付近までが条里遺構がよく残っており、この付近までが稲作開始当初最も自然的条件に恵まれ、この付近から北側は未だ泥質化現象が進行中であり稲作には未だ不適であったものと考えられる。したがって有田・小田部の低台地とその周辺、十郎川周辺が当時の稲作の最適地であったことがわかる。有田・小田部周辺では七田前遺跡で晩期V・Ⅵ式の土器が出土しており、この時期にこの低台地に進出したことがわかる。稲作をこの当時行っていたかは未だ不明であるが、晩期Ⅵ式の段階では行っていた可能性が強い。現在のところ曲り田(新)式以後の土器が発見されているが、周辺遺跡の状況から考えて、晩期Ⅵ式にひきつづき曲り田(古)式段階で有田周辺での稲作開始は確実といえよう。その後、曲り田(新)・夜臼式とこの台地周辺での進出はひきつづき、夜臼・板付Ⅰ式の段階では環溝集落へと発展する。その後、有田・小田部の台地では前期の遺構・遺物、前期の甕棺数ヶ所が知られ、そのうちの一つは細形銅戈を副葬し、この集落がこの周辺地域で中心をなすものであったことを理解できる。と同時に、飯倉の細形銅剣を副葬した甕棺、最近の調査で明らかにされつつある飯盛遺跡の青銅器副葬の甕棺・木棺墓等がある。これらは前期後半以後に上流域・低丘陵地域へと集落が進出し、その中心となった集落の首長墓であると考えられる。十郎川遺跡をはじめ十郎川流域の遺跡は有田・小田部周辺の遺跡群とは単位を異にするものと思われるが、その後の遺跡の実態が明確でない。今後甕棺等の調査によって副葬品をもつものが発見される可能性が考えられる。いま早良平野における弥生早・前期の遺跡の進出状況を見たが、板付Ⅱ式以後の上流域・低丘陵への進出状況が現段階の調査では未だやや不十分といえる。そこで小郡市三沢丘陵を例にとってこの段階での低丘陵への進出状況をみてみよう。

第49図に小郡市三沢丘陵の弥生前期の遺跡分布を示した。これらの遺跡を概括すると狹隘な



1. 津古内畑遺跡
2. ハサコの宮遺跡
3. 松尾口遺跡
4. 栗原遺跡
5. 北牟田遺跡
6. 牟田遺跡
7. 横隈山遺跡
8. 古賀遺跡
9. 北内畑遺跡
10. 蓬ヶ浦遺跡

第 49 図 三沢丘陵における弥生前期の遺跡 (縮尺1/25,000)

谷水田をひかえ畑作も可能な低丘陵へ弥生前期後半頃から集落が進出し、墓地が営なまれ、弥生中期前半までそれが引き続いている。これらの集落は住居跡の規模・構造等からみても低地に営なまれた集落のものと遜色はない。このような状況は嘉穂郡穂波町の彼岸原台地でもみられ、北部九州では一般的な現象であったといえる。したがって先にみた曲り田(古)式~板付Ⅰ式までの間は自然的条件に恵まれた水稻適地への進出でことたりたが、板付Ⅱ式以後上流域もしくは狭隘な谷水田をひかえた低丘陵をもきり拓いて集落が進出せざるを得ない程急激な人口増加があったものと想定できる。この新たな土地開発をめぐる近隣集落との土地・水をめぐるとの対立抗争が頻繁に起り、殺傷におよぶこともあった。今ここでその結果として銅剣・石剣等の切先を棺内に残し、人体に刺突したものと考えられる板付Ⅱ(古)式~(新)式の例をと

第5表 弥生前期における棺内出土の剣・戈切先地名表

番号	遺跡地名	時期	種類	寸法			出土状態	被葬者 性別年齢	参考文献・備考
				長	幅	厚			
1	佐賀県唐津市宇木汲田 K-32	K I c 式	銅剣	54	23	7	甕棺内		唐津湾周辺遺跡調査委員会「未慮国」 1982
2	福岡県糸島郡二丈町 石崎曲り田 K-2	K I a 式	石剣 磨製石鎌 打製石鎌	15 (3) 24	12 17	3 3	甕棺内	成人 推定身長 162.1cm	福岡県教育委員会「石崎曲り田遺跡」 I 1983
3	福岡県糸島郡前原町 三雲石橋 I-2 K-7	K I b 式	石剣	142	43	9.8	甕棺内		福岡県教育委員会「三雲遺跡」II 1981
4	福岡県大野城市中寺尾 II区 D-8	前期前葉	石剣				木棺墓内		大野町教育委員会「中・寺尾遺跡」 1971
5	福岡県小郡市ハサコの 宮 第2次調査	前期	石剣 石剣 石鎌	29 34 (4)	27 17	8 2	土壇墓内		福岡県教育委員会「九州縦貫自動車 道関係埋蔵文化財調査報告」 XXX 1—中巻 1979
6	ハサコの宮 D-17	前期末	石剣	55	26.5	7	木棺墓内		
7	福岡県小郡市 北牟田遺跡 D-48	前期末	石剣 石剣 石剣	101 137	29 32	9 8	木棺墓内		〃
8	福岡県行橋市 竹並B地区 D-1	前期末 ~中期初	石剣	166 115	41 53	9 13	土壇墓内		竹並遺跡調査会「竹並遺跡 — 弥生・古墳」1979
9	〃 〃 D-12	〃	石剣 石戈	127	35	8	土壇墓内		
10	佐賀県鳥栖市柚比町 安永田遺跡 287区5T 3号土壇墓	前期後半 ~末	石剣 石剣 磨製石鎌	75 53 53	28 29 19	7 7 3	木棺墓内		鳥栖市教育委員会「安永田遺跡——柚比遺跡 群範囲確認調査第3年次調査報告書——鳥栖 市文化財調査報告書第16集 1983

りあげ、こり土地争いの状況をみてみよう。

第5表に示したように前期における棺内出土の銅剣・銅戈、石剣・石戈の切先出土地は8遺跡10例を数える。中期の例を加えるならば現在では30例をこなすものと考えられる。これらの剣・戈の切先はかつては切先副葬と考えられ、前期末~中期前半頃に流行した副葬の一形態と考えられてきた。1975年福岡県嘉穂郡穂波町スダレK-3人骨の第2胸椎右側椎弓板に磨製石剣片が嵌入した例が調査され、その後も永岡遺跡等で人骨への銅剣の嵌入例が追加されており、これらの切先の大部分が人を殺傷におよび、<sup>(21)</sup>刺突時のショックによって折損し人体内に残ったもの<sup>(22)</sup>と考えることができるようになった。切先の残存が短いものは骨につき刺さり先端部が折れ、腹部等の骨にあたらなかったものは深くつき刺り、比較的長めに折れたものと考えられる。これらは先端のつぶれた磨製石鎌・打製石鎌を伴う例が少なからずあることから、弓矢で射かけ、剣でとどめをさすという戦法を想定できる。このような戦法は個人的決闘というようなものではなく、集団間での戦闘行為であったものとする。このような例は板付II(古)式以後中期前半までの現象であって、集落が上流域、低丘陵へ進出した時期と符号している。したがって土地開発に伴い土地・水をめぐる争奪戦が近隣集落との衝突を頻繁にひきおこし、集落間の戦闘も激しく行われ、他集落の構成員を殺傷におよぶことも多かったものと思

われる。この結果各集落・村落は強い結合を必要とするとともに、土地開発および戦闘のために強力な指導者を生み出さざるを得なかった。これらの指導者は生産活動・戦闘のなかで次第に権力を増すとともに世襲化され、富をも集中する首長へと発展していく。朝鮮系の細形銅剣・細形銅矛・細形銅戈・多鈕細文鏡、南方産のゴホウラ・イモガイ等の大形巻貝製貝輪を着想した被葬者が出現する前期末こそが、この首長層の成立した時期であった。

丘陵部への分村的進出は数個の住居跡を基礎単位としていることは、宝台遺跡のみならず他の狭小な丘陵部へ進出した住居跡群の調査から明らかであるが、各遺跡における住居跡の数から通常は数個の住居跡からなる基礎単位の数個のまとまりが一集落を構成するものと考えられる。板付Ⅱ式以後のこのような集落の増大傾向は、各集団間の激しい闘争を経た後、強力な指導者を生み出し、各水系等を基礎にした新たな地縁的結合関係を生み出すに至った。唐津平野の場合は菜畑・宇木汲田を核とするまとまりが形成されたことは井関の地質的調査の結果から明らかであるが、早良平野を例にとった場合、弥生早期以後の遺跡の分布は有田遺跡を核として田村・四箇・飯盛・都地等の上流域、飯倉等へ集落が進出したものとする。十郎川流域の遺跡群は別個のまとまりをもつものと考えたい。核としての有田遺跡のみでなく飯倉・飯盛における前期末の朝鮮系青銅武器を副葬した被葬者の出現は、後から進出していった集団のなかにも首長層を生み出す経済的背景と、このような集団こそが最も頻繁に他集団との抗争をくりかえすなかでより強い結合を必要として出現したのであろう。有田の場合は現段階で細形銅戈をもった甕棺1基が知られ、現在調査中の飯盛遺跡の青銅器・鉄器等の副葬品に凌駕された靚があるが、ともあれ核となった菜畑・宇木汲田・曲り田・有田・板付等の集落の首長がこの地縁的結合による共同体の盟主的存在であったことは疑う余地がない。それは板付における細形銅剣・細形銅矛を副葬した前期末の甕棺、宇木汲田の細形銅剣を副葬した前期末の18号甕棺、<sup>(24)</sup>多鈕細文鏡・細形銅剣を副葬した中期中葉の12号甕棺<sup>(25)</sup>の被葬者に示されているといえよう。そしてこの段階で既に核をなす集落の首長と分村的集落の首長との間には較差が生じ、核をなす集落の首長が、未だ分村したという点で血縁的結合関係を残しながらも水稻耕作を基盤として新たに生じた各水系ごとの地縁的結合の共同体つまり農業共同体を統率する役割をになった。前期末に形成されたこのような農耕社会は弥生中期以降の発展の基礎となるものであった。

- 註1 井関弘太郎「末盧の地形と地質」 唐津湾周辺遺跡調査委員会『末盧国』 六興出版
- 2 福岡市教育委員会「福岡市板付遺跡調査概報」(板付周辺遺跡調査報告書5 1977~8年度) 福岡市報49 1979
- 3 唐津市「菜畑——佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査——」 1982
- 4 永倉松男・鏡山猛「筑前国藤崎における弥生式遺跡」考古学2—1 1931
- 5 福岡県教育委員会「福岡県伯耆社遺跡調査概報——1966夏・秋・冬——」福岡県報36 1968
- 6 大野町教育委員会「中・寺尾遺跡——福岡県筑紫郡大野町中所在甕棺・土壇墓群発掘調査報告——」大野町の文化財第3集 1971



- 大野城市教育委員会「中・寺尾遺跡 福岡県大野城市大字中字寺尾所在遺跡調査報告—  
—」大野城市文化財調査報告書 第1集 1977
- 7 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第4集 1976  
福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第5集 1977
- 8 住宅・都市整備公団「十郎川——福岡市早良平野 石丸・古川遺跡」 1982
- 9 福岡市教育委員会「有田古代遺跡発掘調査概報」 1967  
福岡市教育委員会「有田遺跡——福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告——」 1968  
福岡市教育委員会「福岡市有田・小田部」第1集 福岡市報58 1980  
福岡市教育委員会「福岡市有田・小田部」第2集 福岡市報81 1982  
福岡市教育委員会「福岡市有田・小田部」第3集 福岡市報84 1982  
福岡市教育委員会「福岡市有田・小田部」第4集 福岡市報96 1983  
福岡市教育委員会「福岡市有田・小田部」第5集 福岡市報110 1984
- 10 福岡市教育委員会「福岡市有田七田前遺跡——有住小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告——」福岡市報95集 1983
- 11 福岡市教育委員会「福岡市西区原深町遺跡」福岡市報71 1981
- 12 福岡市教育委員会「有田遺跡——福岡市古代集落遺跡第二次調査報告」 1968
- 13 福岡市教育委員会「鶴町遺跡」福岡市報37 1976
- 14 福岡市教育委員会文化課横山邦継氏の御好意により、遺跡、遺物の一部を見学させていただき御教示を得た。
- 15 福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 第1集——福岡市西部地域（早良平野以西）の遺跡分布調査の概要——」 1969
- 16 福岡市教育委員会「福岡市早良区田村遺跡」Ⅱ福岡市報104 1984
- 17 福岡市教育委員会「福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書」4 福岡市報63 1981
- 18 福岡市教育委員会「牟多田遺跡」福岡市報27 1974
- 19 小郡町教育委員会「津古内畑遺跡」第1次 1970  
小郡町教育委員会「津古内畑遺跡」第2次 1971  
福岡県教育委員会「津古内畑遺跡」第3次（遺構編） 1972  
福岡県教育委員会「津古内畑遺跡」第4次 1973  
福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」——X X X I——上巻 1979
- 小郡市教育委員会「三沢栗原遺跡Ⅰ・Ⅱ」小郡市文化財調査報告書第15集 1983  
小郡市教育委員会「牟田々遺跡」 1977  
小郡市教育委員会「横隈山遺跡」 1974  
小郡市教育委員会「三沢・古賀遺跡」小郡市文化財調査報告書第12集 1982  
小郡市教育委員会「北内畑遺跡」小郡市文化財調査報告書第7集 1981  
福岡県教育委員会「三沢蓬ヶ浦遺跡」福岡県報66 1984
- 20 福岡県教育委員会「日上遺跡」福岡県報48 1971  
穂波町教育委員会「スダレ遺跡——福岡県穂波町椿所在遺跡の発掘調査報告——」穂波町文化財調査報告書第1集 1976
- 21 穂波町教育委員会「スダレ遺跡」1976
- 22 筑紫野市教育委員会「永岡遺跡——筑紫野市大字永岡所在墓地群の調査——」筑紫野市文化財調査報告書第6集 1981
- 23 日本住宅公団「宝台遺跡——福岡市上長尾所在弥生時代集落遺跡——」 1970
- 24 中山平次郎「銅銚・銅剣の新資料」考古学雑誌7—7 1917
- 25 唐津湾周辺遺跡調査委員会「末盧国」 1982  
12号甕棺は汲田式として中期前葉に位置付けられているが、橋口の分類によるKⅢa式であり、中期中葉とした。

## 6) まとめ

御領から亀の甲までの土器を編年し、御領を晩期初頭とし、晩期をⅠ～Ⅵ式に分類した。いままで刻目凸帯文系土器として認識された晩期後半～終末と位置付けられてきた土器を曲り田出土の土器を中心としながら曲り田（古）式・曲り田（新）式・夜臼式に分類し弥生時代早期とした。又板付Ⅰ式をおもに高坏をとりあげ（古）・（新）の両者に分け、板付Ⅱ式は（古）・（中）・（新）に分け橋口の甕棺編年のKⅠa式～KⅠc式に対応させた。また亀の甲型土器の発生過程をとりあげ、板付Ⅰ式の波及していない筑後・肥前南部の板付Ⅰ式期に残る夜臼系甕から直結して出現すること、したがってその発生の時期は板付Ⅱ（古）式であることをみた。

土器の分類を基礎に、曲り田（古）式に先行する晩期の段階で、原始的萌芽的農耕が発生し、それが発展することによって弥生文化を受容したものとして縄文晩期農耕論を再検討した。そしてかつての晩期農耕論が、雲仙・阿蘇山等の火山灰台地の遺跡を中心として展開されたのに対し、近年の調査によって明らかにされた弥生遺跡と共通する低地の晩期遺跡をとりあげ、土掘具と考えられる扁平打製石斧が地上上の遺跡と共通し、原始的萌芽的農耕を考慮せねばならないこと、そして各地域における弥生文化の開始が同一平野内で晩期から継続して追求できる展望がひらけたことを述べた。

曲り田（古）式になると稲作だけでなく、壺・高坏が出現して土器の組み合わせが確立し、大陸系磨製石器群が成立し、晩期の段階と石器組成が変わること、又晩期にみられる大形紡錘車がこの時期に小形化・定型化し、晩期の組織痕土器にみられる布目とこの時期以後の布目とに差が認められることから紡織技術に発展があったこと、支石墓が導入され、又鉄器の出現等々弥生文化を構成する諸要素は整っており、この段階で弥生文化が成立したものとした。弥生文化の成立はいままで考えられていたような急激な変化ではなく、縄文後晩期以後に徐々に朝鮮からの先進的文化的流入があり、それを在来的要素と融合させながら受容しつつ弥生文化へ漸次発展していったというのが実態に近く、あくまでも弥生文化の成立については主体は内部的条件の発展であり、外来的要素は従であったと考える。

北部九州で成立した稲作が九州西海岸を南下し、東九州・中国・四国・近畿・東海地方へと波及する状況と、その間における北部九州内部での社会発展の動向をみた。そして前期における丘陵部への集落の進出と、この土地開発に伴う土地争い、水争いの激化が生産活動・戦闘における指導者を生み出し、それが首長層へ発展することをとりあげた。そしてこの土地開発によって各水系ごとの地縁的結合関係による共同体が新たに成立することをのべた。その時期は朝鮮系の青銅製武器・多鈕細文鏡、南方産の大形巻貝製腕輪を着装する被葬者が出現する前期

末であること、又この農業共同体の成立によって、弥生中期以後の発展の基礎が作りあげられたことをのべた。

ところで弥生文化成立期とした曲り田（古）式の年代観について若干言及せざるを得ない。私は先に 甕棺の編年的研究のなかで、弥生時代の年代観について述べた。<sup>(1)</sup>これは現在までのところ大筋では正しいと考えている。とくにKⅢ期・KⅣ期の年代は今後ともそうたいして動くものではないと考える。今回前期末までとりあげたが、先の論考ではこの時期をB. C. 170～180年頃に考えている。したがって同様の論理にしたがって板付Ⅰ（古）式に年代を付与すれば、B. C. 4Cの後葉からB. C. 300年前後に、曲り田（古）式の年代はB. C. 400年前後する頃に位置付けられる。

註1 橋口達也「甕棺の編年的研究」 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』——X X X I——中巻 1979

きわめて短時日でまとめたので、言いつきない点、論理構成のあましさ等があると思われるがいたしかたない。機会があれば今後さらに検討を加え、追補・修正していきたい。

本稿をまとめるにあたり佐賀県文化課東中川忠美、佐賀県立博物館藤口健二、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室藤丸詔八郎・山口信義、筑紫野市教育委員会山村淳彦・奥村俊久、福岡県文化課木下修・小池史哲・伊崎俊秋の各氏には資料の面で便宜をはかっていただいた。記して感謝したい。



## 2. 紡錘車の研究

——我国稲作農耕文化の一要因としての  
紡織技術の展開について——

### 1) はじめに

日本の弥生文化を規定する内容としての文化的要因は、水田稲作・金属器・農工具や武器としての外来性の強い磨製石器群・紡織技術の新展開・シンプルに定型化する土器・支石墓等の新たな墓制などの組み合わせが考えられてきた。そして、それぞれの要因に対しては、従来幾多の研究がなされ、また、開発攻勢に伴って増大した近年の発掘成果に基づく新しい知見も得られるようになった。

ただし、このうちの紡織技術に関しては、弥生時代前夜における組織痕土器等からの検討は行なわれてきたものの、対象が腐蝕し易い有機質繊維であるが為に、他の分野に比べると、その研究の進展は遅々たるものであったといえよう。

殊に、考古学者の取扱い得る遺物としての紡錘車については、当該期におけるその重要性の指摘は多々論ぜられてきたにも関わらず、意外と、その詳細な検討が顧みられることは少なかったと感じざるを得ない。研究があったとしても紡錘車そのもののみの分類や、国内各地方においての地域を限った論考が行なわれてきた程度であった。もちろん、後項に述べる研究小史にもみられるように、地道な分類研究や、稲作農耕文化発生に関するすばらしい、第六感的な予見の発表などが学界を推進させていったことを否定するものでは決してない。却ってその研究史の重さに深く頭を垂れる次第である。

それにしても、稲作農耕文化発生期前後においては、基準となる土器における編年作業の進展、金属器に対する自然科学的研究をも含めたその研究の徹底さ、稲そのものの土器圧痕や炭化米等への精緻さ、大陸系磨製石器群の朝鮮半島・大陸まで拡大した研究、等々の各進展ぶりに比べて、紡織技術への研究はいかに遅々たるものであったかは、今さら言うまでもないことである。

本論の目的は、以上述べた如き状況を顧み、考古学徒の扱い得る遺物としての紡錘車の変遷を通して、紡織技術の展開を考察することによって、我国の稲作農耕文化開始の様相の一端を解明せんとするものである。

具体的には、近年整備されつつある土器編年に従って、紡錘車の時代的变化の流れを追い、更に、地域的な特色を抽出して、各地の紡錘車相互の関連を追うことを主眼としたい。

なお、ここでは、紡錘車全般について詳細を施すつもりは無く、上記の事由から、時代を日本の縄文時代から弥生時代にわたる、特に稲作農耕文化開始の時期を中心とするその前後の時期に限りたい。地域も、私自身がフィールドとする北部九州を主眼として、朝鮮半島に到る範囲に限っており、東アジア全域の詳細な検討にまでは到らなかったことをお断わりしておきたい。

## 2) 研究小史

日本考古学史上画期的なE・S・モースの大森貝塚発掘により、その報告書“Shell Mound of Omori”の中で、“spindle whorl”の想定をしたことがすでに行なわれている。<sup>(1)</sup>

紡錘車そのものは以後各地から散見的に報告があり、大正期になって、もっぱら糸を紡ぐ小道具としての認識が紡錘車としての考古学的用語を定着させた。

昭和初期、八幡一郎氏は、各地の布圧痕等の検討から「紡績の技術が相当に進んだのは古式弥生式土器の時代ではないかと予想」して、「機織の発達は生活様式の変遷を示す一証左となるのであろう。」と推論している。<sup>(2)</sup>

それを受けて、森本六爾氏は、更に一步進んで、紡錘車の形態を二分類して、「扁平円板状のもの」と、「截頭円錐状所謂へそ石型のもの」とを上げ、「両者共紛れもなく大陸風の紡錘車形態の伝播であり、後者は前者に対して比較の後出的なもの」とした。またこれらのことから、「弥生式の紡織は遠賀川式の初めからあった様」との推論を述べている。森本氏のこれらの論は、弥生文化の規定の研究という氏の業績の中でも、評価されねばならない。<sup>(3)</sup>

昭和12年大和唐古遺跡の調査が行なわれ、第1様式から第5様式期にわたる、石・土・鹿角製等各種の紡錘車が得られ、更に、織機の木製部品の各種が出土した。<sup>(4)</sup>特に織機に関しては報告書中では明らかにされなかった木製品をもって、戦後の登呂遺跡発掘の成果により太田英蔵氏は織機の各部品と判断し、地機的な織機であったことを示した。<sup>(5)</sup>もちろん、同時に登呂遺跡出土の木製織機の復元を試みており、弥生時代の織具機法を、機台の無い無機台貫刀杼機と想定した。それ以後の「もっとも高度な発達をとげた絹機、あるいはその一部機能を摂取した布機に至る五段階の機法」の変遷を想定した。弥生時代の織機の研究については、これ以上の飛躍的進展は見ずじまいである。

ただ、古墳時代及びそれ以降のものについては、既に、大正年間に高橋健自氏が群馬県前橋市稲荷山古墳発見の滑石製品に対して、機織具を型どったものとの発表を行っている。<sup>(6)</sup>また、戦後の玄界灘の沖ノ島の調査による金銅製の織機ミニチュアの発見などによりかなり具体的に判かるようになった。

戦後、弥生時代各遺跡の飛躍的な調査進展にともない、我国の農耕文化生成の諸問題が重大

関心事となり、九州においても、板付遺跡、安国寺遺跡等の調査から、更に縄文晩期の諸遺跡の調査にも手が広げられた。その中で、鏡山猛氏の組織痕土器で総括された各種圧痕を分析した成果は圧巻である。蓆目・網目・籠目・布目などの圧痕を分析しているが、うち布痕については、縄文晩期の唐津市笹ノ尾遺跡・長崎県山の寺遺跡、及び宮崎県下弓田遺跡・熊本県麻生原の実例が掲げられている。これらについては、後項で具体的な検討を行なうが、氏はこれら弥生前夜の段階での組織痕土器の急激な出現が、弥生文化を規定する一要因としての紡織技術が、存在を既に示しているものとして、弥生文化がすべて外来的なものとするに疑問を示し、日本独自の「自主的な組織製品の存在」を明らかにした。氏の研究を継承発展させる者が少なくなり、残念に思う。

布そのものについては、特に弥生時代以降の絹布については布目順郎氏の諸研究が、繊維断面の観察という手法を用いて行なわれている。また、古代文献上からの織機・織布の研究は、小林行雄氏によって多くが示唆されている。<sup>(8)</sup>

紡錘車の研究に目を転ずると、八幡一郎氏の一連の論文に、地域別に形態分類を施してゆくという地道な作業がみられる。まず唐古出土紡錘車の分類検討が行なわれ、更に円板形と笠形紡錘車との来歴について所感が述べられている。<sup>(10)</sup> 笠形のものについては、独楽の発生とその名称との関係を示されており、興味深い。更に北海道の擦文土器文化に伴う紡錘車に対して論考がなされている。文様を施す特異な紡錘車を集成して、更に千島アイヌの土俗例の装飾品としてのクックルケシとオホーツク文化の有孔円盤（有文）をとり上げ、大場利夫氏等が主張するオホーツク文化有孔円盤垂飾説に若干の疑問も示している。次に、朝鮮半島の紡錘車を集成している。<sup>(11)</sup> 発見地名表であるが、惜しむらくは、形態分類のみで時期的な変遷等が全く考慮されないままの羅列となったことである。戦後の殊に彼地の動乱以後の南・北地域での調査成果は着々と累積されつつあり、その利用が殆んどなされないままに了っていることは残念である。

更に八幡氏はイラン国、中国遼東半島の紡錘車にも手を広げて論考が進められている。<sup>(13・14)</sup> とりわけ遼東半島の紡錘車については、東亜考古学会調査の羊頭窪・望海堀・貔子窩・牧羊城・赤峰の各地の遺跡出土紡錘車について年代を比較しながら、変遷と地域性を論じている。また赤峰遺跡出土の土製円錐形の特異な例について、その出自を「より西方オリエント方面に求められる可能性がある」と考察されたことは、我々に多くの示唆を与える所である。これら特異形態紡錘車は、後項で詳察する如く、朝鮮半島北部から更に我国にまでその類似品が認められるからである。以上のように八幡一郎氏の紡錘車に関する業績は、我国の初期稲作農耕文化について考察する際には忘るべからざるものである。

以上の研究史の中での今後に残した問題点も数多い。まず基本的に、どの土製品・石製品を、紡錘車と判断認定するのかということ。更に、織布そのものの発展と紡錘車の変化との関係。また、織機の改良と糸を紡ぐ紡錘車の変化が、具体的にどう対応してゆくのか等の問題。或い

は、使用繊維そのものの違いによる紡錘車の異同が認められるのかどうかということ。これらのかなり根本的な問題に対しては、各人の所感が散見される程度で、きちんと整理された類の論考はみられなかった。以上のことについては、後節で問題点を整理して、若干の私考を加えることとしたい。

今後、実験考古学的な操作を含めて、繊維学・紡績・服飾関係等の諸自然学、民族学等を総合的に集智する方向が求められるところであろう。

### 3) 日本の縄文時代～弥生時代前期の紡錘車

日本の縄文時代後期以降の土器底部等に組織圧痕の残存していることは、前の研究史でも述べた通り、以前より注目されていた。しかるに、殊に晩期の織布の存在そのものは否定し得なかったにも関わらず、当然それに伴う紡織具に対しては注意がはられない傾向があった。

殊に縄文後晩期の中心に孔を有する円盤状土製品を「有孔円板形土製品」「紡錘車形土製品」と呼称し、より積極的に「紡錘車」と考えることは、少数派の無視されがちな意見であったといえよう。

それらの中で、終始、縄文後晩期の紡織技術に注目し、その重要性を指摘されてきた研究者が居られた。殊にその中で紡錘車との認定をはばからなかった乙益・前川両氏の洞察眼は敬意に値しよう。両氏はその著論の中で、縄文後期三万田遺跡出土の有文有孔土製品等から、「三万田式以後に出現する紡錘車形土製品のごときもおそらくその用途は紡錘車そのものと考えられ、製品としての編物や織物の発達が考慮される」と述べている。これらのことを充分念頭に置いた上で、以下地域毎の詳細へと進めたい。

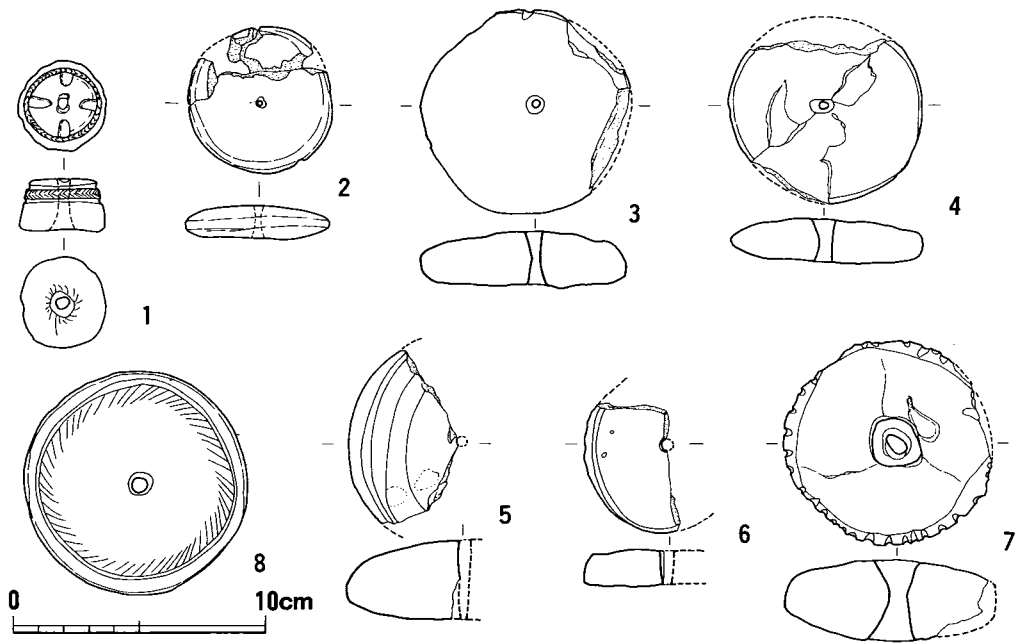
なお、以下に示す紡錘車掲載図は、大小の感覚を知る為に、すべて1/3に統一縮図した。また石製紡錘車は断面に斜線を入れて、白抜きのままの土製のものと区別した。

#### 九州・西日本の縄文時代紡錘車

まず、縄文晩期以前の例について触れておかねばなるまい。九州地方においては、縄文後期後半～末の三万田式土器に伴う紡錘車が最古であり、この時期以後と以前においては、文化諸要素の様相が一変することは後述する如くである。

**三万田遺跡出土紡錘車**（第50図1・2）（熊本県菊池郡泗水町）1は、乙益・前川氏の前掲論文に示されたものである。直径3.5cm、厚さ2.1cmの部厚い異形類である。側面上端に細線羽状文を巡らせ、<sup>(15)</sup>上面には十字方向に沈線を入れる。小型品で他に例をみないが、文様は三万田期の特徴を示している。2は、2号住居跡床面（土器は三万田式でも磨消縄文系のものをかな





第 50 図 縄文後期三万田期の紡錘車 (縮尺1/3)

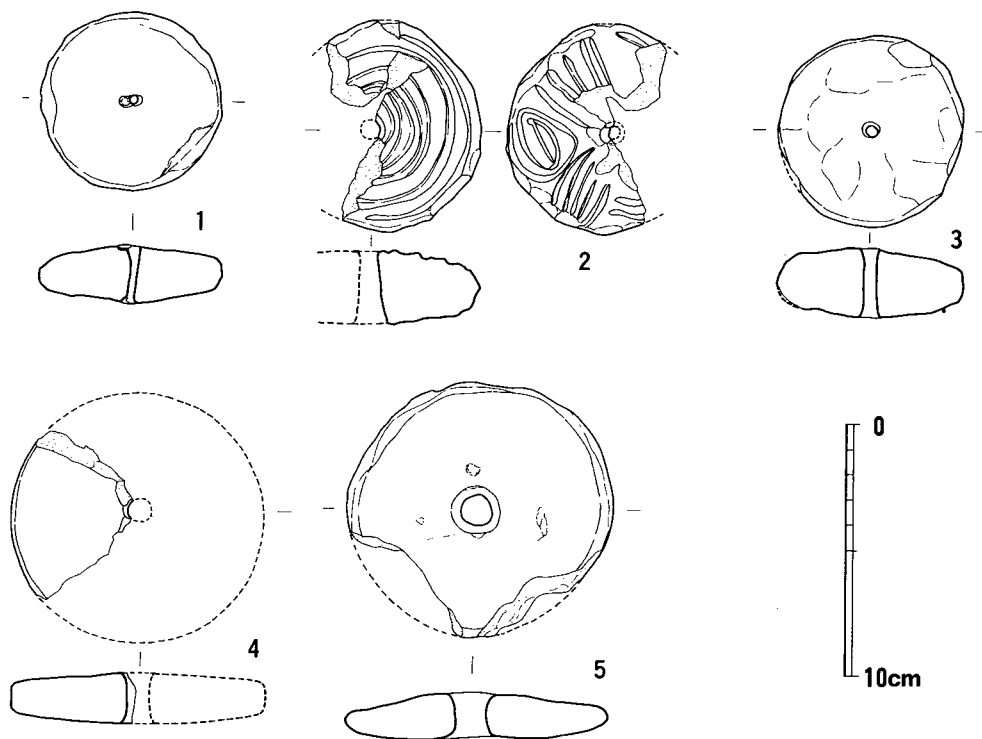
1 : 三万田遺跡 2 : 三万田東原遺跡

3 ~ 7 : 四箇遺跡 8 : 赤池町山崎遺跡

り含む前半のもの) 出土品で、土製品にしてはやや薄めの扁平円板形、径5.7cm。中央孔は細く磨滅の痕跡はない。<sup>(16)</sup>

**四箇遺跡出土紡錘車** (第50図3~7) (福岡市早良区) 早良平野の旧微高地に占地する本遺跡のL-11C地点出土品である。すべて土製品で、三万田後葉期に伴うとされる。報告書では円盤状土製品と称する。<sup>(17)</sup> 同遺跡内の四箇東遺跡からも同種のものが出土しているらしい。直径が8cm強~7.5cm、厚さが3~1.5cmの、大きく部厚いタイプである。7は側面に篋状工具で刻目を入れて歯車状に仕上げている。この大きい点は、関東地方縄文晩期に出現する「有孔円板形土製品」の法量に匹敵する。孔が両面穿孔で後世の紡錘車の如くすっきりと上から下まで直線的な断面をみせないことや、異様な文様等を併せて、おそらく、報告者は紡錘車と称することを躊躇したものとかんがえられる。これらのタイプが漸次変化して夜臼期の誰もが認め得る紡錘車へと連続することを考えると、この四箇タイプのものも紡錘車と認定してよいものと言える。

**山崎遺跡出土紡錘車** (第50図8) (福岡県田川郡赤池町<sup>あがの</sup>上野) 「北九州古文化図鑑」<sup>(18)</sup>に掲載されたもので、断面形態は明らかでない。直径9cm弱と大型品である。上面周縁近くの沈線の内側に細線斜行短線を巡らせている。文様は三万田式の羽状文を彷彿とさせるものである。遺跡は縄文後期西平式・三万田式土器が出土し、三万田式土器が主体をなす。当品は共伴関係に<sup>(19)</sup>



第 51 図 縄文後期末～晩期前半の紡錘車 1 (縮尺1/3)

1：吉井町法華原遺跡 2・3：香田遺跡

4：権現塚遺跡 5：古保山A遺跡

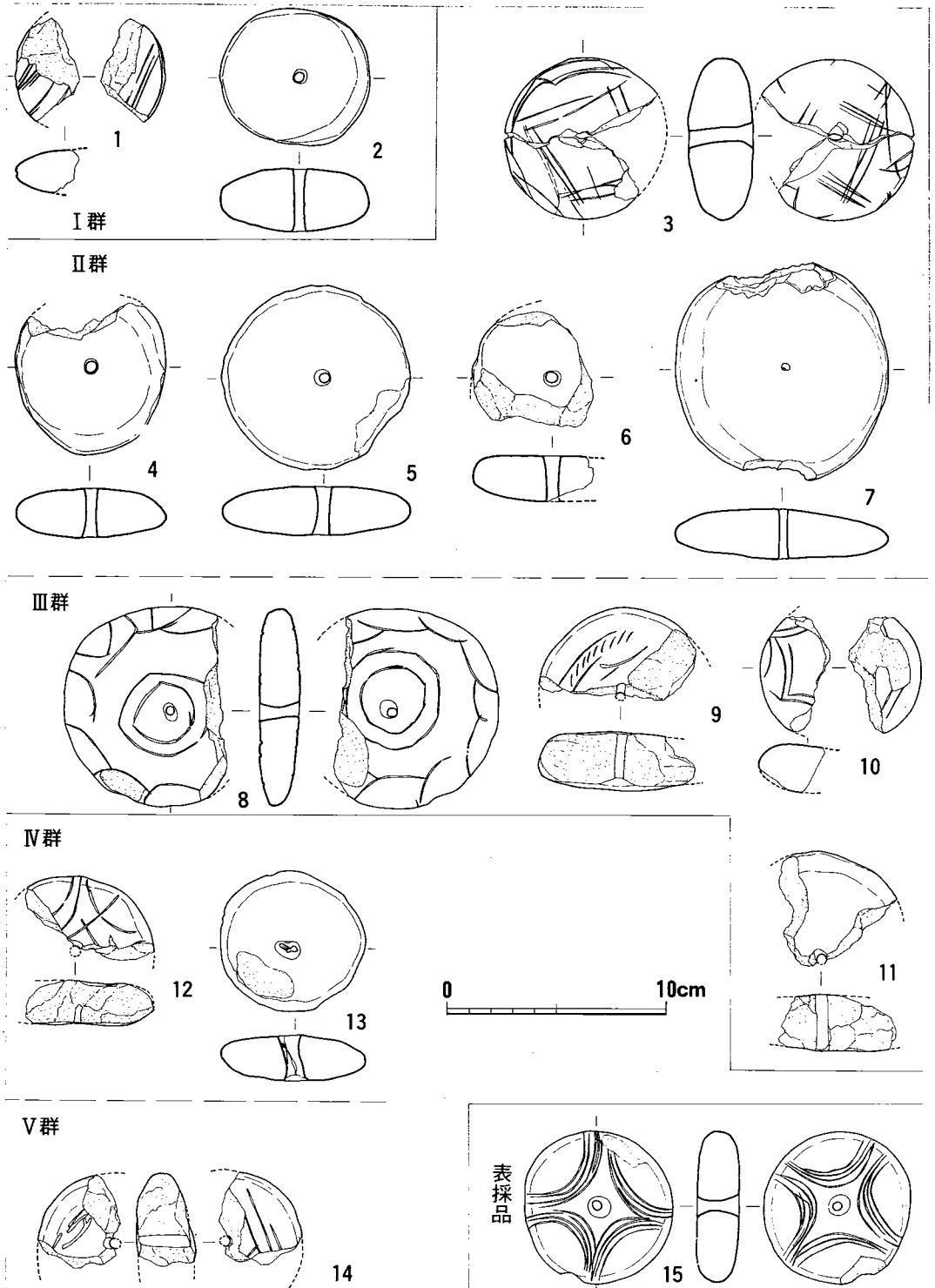
まひとつ明確さを欠くが、大きさ・文様等から、やはり三万田式期のものと判断したい。

以上の如く、縄文後期三万田期には既に九州北半の各所に紡錘車の出現がみられる。それらはいずれも土製品で、特殊な小型品と、径8cmを越える分厚い大型品とに分類され、当該期土器特有の文様を施すものもある。

次に縄文後期末～晩期前半における紡錘車をみてみよう。これは従来言われる御領式、大石Ⅰ・Ⅱ式を中心とした時期の資料である。

**法華原遺跡出土紡錘車** (第51図1) (福岡県浮羽郡吉井町) 金子文夫氏採集資料である。当遺跡からの縄文土器は、鐘ヶ崎式・西平式・御領式・滋賀里式系<sup>(20)</sup>のもの・晩期黒川式のものなどがあり、どの時期の土器に伴うか明確さを欠く。ただその中でも御領式系<sup>(20)</sup>のものと黒川式<sup>(20)</sup>のものがより目につき、いずれかと考えたが、径7cmと大型品であり、作りの粗雑さから、黒川期<sup>(20)</sup>のものではなく、縄文後期末～晩期初頭の所産と考えたい。重量103g。

**香田遺跡出土紡錘車** (第51図2・3) (佐賀県三養基郡中原町大字養原)<sup>(21)</sup> いずれも土製品で、大型で表裏に特異な凹線文を施したものと、無文のもの<sup>(21)</sup>とがある。3は148g。縄文後期末・晩期初頭～晩期中葉・夜臼式の各土器<sup>(21)</sup>が伴うが、少なくとも夜臼期<sup>(21)</sup>のものではなからう。やはり文様・大きさなどから後記する広田例と相通ずる、縄文後期末～晩期前葉頃のもの<sup>(21)</sup>と考えた



第 52 図 縄文後期末～晩期前半の紡錘車 2 (縮尺1/3)  
 広田遺跡出土品：共伴土器による分類

い。3の孔は、四箇例にみられた如き両面穿孔のものとは異なり、しっかりしている。

**権現塚遺跡出土紡錘車**（第51図4）（福岡県山門郡瀬高町大字坂田）縄文晩期前半代の土器を（22）中心に、三万田式・御領式・黒川式を少量含む大量の土器が出土した。晩期甕棺墓も調査されるなど、重要な遺跡である。1点の土製紡錘車は、復原直径9.9cm、厚さ2cmの大形品である。その形態や、土器等との関係から、縄文後期末～晩期前葉の時期のものと考えられる。側面や表・裏面はかなり精整である。他に土器底部片の中央に穿孔を試みたものが1点出土しているが、整形が粗雑で明確には判断し難い。

**古保山A遺跡出土紡錘車**（第51図5）（熊本県下益城郡松橋町）報告では「縄文晩期の黒川期」（23）の遺物が多く出土したとあり、その詳細は記されていない。図示されている「高坏の脚部」は到底黒川期のものとは考えられず、三万田期前後の所産であろう。紡錘車は径10.2cm、厚さ1.8cmの特大形品である。黒川式土器も多く出土しているのかも知れないが、少なくともこの紡錘車にかぎっては、大きさ・形態からみて三万田期前後のものではないかと考えておく。

**広田遺跡出土紡錘車**（第52図）（福岡県糸島郡二丈町大字吉井）すべて土製品の15個が出土した。（24）層位により土器群は5群に分類され、それぞれの群に伴う紡錘車を配列しなおして図示した。ただし、報告者も記す如く、各群が明確な土器の型式差を示す類ではなく、Ⅰ群はⅡ・Ⅲ群より古い様相を示し、Ⅳ・Ⅴ群はⅡ・Ⅲ群より新しい傾向をみせる程度ということらしい。共伴土器は、縄文後期末、晩期初～前半を主として中葉まで連続する。紡錘車はいずれも部厚い円板形であるが、細沈線による文様が特徴的である。Ⅰ→Ⅴ群への変遷をみると、径はⅡ・Ⅲ群で最大となり、それ以降小径化傾向をたどる。文様はⅠ・Ⅱ群では直線文であったものが、Ⅲ群以降内行連弧文がみられるようになる。15は表裏とも内行重弧文の好資料であるが、表採品のため時期が明確でなく残念で仕方がないが、おそらく文様・大きさなどからⅢ群以降の晩期前半の中に位置付けられるものと考えられる。9は両端を打ち欠き、土錘へと転用されたもの。13の中心孔内には、中心軸であった木質が残存する。

この広田出土紡錘車は、Ⅰ→Ⅴ群への土器の流れと共伴関係が一応明らかではあるが、各群の土器の方が型的重複・混在がかなり認められ、厳密な意味では時期差そのものが明確とはされない。これは紡錘車の時期区分について少々苦しい所ではある。しかし、先に述べたような大きさ・文様の変遷の大勢はまず妥当な線であると考ええる。それは、まず大きさの点からは、次の第53図に示す縄文晩期中葉以降の紡錘車が小径化していることは一目瞭然であり、これらに連続するものとして広田Ⅳ・Ⅴ群の紡錘車が継がるからである。文様の点からは、前時代（縄文後期末）ごろからの各々個性的な、或いは土器文様を反映した文様が出現して、広田Ⅱ・Ⅲ群に伴う紡錘車で、連弧文・同心円文等がかなり普遍化されたものと考えられる。そして次の晩期中葉以降に星形文（鋸歯文）が発生してゆくのである。更に、後に述べるように東関東地方縄文晩期前半～中葉に盛行する「有孔円板形土製品」との文様・大きさ等の類似点は

まさに驚くべきものがあり、殊に広田15などは、市原市西広貝塚例の文様と酷似する。

以上の他に、ここでは図示しなかったが次の資料も晩期初頭前後の時期のものと考えられる。**陣内遺跡出土紡錘車**（宮崎県高千穂町）報告書中に「有孔円板」として「円板状土製品に類似する資料で、その中央に小孔をもつものが数例出土している。—（中略）—晩期の紡錘車や弥生時代以降の紡錘車の如く精巧なものではなく、その小孔に均一性がなく、紡錘車としての用途を充分にはたし得ると思われない。」と記述されている。報告中には、図も写真もなく、筆者自身も現物を見ていないので何ともいえないが、可能性として、縄文後期末～晩期初頭に属する紡錘車としてとり上げ、詳細は後日の確認に譲りたい。

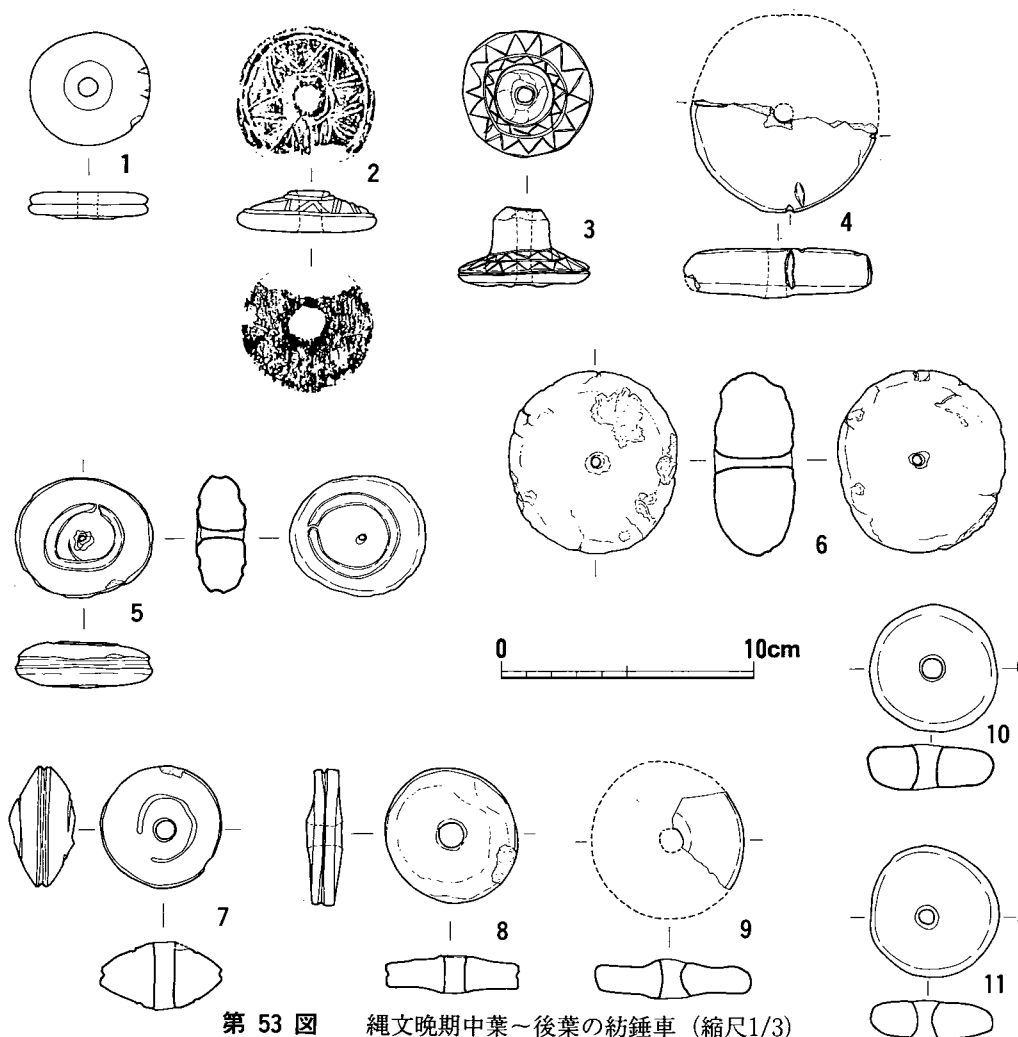
**三雲遺跡出土紡錘車**（福岡県糸島郡前原町）縄文後期西平式から晩期後半期まで連続する包含層があり、石橋地区・サキノノ地区Ⅰ-1区から土製紡錘車各1点いずれも小片が出土した。いずれも厚さ2.5cm前後と部厚く、直径は7cm前後の大形品となるタイプである。文様はない。断面形態や厚さ等から、広田遺跡出土品と共通し、本遺跡での晩期初頭前後の土器が目立つことから、これらは、縄文晩期初頭前後の所産と考えられる。

縄文晩期中葉から夜臼期以前までの紡錘車をみてみよう。土器型式で言うと従来黒川式と呼ばれたものを中心に、山の寺式期までのものを含む。即ち本書の橋口編年の縄文晩期Ⅴ・Ⅵの時期である。この時期まではすべて土製品である。

**嫁坂遺跡出土紡錘車**（第53図1）（熊本県宇土郡不知火町御領）古田一英採集品で、径5cm弱の土製品で、側面に深い沈線、片面の孔周囲を、わずかではあるが一段高くした類である。なお、本遺跡での同氏採集品の中に蓆目圧痕土器1片があることが、鏡山氏によって詳報されている。本遺跡採集の土器は、くの字状に屈折する頸部外面に蝶ネクタイ状の突起を貼り付けたものなどがみられ、年代的には、典型的黒川式より下る時期である。

**下乙遺跡出土紡錘車**（第53図2）（熊本県球磨郡免田町）昭和10年に坂本経堯氏が免田町一武小学校にて実測されたもので、どのような土器に伴うものか全く不明である。片面中心が中高となり、周縁に沿った二重沈線の内側に星形の二重線による鋸歯文が施されるという特異な好資料である。片面中央が高くなる点や文様構成などが、次に示す金龍開拓例や山の寺例などでもこの時期の特徴であることから、本例も縄文晩期中葉以降夜臼期以前の所産と判断できる。

**金龍開拓遺跡出土紡錘車**（第53図3）（佐賀市金龍）発掘調査を行なった遺跡からいくらか離れた場所での表採品である。調査時出土の土器は縄文後期末から黒川式期までのものがあり、本紡錘車の時期は明確ではないが、特異な形態・文様等から、やはり黒川式期の所産であろうと考えたい。片面中央がつまみ状に突出し、後の板付遺跡弧状溝出土紡錘車（板付Ⅰ式期）（第56図14・15）へとつながるタイプである。文様は片面のみに、二重に鋸歯文を巡らせたもので、前出の免田町下乙のものと同通するものである。重量46g。



第 53 図 縄文晩期中葉～後葉の紡錘車 (縮尺1/3)

1：不知火町嫁坂 2：免田町下乙 3：金龍開拓遺跡

4：藤附A遺跡 5.6：丸山遺跡 7～11：山の寺遺跡

<sup>とうつせ</sup>藤附A遺跡出土紡錘車 (第53図4) (佐賀市久保泉町大字川久保) 出土土器は、縄文後期末～  
 晩期初頭、黒川式、夜臼式の各時期のものにわたり、明確な時期を示し得ない。しかし、径は  
 やや大きくとも、断面形態が、縄文後期末～晩期前半の中心部にやや厚く周縁が丸っこいもの  
 とは異なり、上下両面が扁平にしっかりしており、側面も面取り状に面をなすことなどから、  
 黒川式期～夜臼式期前後と考えられる。側面の四方に短凹線を施し、片面一部にも凹短線がみ  
 られる。

丸山遺跡包含層出土紡錘車 (第53図5・6) (佐賀市久保泉町) 古墳群や夜臼期前後の支石墓  
 に切られて、縄文期の包含層があり、それらの土器は、三万田式若干<sup>(32)</sup> (土偶を含む)・晩期初  
 ～前葉・黒川式 (量としては最多) のものである。5は2号墳墳丘内混入品で、大きさ、形態

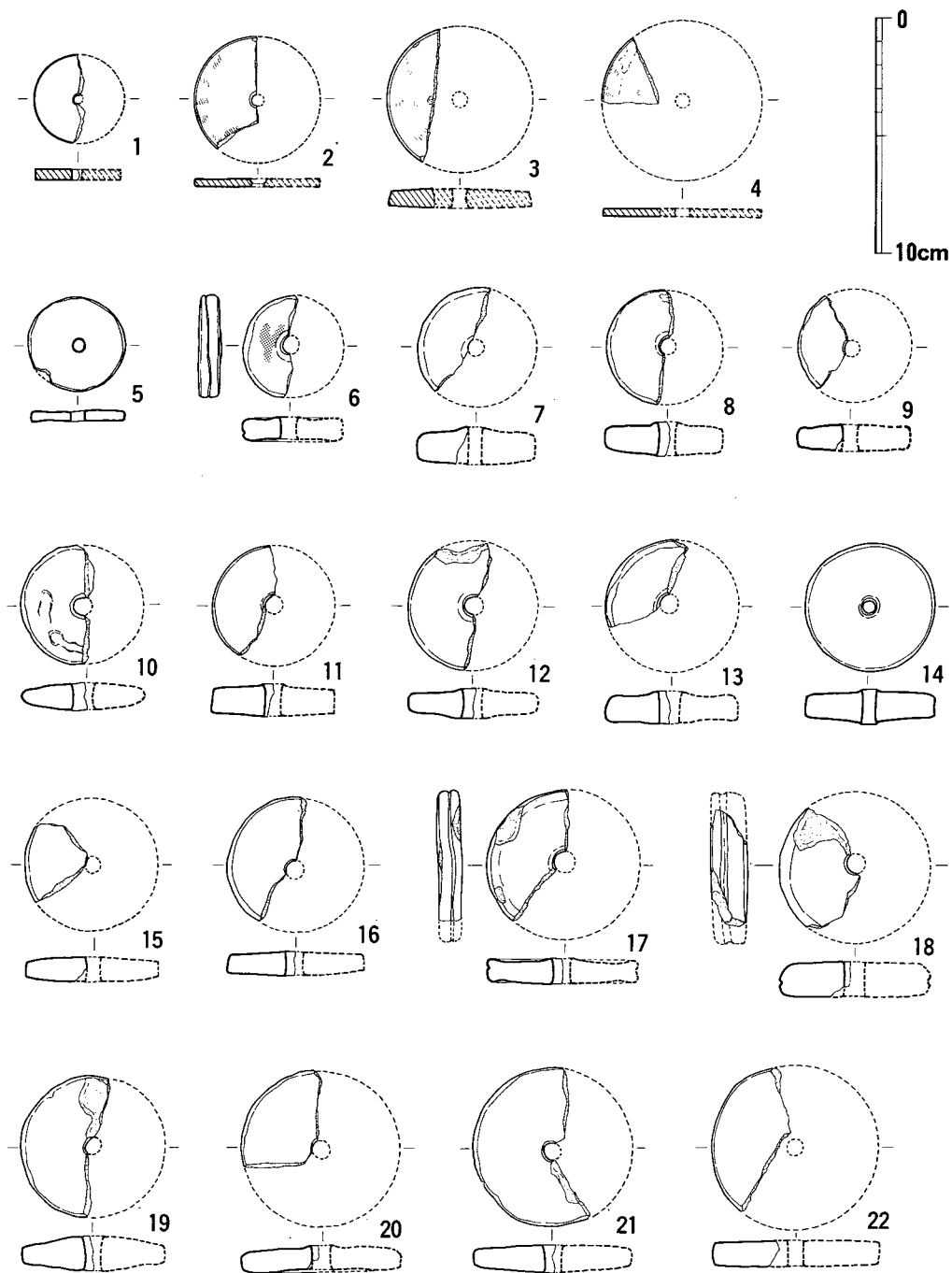
より黒川式期のものであろう。表裏両面に凹線が一周し、側面にも凹線が巡る。文様は後記の山の寺例と同類である。54g。6は2号墳周溝混入品で部厚く、雑な手捏ね状の作りで、重量も約180gとかなりある。5と同じく黒川式期のものでもよいのかもしれないが、3.2cmという部厚さや形態から、より縄文後期末～晩期前葉の所産とした方がよいと考えている。

**山の寺遺跡出土紡錘車**（第53図7～11）（長崎県南高来郡深江町梶木<sup>(33)</sup>）遺跡は山の寺式土器で有名な晩期遺跡であるが、ここでは数型式の土器群がみられるようであり、古田氏採集品のものでは明確な時期は求められない。7・8は日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会が昭和35年発掘調査したB地区より出土したものである。このB地区からは、黒川式のより新しい段階から曲り田期、夜臼式古期の段階のものまでを含むが、前者2期が主体をなす。そういう意味でも、7のような両ぶくらみ形態に沈線文を巡らせるという黒川式期の特徴を示すものから、8・9のような曲り田例（第54図6・17・18等）に特徴的なものまでみられる。7は50g。8は38g。尚、山の寺遺跡からは、古田コレクションの中に布目・蓆目・網目・籠目の各圧痕が見られ、鏡山氏により詳細が報告されている。更に上記昭和35年発掘調査によっても、布目・蓆目・網目の圧痕土器が発見され、7・8の土製紡錘車に伴うとされる。

以上の縄文晩期中葉～曲り田期以前までの紡錘車は、すべて土製であり、それ以前の大型品から明らかに小径化しており、特異な鋸歯文や、やや単純化した沈線文が特徴的である。形態面からは厚めの円板形も残るが、この時期にはじめてつまみ形のものが出現する。そして中央が片面ないし両面側にふくらみをみせるものもこの時期が初現である。更に側面に沈線を巡らすものも、広田例にも1例は在るが、この時期から盛行する特色といえよう。

次に曲り田期の紡錘車についてみてみよう。ここに設定した時期は、本書編年中で曲り田(古)式・(新)式としたものから夜臼式(板付I式と混在しない時期)までを示す。

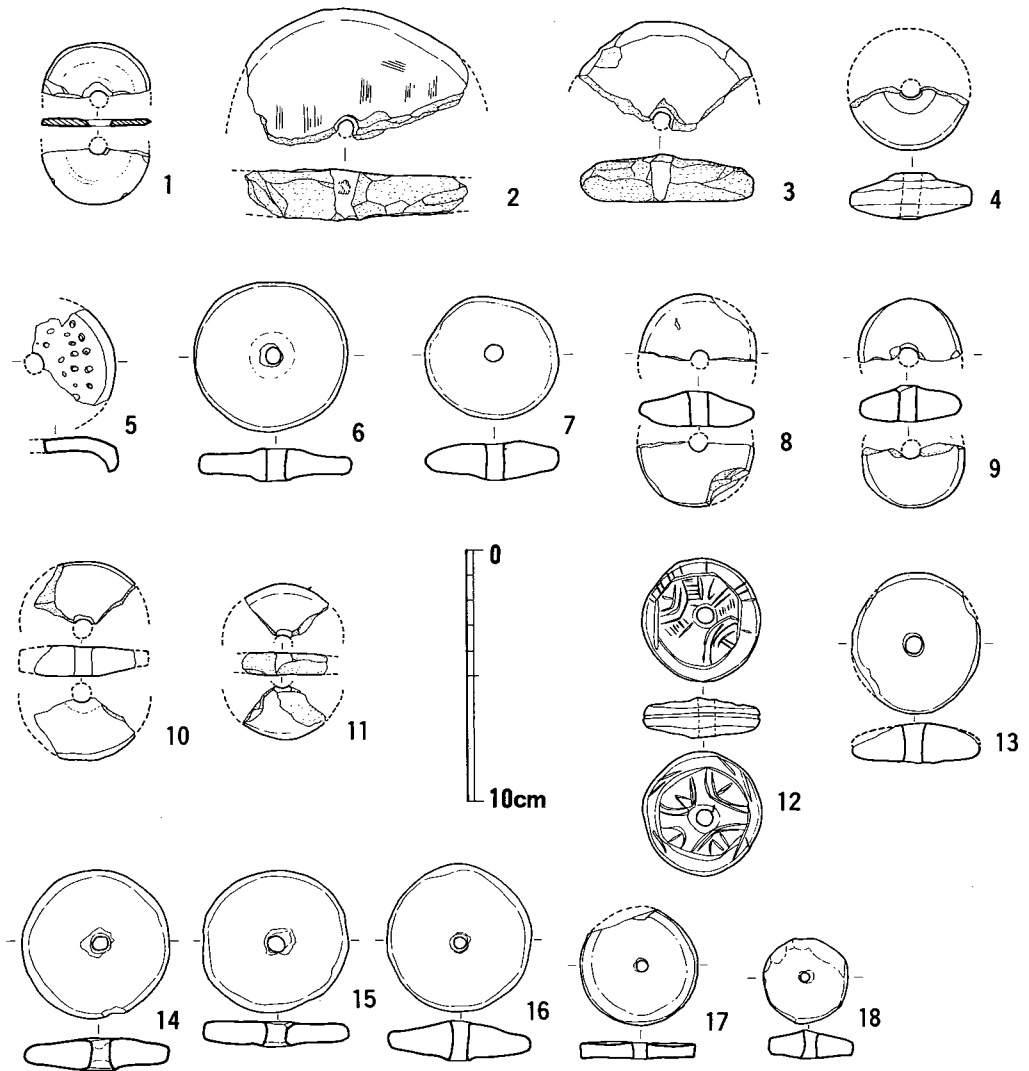
**曲り田遺跡出土紡錘車**（第54図1～22）（福岡県糸島郡二丈町石崎<sup>(34)</sup>）個々の詳細については、既刊のⅡ一中巻を参照して頂くとして、ここでは若干の分析のみに留める。1の小形円板状石製紡錘車のみは、黒色包含層（曲り田期～弥生後期・歴史時代）出土品で、時期を明確にできないので、一応除外して考える。1以外は曲り田(古)・(新)期の遺構・包含層に確実に伴う。うち石製3点がこの時期になって初めて出現する。いずれも扁平円板形である。土製品もすべて基本的には円板形である。そして大・小の区別がみられ、直径4.8～7.0cm（重量平均48.6g）の大きい類と、直径3.7～4.3cm（重量平均13g）の小さい類がある。しかしこの段階ではまだ大きい類の方が多い。形態は前時期のものとは比べ精整されており、側面もしっかりした面をなす。側面に沈線を巡らすもの（6・17・18）、丹塗りがみられるもの（6）、なども在る。中心孔周縁がごく僅かに突出するタイプもかなりみられ、この期以降弥生前期までに多くみられる特徴である。



第 54 図 曲り田・夜臼期の紡錘車 1 (縮尺1/3)

1~22: 曲り田遺跡 1~4 は石製





第55図 曲り田・夜白期の紡錘車 2 (縮尺1/3)

1~11: 菜畑遺跡 12・13: 柏崎大深田遺跡 14~18: 有田七田前遺跡  
1のみ石製

菜畑遺跡出土紡錘車 (第55図1~11) (佐賀県唐津市菜畑字松円寺) 報告書には縄文晩期のものとされる10点が示され、うち扁平円板型の石製品1個(1)の他は土製である。<sup>(35)</sup> 2のような特大型、3・6のような大型の他はかなりの小型品が多い。5は、特異な断面形態をなし、刺突文を施す。6~9のような中心孔周縁がわずかに突出するタイプは曲り田例と共通する。2の中心孔内面には木質が残存する。4は、第8層出土品で共伴土器から弥生前期とされるが、まさに嫁坂・下乙・山の寺例と同種の紡錘車であり、より古い時期のものが混入したものと考えられる。尚、本遺跡からは編布・平織布・網目・網代の圧痕土器が発見されている。

柏崎大深田遺跡出土紡錘車 (第55図12・13) (佐賀県唐津市柏崎) 12は、表裏に沈線文を施す<sup>(36)</sup>

好資料であるが、堆積層出土品で、土器は夜臼式がみられる。文様的にはより古い感じがするが、大きさ、形態等は、曲り田～夜臼期のものでありこの時期まで古い様相が残る類かもしれない。

**有田七田前遺跡出土紡錘車**（第55図14～18）（福岡市西区有田<sup>(37)</sup>）6点の土製紡錘車が出土しているが5点しか報告書には図示されない。相伴土器は、曲り田期と同様のものを多く含む。ここでも大小の別がみられ、小3点（径平均4cm、重量平均17.9g）大3点（径平均5.7cm、重量平均45.3g）の組み合わせとなる。形態は、中心孔周縁がごくわずかに肥厚するタイプで、他例と通有である。

以上のように曲り田期に入って、紡錘車は一大画期を呈す。即ち、石製扁平紡錘車の出現、大小種の区別が行なわれていること、基本的には表裏面の文様の消滅、それに伴って形態の精製化・画一化（中心孔周縁のわずかなふくらみ・側面の平面化等）が開始されている。換言すれば、前段階までの縄文的様相からの完全脱脚が認められるということである。

次に、夜臼式期(古)をも含めて、夜臼式(新)と板付I式と混在するような時期のものを抽出して分析を行ないたい。

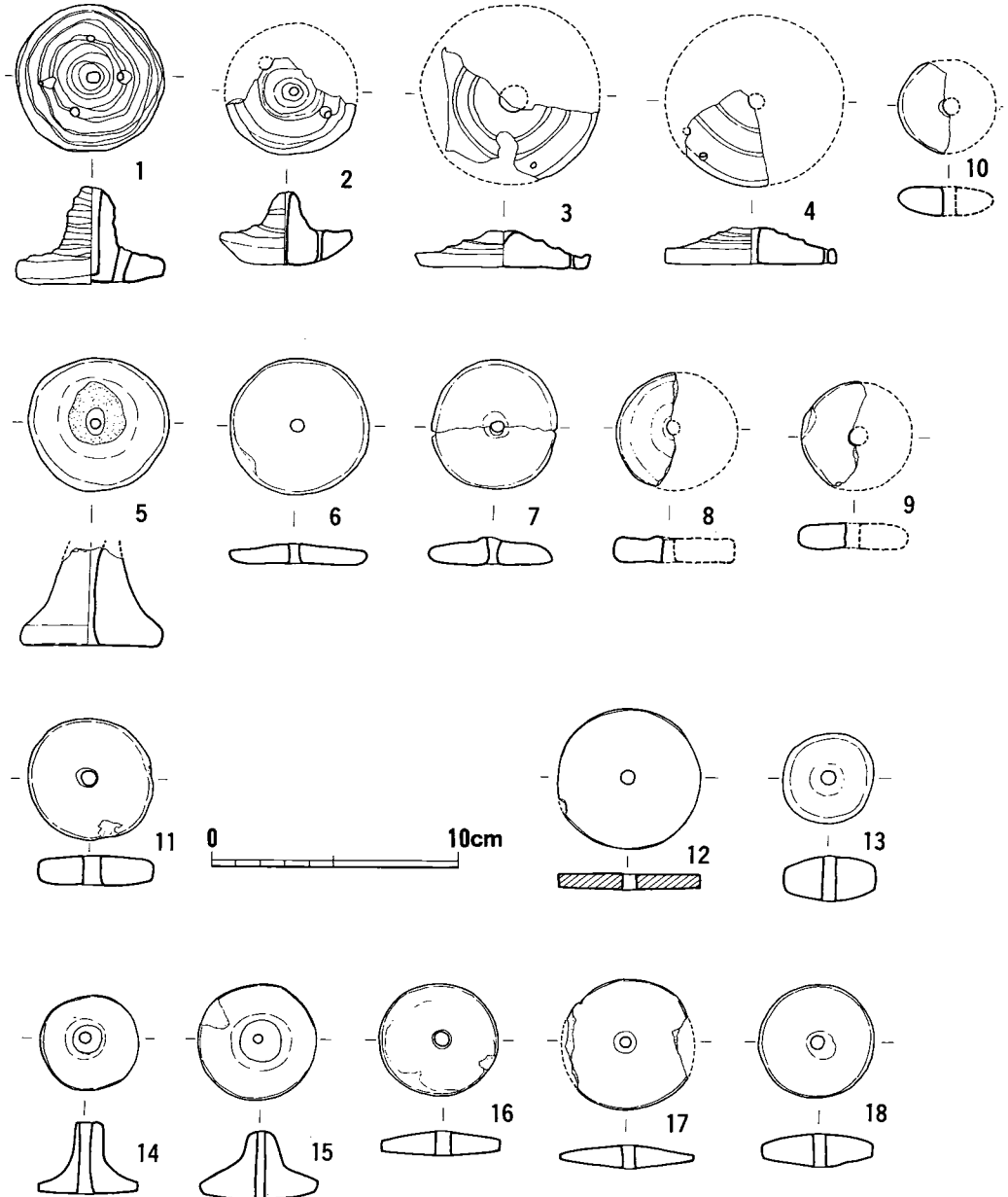
**板付遺跡E-5・6区出土紡錘車**（第56図1）（福岡市博多区板付<sup>(38)</sup>）「ボルト形の用途不明土製品」とされるもので、中心孔は貫通しておらず、円盤面に4小孔を穿っている。断面形態はつまみ形の紡錘車と同類であるが、貫通しない中心孔や、小孔等から全く別種の用途を考えねばならないという意見も強い。ここでは、とり敢えず紡錘車の可能性ありと考える筆者の独断により、ここにとり上げた。その理由は「問題点」の項で詳述したい。包含層の第7層出土品で、この層からは、夜臼式と板付I式が出土したが、量的には圧倒的に夜臼式土器が多い。

**十郎川遺跡出土紡錘車**（第56図2～10）（福岡市早良区<sup>(39)</sup>）都合9点すべて土製品で、形態的に3類に大別される。截頭円錐形に近い高いつまみ形の類（5）、上記板付E-5・6区例と同種と考えられる類（2）、更に3・4もこの亜類であろう。それと扁平円板タイプ5点があり、それも大・小類に分けられる。2～4は中心孔の他に小孔を穿つが、2は2孔、4は2個づつが対になるものらしい。3の中心孔は貫通しない可能性もかんがえられている。いずれにしろ特殊タイプであり、今後の問題を残す類であろう。相伴土器は夜臼式(古・新)～板付I式まであるが、大旨夜臼式段階と考えてよい。

**夜臼遺跡出土紡錘車**（第56図11）（福岡県粕屋郡新宮町<sup>(40)</sup>）径5cm・厚さ1.2cmで夜臼式・板付I式土器に伴うとされる。円板形で中心孔周縁のわずかな突出も、ふくらみもない。遺跡は夜臼式土器の標式遺跡であるが、紡錘車に関しても、大きさ・形態点でも曲り田～夜臼期の単純化した典型例としてとらえ得る。

**板付遺跡弧状溝区出土紡錘車**（第56図12～18）（福岡市博多区<sup>(41)</sup>）いずれも夜臼・板付I式土器

の層中よりの出土で、12のみ石製品である。土製紡錘車は、高いつまみ形のもの2点、中央がふくらむ円板形のもの3点。径は3.7cmと小さいが厚さ1.8cmと部厚い後出的感じのするタイプ1点がある。これらの出土した弧状溝は板付Ⅰ式土器の標式となったものであるが、紡錘車



第 56 図 夜白～板付Ⅰ式期の紡錘車 (縮尺1/3)

1: 板付遺跡 E-5・6区 2~10: 十郎川遺跡  
11: 夜白遺跡 12~18: 板付遺跡弧状溝 12のみ石製

に関してもこの期（夜臼～板付Ⅰ式）の特徴を如実に示している。即ち、この期特有のつまみ形のもの、中ぶくらの円板形のもの、それに石製紡錘車の共存である。つまみ形紡錘車はこの時期以降消滅してしまう特異な類である。ただ、夜臼系土器群を継承する北九州以外の周辺地域では、若干変形して板付Ⅱ式段階まで残像的に残る場合がある。

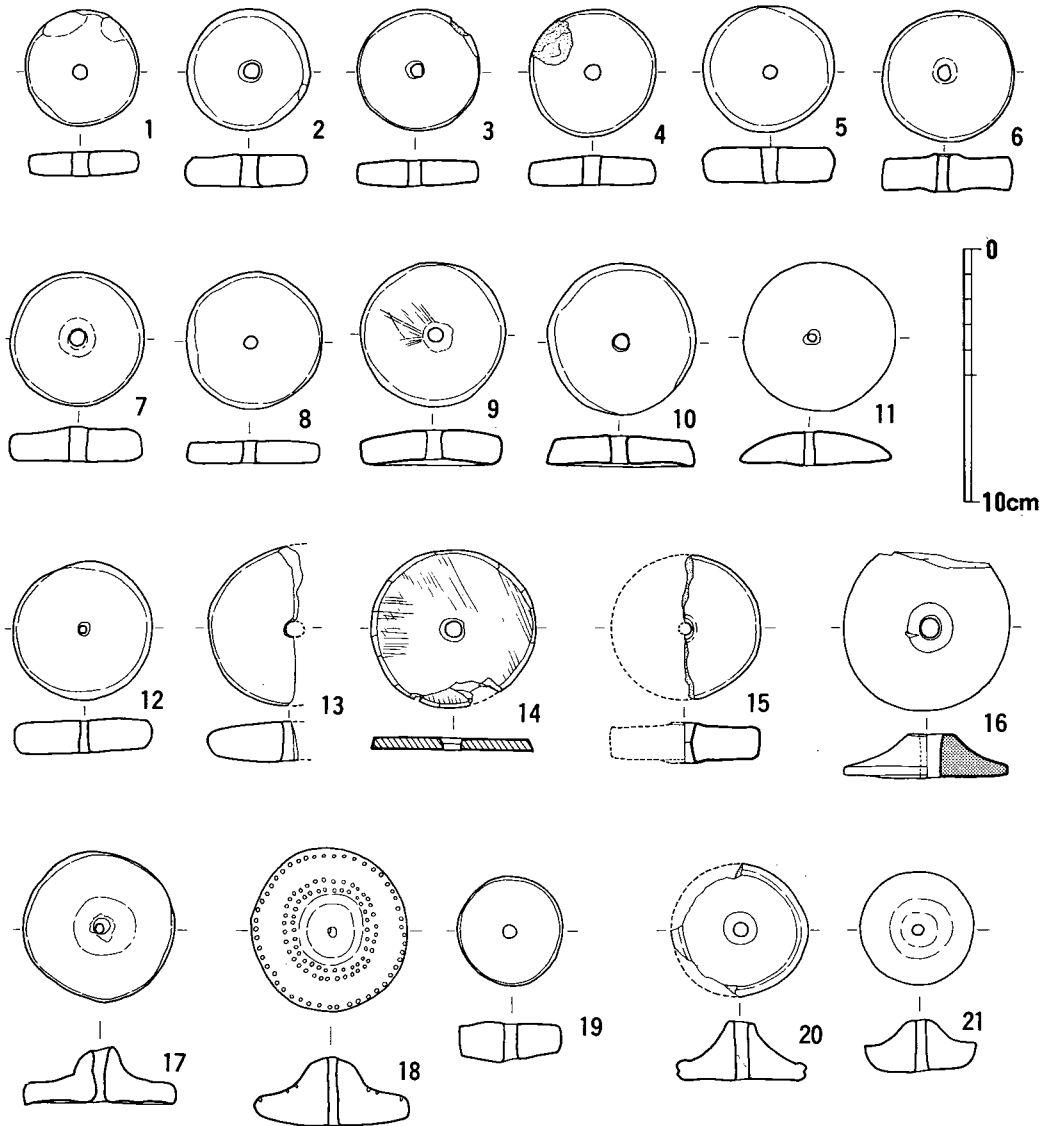
**今川遺跡出土紡錘車**（第57図1～14）（福岡県宗像郡津屋崎町）頁岩製1点（14）と、他は円板状土製品である。直径4.6～6.3cm、重量平均45gとなり、<sup>(42)</sup>図上ではほぼ同大と写るが、13の大型品を除いても、重量でゆくと、21.5～34gの小類と、42～51gの大類に分けられる。断面の片面のみが弧状をなす、所謂饅頭形に近い形態の11は、報告者も指摘する如く、後に記すように朝鮮半島例に散見するタイプと共通点を見出せる。更にこの11は、中心孔が本遺跡出土他例と異なり、細くて、この中では異趣である。共伴土器は、夜臼式（新）～板付Ⅰ式を主体とするが、若干時期の下降するものもあるらしい。孰れにしろ、紡錘車に関しては曲り田例よりも古式の様相は消滅しているが、大きさ・重量からみて、曲り田の中型クラスの範囲に収まる一群である。以上のことから本今川例は夜臼（新）～板付Ⅰ式期の古相を残さないグループの典型的な好資料と言えよう。

**松木遺跡出土紡錘車**（第57図15）（福岡県筑紫郡那珂川町）土製1点<sup>(43)</sup>が出土している。直径5.7cm、厚さ1.6cmを測る円板形である。出土した溝4は、夜臼式甕片・板付Ⅱ式土器があるが、形態・大きさ等からみて、夜臼期のものと判断したい。曲り田例等に多くみられる中心孔周縁のみがわずかに突出する類で、曲り田～夜臼式期の典型的タイプの一つである。

**原深町遺跡出土木製紡錘車**（第57図16）（福岡市西区）夜臼式から弥生、更に古墳時代の土器を含む大溝から出土しており、厳密に時期を確定出来ないが、その形状から夜臼式～弥生前期のものと考えられる。ムクノキ製で径6.6cm、厚さ1.7cmで美しく加工されている。片面中央が隆起した笠形に近いつまみ形の一種である。土製品の形態がそのまま写されたものであろう。

さて、以下は、従来夜臼式ないし、夜臼式・板付Ⅰ式共伴の時期とされている、九州のうちでも周辺地域の夜臼系土器群に伴なう紡錘車を掲げる。敢えてこういう設定を行なったのは、近年筆者も含めて、夜臼式土器の周辺地域への波及（勿論他文化内容も含めての意）が進んでも、直後の純粋な板付Ⅰ式そのものの波及が板付Ⅱ式（古）段階と一緒に及んでいるという見解が存在するからである。博多湾沿岸部・唐津湾沿岸部を除けば、他地域の殆どどの夜臼系土器はその部類と考えられる。より遠隔地に行けば更にその感を強くする。以上の理由からも、以下の資料は、共伴土器の編年的位置付けに今後のもう一步の詰めが必要な類であることを付記しておきたい。

**丸山107号壺棺供献紡錘車**（第57図17）（佐賀市久保泉町）この壺棺自体は、<sup>(32)</sup>撐石は失われている



第 57 図 夜臼～弥生前期各地の紡錘車 (縮尺1/3)

1～14：今川遺跡 15：松木遺跡 16：原深町遺跡 17：丸山107号壺棺供献品  
18・19：江津湖苗代津遺跡 20・21：高橋貝塚 (14は石製, 16は木製)

たが支石が残っており、支石墓と考えてよいもので、土製紡錘車は棺外に供献されたものである。下棺の壺は夜臼式的様相は残すが、板付Ⅰ式併行期と考えられるタイプである。紡錘車は、直径6cmのつまみ形の特異な類である。板付弧状溝例のつまみ形の系列に位置付けられよう。また、暗黄褐色の色調といい、器表面の雑なミガキの手法といい、弥生前期壺の通有の手法と酷似しており、上述の年代観を裏付けするところであろう。

江津湖苗代津遺跡出土紡錘車 (第57図18・19) (熊本市健軍町) 報告によると「夜臼一板付式」  
(44)

土器と共伴したものとみられる」とある。2点とも土製である。18は、板付弧状溝例のつまみ形のものの系統とみられるが、つまみ部はぼってりと乳房状で、直径6.4cmと大きい。三重の「刺突連点圈文」をめぐらし、重量74.8gと重く、いかにも古相を呈する。19は、厚手の円板形の類である。殊に18は文様の点も含めて、いかにも前時代的であり、周辺地域での残像現象を良く示している。

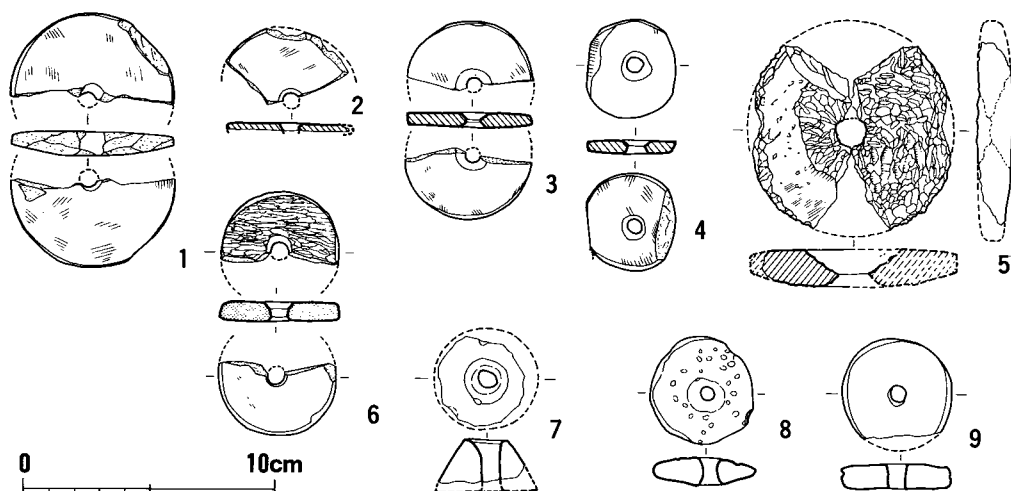
**高橋貝塚出土紡錘車**（第57図20・21）（鹿児島県日置郡金峰町）本貝塚からは土製のもののみ12点出土しているがここではつまみ形の2点のみを掲げた。<sup>(45)</sup>20・21は板付弧状溝例の系統に位置付けられるが、20の側面には沈線を巡らせ曲り田期の特徴を残し、21の断面形態も「舟型をなす」如き異類である。河口氏によれば「攪乱層の出土であるが、高橋Ⅰ式に伴うものと考えられる」とされる。図示しなかった10点はいずれも土製円板形で、径3cm前後のもの5点と、5cm弱のもの5点に分類される。これらは高橋Ⅰ・Ⅱ式に伴うものとされ、小類はやはり高橋Ⅱ式以降に伴うもので、大類が高橋Ⅰ式・Ⅱ式に伴うと考えた方がよかろう。大類の中には中心孔周縁のみがわずかに突出する夜臼期前後特有なタイプもみられ、他に厚さ1.7cmと部厚いものもある。

以上の夜臼期以降の周辺地域における紡錘車の様相は、資料数に恵まれず、今一つ細かい流れが追えない所がある。しかし、大勢としては、土器そのものが夜臼の様相の中で把えられる事を反映して、板付Ⅰ～Ⅱ式併行期と考えられるものにも古相を残していることは確実であり、特異形態のつまみ形のものも各々の地域において独特の変化をみせている。更に、今のところ石製紡錘車の出土を見ないのは、これらの後進性を裏付けるものとなるのだろうか。

次に、弥生前期の紡錘車についてみてみよう。この時期特に板付Ⅱ式以降になると、調査遺跡数も急激に増加し、弥生前期末前後までその傾向がみられ、紡錘車の資料も多くなる。その殆んどが石製扁平円板形と、土製円板形の前時代より更に小径化したタイプである。よってここでは総てをとり上げるのは意味が無いので、代表例と、若干の異類例のみを掲げた。

**菜畑遺跡出土紡錘車**（第58図1～6）（唐津市菜畑字松円寺）先に曲り田期の紡錘車として資料を掲げたので、比較の意味で、弥生前期のものをもとり上げた。<sup>(35)</sup>板付Ⅰ式土器共伴のものがかなり在るので、他の板付Ⅱ式以降の例とかなり異なる。土製1点（1）は径が6.5cmとかなり大きく、2～5の石製品の量的卓越が気になる。5は滑石製特大形で、異様である。6は骨製品である。

**板付1区第70号竪穴出土紡錘車**（第58図7）（福岡市博多区）土製で截頭円錐形をなす。遺構は円形袋状竪穴で、共伴土器は弥生前期中葉のものである。<sup>(46)</sup>これまでの時期の中で完全な截頭円錐形のものが見出されず、単純に半島からの系列とも速断にすぎ、今後注意しておかねばならぬ特異タイプである。



第58図 弥生前期の紡錘車（縮尺1/3）

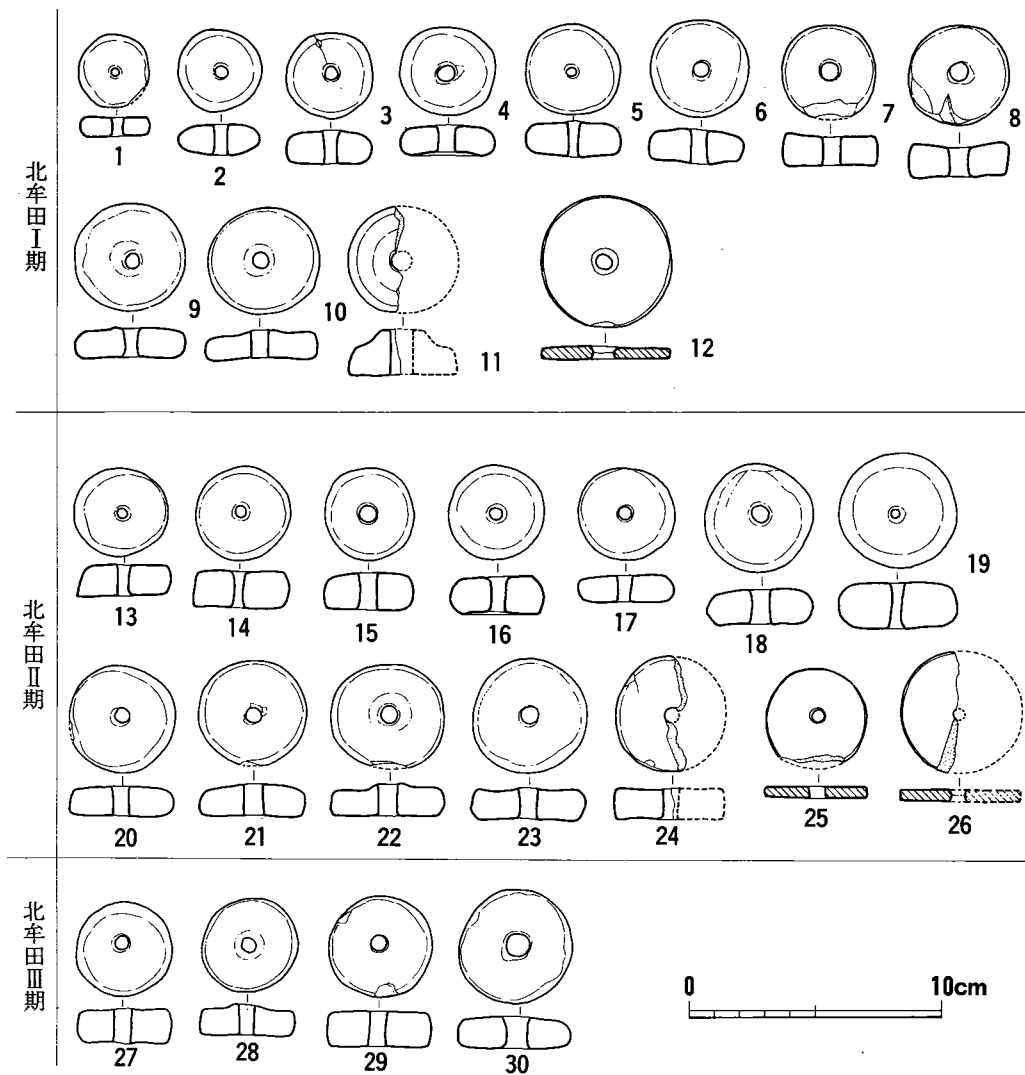
1～6：菜畑遺跡 7：板付1区第70号竪穴 8：辻田遺跡  
9：板付1区第68号竪穴（2～5は石製，6は骨製，他はすべて土製）

つじはたけ

**辻田遺跡包含層出土紡錘車**（第58図8）（福岡県春日市上白水）辻田遺跡からは弥生前期後半を主体として一部中期初頭までの袋状竪穴・住居跡が多数発見され、紡錘車も27個出土している。<sup>(47)</sup>うち上記時期の遺構に伴うものは18個あり、1点のみ石製で他は土製品である。これら土製品の直径は3.4～5.2cm（平均4.3cm）、厚さは0.8～1.6cm（平均1.2cm）で、形態は円板形である。これらは敢えて図示しない。以上の他に弥生前期～終末期までの包含層から出土したものが9個あるが、各々時期の決定はなし得ない。その中で、図示した8は、片面のみに刺突文が不規則に施されており、断面形も中央がふくらみ、側面は面をなさず、同遺跡の他例に比べて全く異種である。時期はやはり弥生前期と考えるべき。このような前時代的なものが極めてまれに残ることもあるという一例となろう。

**板付1区第68号竪穴出土紡錘車**（第58図9）（福岡市博多区）袋状竪穴の板付Ⅰ～Ⅱ式土器に共伴する土製紡錘車である。<sup>(46)</sup>形態はこの期には何の変哲もない円板形であるが、側面に沈線を巡らせているものである。この時期にまで、曲り田～夜臼期の特徴の一つである側面の沈線施文が残る稀例である。

**北牟田遺跡出土紡錘車**（第59図）（福岡県小郡市大字三沢）弥生時代前期末～中期前葉における一大集落が明らかになった北牟田遺跡においては、土製紡錘車44点、石製紡錘車（未製品を除いて）4点が出土した。<sup>(48)</sup>ここでは、報告者のⅠ（前期末）・Ⅱ（中期初頭）・Ⅲ（中期前葉）期の時期分類に従って配列図示してみた。北牟田Ⅰ期の紡錘車は、径3cm前後の小型品と、4cmを越える大型品との分化が明らかである。基本的には円板形であるが、11のような片面中央が突出したものもある。このタイプは、板付弧状溝例にみられるつまみ形紡錘車の、最終的残像現象と考えられる。他に石製の扁平円板形も1点みられる。北牟田Ⅱ期では、すべて円板形で、直径3.5～4.5cmと大小はあるが両者間にそれ程の断絶は無い。北牟田Ⅲ期は、



第 59 図 弥生前期末～中期前半の紡錘車 (縮尺1/3)  
 (北牟田遺跡における変遷) (12・25・26は石製)

数が少ないが、直径3.8～4.5cmのもので土製円板形である。以上の前期末～中期前葉の時期の流れに対して、紡錘車の変化は殆どみられない。北牟田Ⅰ期において古い様相がわずかに残る程度である。

既述の辻田遺跡紡錘車群と比べると、辻田例が時期的にやや古い弥生前期後葉を中心とした例であるため、北牟田例よりもいくらか大型のものが多くて、この両者の差はみられるが、北牟田の特にⅡ期以降(中期初頭以降)においては殆ど差がなくなってしまう。

以上のように、縄文後期末から曲り田期以前まで変化しながら多様性をみせてきた紡錘車は、曲り田期においてはじめて、石製品が導入され、規格性が表われる。それ以後弥生前期いっば



いの間は、異種例（つまみ形のもの）の一時的出現と急激な消滅や、小径化をたどり、また規格性に伴う単純化が進んだのである。前期末以降弥生時代いっぱい、紡錘車においては殆ど変化をみせず、僅かの石製扁平円板形と土製円板形がすべてと言っても過言ではない。

古墳時代以降については、詳細はここではとり上げる余裕はない。概略のみを述べておこう。古墳時代初期においては土師質土製品が残り、5 C代には須恵質の厚手の側面に稜をつくる類、更に滑石を主とする石製の断面台形状をなす類が細線文様を施されて群集墳盛行期まで、多く行なわれる。奈良期までは土製・石製の厚手円板形が広く行なわれる。これらの弥生時代以降の流れについては、機会を改めて、分析を行ないたいと考えている。

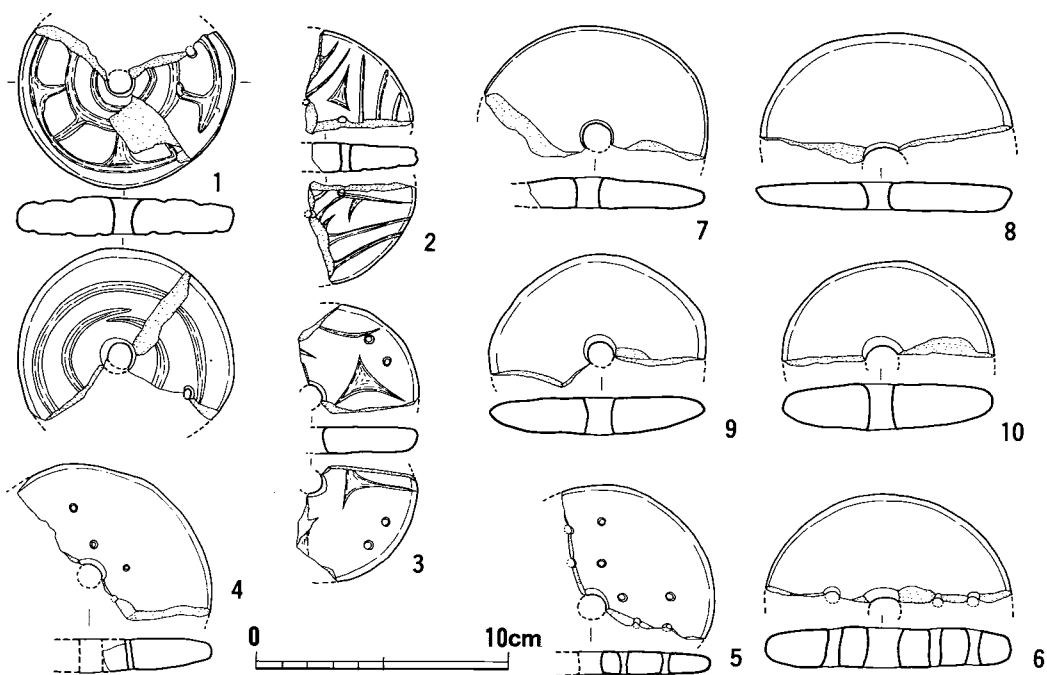
## 関東地方の縄文時代紡錘車

これまで九州における縄文時代後期から弥生時代前期までの紡錘車の流れを追ってきたが、ここでは九州の縄文時代紡錘車と関連して特徴的な一群をとりあげて若干の問題を提示したいと思う。

東関東地方の縄文晩期に「有孔円板形土製品」なるものが分布している。東京・千葉・埼玉・群馬・栃木・茨城各県にみられるが、特に千葉県北半においての集中が目立つようである。まず、以下に例を図示してみよう。

**貝の花貝塚出土紡錘車**（第60図）（千葉県松戸市八カ崎字栗カ沢）<sup>(49)</sup> 総数43点が報告図示されており、そのうちの一部である10点のみを転載した。即ち有文のもの・無文のもの、中心孔以外の小孔の有るもの・無いもの等である。報告中での岩崎氏の分類が在るので、詳細は譲りたい。有文のものは、ここに図示した3例のみで、他はすべて無文である。文様は表裏ともに施され、うち1は同心円凹線文を基本とする。2・3は「彫刻的三叉文」を間隙に施している。無文のものも有文のものと形態・大きさなどに差はみられず、円板形である。小孔は2個ずつ対になって施されるものが目立つ。無文のもの径は10.4～6.3cmで8.5cm位のもが多く、厚さは1.5cm程度が多い。この大きさは、九州縄文時代特大型紡錘車と同じかやや大きめである。これら貝の花例の時期は、縄文晩期中葉～後葉の間とされる。

**西広貝塚出土紡錘車**（第61図）（千葉県市原市西広字上の原）<sup>(50)</sup> 総数61個体分が出土しており、有文・無文・小孔の有無等各種ある。ここでは一部分の12点のみ転載してみた。有文のものは、同心円文のもの、内行連重弧文のもが多く、5のように彫刻的三叉文を施すものもある。直線文を施すものも若干ある。有文のものは16点で他は無文である。小孔を有するものは、2個が対になるものが多いようである。無孔のものも全体の半数以上を占める。12のような、径5.2cm、厚さ2.0cmの小ぶり部厚いタイプもみられるが、他は殆ど特大型で、直径12.6～6.

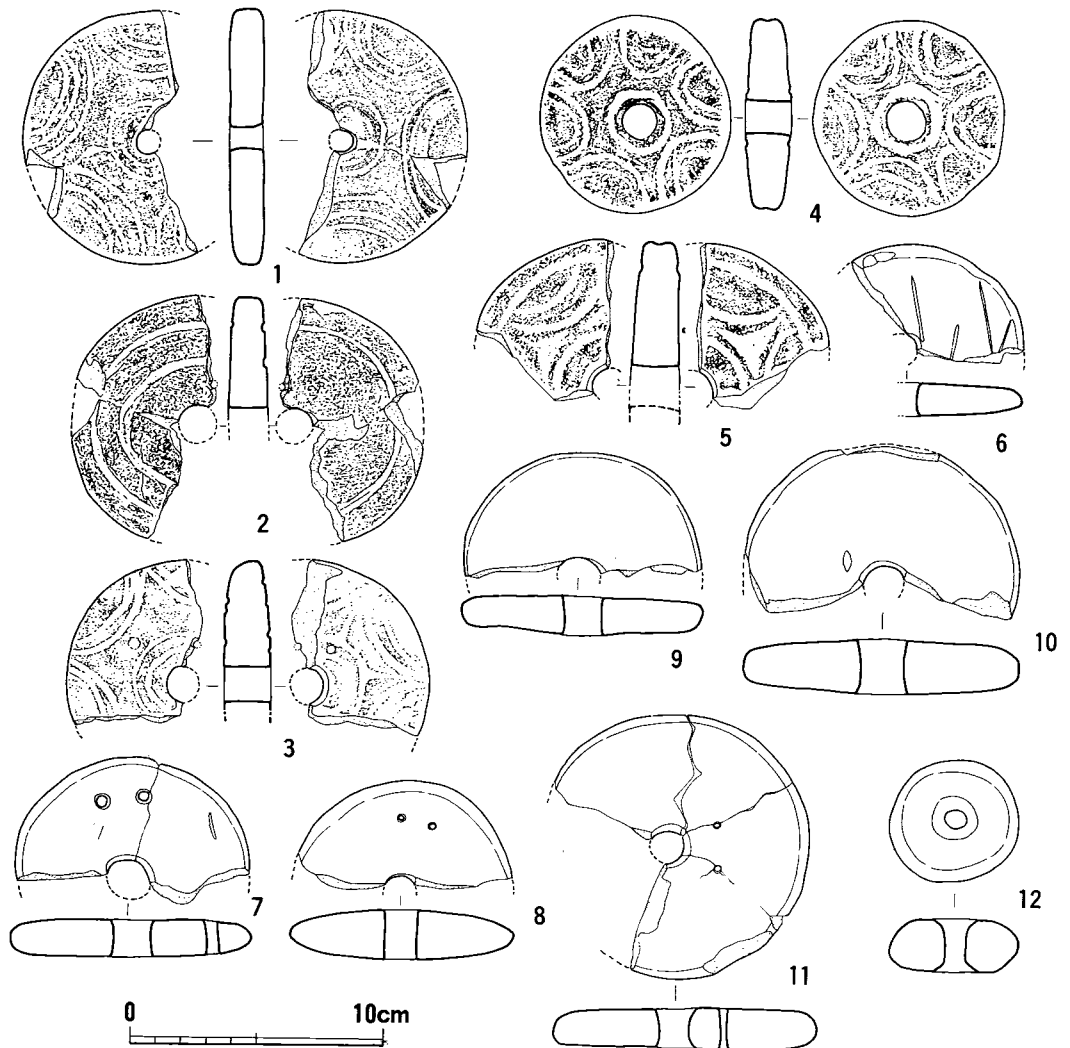


第 60 図 貝の花貝塚出土紡錘車 (縮尺1/3)

4cmとなる。これらの時期は、前浦式土器を主体とする包含層より61個のうち49個が出土しており、縄文晩期前半～中葉、ことに晩期中葉を主体とするものらしい。尚、有文のものは、九州広田例（第52図）に酷似することを付言しておく。

以上の2遺跡例のみならず、鷹野氏によると25遺跡より出土しているとのことである。著名な大森貝塚からも出土している。これらの関東地域研究者の呼ぶ「有孔円板形土製品」について、若干私見を述べたい。まず、これらはすべて土製紡錘車そのものであるということ。理由は、以下に列挙する。

1. 現在までの各用途説に対して消去法的にみてゆきたい。まず、鷹野氏も何となく先の報告中で気を持っておられる「土版説」に対しては、土版そのものの文様の密度・彫刻的手法の卓越さ、土版では上部に両目を意匠したものなど土偶との関連が密接であること、土版も関東では晩期初頭以後に盛行することが指摘される。更に、土版は穿孔するものの殆んどは端部近くのみ1～2孔を穿つだけであり、秋田県横手市塚堀半谷地出土例の如き中心孔を有するものも稀にあるが完全な楕円形であり、回転を意識する正円形のものはないこと。更に、文様の点で土版では、中心点を意識した対称配置的な構成は殆んど無い。両者が完全な同時、同地域共存でなく僅かな差異があるのだと仮定したとしても、それらを結ぶ中間的なものがあってしかるべきであること。更に、有文・無文の間に、形態的に差異が認められず、無文のものが果し



第 61 図 西広貝塚出土紡錘車 (縮尺1/3)

て土版的呪術性を考え得るものかどうかという点。以上の理由により土版説は廃する。

2. 「蓋説」に対しては、片側に2孔ずつ対になる例があるのを見たり、壺・注口土器の口径が小さいものとあたかも合致するかの如く思わないでもないが、これら土器は通常精製の薄手の磨研土器であり、その本体に対して、「有孔円板形土製品」はいかにも粗製であり、全くつり合わない。また中央寄りにある小孔の解釈はどうするかとの問題もある。すべてに中心孔がある点も更に想像をたくましくせねばならない問題点である。以上により「蓋説」も除外する。

3. 「土錘説」は、同時に石・土製の別種品が各所に在るのに、わざわざ緊縛の困難な円板形の形態を必要としたのも解せない。破損品が生活の場に近い位置から多く出土することも理解

できない。何故なら、実際の各々の作業場で破損するのであろうから、その場で廃棄せられると考える方が常識的ではないだろうか。文様の有るものの存在も、この土鍾説に対しては十分な説明を付し得ない。

4. 次にこの種土製品を積極的に「紡錘車」として支持してみよう。まず、何よりも形態が酷似すること。そして、鷹野氏が指摘するように、この種土製品は、下沼部貝塚・広畑遺跡などに、後期末にすでに存在すること。そしてこの時期のものがやや小形（直径7cm前後）であり、晩期前半～中葉に至って盛行し、特大型となる。そして、晩期終末の大洞A・A式に伴う例（荒海貝塚）まで在るという経過をみると、九州における縄文時代紡錘車の様相と完全に一致することがわかる。そして九州の状況では、それらが連綿と継続変化してゆき、曲り田・夜臼期の誰もが認める紡錘車へと系統付けられるという事実を認識すれば、この時期の日本全体の把握の中で、関東のこの種も容易に紡錘車と判断できる筈である。関東をフィールドとしない筆者にとっては、彼地の研究者がどうして、この時期以後から弥生文化におけるまでの紡錘車を綿密に追いかけてやらないのか不思議でたまらない。必ずや両者が何処かで継がるものと信ずる。もしその間に断絶が認められたとしても、おそらくそれは、弥生文化の波及の段階での一大画期なのであって、当初から否定してかかる類ではなかろう。小孔の存在も、九州例にも稀れに存在しており、軸棒への緊縛という実用的な考えとともに、文様の効果のねらいがあると考えてよかろう。岩崎氏は破損品の多さを何かに結びつけたような書き方をされるが、明らかに紡錘車である九州の曲り田・業畑例をみると、同様に破損率の高さに気付くであろう。九州例のこれらはおそらく、一大画期をむかえた頭初期の段階での使用する際の非合理的な不慣れによるものと考えられる。同様な現象として関東の初期紡錘車においても考えられないだろうか。

重量の点に関しては、鷹野氏が指摘する如く、民俗例にも重いものがあり、筆者も全く気にしていない。

以上の事由により、東関東地方縄文晩期に盛行する「有孔円板形土製品」は土製紡錘車そのものであると判断する。尚、これだけで問題は収まらない。更に九州例との具体的な関係は、特にその両者を結ぶ間の資料の分析が必要である。その前程として、両地域を含めて西・東日本の縄文後晩期の年代基準となる土器編年作業上で年代的な組み合わせを今後確実にしてゆかねばならない。今後の努力目標としたい。

尚、関東地方においては、古墳時代前期にまで、土製有文のものが残るが、これは、北海道擦土器文化のものと類似するものであり、これら両者は、密接な関係が考えられるところである。今回は詳論しないが、北方的文化様相のひとつとして、今後系統を追わねばならぬ類であろう。

## 北海道の紡錘車

北海道東北地域を中心に、断面台形・円板形の殊に特異な有文の紡錘車が発見されていたことは、かなり知られていた。そして、八幡一郎氏も「北海道の紡錘車について」<sup>(51)</sup>の論文の中で分析・詳論されている。ここでは、問題としている九州稲作発生期前後の紡錘車と時期的・地域的に遠いことや、細かい資料を揃えていないことで、以下簡単に概略と問題点を指摘しておくに留めたい。

北海道の紡錘車の特徴は、土製で円板形のもの、断面が本州以南の古墳時代例に通有な断面台形をなすもの（それ程厚くないものが多い）、厚手の円板形（厳密に言えばわずかに断面台形）のものに分類される。文様を有するものと素文のものがある。文様は、刺突による同心円文と放射状文の組み合わせが多く、沈線による放射状文もまれにある。これらは、常呂郡常呂町における各遺跡出土例が著名である。他地域からもかなりみられる。北海道例の確実なものは殆んど擦文土器に伴う時期である。常呂町栄浦第1遺跡第2号竪穴住居跡のC14測定値は340±110A.D.が得られ、同第2遺跡第1号竪穴住居跡のC14の測定値は880±80A.D.となる。

オホーツク文化のモヨロ貝塚出土の骨・石製の有孔円盤の中に、同心円文や鋸歯文が施されるものがある。これらは扁平形で文様構成も擦文土器文化の紡錘車と趣きが異なる。これらをもって、千島アイヌの土俗例としての装身具（クックルケシ）と同様の使用法と考える研究者も多いと聞く。

以上の北海道擦文土器期の紡錘車と、モヨロ等のオホーツク文化の「有孔円盤」は、文様等からみて、やはり、系統としては、沿海州・バイカル地方等をめぐる大陸の様相の、北からのルートを通じての伝播と考えてよからう。また、それらは八幡氏も示唆される如く、いずれも紡錘車そのものであろう。モヨロ例と同類「有孔円盤」を副葬していた船泊の女子の墓の例は、通常女子墓副葬品に紡錘車が伴うことからみて、これらオホーツク文化系統の「有孔円盤」は紡錘車と考えた方がよさそうである。更に、土俗例垂飾品のクックルケシは、本来紡錘車であったものを、糸・織布等を先進地域住民との接触による入手が容易になった段階で、装飾品としたものが残ったという、いわゆる文化変容の問題として把握できないものだろうか。諸賢の御意見をうかがいたい所である。

## 4) 朝鮮半島の原始紡錘車

これまで日本の稲作農耕発生期前後の紡錘車について、代表的資料を掲げて分析を加えたが、

ここでは、朝鮮半島に目を向けることにする。言うまでもなく、日本とは一衣帯水の地であり、考古学的にも縄文期の古い頃からの交流が確かめられている訳であり、紡錘車に限らず稲作農耕発生期前後の各種の文化要素についても、彼地との詳細な比較検討が必須条件である。という訳で、とり敢えず朝鮮半島の紡錘車を概観して、文化的つながりを探ってみることにする。

ここでは、紡錘車のうち、半島での鉄器出現以前の、所謂櫛目文土器文化末期から無文土器の時代のものに限定した。更に、本稿の目的の一つとして、時期的な流れを追って系統立てるという意味から、時期のわかる土器と共伴するもの、特に住居跡・墓等の出土資料を優先してとり上げた。戦前・戦後の採集資料の中には好資料が少なくないが、紡錘車そのものだけで時期確定が難しい現在の研究段階では、個々にとり上げるのは危険が伴うので、今回はなるべく除外した。

時期の基準としては、筆者は半島の土器編年論に深く関わる研究的意見を持ち合わせていないので、近年の成果を踏まえた諸研究者の土器編年を参考にしながら大方の最大公約数的な所でおさえている。我国研究者では、西谷正<sup>(52)</sup>・後藤直<sup>(53)</sup>・甲元真之<sup>(54)</sup>・藤口健二<sup>(55)</sup>の各氏の所論を参考とした。

以下、東北・西北・西(コマ形土器に伴うもの)・南半の各地域に分けて、紡錘車資料を検討してゆきたい。

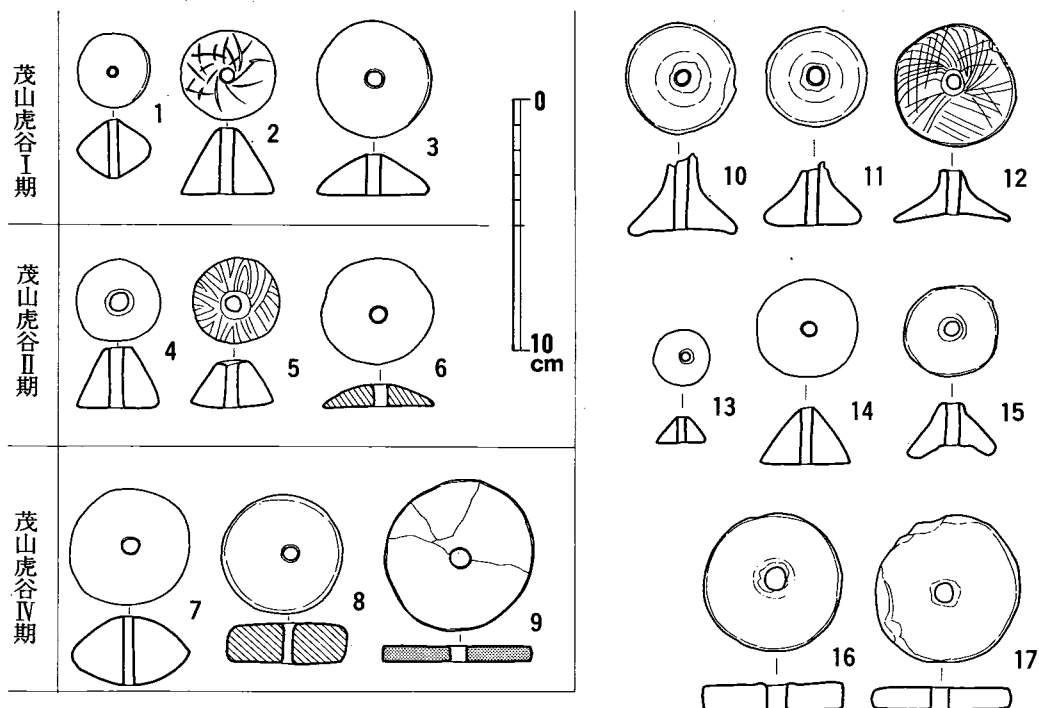
## 東北朝鮮の紡錘車

咸鏡北道を中心とする地域は、往古よりその北接地域のバイカル湖以南～沿海州との文化的つながりの深い所である。また、両江道～慈江道西北端部も中国東北地方に接する為、西モンゴル・旧満州地域を経る西方文化的様相も見逃せない地域である。紡錘車もその例外ではなく、それらの外縁地方と共通する文様・形態のものが多く、極めて特徴的といえる。

当地方では幾何学文土器文化の最終期ごろに土製紡錘車が出現し、無文土器の前半の中頃近くに石製品が伴っているようである。

なお、ここではとり上げないが、咸鏡北道清津市農圃洞(油坂)<sup>(56)</sup>貝塚より土製紡錘車91個が発見されている。幾何学文土器後期とされる土器とともに、黒曜石製打製石器2,546点と、磨製石斧・磨製石鏃・土偶等が発見されたが、石庖丁を伴わないことから、漁撈主体で農業は疑問であるとする生業形態が考えられている。異形の有文紡錘車も多く、将来の土器編年と紡錘車の細分によって、改めて分析し直すべき資料である。

茂山虎谷遺跡出土紡錘車(第62図1～9)(咸鏡北道清津市茂山郡)「報告」<sup>(57)</sup>では住居跡群が1期(新石器時代)・2～4期(青銅器時代)・5～6期(鉄器時代)に分けられている。1期は、まばらな斜行櫛目文・刺突連点文や所謂突瘤文の土器を伴う幾何学文と無文土器の両文化の接する



第 62 図 東北朝鮮の紡錘車 1 (縮尺1/3)  
 (1～9：茂山虎谷遺跡, 10～17：土城里遺跡)  
 (6・8は石製, 9は骨製, 他は土製)

時期で、土製紡錘車 3 点(1～3)を伴う。他に 6 点出土しているが図示されていない。小形で算盤玉状のもの・截頭円錐形のもの・笠形のもので、類放射状の粗い沈線文がみられる。2 期は無文土器前半期に属し、石製 4 点・土製 6 点出土しているが、すべては「報告」に図示されていないので、土製紡錘車 2 点(4・5)と、石製紡錘車 1 点を掲図する。土製のものは截頭円錐形の類で、図示しないものも同様であるという。密な類放射状細沈線の文様を施すものがみられる。石製は断面形態が所謂饅頭形の片面が丸くふくらむタイプがみられる。3 期は無文土器後半期であり、土製品 2 点が出土しているが「報告」には形態の説明がない。4 期は鉄器時代の直前であるが、計 12 点出土しており、土製 9・石製 2・骨製 1 点となる。土製のものは、図中 7 のようなレンズ状にふくらむものと、横断面が「長方形」のもの(円板形の厚手のものか)があり、石製は図中 8 のような円板形厚手のもので、骨製(9)は扁平円板形である。土製の 1 点には、円板形に爪による類連点放射状文様がみられる。5 期は鉄器が相伴しており、4 個の土製紡錘車が出土して、形態等は明らかでない。その中には上記 4 期にみられた爪による文様のものがある。

「報告」にすべての紡錘車が図示されないので、不確実な点はあるが、一応この虎谷出土例

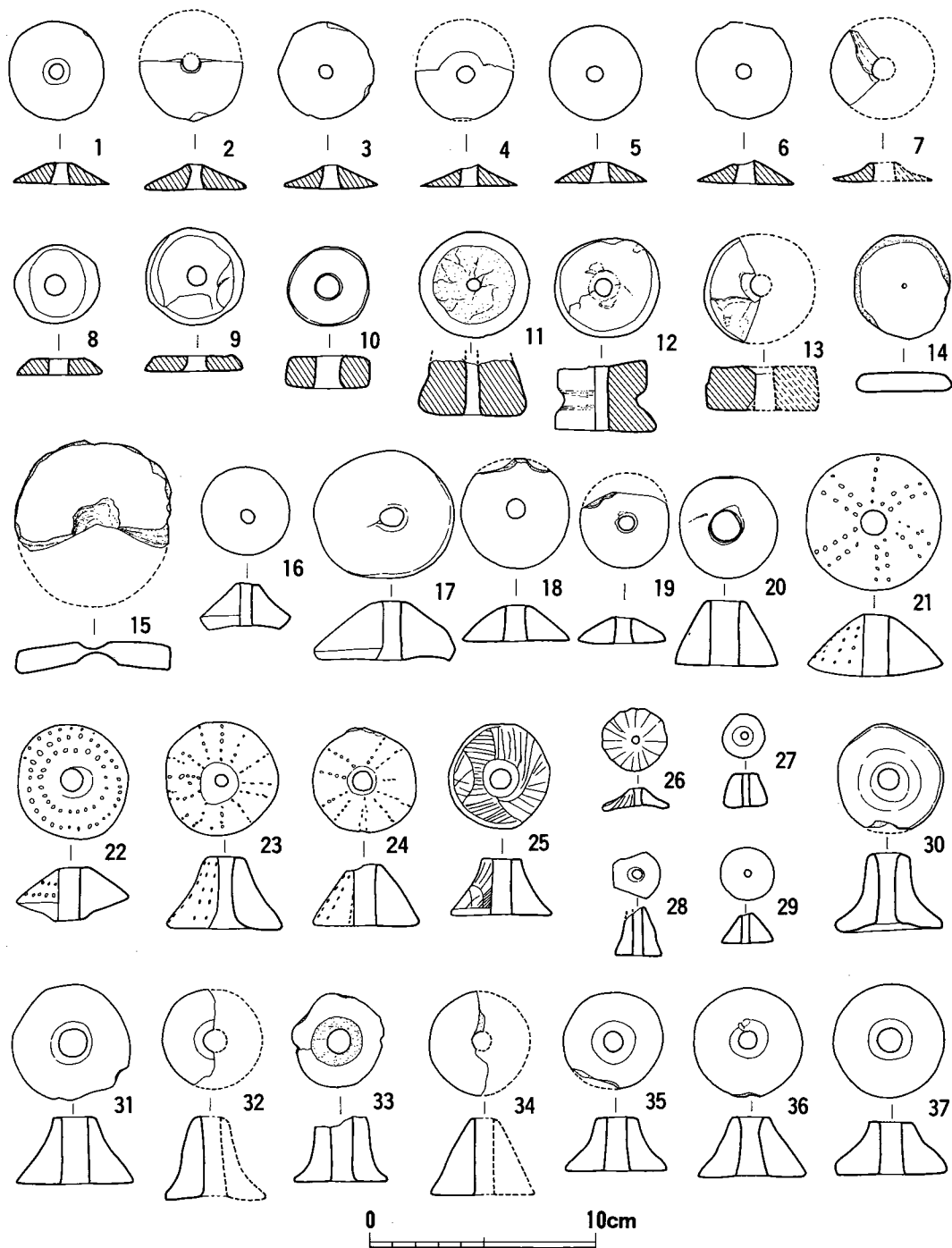
をまとめてみよう。幾何学文文化末期の1期は算盤玉形・円錐形・笠形の立体的なタイプで文様を有し、2期にまで截頭円錐形がみられるが、石製の類饅頭形が出現し、末期の4期になると、土製品はレンズ状と厚手円板形に変化し、爪による放射状文がみられ、石製も厚手円板形となる。骨製もみられる。爪施文の類は次の鉄器を伴う5期まで残る。以上の虎谷例による縦の流れは、基本的に朝鮮東北地方の傾向を示すと考えられる。

**土城里遺跡出土紡錘車**(第62図10~17)(慈江道中江郡)土城里遺跡は後の西北朝鮮の項でとり上げる深貴里・魯南里と同じ慈江道ではあるが、土城里はこの最北端に位置し、中部の深貴里・魯南里と若干位置を異にする。そして紡錘車もかえて、咸鏡北道の会寧五洞などに極めて近い系統をみせるので、地理的には離れるが、敢えて、この東北朝鮮の項に入れた次第である。幾何学文文化の最もおそい時期とされる土城里2号住居跡からは、土製のつまみ形の有文紡錘車(12)が出土している。遺跡全体からは8点以上出土するが、すべて土製品で8点が「報告」に図示してあるが、12(2号住居跡)・13(5号穴)以外は、どの遺構に伴うか明確でない。魯南里型土器と鉄器片を伴う3・4号住居跡から有文のもの、山形のもので出土したらしいが具体的に図中のどれか判断できない。しかし写真によると4号住居跡出土品は、刺突による連点放射状文のものらしい。以上の様に土城里例は「報告」の不備から、紡錘車の様相を明らかに出来ないが、漏斗形とも言える12のつまみ形のもので幾何学文文化の末期に位置付けられるならば、10・15も当然古いタイプであろうし、11・13・14も虎谷例などからみて無文土器後半に下降するものではなからう。16・17の円板形は或いは鉄器を共伴する時期とならうか。

**会寧五洞遺跡出土紡錘車**(第63図)(咸鏡北道会寧郡)8基の無文土器文化頭初から鉄器を伴う時期までの住居跡が発掘されている。各々は切り合い等から5期に細分される。ⅠA(8号住)→ⅠB(2・1号住)→ⅡA(4号住)→ⅡB(5号住)→Ⅲ(6号住)となるが、ⅡB期とⅢ期との間には時期的ブランクがある。紡錘車は全部で石製13点(片岩製)、土製39点が出土している。うち石製はすべてと、土製の22点、及び土器片転用かとみられる半穿孔品の2点が図示されている。ただし例によって「報告」が不完全なため、各々の住居跡との関係が完全にはつかめない。

まず無文土器初頭の8号住居跡では12の異形品がみられる。厚手で中央がくびれる類である。11も含めて、紡錘車かどうか、類例がないので速断しかねるタイプである。次の前葉の時期の2号住居跡からは、石製13点のうち7点が出土したとのことであるから、1~7の薄手笠形のタイプを必ず含むに違いない。次のⅡA期の無文土器文化中頃前後の4号住居跡では、5点がみられ、22と36が接して出土している。22は刺突連点の同心円文で、断面形が表裏双方へやや低い截頭円錐形にふくらむ類である。Ⅲ期の6号住居跡からは25の截頭円錐形に沈線文が施されたものと、26の放射状沈線文の小型笠形の類がみられる。Ⅲ期の鉄器を共伴する時期に25のようなものが存在するとは考え難く、より古い時期のものが混入したものとも考えられる。また26~29のようなものは、紡錘車の機能を有するのかどうか、再考を要する類であろう。以上の





第 63 図 東北朝鮮の紡錘車 2 (縮尺1/3)  
 (会寧邑五洞遺跡)  
 (1~13まで石製, 他は土製)

ことしか時期的変化は明確でないが、五洞例では、無文土器前半に片岩製薄手笠形が盛行し、中頃には、土製の截頭円錐形が刺突連点文を施して行なわれるということが判明した。これらの有文紡錘車は言うまでもなく、北方的古式紡錘車の特徴となるものである。九州におけるつまみ形に酷似するものも五洞例にもかなりみられるが、その時期が明確にならないのは残念である。

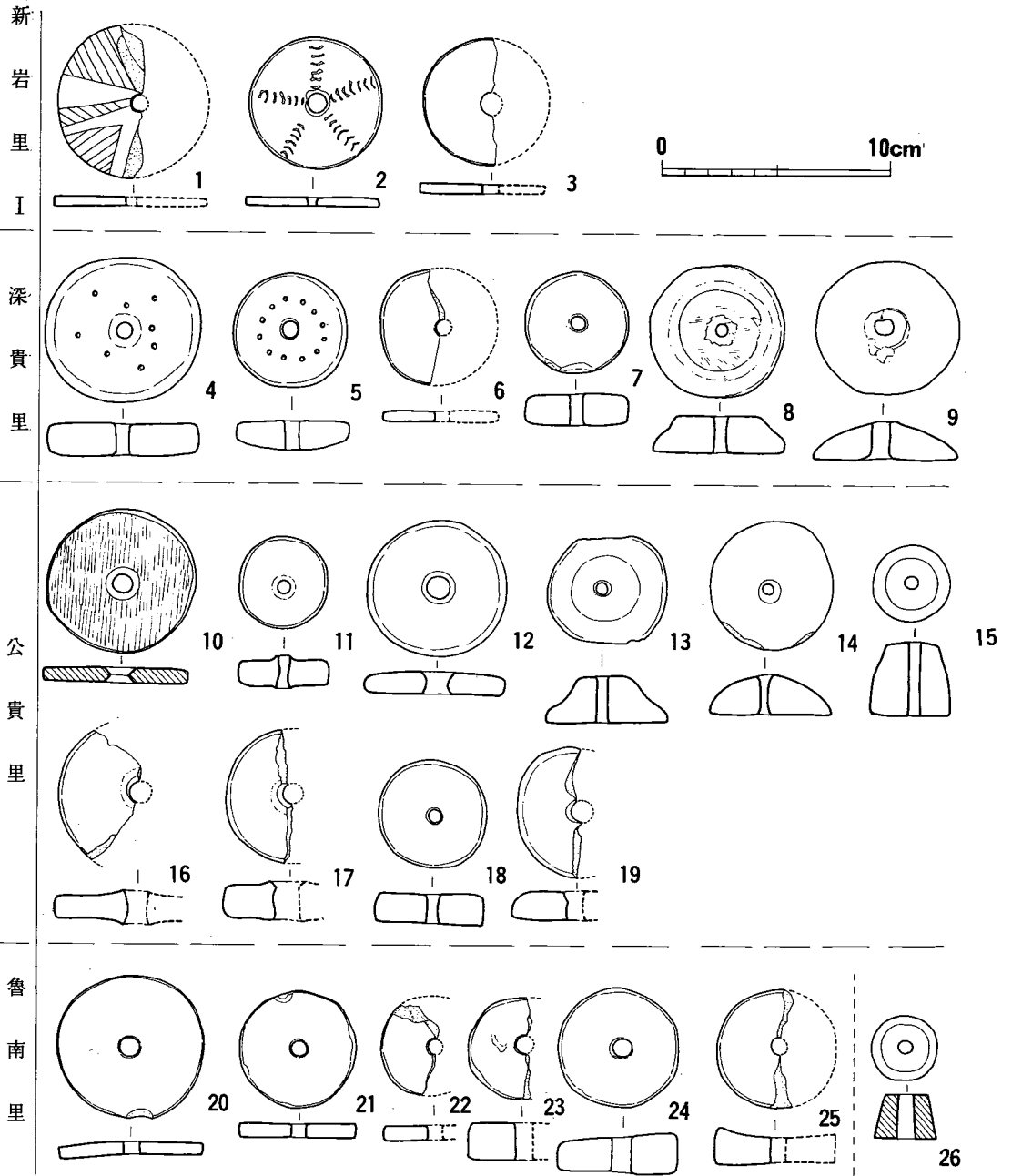
## 西北朝鮮の紡錘車

中国との境をなす鴨緑江流域にあたる平安北道・慈江道あたりは往古より、中国との関係がより密接で、歴史上重要な地域である。紡錘車についても中国東北地方・遼東半島例等と共通する様相がみられる。この地域でも、基本的には幾何学文土器文化末期に有文の紡錘車がみられ、無文土器前半期まで刺突文のものが残り、円板形素文の形態へと変化してゆく。第64図に示したものは、上から下方へ、時期的変化を表している。ここでは共伴土器関係から、コマ形土器に伴う例は、後の「西朝鮮」の項にすべて含めた。

**新岩里第1文化層出土紡錘車**(第64図1～3)(平安北道龍川郡)新岩里遺跡は雷文等特異な幾何学文様の土器で有名である。その文化を第1文化層とし、美松里型土器の第3文化層まで認められるが、その幾何学文土器文化末期(無文土器文化への移行段階)<sup>(60)</sup>とされる第1文化層から有文を含む土製紡錘車が出土している。1は中心孔より外方へ沈線で区切られた各区画の内部を斜線で埋めた文様である。あたかも多鈕粗文鏡を想わせるかの如きである。2は、ヒトデの殻を想わせるような、5方向への短線刺突放射状文である。いずれも扁平円板形であり、虎谷・土城里・会寧五洞等に見られた截頭円錐形等の立体的なタイプとは全く異なる。この後の第2・3文化層出土のものは図示しなかったが、基本的に扁平円板形のタイプがみられる。

**深貴里遺跡出土紡錘車**(第64図4～9)(慈江道時中郡)無文土器文化初～前半と考えられる深貴里1・2号住居跡からは、各々7・5点のすべて土製の紡錘車が出土した。初頭期と考えられる1号住居跡では4・5・8の3点が接して出土している。図示した他の3点が1・2号のいずれに属するかは不明である。形態からみると、刺突連点文や厚手の断面台形の4・5・8が1号住居跡出土とすると、土器型式のより新しい2号住居跡からは6・7のような円板形が伴ってよさそうである。9のような片面中央のふくらむ饅頭形は次の公貴里例にもみられ、無文土器中頃前後にみられるタイプのようなのである。

**公貴里遺跡出土紡錘車**(第64図10～19)(平安北道江界市)住居跡6軒が調査され、公貴里型の土器が出土する。紡錘車は17個(以上?)出土しており、図中の10とほぼ同大の石製扁平円板形紡錘車が3点で、他は土製品である。うち13のような山形に隆起したもの、14の如き饅頭形のもの、15のような高いタイプ(他にも1点あり)などもみられるが、殆どは円板形のものである。



第 64 図 西北朝鮮の紡錘車 (縮尺1/3)

11・16・17のように九州例にみられるような中心孔縁辺がはみ出る類もある。他に土器片利用の有孔の類2点がみられるが、1点は孔が著しく斜めに穿たれており、紡錘車としては適さないで除外した。

魯南里遺跡出土紡錘車(第64図20~26)(慈江道時中郡)無文土器文化最末期に属する住居跡群が

調査されて、円板形紡錘車が多くみられる。20は住居跡底面出土の薄手円板形である。なお、26は後の鉄器時代に属する石製品で、円柱形に近い類である。更にこの鉄器時代には既に鉄製紡錘車が伴っている。

以上の西北朝鮮の紡錘車資料の他に、この地方では、ここでは図示しなかったが他にも多くみられる。細竹里遺跡第2文化層(平安北道寧辺郡)では可楽里式系と美松里上層系の複合形態をなす土器群に伴って、扁平円板形の石製紡錘車が出土している。また、美松里型土器で知られる美松里遺跡(平安北道義州郡)でも、扁平円板形の石製紡錘車が出土している。

以上の西北朝鮮の紡錘車は、東北朝鮮とやや異なる様相をみせる。まず幾何学文土器文化末期頃には、文様を施す扁平円板形のもののみられ、円板形が古くより出現する状況が知られる。ただし、新岩里以外の他遺跡では截頭円錐形等の立体的なタイプも伴うと予測される。次の無文土器前期にはまばらな刺突連点文を施すものが残るが、断面台形状の類や饅頭形のもののみられ、これらは中葉前後まで盛行する。しかし、中葉以降は基本的には円板形が主流となる。最終期近くになると、殆ど円板形となる。石製円板形は公貴里・美松里・細竹里例の如く、前半～中頃にかけてかなり普遍的となる。

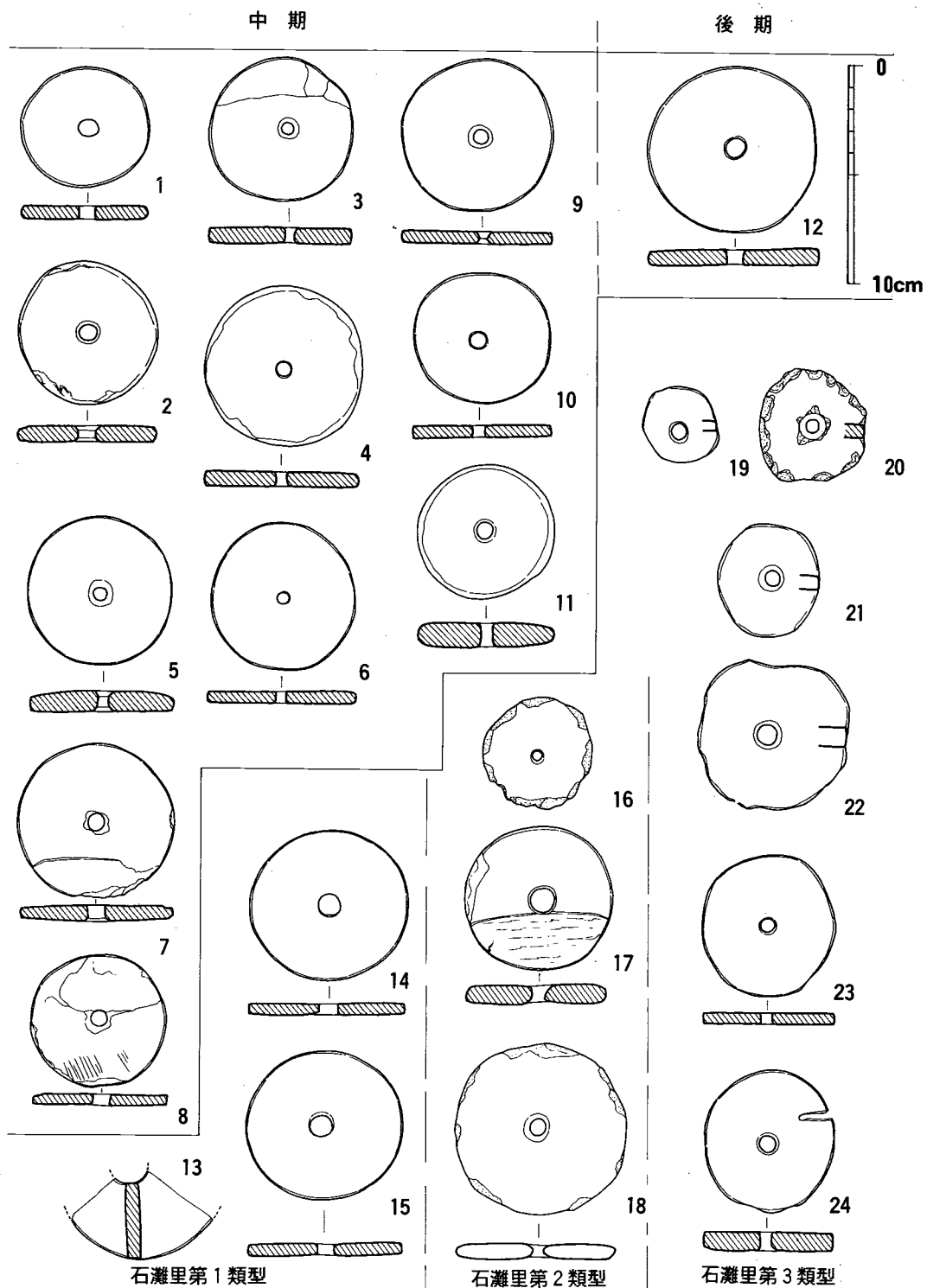
## コマ形土器に伴う紡錘車

半島西岸の北寄りの慈江道、平安南・北道、黄海南・北道、京畿道などではコマ形土器と呼ばれる無文土器文化がみられる。これらは戦後の多くの調査例により、土器型式編年が南・北の、及び日本の諸研究者により試みられている。しかしながら、このコマ形土器編年は個々の研究者によりかなりの差異がみられ、専門外の者にとっては未だ混乱をまぬがれない現状であるようだ。ただその流れとしては、口縁肥厚部外面の有文→無文化の現象を基本として、器形の変化や、共伴石器等の様相を加味する方法がとられ、その末期頃には立石里2号住居跡出土土器群や猿岩里例などが位置付けられるようである。その中葉段階は各研究者による意見の相違が著しく、紡錘車の位置付けとしては敢えて細分は行なわなかった。土器編年観としては藤口氏論文を主にした。コマ形土器に伴う紡錘車の特徴は、石製の扁平円板形が大勢を占めるということである。

**新興洞遺跡出土紡錘車**(第65図1)(黄海北道鳳山郡)3号住居跡より扁平円板形の石製紡錘車が出土している。直径6cmである。この住居跡出土土器は、前期～中期のものがみられるので、紡錘車も厳密な意味では、前期ではなく、前半期のものでした方がよいかもしれない。

**三巨里遺跡出土紡錘車**(第65図2)(京畿道江華郡)三巨里E号支石墓脇から出土したものである。時期は不明である。粘板岩製で直径約7cmとなる。

**南京遺跡出土紡錘車**(第65図3・4・9～11)(平壤市三石区域湖南里)幾何学文土器文化からコ



第 65 図 コマ形土器に伴う紡錘車 (縮尺1/3)  
 1:新興洞 2:三巨里 3・4:南京Ⅰ期 5:大坪里 6:金灘里  
 7・8:真坡里 9~11:南京Ⅱ期 12:猿岩里 13~24:石灘里  
 (16・18・19・21・22のみ土製)

マ形土器文化にわたる住居跡が調査された、あらゆる点で重要な遺跡である。「青銅器時代Ⅰ期」とされるコマ形土器中期頃の住居跡からは、片岩製円板形紡錘車3点が出土している。(図は3・4のみ)径は6.6~7.4cmとなる。「青銅器時代Ⅱ期」とされるコマ形土器中期頃と美松里土器を伴う時期では6点の片岩製円板形紡錘車が出土している。(図は9・10・11のみ)径は5.9~7.3cm, 厚さ0.5~0.9cmで、7cm前後のものが中心となる。次の「Ⅲ期」では、計12点の片岩・粘板岩製紡錘車が出土した(図なし)。すべて扁平円板形のもので、7cm前後のものが多し。以上のコマ形土器のⅠ~Ⅲ期までの紡錘車の様相をみると、すべて石製で形態と言い、大きさと言い、殆ど変化はみられないことがわかった。

**大坪里遺跡出土紡錘車**(第65図5)(平安南道北倉郡)<sup>(67)</sup>中期コマ形土器の大坪里遺跡第1地点5号住居跡からは石製円板形紡錘車2点が出土する(うち1点が図中5)。105号住居跡からも石製1点が出土している。径7cm弱のものである。

**金灘里遺跡出土紡錘車**(第65図6)(平壤市勝湖区域)<sup>(68)</sup>コマ形土器中期段階の2・1号住居跡から各1点、8号住居跡から4点の計6点出土している。いずれも石製円板形らしい。直径7cm弱のものが多し。

**真坡里遺跡出土紡錘車**(第65図7・8)(平壤市中和郡)<sup>(69)</sup>中期頃の典型的なコマ形土器と共伴して、住居跡から石製扁平円板形の紡錘車2点が出土している。直径は6.5~7cm強をなす。

**猿岩里遺跡出土紡錘車**(第65図12)(平安南道江南郡)<sup>(69)</sup>無文の口縁部を有する末期に近いコマ形土器に伴って、1号住居跡から石製紡錘車2点が出土している。直径約7.5cmでやや大きいタイプである。

**石灘里遺跡出土紡錘車**(第65図13~24)(黄海北道松林市)<sup>(70)</sup>42軒という多くの住居跡が調査され、コマ形土器を伴う集落が明らかにされた。しかし、この遺跡のコマ形土器については、各研究者によりかなりの編年上の差異がみられる。よってここでは取りあえず「報告」での住居跡の構造類型による分類に従って、一応紡錘車を並べてみた。将来各住居跡毎の編年が確立されれば、紡錘車の変遷も明らかになるであろう。まず第1類型では片岩製7点が出土している。図示したものは直径約7cmの扁平円板形である。第2類型の住居跡群からは、石製4点・土製2点が出土する。土製品は、土器片転用のものである。石製は径約7cmの扁平円板形である。第3類型の住居跡からは、石製5点、土製16点が出土している。土製品はすべて31号住居跡から出土したもので、土器片転用品が多い。また土器片加工の未穿孔品も多く、穿孔されたものでも両端にわずかな抉りを入れるものもあり、魚網錘等の他の用途が考えられる。尚、図中23・24は「報告」本文中では直径6cmと記述されるが挿図の尺からみると径約9cmとなり、写真などと対照したが、他の19~22とともに何とも解釈し難い。ここではとりあえず23・24を6cmとして、19~22を20の「報告書」写真図版からわり出した大きさにして掲載した。以上石灘里出土紡錘車の特徴は、基本的には直径6~7cmの扁平石製円板形であり、第2・3類

型住居跡には土器片転用の有孔円板も伴う。

以上掲げた紡錘車の他にも、コマ形土器に伴う多くの資料がある。まず、コマ形土器前期の資料を図示しなかったが、舟岩里遺跡(黄海北道隣山郡)<sup>(71)</sup>1965年調査分の口縁有文コマ形土器を出す住居跡出土の紡錘車がある。これは片岩製2点で、直径7.5cm、孔径0.7cm、厚さ1cmを測る。又、中頃以降(藤口編年では後期)のコマ形土器を出した石橋里1号住居跡(黄海南道龍淵郡)と同類型の3号住居跡からは、直径7cmの石製紡錘車1点が出土した。又、最終段階とされる立石里遺跡(平壤市勝湖区域)からは、1号住居跡から石製2点・土製1点、2号住居跡から石製4点・土製14点が出土している。石製紡錘車の中には約9cmの大きいものもあり、土製品は土器片加工の有孔品が多いようだ。他に沈村里支石墓群・深村里住居跡・江路里遺跡等でも発見されているが、石製円板形の直径7～6cmのタイプが殆どである。

されているが、石製円板形の直径7～6cmのタイプがある。殆どである。

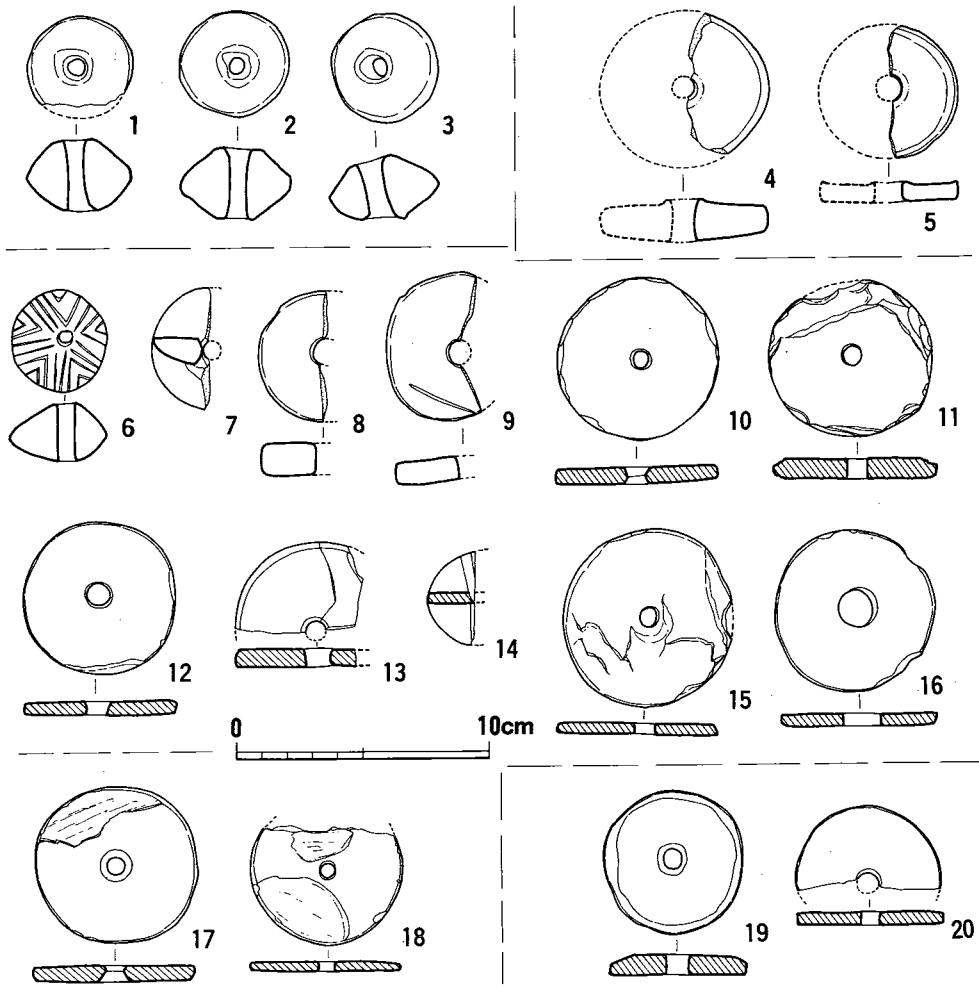
以上のコマ形土器に伴う紡錘車をまとめてみると、まず、片岩を主とした石製扁平円板形のものや圧倒的量を占めて盛行する。それも直径6～7cm前後に集中する。基本的には、古い時期から新しい時期までの形態的变化はみられないが、後期になると径がやや大きくなる気もするが、現状では未だ不確実である。土製紡錘車は原則として伴わない。土器片転用の有孔円板は一定の住居跡に集中して多量に出土する例が多く、石製紡錘車がちゃんと在り乍ら他にそう多量に必要とするとは考えられない。更に形態も正円形のは稀れで、中には両端に抉りを入れるものもあり、魚網用等の錘とした方が良いと考えられるのである。

## 南半朝鮮の紡錘車

ここでは、朝鮮半島南半の幾何学文土器の時期から、孔列文土器・所謂可楽里式・紅陶を伴う無文土器から鉄器出現以前の時期のものまでをとり上げたい。孔列文・可楽里式・紅陶等の相互間の関係、また各々の文化内部でのかみ合い方が、未だ十分に解明されていない現状では、紡錘車についてもバラエティーに富んだ諸様相を確実に分析するのは困難である。ここでは、大旨上記の順に列挙してゆきたい。

**金海水佳里貝塚出土紡錘車**(第66図1～3)(慶尚南道金海郡)<sup>(72)</sup>無文土器との接点とされる「新石器時代晩期(Ⅲ期)」のⅠ・Ⅱ層から、土製紡錘車3点が出土している。直径4～4.2cm、厚さ2.5～3cmの算盤玉状タイプである。ちなみにⅠ層の貝殻によるC14測定結果はおよそB.C.1100～1300年となっている。この類の立体的紡錘車は北方にもみられたが、未だ直接的に両地方を結びつける必要は無く、現状では半島におけるより古式のタイプとしておさえておきたい。

次に孔列文土器に伴う紡錘車をみてみよう。



第66図 南半朝鮮無文土器に伴う紡錘車 1 (縮尺1/3)  
 1~3:金海水佳里 4・5:新村里 6~16:欣岩里  
 17・18:玉石里 19・20:可楽洞 (1~9は土製, 他は石製)

欣岩里遺跡出土紡錘車(第66図6~16)(京畿道驪州郡)孔列文土器で知られる本遺跡では、C14測定が行なわれている。それによると12・8号住居跡(約B.C.1000年前後)<sup>(73)</sup>→14号住居跡(B.C.700年を中心とする時期)→13号住居跡(B.C.200~300年前後)となる。各住居跡出土土器・石器類をみてゆくと、大旨その順序が首肯される。ただし、古い時期に属する住居跡(1・2・5・12号)が多くて、新期のは少なく様相が明らかでない。各住居跡出土の紡錘車をこれに対応させると、古い時期には6・7のような、土製の立体的なものがみられ、石製円板形のものも伴う。土製有文のもの6や饅頭形7は北方無文土器に伴う紡錘車と共通している。7が出た1号住居跡からはコマ形土器と密接な土器が出土している。8のような土製円板形や、9のような有文土器片転用品なども含めて、土製品は古い時期に残るものではなかろうか。石製円板形紡錘車は、直径6~7cmでコマ形土器文化に伴うものと同様である。ただ石材は各種



ある(砂岩・粘板岩・千枚岩等)。更に最新期とされる13号住居跡出土の11は、古期と考えられる12号住居跡出土の10と大差はみられない。

**玉石里住居跡出土紡錘車**(第66図17・18)(京畿道坡州郡)<sup>(74)</sup>孔列文土器を出す住居跡から粘板岩製と斑岩製の2点の紡錘車が出土した。直径が6.4, 5.9cmのいずれも扁平円板形である。

**晋陽大坪里遺跡出土紡錘車**(第67図21~30)(慶尚南道晋陽郡)<sup>(75)</sup>長大な竪穴住居跡から、孔列文土器(内面からの突瘤文土器)・紅陶の壺・変形角形土器・無文土器などの、問題の多い共伴の仕方をする土器群とともに、土製紡錘車10点が出土している。いずれも基本的には円板形であるが、上・下で径がいくらか異なり、薄手の台形状をなす。径の小さい面の周縁がわずかに突出するもの(21~26・28)が多く、あたかも北海道擦文土器に伴う土製紡錘車の如きである。穿孔時の余りの粘土未処理による孔周縁の突出も特徴的である。直径は5cm前後で規格性がみられる。21の如く、側面に刺突連点文を施すものもある。これらの資料は多くを語る。まず、孔列文土器に伴う他遺跡の如き石製円板形のものがないということは、地理的な位置を考慮せねばなるまい。有文のものや、27のようなやや立体的なタイプなどは、いくらか北方的要素もあるかもしれない。ただしもっと重要なことは、紅陶・無文土器(南朝鮮)の地域における例として、後述する新村里例等と共に、土製円板形が在るということ、そしてそれらが、九州初期水田稲作開始期における紡錘車の様相と関係付けられ得る類なのだということである。また中心孔周縁が突出するタイプを見ていると、この地域にも九州例の如きつまみ形のものが出土してもよさそうな気がするのだが。

次にコマ形土器との関連が考えられている可楽里式土器に伴う紡錘車を見てみよう。

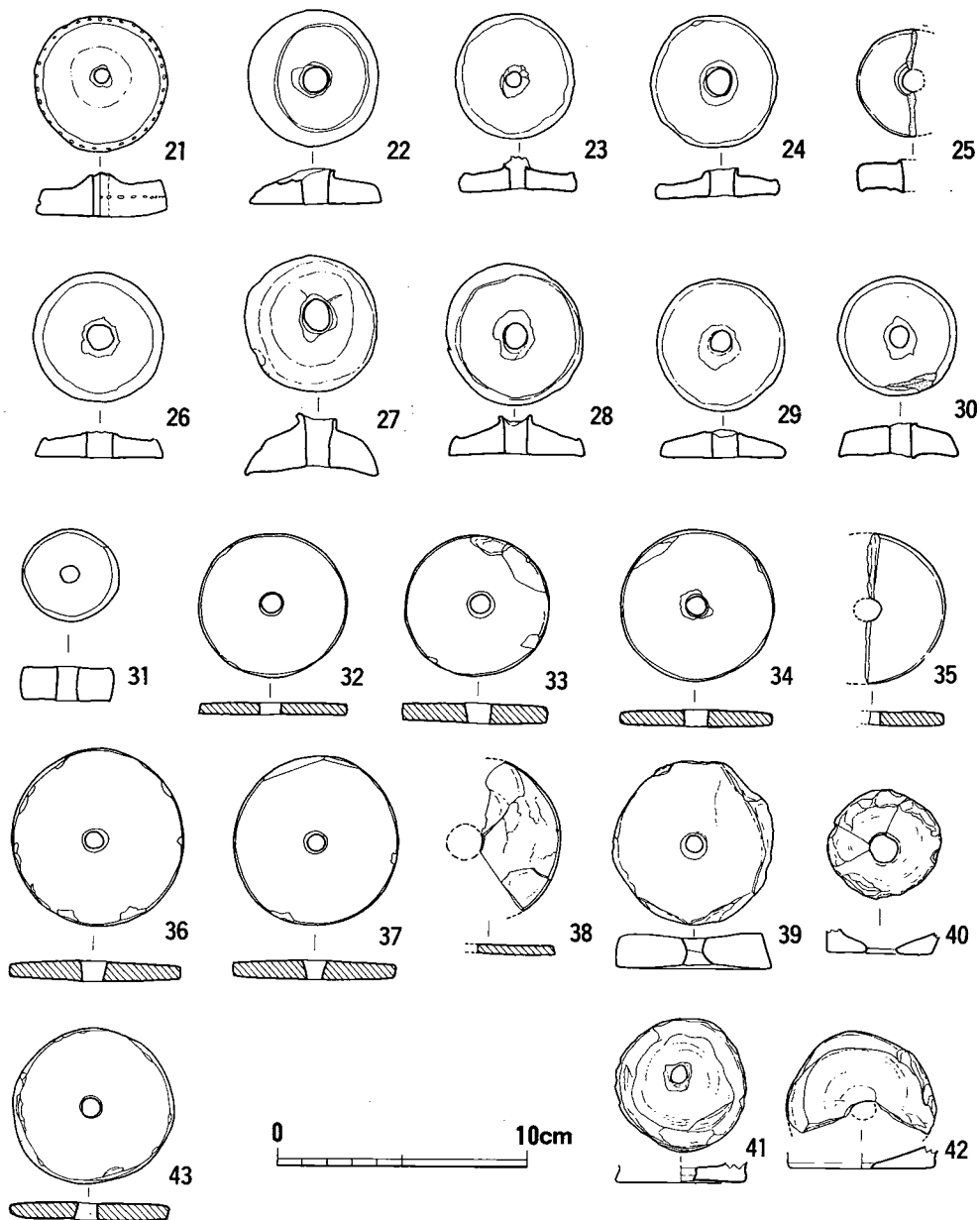
**可楽洞遺跡出土紡錘車**(第66図19・20)(ソウル特別市域城東区)<sup>(76)</sup>可楽里式土器で知られる可楽洞住居跡から石製紡錘車2点が出土している。いずれも直径が6cm弱のものである。コマ形土器に伴うものと同様であると考えてよからう。

次に、所謂紅陶を伴う南朝鮮の無文土器期の紡錘車について見てみよう。

**新村里遺跡出土紡錘車**(第66図4・5)(慶尚南道義昌郡鎮北面)<sup>(77)</sup>「無文土器前期」とされる新村里I区10号住居跡から、土製紡錘車2点が出土している。いずれも円板形で、直径6.2・5.3cm、厚さ1.6・0.8cmとなる。いずれも中心孔周縁がわずかに突出し、5は側周縁も片側のみ突出して、晋陽大坪里例と共通する。

**飛下里遺跡出土紡錘車**(第67図31)(忠清北道清原市江西面)<sup>(78)</sup>おそらく「長方形竪穴式石室」から出土したものであろうという一括遺物(黒陶長頸壺・粘土帯無文土器・細形銅剣)の中に土製紡錘車1点のみみられる。直径3.8cm、厚さ1.4cmで小径の厚手品である。土器は大田市槐亭洞タイプであり、ほぼ同時期とされよう。

**松菊里遺跡出土紡錘車**(第67図32~43)(忠清南道扶餘郡草村面)<sup>(79)</sup>正円形・楕円形・長方形の各平面形の竪穴住居跡群が調査され、紅陶を伴う無文土器の時期で、下限がB.C.4C初頭とされる。



第 67 図 南半朝鮮無文土器に伴う紡錘車 2 (縮尺1/3)

21~30: 晋陽大坪里 31: 清原飛下里 32~43: 松菊里  
 (21~31は土製, 39~42は紅陶底部の転用品, 他は石製)

円形、長方形いずれの住居跡からも紡錘車が出土しているが、土器を見る限り両者に時期的差異はみられない。石製扁平円板形が主であり、他に紅陶底部転用の有孔製品もみられる(39~42)。石製円板形は片岩・粘板岩製で、直径5.7~6.7cm(平均6.2cm)となり規格性が窺われる。

以上の南朝鮮型無文土器に伴う紡錘車は、多様性に富む。それは単に時期の前後だけでなく

地域性ともとれる違いも考えられる。即ち、忠清道あたりの西南岸に面する地域(松菊里など)と、東南岸に面する慶南地方(晋陽大坪里など)がそれぞれ、石製・土製の材質の差を表しているのかもしれない。時期的流れとしては、晋陽大坪里は孔列文土器を伴い、紅陶壺も古く、新村里も前期であろう。玉縁状口縁の飛下里は、後期段階(狭義の南朝鮮無文土器)では古く、以上はいずれも紡錘車は土製である。しかし、下限を4C初頭に置くという松菊里例は、コマ形土器・西岸孔列文土器にみられるような石製円板形である。この後の初期鉄器を伴う金海会峴里貝塚では土製のものが主体となることを考えると、やはり単に時期的変化として割り切れない所もあり、前述の如く地域性も強いと考えられる。

南朝鮮の無文土器について近年編年細分案が出されている中で、手元にある紡錘車資料の数が少なすぎて思うように系統付けられなかった。今後、九州とのより直接的関係を考える上で、当地域研究者との連繋を深め資料を集積し、再度この問題にとり組むことを約束したい。

## 5) その他周辺地域の紡錘車

日本から朝鮮半島の紡錘車を概観してきたが、やはり、日本への稲作伝播の問題を考えると、中国及びその周辺の状況も考察する必要があるように、紡錘車についても概観してみたい。ただし、今回は詳細に分析する資料的・時間的余裕を持ち合わせていないので、中国における様相のみのごく簡略な状況把握にとどめたい。

### 中国の新石器時代の紡錘車

**旅大地区の紡錘車** 先に朝鮮半島の紡錘車について述べたが、これと至近の遼東半島先端の、旅大地区における各文化の紡錘車をみてみよう。新石器時代の文化類型として、まず、約6-7千年前(C14測定値から割り出した略年代。以下同じ)とされる「小朱山下層文化」<sup>(80)</sup>では陶片転用品がみられる。次の約五千年前とされる「小朱山中層文化」(大汶口文化早期の第3期に相当)では圧印と刻文の陶製紡錘車が出土している。なおこの期には方形石製穂摘具が伴う。次の約四千年余前「小朱山上層文化」では、「饅頭形・梯形」の陶製紡錘車が伴う。なお石製穂摘具は直背弧刃双孔のものが伴う。次の約四千年前の「于家村下層文化」では、朝鮮新岩里Ⅰの文様を思わせるような土器が出土するが、紡錘車の様相は明らかではない。次の青銅時代初期の「于家村上層類型」(3200年前後前)では、西北朝鮮コマ型土器の祖形となるかと思われる土器などと共に、扁平円板形石製紡錘車が伴う。次の「上馬石上層類型」(約3150年前)(牧羊城下層)でも扁平円板形石製紡錘車が伴う。また次の戦国期明刀銭を伴う時期の「上馬石青銅

短剣墓類型」でも扁平円板形石製紡錘車を伴う。この時期には、可樂里式的な土器もみられる。

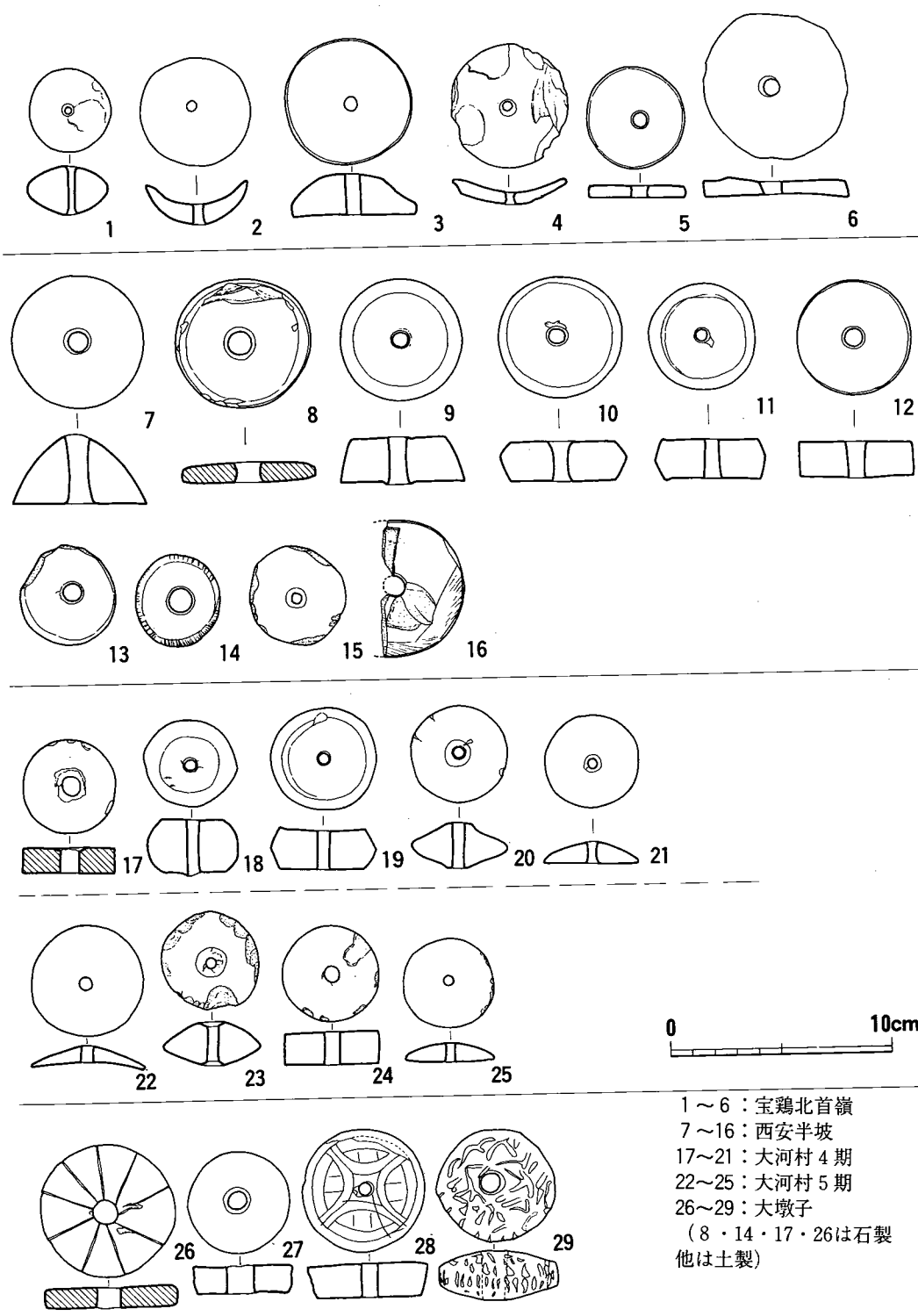
以上の旅大地区新石器～青銅器時代の紡錘車の様相は、その中途に大きな変換をみることが出来る。即ち、小朱山下・中・上層文化の間は陶製紡錘車で、しかも、有文のもの・立体的なものを含んでいる。青銅器時代以降になると、戦国期まで扁平円板形石製紡錘車が主体となる。この様相は、地理的に隣接する朝鮮半島北半の様相に非常に似ており、両者の深い関係が改めて考えられるところである。

**仰韶文化以前の新石器時代の紡錘車** 戦後の中国考古学の成果の一つとして、裴李崗・磁山などの仰韶文化に先行する新石器時代早期文化の発見がある。これらの各文化に伴う紡錘車についてみてみよう。裴李崗文化 (B.C.6000年) (河南省新鄭県) では紡錘車はみられず、石製穂摘具も未だ発見されていない。<sup>(81)</sup> 磁山文化 (B.C.6000～5600年) (河北省武安県) では、陶製円板形のもの2点 (直径5.5cm, 厚さ1cm) が出土し、他に陶片転用品2点 (直径3cm) も発見されている。石製穂摘具は未だ伴わない。大地湾文化 (B.C.5850・5405年) (甘肅省泰安県) では、陶片転用紡錘車が4点以上出土しており、石製穂摘具は、定形化しない磨製のもの4点が発見されている。<sup>(82)</sup> 北首嶺遺跡 (B.C.5150・5020年) (陝西省宝鶏市) では、陶製紡錘車11点と、陶片転用品11点が出土している。<sup>(84)</sup> (第68図) 台状に片面が隆起するもの (1点)、両者がふくらむ小形のもの (2点)、全体にレンズ状に反るもの (2点)、扁平円板形のもの (6点) がみられ、扁平円板形は陶片・碗の圈足を転用したものが多し。石製穂摘具は定形化しない鎌状のもの・両端抉りのもの・長方形一孔のものがあり、両抉りの陶片転用品もみられる。

以上の仰韶文化以前の諸遺跡出土紡錘車は、陶製のもので、陶片転用のものである。北首嶺では既に多種の立体的なものを含むタイプが出現しており、これらはかなり古い型であることがわかる。

**仰韶文化に伴う紡錘車** まず、仰韶文化半坡類型の標式遺跡となる西安半坡遺跡出土品をみてみよう。<sup>(85)</sup> (第68図7～16) 全部で52点出土しているが、各々の時期は仰韶早・晩のいずれか決め難く、また戦国・漢代の墓葬も周縁に在り、年代の下降する可能性のあるものも含まれているようだ。石製紡錘車は2点のみで、砂質石灰岩・石灰岩製で、扁平円板形の大小類である (8・14)。陶製のものうち36点が円板形で、細泥陶片転用品も多い。中には10・11の如く側面に稜を有するものが少量ある。この円板式の他に9のような断面台形式のタイプが3点、7のような円錐形のもの4点出土している。以上の半坡遺跡紡錘車は、陶製平円式 (陶片使用多くを含む) を主体として、厚手の有稜式・台形式・円錐形の土製品を少量伴うものであり、石製扁平円板形は極く僅かとなる。なおこの遺跡からは骨針281点の多きが出土しており、紡錘車の量と併考して、紡織生産がかなり日常的に行なわれていたことを示してくれる。

同じく仰韶文化半坡類型とされる東庄村遺跡 (山西省芮城県) からは石製1点と、泥質紅陶の扁平円板形6点と、泥質灰陶の円柱形1点が発見されている。<sup>(86)</sup> 円柱形のは朝鮮公貴里例



1 ~ 6 : 宝鶏北首嶺  
 7 ~ 16 : 西安半坡  
 17 ~ 21 : 大河村 4期  
 22 ~ 25 : 大河村 5期  
 26 ~ 29 : 大墩子  
 ( 8 · 14 · 17 · 26は石製  
 他は土製 )

第 68 図 中国新石器時代の紡錘車 (縮尺1/3)

と似るタイプである。

また、同県の西王村遺跡からは、廟底溝類型とされる仰韶早期の土器に伴って、断面台形で大径側の周縁に刻目文を巡らせた陶製1点<sup>(86)</sup>が出土している。次の半坡類型晩期にあたる時期のものは、石製扁平・やや厚手の2点と、陶製4点がある。泥質紅陶で、やや厚手円板形2点と、断面台形のもの1点、截頭円錐形の上記仰韶早期例と似る刻目文を施すもの1点がみられる。

黄河中流域の仰韶文化で著名な大河村遺跡での紡錘車の様相をみてみよう。ここでは竜山文化早期まで連続するので、その時期まで続けて記述する。仰韶文化中期とされる「大河村1期」では、円餅形石製1点と、円餅形陶製のもの2点がみられる。同じく中期の範囲とされる「大河村2期」では、陶製2点が知られる。1点は側面に稜を持つもの、他は円板形である。次の仰韶文化晩期とされる「大河村3期」では、陶製11点<sup>(87)</sup>が出土する。側面に稜を持つもの6点、円板形のもの5点である。次の仰韶・竜山両文化の過渡期とされる「大河村4期」では石製円板形2点、陶製14点がみられる。(第68図17～21) 陶製のもの、18のような厚く丸っこいもの2点、19のように側面に稜を有するもの1点、20のようなタイプ6点、21のような薄手饅頭形5点である。次の竜山早期とされる「大河村5期」では、円板形石製紡錘車が13点と多く、陶製は21点見られる。(第68図22～25) うち、24のような厚手の円板形のもの3点、23のような両面にふくらむ断面菱形に近いもの3点、25のような薄手饅頭形のもの7点、22のような片面が凹状をなすレンズ形のもの8点となる。以上の大河村遺跡における変遷をまとめると、まず、石製品が仰韶期のうちでは僅かではしかないものが、竜山早期になるとかなり増えることがわかる。陶製では、円板形のもものが仰韶晩期までは主流的であるのにそれ以降は少なくなる。そして厚手になってくる。また、側面に稜をつくるタイプが仰韶晩期を中心に盛行するが、以降は衰退する。かえって竜山早期前後に断面菱形や、22のようなレンズ状タイプが盛行するようになる。以上の特徴は大河村遺跡のみの現象なのか、今後の検討が必要であろう。

次に長江中流域では、晩期仰韶乃至早期竜山文化に併行するとされる屈家嶺類型の時期に、特異な紡錘車がみられる。屈家嶺遺跡<sup>(88)</sup>(湖北省京山)では、彩陶の扁平円板形紡錘車が出土している。文様は、渦巻状の条線文や連点文、四方への放射条線文、部分的に塗り分けたものなど、その文化の彩陶壺などと共通するものである。

**大汶口文化に伴う紡錘車** 山東地域の新石器文化の一つとして、竜山文化へと直結する大汶口文化は仰韶文化中・晩期と併行し、およそB.C.4300～B.C.2400年とされる。この大汶口遺跡においては、133基の墓葬のうち20基で31個の紡錘車が副葬されていた。早期墓では石製16点<sup>(89)</sup>、中期墓では石製4点・陶製3点、晩期墓では石製2点・陶製1点、時期不明が石製1点、陶製1点となる。石質は片麻岩・大理石を用い、陶製品は泥質灰陶のものである。ここでの特徴は、早期に石製品が多いことである。陶製紡錘車の形態は報告では明らかにされていない。なお紡錘車副葬墓で性別の判るものは、10例あり、うち男性1例を除いて他はすべて成年女性である。

また、骨針も20点出土し、紡錘車と共伴するものもあり、成年女性の67号墓では12点も集中して副葬されていた。女性墓副葬品としてのこれら紡織関係遺物の共伴状況がかなり明確となった。

江蘇省邳県大墩子遺跡の第二次調査の墓葬群は、大汶口文化早期にあたる劉林期・花庁期の<sup>(90)</sup>もので、計342基が調査されている。ここからは計34点の紡錘車が出土し、石製14点、陶製20点となる。(第68図26～29) 石製品はすべて扁平円板形で、1例のみ放射状の9本の細線を施している。陶製は円板形が13点、断面やや台形のもの(例28)が7点、縁辺が丸くふくらむもの(例27)3点、片面のみが丸くふくらむもの1点となる。28のように細線文を施したり、29のように短線文で飾るものもある。中国の東北地方周辺を除いて、黄河中流域などには見られないこれら有文紡錘車は、中国南半全域に散見するようであり、同じ新石器時代であり乍ら、地域性の強さが看取されて興味深い。

大汶口中期とされる呈子遺跡(山東省諸城)<sup>(91)</sup>第1期では、石製のやや厚手の円板形紡錘車6点が出土している。呈子遺跡第2期は竜山期早・中・晩期に相当するが、この時期には、石製のやや厚手タイプが3点なのに対し、陶製18点となる。陶製品は3点の陶片転用小径品の他に、厚手円板形7点や、断面菱形のもの、「弦文」が一周するものなどの厚手立体的なものがかかなり目立つようになる。ちなみに、この呈子遺跡墓葬における紡錘車の副葬は女性墓に限られており、更に骨針とセットになるケースが多い。以上の呈子例は、大河村における紡錘車の変遷と類似する。即ち、陶製の厚手・立体的なものが竜山期になるとかなりみられることである。ただ石製品は大汶口例と同様に大汶口中期以降減少傾向にあり、大河村5期(竜山早期)での増加傾向とは趣きが異なるようである。

**竜山文化に伴う紡錘車** 既に黄河中流域の大河村遺跡、山東省の呈子遺跡での、仰韶或いは大汶口文化から続く竜山文化での紡錘車の様相を述べているが、もう一つ、姚官庄遺跡(山東省濰坊市)<sup>(92)</sup>の例を見てみよう。竜山文化に属する当遺跡からは、円板形石製紡錘車が9点、泥質黒陶を主として他に泥質橙紅陶などの陶製品が43点出土している。陶製紡錘車は、扁平円板形が21点、この中には片面沿辺に段状圏線を入れるもの1点を含む。断面菱形のもの10点、断面台形のもの7点、側面に稜を持つもの5点となる。円板形が主体となるが、大河村4・5期や呈子2期と共通する断面菱形のタイプが同様に目立っている。以上の竜山文化における紡錘車の特徴は、陶製が主体となるが石製もかなり残る。陶製のものは円板形が多いが大旨厚手となり、断面菱形・片面凹状のレンズタイプなど立体的なものがかかなり目立っている。

## 商以後の紡錘車

**商周時代の紡錘車** 殷墟の発掘調査で明らかになりつつある商代については、かなりの紡錘車

資料がみられる。まず、殷墟西区墓葬では、939基の殷代墓葬中6基に陶製紡錘車7点が副葬されていた。「円餅形」のもの2点、<sup>(93)</sup>「両側有篋文」のもの1点、「算珠形」のもの4点である。算珠形とは側面に稜を有する類と考えられる。

また、殷墟婦好墓では、玉製「紡輪」が22点出土している。半製品4点の他は、直径2.9~6.1cm、厚さ0.4~1.2cmで、うち2点には文様を施している。殷墟周辺では玉製品が極めて多量副葬されることは周知のことであるが、これら有孔円板形玉製品を紡錘車と考えることには疑問を抱く向きも多い。ただこの文化の特異性として、玉製品にかなりの日常性をも見出すことが困難ではないことを考えると、紡錘車と認めるのもそう無理ではないように思う。

鄭州南関外<sup>(95)</sup>（河南省鄭州市）の商代遺跡では上・中・下層に分かれて紡錘車もそれぞれ伴っている。まず商代早期とされる下層からは、泥質灰陶のやや厚い円板形（直径3.9cm、厚さ0.9cm）1点が出土している。次の商代二里岡期下層にあたる中層からは、すべて泥質灰陶製の14点が出土している。内訳は、厚さ0.9~1.5cm、直径3.8~6.3cmの円板形のもの7点、この中には両面に沈線圈文を施すものもある。わずかに台形をなすもの1点、側面に稜をもつもの6点となる。次の商代二里岡期上層にあたる本遺跡上層からは8点の陶製品がみられる。2点は側面に稜をもつもの、6点は厚手円板形である。

二里頭遺跡<sup>(96)</sup>（河南省偃師県）においては、二里頭4期に陶製紡錘車1点が報告されている。これは厚手円板形のタイプである。

また、南沙村遺跡<sup>(97)</sup>（陝西省華県）上層は、二里岡文化上層にあたりとされ、商文化分布の最西に位置する遺跡である。この層から陶製紡錘車5点が出土しており、うち4点は厚手円板形で、1点は直径4cm、厚さ3cmの円柱形である。

以上の商代紡錘車の様相をまとめてみよう。殷墟婦好墓の玉製円板形を例外として、まず石製は姿を消す。陶製品も灰陶質のものが主体となり、形態は厚手円板形か、側面に稜をもつ厚手タイプかに殆んど統一されるようだ。

**春秋~漢代の紡錘車** 商代以降になると殆んど規格性を持った大きさ・形態のものとなるようである。よってここでは若干の例を掲げるとどめる。地理的にぐっと離れた地域でのこの期紡錘車の様相はどうかであろうか。雲南省呈貢竜街石碑村古墓群では、春秋晚期~西漢早期とされる第1・2期墓、西漢中・晚期とされる第3期墓群のいずれに伴うか<sup>(98)</sup>時期的には不明であるが、計28点の陶製（夾砂粗黒陶と泥質紅陶）紡錘車が出土している。形態はすべて「算珠形」で、側面に稜をつくる厚手タイプである。117墓葬中の26基に紡錘車を副葬している。うち紡錘車のみ副葬するものが11基、耳墜・紡錘車のみが7基、他に、爪鎌・石（玉）管等を伴うものも多い。このように、中央よりはるか離れた地域でもこの期では、側面に稜をもつ定型化した紡錘車となっている。

漢代になると<sup>(99)</sup> 東城東区（洛陽市）では、陶製紡錘車28点が出土している。直径8.5~3.1cmの



円板形多数と、片面平らで他片面が半球形で密な同心円沈線を巡らすもの（径7cm弱）が出土している。この後者のタイプは、時代は異なるが、周代とされる洛陽西郊遺跡出土品の中にも類似品が出土している。これは、直径5cmで断面台形状をなし、側斜面に同心円を密に巡らすものである。

以上の春秋～漢代の紡錘車は具体的な個々の大きさや形態の報告が極めて少ないので、明確ではないが、かなりの規格化が行なわれているようである。即ちその形態は、厚手の側面に稜を持つものと、厚手円板形とが殆んどになっている。

以上、中国における紡錘車の変遷を具体的な時期を追って述べてきたが、その広大さによる地域的差異も大きく、このような小論では手に負えないというのが実感である。もっと具体的な日本初期・朝鮮初期の紡錘車との比較をすべきであったが、目指す東海岸地域の資料が明瞭でなかったりして、目的を果たすことが出来なかった。今後の課題としたい。

ただ、大まかにみて、中国黄河流域の紡錘車の様相は、年代的なかなりのずれを持って朝鮮半島に、更に日本へと縦の流れそのままに認められるような感触を持っている。また、上記の流れの中で強いて言えば山東省竜山期の様相が特に朝鮮半島・日本の初期紡錘車の形態とより強い関連性を認め得る類と言えよう。竜山期の土製異形品の目立つことは先に述べた通りであり、朝鮮半島初期においても同様であった。ただ、これらは、今後中国東北・内蒙古地域における編年の作業が進んで、北方的要素との関係が明確になるに従い、確認されてゆくべき類であろう。

## 6) 紡錘車の問題点

### 《どれを紡錘車と呼ぶか》

あらゆる考古学的遺物についても同様であるが、或る遺物に対しての名称は、研究者個々によって異なるという現象が多々見受けられる。これは研究者個人によって形態からの判断・用途に対する判断が異なるからである。紡錘車に対しても同様のことが言える。これらを整理することによって、筆者のこれまで取り上げてきた紡錘車としての判断を明確にしてゆきたい。

**土器片転用の有孔製品について** 長崎県福井洞穴の縄文早期段階から、砂岩製2点・土製1点の有孔円盤が出土している。これらをもって、即紡錘車との判断は難しい。ただ、関東・奥羽地方における網目文土器の盛行は、網そのものの圧痕かどうかはさておいても、網の存在は推測させるに充分である。早期初頭の井草式にすでに網目文がみられ、前期初頭花積下層式にも施され、更に奥羽地方では縄文後期後半から類例が増加する。また燃糸文の盛行や、縄・網に

はじまって、晩期の織布の存在に至るまでの諸状況は、植(動)物の諸繊維の利用の多さを物語るところであろう。ただ、どの段階から、人間の手や足だけを使った撚り方から、紡錘車を使用した紡ぎの技術に転換したのかは大問題である。ただ徒らに、撚られた繊維があるからといって、その時期の有孔製品を紡錘車と呼ぶのは危険である。先の福井洞穴例は、殊に石製品はその後の同地域において類例に乏しいので否定的とされよう。

紡錘車そのものは土製・石製のみならず、骨製・ガラス製・鉄製などや、腐蝕して残りにくい木製・大きめの堅果類の使用なども知られており、これら有機質のものが、土・石製紡錘車の出現以前に使用されていた可能性もない訳ではない。しかし、古くから土器製作技術を有していた我国で簡単に土製品が作り得ることを考えつかぬ筈はないと思う。そして、土器片縁辺を整形して穿孔するという手間よりも、当初から紡錘車として作った方が製作途中の失敗も少なく、より確実に得られるという常識的判断も成り立つであろう。

我国縄文時代において土器小片の縁辺を加工して、中央に穿孔したものがみられることは周知のとおりである。例えば佐賀県坂の下遺跡<sup>(100)</sup>においては、中期段階において「有孔円盤状土製品」が多く出土しており、報告では底部に「布目」を有するものがあり紡錘車とする(前者文献中)意見が出されているが、底部圧痕は布目とは到底考えられない類であり、「布目」からの紡錘車説はまず除外されよう。形態も不整形のものが多く、紡錘車としては適当ではない。更に、多量に製作されるということは、先に朝鮮コマ形土器文化の項で述べたとおり、後世の紡錘車の出土状態からみて、必要以上の量であり、適切でない。やはり、錘等の用途を考えざるを得ないであろう。また滋賀県滋賀里遺跡<sup>(101)</sup>では縄文晩期に土器片利用の有孔品が34点出土するが、中心よりずれて穿孔されるものや、円形でないものも多い。報告書に「孔の周囲に、直径にして1.2~3.5cmの間に同心円状の擦痕が走るものが4例あり……」として、紡錘車としての使用痕とするが、この擦痕はおそらく穿孔時の擦痕であろう。池上遺跡や曲り田遺跡出土の穿孔具の形態をみると孔の周囲に擦痕がつくことは容易に首肯されるであろう。この滋賀里の時期には紡錘車の存在は考えられるが、紡錘車として製作されたものが出土していないという状況から、上記有孔品を紡錘車と判断できないこともない。しかし、形状等は既述坂の下例と同様に最適とは言い難い。やはり滋賀里例も否定的といわざるを得ない。次に弥生時代以降までも、いわゆる「メンコ形」と呼ばれる土器片転用品が、しばしば見受けられる。それらは、有孔・無孔半々か、或いは無孔の量が多いことが知られている。それらの形態は縄文期のものと同様であり、紡錘車とは考えられていない。

以上の諸理由から、土器小片転用の有孔円盤状製品は中国の最古期や、朝鮮半島の若干の例外を除いて、その大多数は紡錘車ではないと判断したい。

**関東縄文晩期の有孔円板形土製品について** これについては、関東の縄文時代紡錘車の項で詳しく分析・検討を行なったので参照されたい。(125~128頁) 結論としては、それらは小孔等

の異様さはあるものの、紡錘車そのものであると判断した。

**紡錘車と同形態をとる各種用具について** 外見上紡錘車と同形態の円板形や独楽形で、中心に孔を穿って、他の道具として用いられるものがある。まず回転の補助具として、各種穿孔を行なう場合に舞錘等につけるものがある。細かな、玉類等への穿孔の場合は小さな独楽形のもので充分であろうが、大きな石製品への穿孔の場合など、重量のあるものが要求されるであろう。古墳時代玉類の穿孔にはこの種の独楽が用いられた可能性がある。また同様に用いるものに発火具の舞鑽に付けるものも考えられよう。ただしこれには重量が重要な要素となろう。縄文後晩期の大形紡錘車をこの種の発火具に用いるという考えもあり、成程と思わぬでもないが、火を起こすという技術そのものはより古い時期から存在していたであろうから、この時期になって急に土製のものが出現するというのも解せないし、石製の類似品もこの前後にはみられないことから、この説は否定したい。そして、縄文期大形紡錘車には中心孔の小さいものがみられ、発火時に必要な重量をかけるときに、細い棒を通して果たしてその力に耐え得るだろうかという懸念もある。また、この時期に舞鑽法が開発されたのだという説にも、これ以降の時期に縄文後晩期の大形土製紡錘車の重量に匹敵するような有孔土製品は見出し得ないことから、反対したい。

次に、八幡一郎氏が度々論ぜられるような独楽としての遊戯具も考えられるが、氏も説かれるように、紡錘車からの転化と考えられ、より後世の段階では、見分けのつかぬものも存在するかもしれない。

以上の、どれを紡錘車と呼ぶかという基本的な問題に関しては、いかに類似品であろうともそれはつねに糸を紡ぐ道具であるという認識のもとに、当該時期における紡織技術の様相を把握した上での判断がなされなければならない。

## 《紡錘車の大きさの意味》

これは、もちろん重量や、形態からくる空気抵抗率等の問題も含んでいる。換言すれば回転運動を持続させるはずみ車としての機能を有する道具としてその大きさが適当かどうかということである。

縄文期の古いころにすでに撚糸が存在し、それは手、或いはひざを使用した撚り方であったろう。そして、紡錘車の導入によって技術的革新がみられ、より細く強く紡がれた糸がより目の細かい布を織り得るという一大発展をみたのである。

既に記述したように日本の原初の紡錘車は、土製の直径7cm~10cm弱の大形品が多い。重量にすれば150gを超えるものも少なくない。縄文晩期前半まで大きい傾向が続き、その後小形化して、更に曲り田期になると形態的にも定型化が認められ一つの大きな画期となる。それ

以降小形化と規格化が進み、弥生前期末以降変化がみられなくなる。これら全体をみると、日本の初期紡錘車は小形化・規格化の変遷をたどったと言ってよからう。

以上の変遷を念頭において、紡錘車の大きさの意味を考えてみよう。大きく重量のあるものは作業の邪魔にならない範囲では、回転持続能力も高く、作業能率の高さを維持することができよう。ところが、日本初期紡錘車の小形化変遷は、これと逆の様相をみせる。ということは、対象となる繊維そのものの変化、さらに製品としてのより細い糸への要求があったと考えられるのである。すなわち、大きい紡錘車は強く粗い繊維を紡ぎ、太い糸を生産したのであり、小形化する段階で、より繊細な細い糸を紡いだと考えられる。更に紡錘車の規格化は、より均一な糸生産への要求を満たそうとしたのである。これらは言うまでもなく、織られる布そのものの目の細かいものへの要求が可能となってゆくのであり、その背景には織機の変革も考えられるであろう。

以上のように、紡錘車の大きさ（重量・形態）は、その生産対象となる製品の文化的様相と密接に関っているのである。

### 《紡錘車の形態・文様のもつ意味》

各地域・各時代における考古学的遺物の形態・文様・材質は、それらの特徴を如実に表して、逆に遺物からの年代・生産地域の判断が可能となることが多い。紡錘車に関してもこの例にもれない。殊に初期紡錘車に関しては、変化の様相がかなり顕著で、土器型式編年と対応する如き変化をみせる。

中国・朝鮮半島例においても、原初期に土製の立体的な有文のものがみられるが、下降するに従って無文化・形態の単純規格化が進むことは既に述べた通りである。ただし、文様の現れ方は、かなり地域的片寄りがみられた。土・石製の材質の違いも若干その傾向があるようである。これらの文様・形態の差は、その所属する文化内容を反映したものである。縄文期紡錘車の文様は、その時期の土器の文様と共通する。九州の三万田期紡錘車には三万田式を中心とする土器に特徴的な細線羽状文を施しているし、千葉県西広貝塚出土紡錘車の文様は、安行Ⅲb・Ⅲc・Ⅲd式の各期の土器文様を如実に写している。これらの縄文期の有文性は、単なる文様類似論にとどまらず、この時期の人々の紡錘車に対する特別視を示すものであろう。それは、大量生産する使い捨ての紡錘車の出現以前における、紡錘技術への重視、祈りにも似た呪術性の付加さえもそこに感じられるようだ。縄文期という特異な思想背景を抜きにしては考えられない要素が、そこにはある。このことは縄文的社会構造が後まで残ると考えられる地域の紡錘車においても文様が施されるということからも首肯されよう。

形態については、上面観が正円形であるという力学的な基本形は当然として、その断面形で

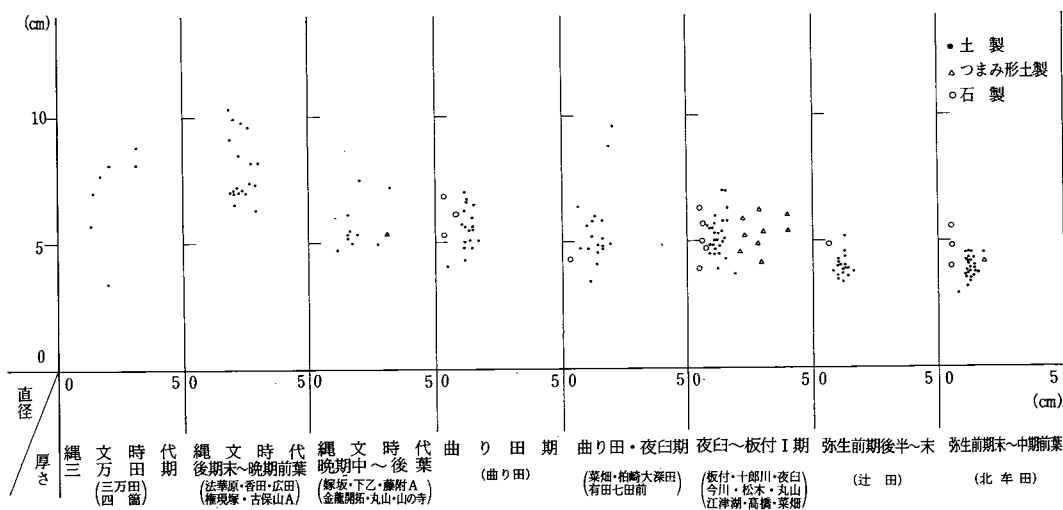
大きく2種に分かれる。即ち、片面側或いは両面側（上下）に肥厚する立体的なタイプと、円板形のタイプである。前者は使用する際には肥厚する側を下にして重心の安定を計ったものと考えられ、原初期に多くみられる。のち一時円板形が圧倒的となるが、後の時代（日本では古墳時代）になると断面台形厚手形の整った形態として盛行するようになる。円板形は径の大きい扁平薄手のものと、小径で厚手のものに分けられ、石製の多くは前者に含まれる。これらの形態の諸相も、年代・地域性に強く規制されている。基本的には力学的合理性の追及に伴う段階変化と考えられるが、それも形態上個性的とも言える縄文晩期段階から没個性・規格化への変化がやはり背景となる社会の思想を反映する類であるというとならえ方も可能であろう。

## 7) 日本の稲作開始期における紡錘車の歴史的意義

### 《日本の初期紡錘車の変遷》

詳細については既述したので、その概要と、具体的な大きさを図示してその変化を追うことにする。(第6表)

第6表 日本初期紡錘車の大きさの変遷



日本の縄文期の紡錘車は土製である。石製品は曲り田期（弥生早期）に初めて出現する。

表は縦軸に直径を、横軸の各時期欄内において厚さを示したものである。本来は重量を組み入れて表を作成すべきであるが、報告書に重量記載の無いものが圧倒的に多いためその意図を

断念したものである。重量による表にすると、ぐっとその変化が明確になる筈であるが、残念である。

九州縄文後期後葉の三万田式土器に伴う例が初現である。今後もこの初現の時期はそう変るまい。これらの紡錘車は大形のもので、たまに小形異形品がみられる。縄文後期末から晩期前半のものは全体にやや大形化がみられ、有文のものも多い。晩期中頃前後から小形化が進み、黒川式土器期には直径は曲り田期のものと殆んど変わらない程になる。ただ、形態的多様性がみられ、つまみ形のもの、特異な有文のものが特徴的である。厚さが一定でなく、規格性とはほど遠い。曲り田期になると厚さも一定化し径も4～7cmの間で大・小類の分化が考えられる。夜臼・板付Ⅰ期になるとその小径化傾向が続き、つまみ形類がこの時期に集中する。弥生前期後半になると、直径4cm、厚さ1.0～1.5cmを中心とする範囲に集中して、明らかな小径化・規格化が進み、これ以降それが定着する。石製紡錘車については、曲り田期で出現以後、形態的に変化は無いが、やはり、やや小径化する傾向がみられる。量的に増加することは無く、土製のものに共伴して散見する程度が続く。

## 《画期とその背景》

以上の変遷過程の中で4つの画期をみることができる。まず言うまでもなく、土製紡錘車出現の三万田期である。次に大きさが極端に小さくなる黒川期である。次は、無文化・規格化・石製品の導入がみられる曲り田期である。そして、弥生前期後葉の小径化・規格化が定着する時期である。

**第1画期** 三万田期の紡錘車出現は、その社会変革の様相と無関係ではない。即ち、土器における黒色磨研土器の定着、磨消縄文・貝殻文系・沈線文系土器群との訣別による文様の激減化がみられ、所謂晩期的様相を呈してくる。粗製土器の比率の増加も如実である。石器についても扁平粗製石斧の急増、打製縦長剝片の加工による石鋸・鎌・石匙等を含めて大量の剝片使用石器の出現などがみられる。また注口土器や、精神生活面で重要な土偶の出現も九州における三万期の特徴であり、集落の大規模化などともに、すべてが「縄文晩期的」様相を備えた時期と言える。このような前後を画する時期に紡錘車の出現をみることは、重要な意義がある。もちろん水稻農耕に伴うような曲り田期以降の紡錘車とは形態的にも全く異なるが、原始的陸耕の可能性を否定しきれないこれらの文化内容は、紡錘車の出現、即ち紡織技術の一大変革がこの時期に起ったと考えるに充分であろう。ただ、未だこの時期の布等の組織の実物や圧痕が知られないので、具体的な変革の様相はつかめない。今後の調査研究により、遠からずその実体が明らかになるであろう。

**第2画期** 縄文晩期黒川式期に、紡錘車の大きさが小径化して、それまでの文様とも異なり、

形態もつまみ形のものや、片面に肥厚するものなどが出現する、バラエティーに富む時期である。この時期は、各種の組織の圧痕土器が多くみられ、組織そのものの復原を可能とする時期である。平織布目痕もかなりみられ、有孔円板形土製品が、紡錘車として既に市民権を得ている。文化的に言えば、この時期には、熊本県ワクド石遺跡出土の靱圧痕土器片にもみられる如く、耕作形態・渡来過程の問題をさておいても既に稲そのものは確実に九州に存在した時期であり、次の時代の水田稲作受容のための具体的醸成が進んだ段階とされよう。織機に関しても、この段階で、例えば、横機が導入されたというような、技術革新が起ったのかもしれない。

**第3画期** 本書で弥生早期とした曲り田期には紡錘車の様相が一変して、これ以降は小形化・規格化が進むのみである。この時期は土器・石器・集落の様相は弥生文化すべての要因を備えた当初期であり、それ以前の時代と明確に一線を引き得る。水田稲作そのものも菜畑・曲り田遺跡で明確であり、曲り田住居跡の鉄器の存在も画的である。紡錘車において、石製がこの期に初現するということは、所謂大陸系磨製石器群が出揃うということにも関連して、南半朝鮮無文土器後半期以降に伴う扁平円板形石製紡錘車との強い結びつきが考えられるところである。また曲り田遺跡では布或いは布目圧痕土器はみられなかったが、同時期の菜畑例をみると平織圧痕があり、経糸が1 cm間に15本以上と多く、それまでの10本前後と比べて、格段に目のつままった細い糸が使用されたことがわかるのである。織布痕と紡錘車については次項へ譲るが、ここに密な布を織るために細い糸の要求があり、定形化した紡錘車の出現がこの時期にみられたのであった。

**第4画期** これは、弥生前期後半期の規格化・小形化の紡錘車の変化がほぼ止まり、定形化した段階である。弥生前期集落の大規模化、各地への水田稲作農耕の波及が広がった時期であり、北九州弥生甕棺墓の定着発展段階にあたる。紡織技術自体も、均一な細い糸を紡いで、平織の布を日常的に生産し得るようになった段階と考えられる。

以上の4つの画期の中で最も注目しなければならないのは、やはり三万田期と、曲り田期の各変革期であろう。曲り田期は紡錘車自体の変容は言うまでもなく、文化的画期に連動したものである。紡錘車についても、ここからが弥生文化であるということが可能である。

## 《織布との関係》

かつて鏡山氏が論究された成果を基として、特に布そのものの圧痕について考えてみたい。<sup>(102)</sup>  
縄文晩期山の寺式期とされる唐津笹ノ尾の例は経10~12本、緯6~7本の糸が1 cm間に織り込まれており、熊本県麻生原例では10×9本、時期が明確でないが宮崎下弓田例の17点が6~10×5~9本、山の寺例が15×7本となる。山の寺出土土器の中には曲り田出土土器と共通するものが多く、或いは同時期と考えてもよいかもしれない。曲り田と同時期の菜畑例では6<sup>(103)</sup>

点出土しており、15～18×8～10本となる。また、筑紫野市剣塚遺跡第9号甕棺（板付Ⅱ古式）片の布圧痕では経緯15～16本の平織りがみられる。以下弥生期の布目は、経糸が少なくとも15本前後以上あるのが通常となる。20本以上のものも稀ではない。糸自体の太さは、その数字からみても0.7mm以下のものとなり、更に糸間の間隙を考慮すると、0.5mm前後以下の太さの糸が紡がれていたこととなる。

先に記した鏡山氏の縄文晩期例が、経糸10本前後であるから、この曲り田期を境として、紡がれた糸自体に大きな変化がみられたことになる。ここに曲り田期紡錘車の定型化・小形化したものの出現等の状況が理解出来る訳である。

### 《日本の紡錘車の系統と外来的要素》

日本の初期紡錘車はどのような系統のもとに、紡織技術の一環として発展定着していったのか、重要な問題である。縄文後期～晩期中頃までの大形紡錘車は、近隣諸国の例では、直結出来そうな類似品が殆ど皆無で、日本自生のタイプと考えざるを得ない。また関東のもの、九州例では、同時に両者が自然発生的に出現したのではなく、両者に密接な関係があると考えられる。今後の両地方の土器編年の充分なかみ合わせが必要であるが、今は一応、九州での発生の直後に両者間に文様の共通性がみられることから、交流があったものと考えている。

次の黒川式期の小形化した肥厚するタイプは、北部朝鮮の初期や中国東北部・モンゴル方面・シベリア東南部等でもやや近いものはみられるが、全く同一という類でもなく、また、年代的にも大きな開きがある。しかし、これらは縄文期色彩を未だ残すものではあるが、何らかの強い刺激を受けて小径化した感じも受ける類であり、今後朝鮮半島南端近辺において同類が発見され得る可能性も考えておきたい。

曲り田期の土製円板形紡錘車は、公貴里などの西北朝鮮無文土器や、新村里・晋陽大坪里などの南半朝鮮無文土器に伴う紡錘車と酷似しており、年代的なへだたりを考慮しても、彼地に特に南半においてその系統が連続して金海会峴里貝塚例へとつながる類であることが充分考えられることから、曲り田期の土製紡錘車へと系統づけることは可能と考えている。曲り田期の石製円板形紡錘車の日本における初現は重要である。西朝鮮におけるコマ形土器の時期の画一化した石製円板形紡錘車の圧倒性は南半朝鮮無文土器の古い段階でもかなり共通するものであるが、降って西南朝鮮松菊里の段階でも優勢である。曲り田期は下限をB.C. 4 初頭とする松菊里例と、年代的にもある程度符号するものであるが、筆者自信は松菊里の土器形態・住居の形態などからもっと下降すると考えている。それで、年代的に松菊里→曲り田の順とする考えはなく、むしろ逆を想定しており、紡錘車の伝播も松菊里からの伝播ではなく、一段古い時期の石製円板形紡錘車の伝播を考えている。



夜臼・板付Ⅰ式期にみられるつまみ形のタイプは、東北朝鮮の古段階に似たものがあるが、年代的にかけ離れており、地域的にも未だ限られた状況であり両者を直結することは危険であろう。ただ、この種は短い時期に集中しており、何らかの特別な理由を考慮することが必要であろう。その観点から晋陽大坪里のような中心孔周縁がもり上がるような類に注目している。このような類が発展して、つまみ形のタイプが生まれる可能性を考えている訳だが、現状では南部朝鮮の無文土器終末近くの段階に伴うつまみ形のタイプが今後発見されることを期待するのみである。また、このつまみ形タイプが黒川式期のⅠ例を除いて、板付Ⅰ式を中心とする時期にのみ出現することは、曲り田期以降この時期にもひとつの小さな文化的波及があったことをも想定させる。

今川例でみられたような低い饅頭形のタイプは、少量ではあるが深貴里・公貴里・茂山虎谷等の北半朝鮮や、欣岩里例などにも散見する。直接的な系統は追えないが、孰れにしろ彼地との関係を無視出来ないタイプである。

以上の紡錘車の外来的要素としての系統論は全く想像の域を出ないものに終わった。これは類似品が在るには在るが、それは時間・空間を無視したらの話で、殊に北部朝鮮例とのつながりは一見強いようにみえる。

しかし、実際にはどのタイプにしても、直接的なつながりを見出すことは困難で時期尚早の感が強い。今後の朝鮮半島・大陸における調査の進展に充分注目してゆくべきであろう。

日本の稲作開始期における紡錘車の歴史的意義は、以上述べたように、紡錘車自体に大きな変革を有しており、弥生文化の重要要因の一つとして、水田稲作・金属器・外来性の強い磨製石器群などととも画期的要素として位置付けられたことにある。従来、事実報告を旨とする報告書の類においてさえも無視されがちであったこの小遺物が、重大な文化的背景を荷負っていたことが明らかになったのである。

資料の詳細を知り得ることの出来ないものも多く、充分論じ得ないままに終ることになった。大方の御教示・御叱正を心から願う次第である。

(1985年2月20日)

- 註1 E・S・Morse “Shell Mound of Omori” 1879
- 2 八幡一郎「弥生式土器の布目」人類学雑誌46-9 1931
- 3 森本六爾「弥生式文化の紡織——底部に布痕を有する土器の一型式——」考古学評論第一輯 1934
- 4 小林行雄・藤岡謙二郎・末永雅雄【大和唐古弥生式遺跡の研究】京都帝国大学文学部考古学研究報告 第16冊 1943
- 5 太田英蔵「登呂遺跡出土の織具」『学芸』第5巻第2号 1948  
太田英蔵「紡織具」『日本の考古学Ⅲ』 1966

- 6 高橋健自「古墳発見石製模造具の研究」『帝室博物館学報』第1冊 1919
- 7 鏡山 猛「原生期の織布」『史淵』第86号 1961
- 8 布目順郎「養蚕の起源と古代絹」雄山閣 1979
- 9 小林行雄『古代の技術』塙書房 1962
- 10 八幡一郎「弥生時代紡錘車覚書」『末永先生古稀記念古代学論叢』 1967
- 11 八幡一郎「北海道の紡錘車について」『北海道考古学』4 1968
- 12 八幡一郎「朝鮮半島の古代紡錘車資料」『朝鮮学報』第49輯 1968
- 13 八幡一郎「イラン国アルボルス山中の古墓出土の紡錘車について」『上智史学』14 1969
- 14 八幡一郎「遼東半島の古代紡錘車」『日本民族と南方文化』平凡社 1968
- 15 乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化 九州」『新版考古学講座』第3巻 1969
- 16 富田紘一・緒方勉他『三万田東原——調査概報——』泗水町教育委員会 1972
- 17 二宮忠司・渡辺和子『四箇周辺遺跡調査報告書 (5)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集 福岡市教育委員会 1983
- 18 九州考古学会編『北九州古文化図鑑』第1輯 福岡県高等学校教職員組合発行 1950  
同書写真図版をトレースしたものであり、精確な実測図ではなく、断面形態等も全く不明である。
- 19 田中幸夫「北九州の縄文土器」考古学雑誌 第26巻7号 1936
- 20 実物は、現在吉井町歴史民俗資料館に展示されており、金子氏及び実測の便を計って下さった関係各位に感謝したい。
- 21 久保伸洋『香田遺跡』九州横断道関係埋蔵文化財調査報告書 2 佐賀県教育委員会 1981
- 22 福岡県教育委員会南筑後教育事務所が1984年発掘調査を行なった。1985年3月に報告書刊行予定。調査主任の川述昭人氏から実測等の便宜を得た。記して感謝したい。
- 23 熊本県教育委員会『古保山・古閑・天城』 1980
- 24 小池史哲「広田0区の調査」『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会 1980
- 25 鈴木重治他『陣内遺跡』日向総合調査報告 第2輯 宮崎県教育委員会 1962
- 26 柳田康雄・小池史哲他『三雲遺跡 II』福岡県教育委員会 1981
- 27 松本雅明編『城南町史』城南町史編纂会 1965
- 28 前掲書(註7)に蓆目圧痕土器片の説明が「緯糸は3条で1組となり、相互に3ミリ程度であったものが所々ゆるんで更に開いている。経糸は10ミリ間に5-6本(間の開いている所では4ミリある)、ゆるい右捻りの目がみえる所がある。」となされ、かなり粗い組織であることがわかる。
- 29 坂本経堯『肥後上代文化資料集成』肥後上代文化研究会 1983
- 30 同遺跡名の報告書が佐賀県教育委員会によって昭和59年度分事業として発刊される。同教委の多々良友博氏の御好意により本紡錘車の実見・実測を快諾された。記して感謝したい。
- 31 杠一義他『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書2 佐賀県教育委員会 1981
- 32 丸山遺跡については、昭和59年度分事業として、佐賀県教育委員会によって正式調査報告書が刊行されるとのことである。この2点の紡錘車の実見・実測に際し、快諾され便宜を計って下さった東中川忠美氏・多々良友博氏に深く感謝する次第である。
- 33 「島原半島及び唐津市(女山)の考古学的調査」『九州考古学』 11号 1960  
古田正隆『山の寺槻木遺跡』百人委員会 1973
- 34 福岡県教育委員会『石崎曲り田遺跡』I・II 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8・9集 1983・1984
- 35 中島直幸・田島龍太他『菜畑』唐津市文化財調査報告 第5集 唐津市教育委員会 1982
- 36 佐賀県教育委員会『柏崎遺跡群』 1980

- 37 福岡市教育委員会『有田七田前遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第95集 1983
- 38 福岡市教育委員会『板付』板付会館建設に伴う発掘調査報告書 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第73集 1981
- 39 吉岡完祐『十郎川 二』福岡市教育委員会 1982
- 40 森 貞次郎「2 福岡県夜白遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1972
- 41 森 貞次郎・岡崎敬「1 福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1972
- 42 酒井仁夫・伊崎俊秋『今川遺跡』津屋崎町教育委員会 1981
- 43 佐々木隆彦他『松木遺跡』那珂川町教育委員会 1985
- 44 緒方勉『江津湖苗代津遺跡』熊本県教育委員会 1974
- 45 河口貞徳「鹿兒島高橋貝塚」『考古学集刊』第3巻2号 1965
- 46 福岡市教育委員会『板付』 1976
- 47 木下修他『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第7集 福岡県教育委員会 1978
- 48 酒井仁夫『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXI 上巻』福岡県教育委員会 1979
- 49 岩崎卓也他『貝の花貝塚』松戸市教育委員会 1973
- 50 鷹野光行他『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査会編 1977
- 51 八幡一郎氏の前掲註11の論文。なおクックルケシの問題も同論文に負う所が大きい。
- 52 西谷正「会寧五洞の土器をめぐる問題」『史淵』112 1975
- 53 後藤直「西朝鮮の「無文土器」について」『考古学研究』第17巻4号 1971  
後藤直「南朝鮮の「無文土器」」『考古学研究』第19巻3号 1973  
後藤直「朝鮮糸無文土器」『三上次男博士頌寿記念論集』1979
- 54 甲元真之「朝鮮の初期農耕文化」『考古学研究』第20巻1号 1973  
甲元真之「朝鮮支石墓の編年」『朝鮮学報』第66輯 1973
- 55 藤口健二「朝鮮・コマ形土器の再検討」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982
- 56 横山将三郎「油坂貝塚に就て」『小田先生頌寿記念朝鮮論集』1934
- 57 黄基徳「茂山虎谷遺跡発掘報告」考古民俗論文集 6 社会科学出版社 1975
- 58 鄭燦永「Ⅵ土城里遺跡」『鴨緑江・禿魯江流域高句麗遺跡発掘報告』遺跡発掘報告 第13集 科学百科事典出版社 1983
- 59 考古学研究所『会寧五洞原始遺跡発掘報告』遺跡発掘報告第7集 1960
- 60 李順鎮「新岩里遺跡発掘中間報告」『考古民俗』1965-3号  
金用珩・李順鎮「1965年度新岩里遺跡発掘報告」『考古民俗』1966-3号
- 61 前掲註58の文献中「1・深貴里住居跡」
- 62 科学院『江界市公貴里原始遺跡発掘報告』遺跡発掘報告 第6集 1959 今回はこの原本に接することが出来ず、内容を確実に理解し得なかった。なお図示したものは、西谷正氏トレースの分を使用させていただいた。
- 63 前掲註58の文献中「Ⅲ・魯南里の住居跡と製鉄跡」
- 64 徐国泰「新興洞コマ形土器住居跡」『考古民俗』1964-3号
- 65 金載元・尹武炳『韓國支石墓研究』国立博物館古蹟調査報告 第六冊 1967 この紡錘車を図中でこの中期の欄に入れたのは、単なる形態的類似によるだけの意である。
- 66 金用珩・石クワンジュン『南京遺跡に関する研究』科学・百科事典出版社 1984
- 67 鄭燦永「北倉郡大坪里遺跡発掘報告」『考古学資料集』第4集 1974
- 68 金用珩『金灘里原始遺跡発掘報告』遺跡発掘報告 第10集 1964 なおこの原本に接していないため、紡錘車の大きさ等具体的には知り得ていない。
- 69 鄭白雲「江南猿岩里原始遺跡発掘報告書」『文化遺産』1958年1号 なおこの原本に接し得なかったため、掲載図は下記文献に拠った。  
有光教一「2・朝鮮半島」『日本の考古学Ⅲ』河出書房 1966
- 70 李キリョン『石灘里遺跡発掘報告』遺跡発掘報告 第12集 1980
- 71 白容奎「隣山郡舟岩里原始遺跡発掘簡略報告」『考古民俗』1966-2号
- 72 鄭澄元・林孝澤・申敬澈『金海水佳里貝塚Ⅰ』釜山大学校博物館遺跡調査報告 第4

- 輯 1981
- 73 ソウル大学校考古人類学叢刊 第4冊【欣岩里住居址】 1973  
ソウル大学校考古人類学叢刊 第5冊【欣岩里住居址】 1974  
ソウル大学校考古人類学叢刊 第8冊【欣岩里住居址4】 1978
- 74 前掲註65のうち「1・玉石里遺跡」
- 75 趙由典「慶南地方の先史文化研究——晋陽大坪里遺蹟を中心に——」『考古学』  
第5・6合輯 韓国考古学会 1979
- 76 金延鶴「広州可楽里住居址発掘報告」『古文化』 2 1962  
西谷正訳の上記論文 『古代学研究』 49 1967
- 77 崔鍾圭・安在皓「新村里墳墓群」『中島進展報告 IV』 国立博物館古蹟調査報告第15  
冊 国立慶州博物館 1983
- 78 『考古学』第3輯 1974 韓国考古学会
- 79 姜仁求・李健茂・韓永熙・李康承【松菊里 I】国立中央博物館 1979
- 80 許玉林・許明綱・高美璇「旅大地区新石器時代文化和青銅時代概述」『東北考古与歴史』  
第1輯 1982
- 81 「河南新鄭裴李崗新石器時代遺址」『考古』 1978-2  
「裴李崗遺址1978年発掘簡報」『考古』 1979-3
- 82 「河北磁山新石器遺址試掘」『考古』 1977-6
- 83 「甘肅泰安大地湾新石器時代早期遺存」『文物』 1981-4
- 84 「1977年宝鷄北首嶺遺址発掘簡報」『考古』 1979-2  
中国社会科学院考古研究所編著『宝鷄北首嶺』 文物出版社 1983
- 85 中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館編『西安半坡』 文物出版社 1963
- 86 中国科学院考古研究所山西工作隊「山西芮城東庄村和西王村遺址の発掘」『考古学報』  
1973-1
- 87 鄭州市博物館「鄭州大河村遺址発掘報告」『考古学報』 1979-3
- 88 『京山屈家嶺』科学出版社 1965
- 89 山東省文物管理所・済南市博物館編『大汶口』文物出版社 1974
- 90 南京博物館「江蘇邳県大墩子遺址第二次発掘」『考古学集刊』1 1981
- 91 昌濰地区文物管理組・諸城県博物館「山東諸城呈子遺址発掘報告」『考古学報』 1980  
-3
- 92 山東省文物考古研究所他「山東姚官庄遺址発掘報告」『文物資料叢刊』 5 1981
- 93 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1969-1977年殷墟西区墓葬発掘報告」『考古学  
報』 1979-1
- 94 中国社会科学院考古研究所編著『殷墟婦好墓』文物出版社 1980
- 95 河南省博物館「鄭州南関外商代遺址の発掘」『考古学報』 1973-1
- 96 中国科学院考古研究所二里頭工作隊「河南偃師二里頭遺址三、八区発掘簡報」『考古』  
1975-5
- 97 北京大学考古教研室華県報告編写組「華県渭南古代遺址調査与試掘」『考古学報』  
1980-3
- 98 雲南省博物館文物工作隊「雲南呈貢竜街石碑村古墓群発掘簡報」『文物資料叢刊』 3  
1980
- 99 黄展岳「一九五五年春洛陽漢河南県城東区発掘報告」『考古学報』 1956-4
- 100 佐賀県教育委員会『西有田町縄文遺跡』1969  
佐賀県立博物館【坂の下遺跡の研究】佐賀県立博物館調査研究書 第2集 1975
- 101 湖西線関係遺跡発掘調査団『湖西線関係埋蔵文化財調査報告書』滋賀県教育委員会  
1973
- 102 前掲書(7)のうち、布目圧痕例のみを引用した。
- 103 前掲書(35)の中で、渡辺誠氏が「編布・平織・網目・網代」の各組織圧痕を分析してい  
る。
- 104 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIV』 下巻 1978

### 3. 磨製穿孔具集成

#### 1) はじめに

曲り田遺跡発掘調査中に、担当者の頭を悩ませた石製品があった。種々考えを巡らせたが、偶々現場見学に来られた西谷正氏に御教示を得て、穿孔具と納得した次第であった。その後、常々注意して諸例を観察しているうちに、意外と各地の遺跡から出土していることが判明してきた。これらの中には、既にその用法が看破されていた池上遺跡例もあり、筆者の不勉強を恥入らせる次第であった。また、恩師河口貞徳氏は、既に1965年に高橋貝塚出土例をもって石製穂摘具などの穿孔具と推定されており、又々至らざるを痛感したのであった。

ここでとり上げる「磨製穿孔具」とは、砂岩等の粗い石材を用い、棒状に整形・或いは自然転石のまま、両端・或いは片端を回転穿孔使用に用いた磨製石器である。日本の縄文時代～弥生前半期に通常みられるところの、黒曜石・安山岩製の打製石錐（ドリル）は含めていない。またここでは、錐部先端の出土例大型・小型の類別、つまり穿孔対象となる製品のための工具としての区別はさておいて、大小いづれも集成した。以下、各遺跡の出土例をみてゆきたい。

#### 2) 各地の出土例（第69～72図，第7表）

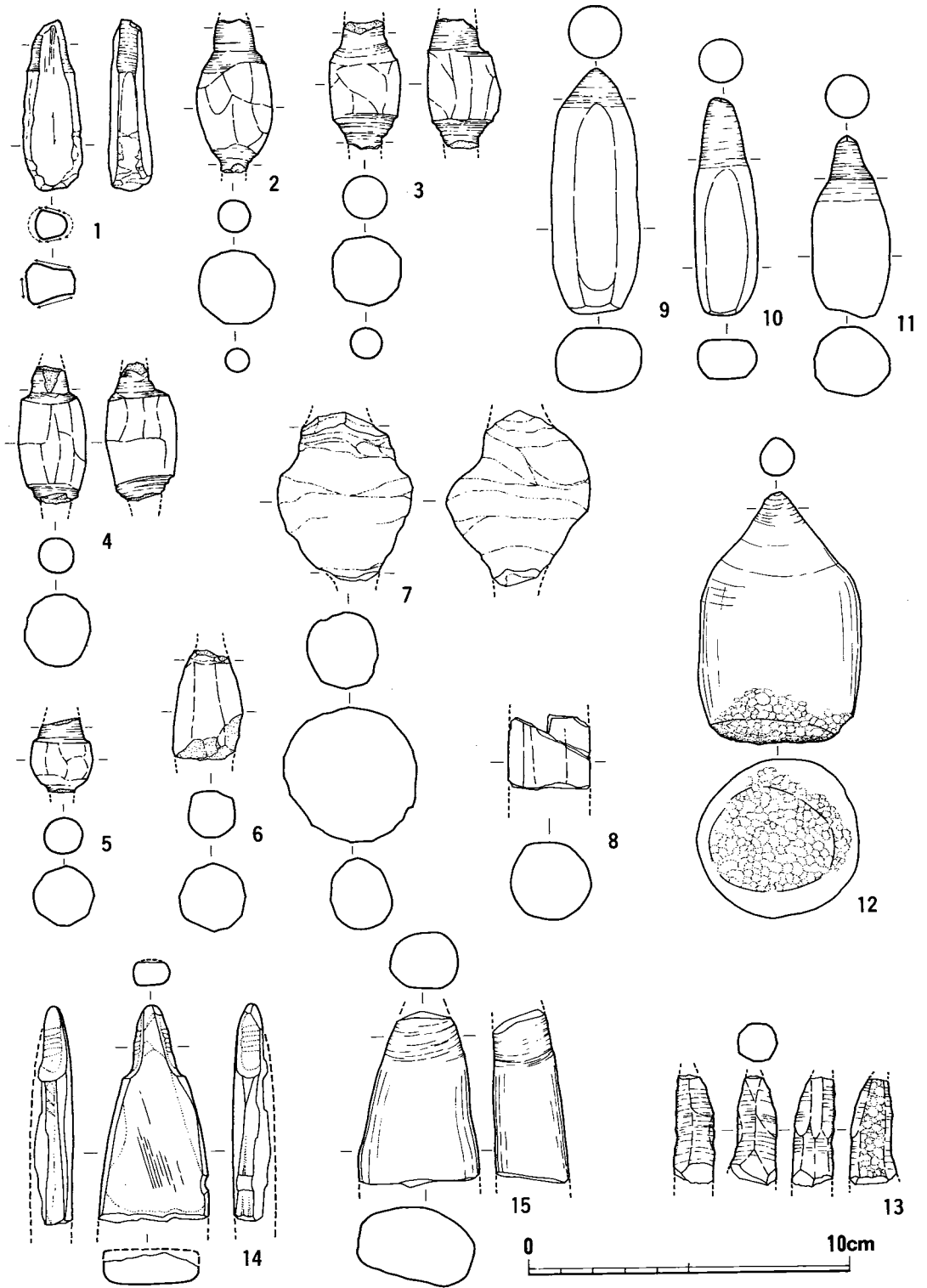
個々の詳細については、挿図・表・更には原文献を参照して頂くとして、主な特徴と若干の所見を加えることにする。

曲り田例<sub>(1)</sub>（1～8）は、小型品と中型品(7)に分けられる。2～6のような、小型で両端使用の形態をとるものは、今回集成した中には例が少なく、最も類似するのは、はるか中国東北部の29の文家屯例である。またその大きさで言うと、高橋貝塚例がかなり近い。1のように砥石転用（或いは兼用か）品は、14の菜畑に例がある。手持ちの手首だけの運動による回転穿孔法であるならば、このような体部が扁平タイプのものが却って便利かもしれない。7のような体部が丸っこいものは、手持ち回転穿孔には不向きかもしれない。そして、各々上下端の中心線が体部の主軸とずれるのは、3・4でも同様であり、また29の文家屯例もそうである。このことは完全な回転運動を意図しようとするならば、かなり非能率的となる筈で、理解に苦しむ処

第7表 磨製穿孔具一覽

(単位mm)

No.	遺跡・遺構名	所在地	長×最大径×錐部径	特徴	時期	文献註
1	曲り田 42号住	福岡県糸島郡二丈町	52.5×15.5×11.5~13	両面砥石、片端のみ使用、砂岩	曲り田期	1
2	" 13号住	"	(47) ×23×(9.5)~13	両端使用、砂岩	"	1
3	" 14号住	"	(40) ×22×(10.5)~15	両端使用、砂岩	"	1
4	" 41号住	"	(42) ×23×10 ~ 12	両端使用、砂岩	"	1
5	" 14号住	"	(23) ×19.5×10~15	両端使用、砂岩	"	1
6	" 4号住混入	"	(35) ×21×10	半欠、砂岩	"	1
7	" W1南半包含層	"	(52) ×44×16 ~ 21	両端使用、花崗岩	"	1
8	" 41号住	"	(23) ×25×——	上下欠損、砂岩	"	1
9	高橋貝塚	鹿児島県日置郡金峰町	77 ×27×17 ~ 0	片端のみ使用、砂岩質	高橋I式	2
10	"	"	69 ×19×14 ~ 7	片端のみ使用、砂岩質	"	2
11	"	"	58 ×24×14 ~ 6	片端のみ使用、砂岩質	"	2
12	十郎川 I-6区	福岡市早良区	77 ×49×27 ~ 5	他にも同類のもの1点あり 片端のみ使用・基部打痕	安山岩 曲り田~板付I	3
13	" J-5区	"	(33) ×14×14 ~ 6	錐部のみ	安山岩	3
14	菜畑 8層	唐津市菜畑	(68) ×33×10 ~ 4	砥石、扁平形	砂岩 弥生前期	4
15	板付 1区沖積層	福岡市博多区	(54) ×37×25~(16)	半欠	砂岩 夜臼~板付II	5
16	" 1区71号竪穴	"	(102) ×45×22~(14)	半欠	砂岩 夜臼~板付II	5
17	" "	"	(100) ×42×26~(23)	半欠、棒状	砂岩	5
18	" 1区96号竪穴	"	85 ×46×37~(30)	片端のみ使用	砂岩 板付I~II	5
19	" E-5・6区5層	"	117 ×50×16~(7)	片端のみ使用	砂岩 弥生前期	6
20	大木II区 2号住	福岡県朝倉郡夜須町	(84) ×53×44~(21)	両端使用の可能性あり	砂岩 夜臼~板付I	7
21	焼ノ正 3号袋状竪穴	福岡県飯塚市立岩	(44) ×6×5 ~ 0	細形	粘板岩 弥生 中期初~前葉	8
22	八王子第2地点1号住	福岡県嘉穂郡碓井町	54 ×16×12 ~ 5	片端はのみ状刃	砂岩 弥生前期後葉	10
23	辻田 19号袋状竪穴	福岡県春日市上白水	36 ×14×10 ~ 6	片端のみ使用	砂岩 弥生前期後葉	11
24	門田谷地区	"	52 ×20×12 ~ 8	片端のみ使用	砂岩	12
25	四ツ池 F地区W49	堺市浜寺船尾町	104 ×55×28 ~ 18	両端使用	砂岩 弥生前~後期	13
26	池上 LX56溝	和泉市池上町	95 ×48×42 ~ 16	両端使用	和泉砂岩	14
27	" MJ54	"	114 ×41×17 ~ 7	両端使用	和泉砂岩	14
28	" MK60	"	103 ×33×28 ~ 0	片端のみ使用	石英閃緑岩	14
29	" KX62	"	63 ×43×24 ~ 15	両端使用	砂岩	14
	" KJ64	"	115 ×33×32 ~ 10	片端のみ使用	和泉砂岩	14
	" MQ55	"	144 ×50×24 ~ 19	片端のみ使用	和泉砂岩	14
	" 不明	"	(63) ×38×20 ~ 6	下半欠	石英閃緑岩	14
	" KT60	"	122 ×62×47 ~ 19	下半欠	和泉砂岩	14
30	文家屯 採集品	中国遼寧省	42 ×20×9 ~ 3	両端使用	砂岩	17
31	大心里	韓国京畿道楊平郡	135 ×62×35 ~ 26		朝鮮無文土器	16
	西乾溝	中国	84 ×52×40 ~ 21	両端使用	仰韶	18
	澗溝	中国河北省邯鄲	91 ×54×44	両端使用	粗砂岩 竜山	18
	林山砦	中国河南省鄭州		両端使用か	仰韶	18
	百家村	中国河北省邯鄲		2例あり(両端使用か)	竜山	18
	東郷(林家)	中国甘肅省隴西県	200以上×	片端使用	仰馬家壺類型	16
追	綾羅木郷	山口県下関市		4(~6以上)点あり、大・小類あり	弥生前期後葉 ~中期前半	追註



第 69 図

穿孔具集成 1 (縮尺1/2)

1~8 曲り田遺跡 9~11: 高橋貝塚 12・13: 十郎川遺跡  
 14: 菜畑遺跡 15: 板付遺跡第 1 区

である。7の石材のみ粗い花崗岩質であるが、表面のざらつきが著しく、他の砂岩質のものよりも却って穿孔能率は良いと思われる。1～6までの使用された先端部（以下錐部と称する）は、他の大型品例よりはるかに小さく、やはり石製穂摘具等の小径孔に対する穿孔・仕上げ研磨に使用されたと考えられる。本遺跡出土の穿孔された遺物は、石製穂摘具・石製紡錘車・土器の補修孔・玉類などであるが、玉類の孔は径が小さすぎてこの種穿孔具錐部の大きさと合致しない。石製穂摘具の穿孔は、当初段階で細かい敲打、或いは鋭利な工具先端での刺突状の痕跡がみられる例があり、最初から磨製穿孔具を使用したとは考えにくい。また、この種穿孔具を使用した作業中に破損して廃棄せられたと考えるものが4例もあり、穿孔作業の困難さを推測できる。またその時にかなりの重量をかけたことも、破損し易かった理由として考えられよう。土器補修孔の穿孔も、孔の大きさ、形状を観察すると、石製穂摘具におけるそれと同種であり少なくとも、仕上げにはこの種の穿孔具を使用したことが確実であろう。7は曲り田例中では大きくその対象とする用途が不明確である。ただ先端が他例の如く細くなるとすれば、石製穂摘具等への穿孔具としてより、効果的な道具となるかもしれない。また石製紡錘車への穿孔はその径が小さく、真直ぐな断面形態をなしており、石製穂摘具などへのそれと全く異趣であり、他類による穿孔法を考えねばならない。

**鹿児島県高橋貝塚例**（9～11）は、大きく2種に分けられる。即ち先端錐部の形状が、そのまま円錐形状に尖るもの（9）と、体部から一度段をつくり、次第に細くなるタイプ（10・11）である。前者は全体にやや大型で、後者がより小型であることを考えると、後者タイプのものをより細かい作業（例えば貫通部分等への最終的仕上げ研磨）に用いたのではないかと推測できる。9～11いずれも弥生前期初頭高橋Ⅰ式に伴うと考えられており、曲り田例と近く、曲り田期～弥生初頭において、小型タイプのものが使用されることが明らかとなった。

**十郎川遺跡例**（12・13）は基部の太い先端円錐形と、刃部のみとである。12は基部端面に打痕がみられるが、これは回転運動を伴わない、敲打のみの穿孔に使用されたことがあったとも考えられる。錐部には回転使用痕しか残らないので、この場合対象がやや軟質の木材等への使用が考えられる。太形で重量もあり、充分可能性はある。13の錐部片は、断面が角ばった状態を残しており、穿孔具としての製作された当初の形態が想定される。これら十郎川例は、共伴土器からみて、曲り田・高橋例と同様に弥生前期初頭前後のものと考えられる。

**菜畑遺跡例**（14）は、曲り田の1と同様に体部面が砥石となる扁平タイプである。全体の大きさは曲り田例より大きい、錐部の直径からみると、石製穂摘具への穿孔具としてよからう。時期も弥生前期の層から出土しており、これまで掲げた諸例の範疇に含まれよう。

**板付遺跡 出土のもの**（15～19）は、いずれも大型品で、棒状の自然石を使用したような類である。時期も、共伴土器は夜臼式から弥生前期後半期までのものであるが、各遺構からの判断からは弥生前期後葉に属するものが多いようである。16と17は回転磨痕は明らかでない。基



部はいずれも径40～50mmと太く、12の十郎川例に似る。15・18・19はともに体部から段がついて錐部へとのびるが、19は更にもう一段細くなっている。19程の錐先端径であったなら、小径の石製穂摘具に対する穿孔も可能であろう。ただ、段のつく部位まで使用する穿孔作業となれば、直径2cm強の穴が穿たれることになり、対象が環状石斧中央孔の仕上げ研磨等に限られてくるであろう。

**大木遺跡例** (20) も、やや扁平な自然石の片端のみを使用したタイプで、大型品の部類に入る。<sup>(7)</sup> 反対側の端部は欠損して、下半側面は研磨されており、両端使用も考えられる。夜臼式(新)乃至板付Ⅰ式期の円形住居跡出土品で、時期は確定できる。全体の大きさ、回転研磨痕の状況からみて、大径の穿孔作業に使用されたものと推定される。

**焼ノ正遺跡出土例** (21) は、これまで述べた類と異なり、細身の小型品である。遺跡は「立岩石庖丁製造所址」<sup>(8)</sup> で著名な位置を占め、石製穂摘具多数(未製品も含めて)も出土している。<sup>(9)</sup> この穿孔具出土の袋状堅穴の時期は、弥生中期初頭～前葉と考えられ、立岩における石製穂摘具製作開始時期にも近く、それらとの関連で最も具体的に用途が確定できる穿孔具例となろう。形態的にはこれまで掲げた例と全く異なる。石材も粘板岩製と、その穿孔能力に疑問を感じさえする。しかし、仕上げ砥などとして水を付けて使用される石材である事を考えると、この焼ノ正穿孔具は、孔細部の仕上げ研磨に使用されたとする事も可能であろう。本遺跡からは石製紡錘車も出土しており、それには両面穿孔例もあり、この種穿孔具の使用も考えられる。

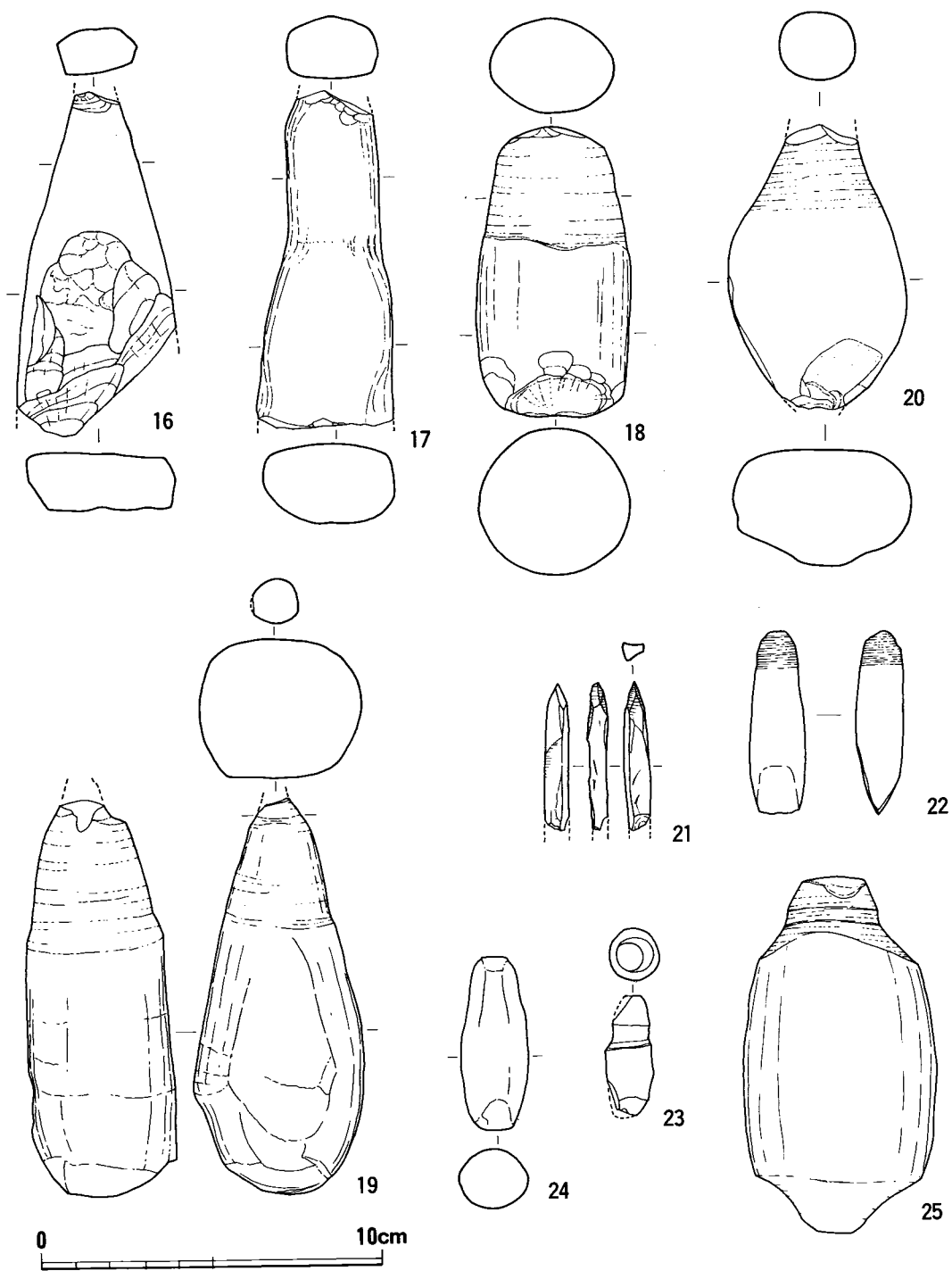
**八王寺遺跡出土例** (22) は、小さな円柱状砂岩の片端を回転穿孔に使用しており、他の端部は一見石のみ状の刃部をつくり出している。弥生前期後葉の住居跡出土品であり、この期前後の穿孔具として、後記する辻田例等とともに定型でない小型穿孔具の散見する類に位置付けられよう。これも石製穂摘具の穿孔具と考えてよかろう。

**辻田遺跡出土例** (23) は、板付Ⅱb式土器多量を伴う袋状堅穴出土品で、先端が段をなし更<sup>つじはたけ</sup>に截頭円錐状となる類である。<sup>(11)</sup> 先端は丸味をもった平坦面をなし、穿孔そのものよりも、粗貫通後の孔内面の仕上げ研磨に使用されたことを示している。

**門田遺跡谷地区出土例** (24) は、片端頭部がわずかにくびれたものである。<sup>(12)</sup> 回転研磨痕は明確でないが、報告者は「穿孔後の研磨に用いた石器であろう」と推定している。時期は、谷の包含層のため、縄文早期～歴史時代まで連続した土器を伴い、明確でない。辻田19号袋状堅穴例と近い、弥生中期初頭前後のものではなかろうか。

以上の、九州の曲り田期～弥生前半期の穿孔具は、大別して3類に分けられる。

- 1類 先端が段をなし細くなる小型類の定型化したもの。時期が弥生早期～前期初頭に限定される(曲り田・高橋・菜畑など)。
- 2類 全体が自然石の棒状品を用いた大型品で回転研磨もかなり径の大きい部位まで残るもの。時期的には夜臼～弥生前期前半ぐらいいままでに或る程度限定される(十郎川12・板付各



第70図 穿孔具集成2 (縮尺1/2)  
 16~18: 板付遺跡第1区 19: 板付遺跡E-5・6区 20: 大木遺跡 21: 焼ノ正遺跡  
 22: 八王子遺跡 23: 辻田遺跡 24: 門田谷遺跡 25: 四ツ池遺跡

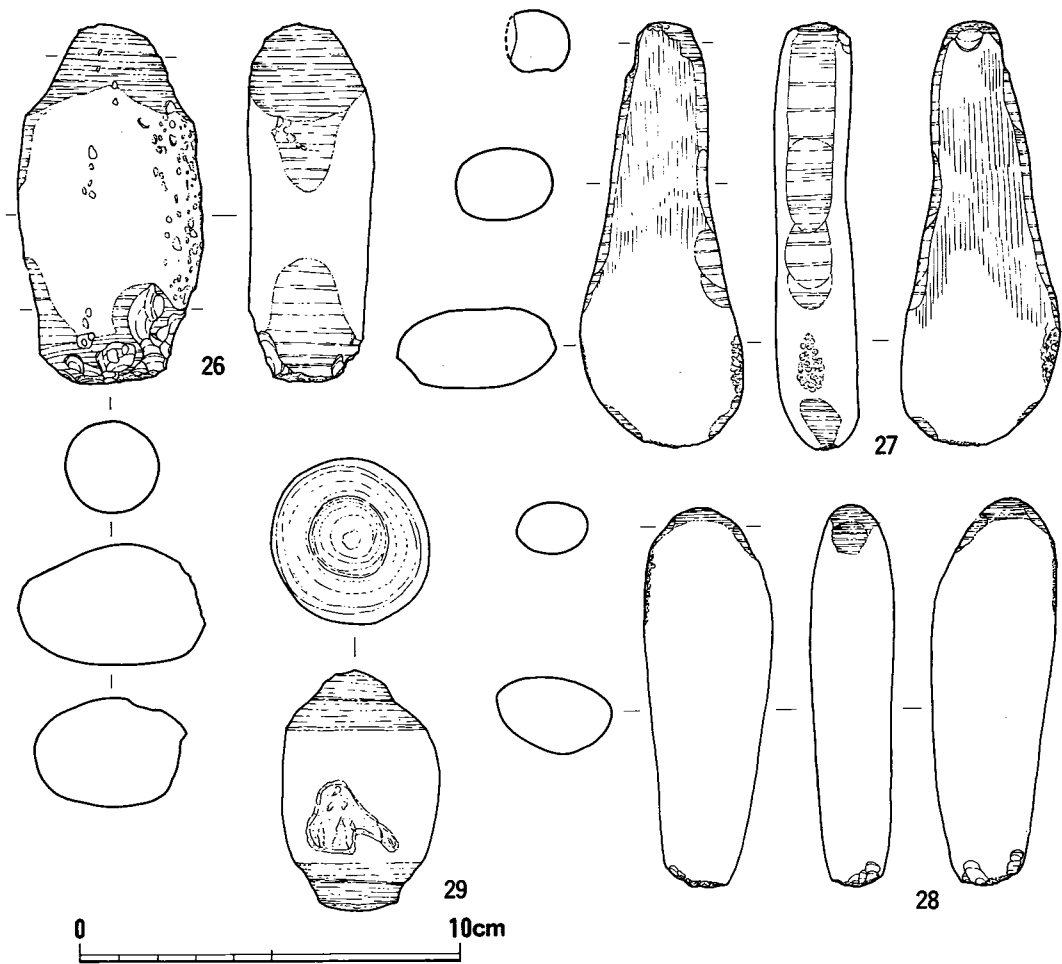
例・大木例)。

3類 小型細形で定型化しないが、弥生前期後葉～中期初頭というやや遅れた時期に残る類(辻田・八王子・焼ノ正例)。

以上の三類のうち、1・3は小径の石製穂摘具などの穿孔に、2類は小径も穿孔に使用された可能性も有するものもあるが、大旨大径の環状石斧等の穿孔に使用されたと考えられる。また各々の系統としては、時期的若干のずれからも考えられる如く、1類はほぼ確実に大陸系磨製石器群導入に伴って出現したもので、彼地に出自を求めるべき類と考える。また、2類も定型的ではないにしても、時期的に1類と重なる部分もあり、海外に例を求めるべき類であろう。更に3類のうち24(辻田)などは、形態からみて1類の系統をひくものであるが、他は国産石製穂摘具製作の各地の在地的な様相に伴って必然的に散見される類であろう。

池上・四ツ池遺跡出土例(25～29)は、報告に詳論されており、重複は避けたいが、すべてが図示公表されていないので、筆者なりに、まとめておきたい。四ツ池遺跡例(25)と、池上遺跡例のうち16・29などは、両端に使用部をつくり出し、形態上は一見曲り田等(13)の九州第1類(14)に似るが、大きさが全く異り、想定される用途も自ずから違うと考えられる。図には示されないが、表中出土地点不明の1点や29などは、穿孔そのものに使用されたと考えられる。また、四ツ池例25や26などの明瞭に段のつくものは回転穿孔作業のうち、孔を掘げたり仕上げ研磨を行なったりしたものと考えられる。所謂「ヘチマ形」タイプの27・28は、完全な連続回転運動を行なう作業には不向きであり、その扁平形の形態からみても、手持ちの手首だけによる反転回転作業にのみ用いられたものであろう。以上の池上・四ツ池出土穿孔具は報告で「環状石斧や環石等の中心孔を穿孔する」とされる如く、先端が太く、石製穂摘具等に使用される類ではない。また孔内面の仕上げ工具の存在も明らかにされている。

四ツ池・池上例の系譜は、必ずしも明らかではない。これらのもっぱら環状石斧等の大形孔の穿孔具であり、九州第1類の形状を有した大型品のタイプが現状では九州にみられず、畿内にみられることは、環状石斧そのものの伝播様相を示唆するかのようでもある。つまり、日本では、縄文早期に散見し、その後、晩期になって北陸・中部あたりに集中する。弥生期初頭には環状石斧が伴わず、前期後半以降～中期になって盛行する。しかも、その分布範囲は、九州出土量は全体の1/4程度にすぎず、残りは関西・長野・山形にまで分布している。このことは、水田稲作受容期頭初に環状石斧が他の磨製石器群とセットとして導入されず、一時期置いた後に、九州でも受容されたことが言えるのである。これは、必ずしも、それまでの如き北九州に最初現的な受容の経過をたどるものではないかもしれない。これらのことから、池上・四ツ池の環状石斧とのセットとしての穿孔具は、石製穂摘具用穿孔具としての九州第1類とは伝播時期・系譜を異にしたものと言える。

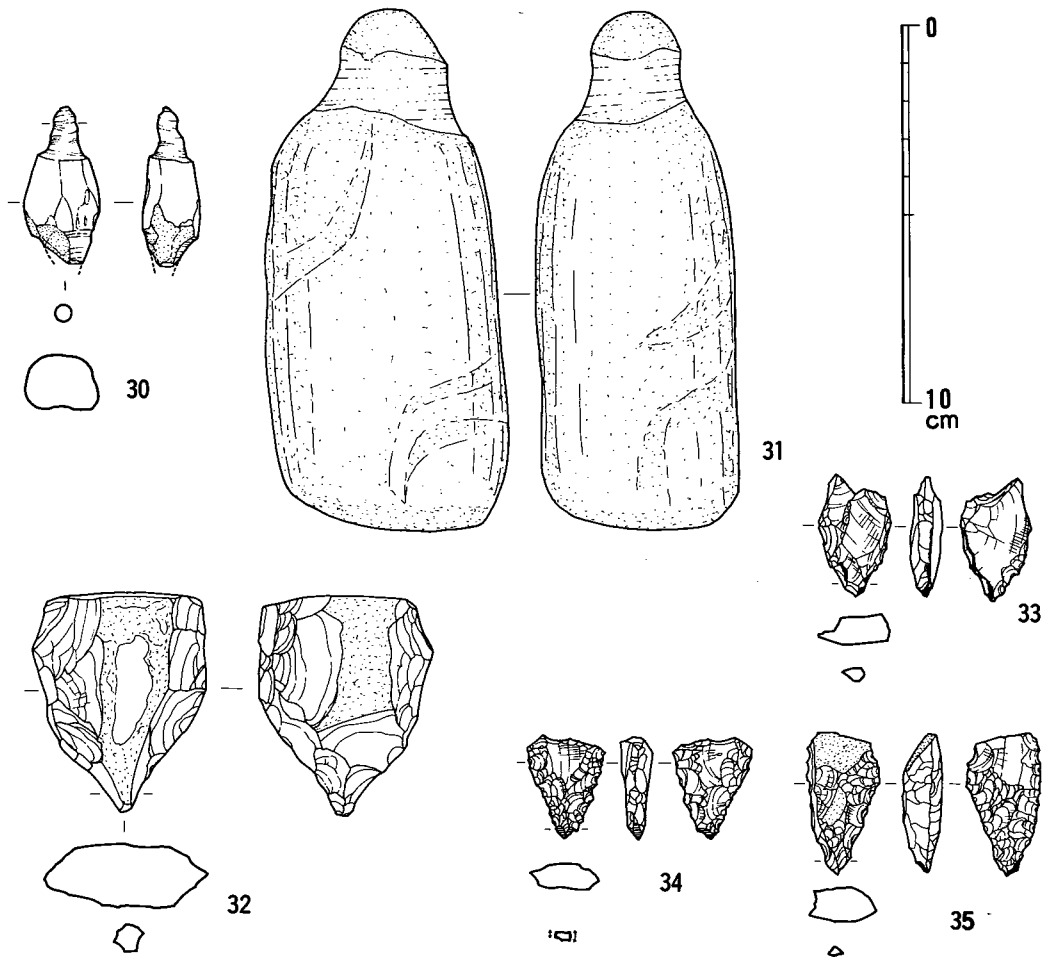


第 71 図 穿孔具集成 3 (縮尺1/2)  
26~29: 池上遺跡

### 《参考資料》

日本国内の例を述べてきたが、既に各例に関してその系譜を考えた際に、海外例を念頭に置いたので、若干の例をとり上げておかねばなるまい。ここでは西谷氏の先駆的論文<sup>(16)</sup>があるので、詳細は避けて、問題点の指摘に止める。

中国遼寧省營城子会文家屯採集品<sup>(17)</sup> (30) は、大きさ、形態など、九州第1類の曲り田例に酷似する。ただ、先端部が振り鉛状に、ひねったような形態になっており、手持ちの手首運動のみによる反転回転作業に伴う痕跡と考えられる。同遺跡採集品には、有孔の玉製品（未製品も多し）がかなりみられることから、これら有孔石斧・環玉等への穿孔に使用されたものと考えられる。なお、他に1点同形態のものが在るが、これは淡灰緑色の玉質品であり、先端部は莖



第 72 図 穿孔具集成 4 (参考資料) (縮尺1/2)

30：文家屯遺跡 31：大心里遺跡 32：辻田遺跡

33：曲り田堤田遺跡 34・35：曲り田遺跡

(舌)状に削り出しているだけで、回転方向の磨擦痕が全く認められず、一応他種品と考えておく。この文家屯遺跡は、中国東北新石器時代の小朱山中層文化（略大汶口文化相当）に属するとされる。

韓国大心里例<sup>(16)</sup> (31) は先の西谷氏論文に掲げられたもので、全体に大型で先端部も太く、環状石斧穿孔工具として最適の類である。朝鮮半島無文土器の時代に環状石斧が特徴的に共伴することは、周知の事実であり、西谷氏の指摘に異論は無い。

中国の西乾溝・潤溝・林山砦・百家村<sup>(18)</sup> (2例)・東郷の各例<sup>(16)</sup> (表参照) は、いずれも大型例に属するものと思われる。西乾溝例は、報告写真によると長さ8 cm強で、両端使用の池上・四ツ池例に類似するものである。中国の仰韶・竜山文化における大口径の有孔石器には、各種

の有孔石斧類・環石・環状石斧などがあり、それらへの穿孔具と考えられている。

また、中国・朝鮮出土石製穿孔具で、小型の九州第1類のようなタイプは、文家屯例以外は管見に触れていないが、小径孔のための工具として、多く存在する筈と考えられる。中国報告中にも「石鉛頭」として文章中に記載されていることが時偶あり、つぶさに現地にて当たってゆくと、かなり存在するものと思う。

### 3) 穿孔技術の復原(第73図 参照)

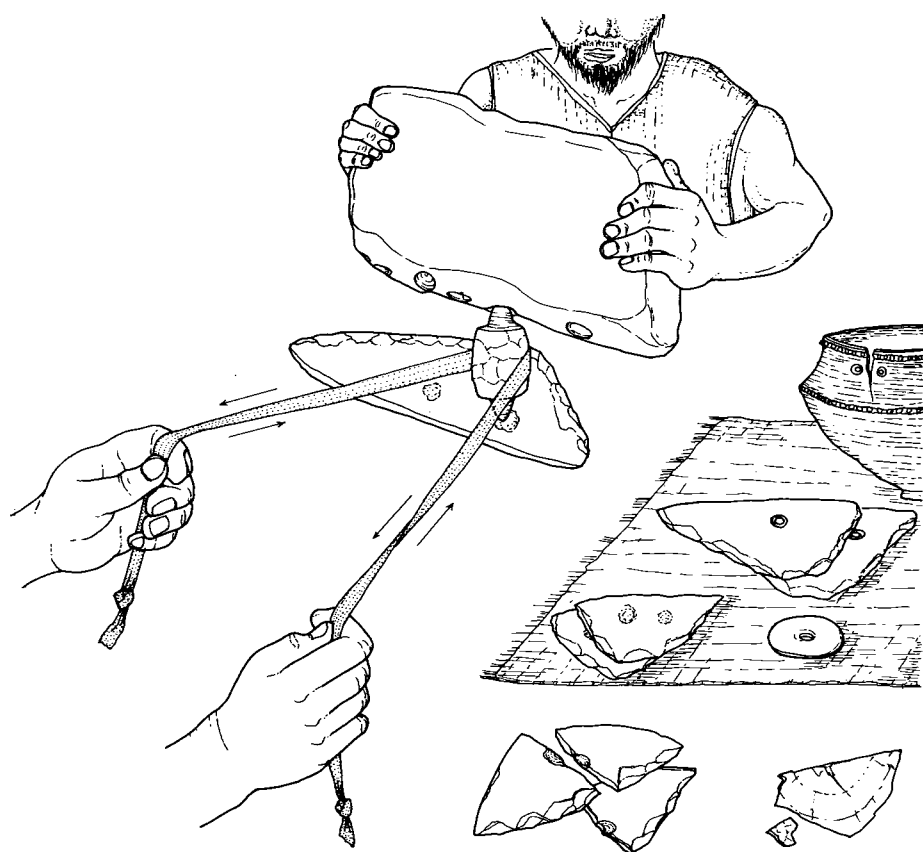
物体(金属・石・骨・土器・木・皮等)に穿孔するという作業は、古今東西、その目的・対象物に応じて、多くのパターンがみられる。その方法は基本的に2種に大別出来る。回転穿孔(摩擦穿孔と挟り取り穿孔)と、他の穿孔法とである。後者には打撃法・刺突法・焼孔法(融解法も含む)などがある。回転摩擦穿孔法には、穿孔具以外の道具を使用しない手首だけの運動による反転手首穿孔と、連続反転回転による(革紐〜舞鑽等の道具を使用)のもの、また、柄を付けたモミ錐のような両手作業によるものなどが考えられる。また機械を使用した完全連続回転穿孔もある。

九州第1類の小型品や、池上、四ツ池例、中国各例などのうちに、両端使用の穿孔具がみられる。これらを詳細にみても、上下端ともに同規模・同形態ではなく、いずれか片端の錐部がくずれたり、径が異なったりする場合が多い。また、両端使用品の場合、両方とも同様の機能を有していたのか疑問を感じていた。錐先部の破損率は高かったであろうが、指先間に収まる程の大きさのもので、片端が破損したからといって、反対端を穿孔用に加工することはかえって至難の技術を要するのではなからうか。しかも石材は入手の容易な砂岩においてである。少なくとも、小型の上下端を突出させるタイプのものは、その製作当初から両端を作り出していたのではなからうか。

池上報告者は、その回転磨痕の観察から、穿孔法として、均一な連続回転穿孔法を考えている。筆者も曲り田例などの観察からこの種の技法を想定している。ただ、中には文家屯例などのように、手首運動だけによる反転回転穿孔法と想定されるものもある。

では、どうして上下両端に使用部を有するのか。仮定として2通り考えられる。まず**第1仮定**として、上下端で同時に穿孔を行なったということ。つまり、一人が穿孔しようとする未製品を下に置き、その上に穿孔具を据えて、更にその上端に他の未製品を乗せて上から両手でおさえて安定を計る。他の1名が穿孔具体部に掛けた(革)紐ベルトを両手で握って引っ張り、それを動かして連続反転運動による穿孔作業を行ない、同時に2個体分への穿孔を得たということである。他の**第2仮定**としては、2個体同時穿孔ではなく、上端には重量をかける意味で軟

質の石塊などをのせて、安定を計り、他は上記と同様に(革)紐ベルトによる連続反転運動がおこなわれたのだという想定である。両方法いずれも可能と考えられるが、第1仮定の場合、穿孔位置がその対象物の中心よりずれて片寄る場合は(例えば双孔の石製穂摘具など)、上に乗せた未製品をも安定させるのはかなり困難になると考えられる。しかし、中心に孔を穿つ環状石斧等であれば、上にのせた未製品自体にも重量が在るので、安定した作業を確保し得るであろう。第2仮定を考えたのは、一つには片端使用穿孔具にも均一な連続反転運動の痕跡を見出し得るからであり、もう一つの理由としては、曲り田遺跡出土の「火鑽臼状石器」としたものに消えない疑問からである。〔曲り田遺跡〕Ⅱ中巻第162図)この石器は既報告の中でも触れたように、粘板岩質の軟質石材で、小孔が多く石材周縁に穿たれている。(すべて未貫通)火鑽臼だとしてもやや扁平な石材の側縁にあたる部位のみにどうして孔が集中するのか。石を立てた状態でないと孔が穿てないものさえある。更に火熱の痕跡は孔内面縁辺には全く認めら



第 73 図 穿孔具使用想定図 (「第2仮定」用法の場合)

れず、孔内面は明瞭な回転条痕が観察される。それで、考え及んだのがこの第2仮定である。即ち、この石を両手に持ち、両端使用穿孔具の上端に浅い孔をはめ込んで重量をかけ、安定を計って連続反転穿孔法を行ったと推定する訳である。そしてこの上石の孔が深くなりすぎると回転能力が低下するので、場所をずらしていったものと考えられる。この第2仮定法では片端使用のみの穿孔具も、上に木などのおさえ具を置けば、革紐ベルトなどによる能率的な連続反転運動が可能である。また、小型穿孔具体部表面が完全に研磨製形されないままに、角ばったままであったり、断面形が多角形的に歪つてあったりするもの、(革)紐ベルトを掛けた時にすべらないようにした工夫と考えられよう。また、曲り田穿孔具の説明のところで触れたように、体部の主軸と錐部中心線がくい違いをみせる現象も、このベルト使用で説明がつく。即ち、慎重な穿孔作業であるが故に、穿孔当初は少しずつ(180度以内に)反転回転させていたために、紐に引っ張られた方の錐先部が余計に磨滅して行って、主軸のずれが生じたものと考えられる。

また、使用法としては、九州第3類とした焼ノ正例などの細身の類は、長い柄を付けてモミ錐と同様の使用法も考えられよう。

#### 4) 打製石錐との関係

黒曜石・安山岩等の打製石錐(ドリル)は、旧石器時代からその形態が連続しており、縄文時代・弥生時代(九州では前期段階まで)を通じて多くみられる。弥生時代の畿内の例では、蜂屋晴美氏によりこの種の打製石錐が石製穂摘具紐孔の穿孔具としてきめ細かに論証されている。<sup>(19)</sup> 実際に、池上遺跡出土石錐608点のうち、93点以上に顕著な回転磨痕が認められ、堅い材質のものへの穿孔作業に使用されていたことがわかる。これらは、錐部が細長いタイプではなく、体部から鈍く錐先へと加工したものに多い。対象物を石製穂摘具とすると、当然の形態選択の結果であろう。

縄文時代のもをみても、先端の長いタイプは殆んど途中で折損しており、また、その錐部に回転磨痕が明瞭に残るものは殆んど無い。この使用痕については、ここでは少なくとも堅い対象物に対する回転反復運動による錐先断面が丸くなるような類を指しているのであり、微細な顕微鏡的使用擦痕を言っているのではない。そのような状況からみて、縄文期打製石錐は、皮等への刺突穿孔具、或いは木・骨角器・土器等への細部彫刻・穿孔などの用途が主であり、堅い石材への穿孔使用は極めて稀であったと考えられる。また、縄文期には確かに硬玉類への穿孔品がみられるが、これらは、かえって骨・竹・木などの軟質材の棒錐・管錐によって、媒材を用いて穿孔する方が容易であることが実験的に確かめられている。更に、中国新石器時代においても骨製の錐が発見されており、打製石錐が堅い石材への穿孔具として不適格であることが推測されている。



九州の弥生期における打製石錐は畿内と比べてそれ程割合は多くない。しかも、遅くとも前期末～中期中頭段階で定型化したものは消滅してしまう。これは畿内の様相と若干異なる。図中32は福岡県春日市辻田遺跡第12号住居跡出土品で、板付Ⅱ式に属する泥岩製の打製石器である。明確な回転磨痕は認められないが、先端は丸く擦れている。報告者も「石庖丁等有孔部の研磨に関係がありそうだ」と考えており、石材や形状から従来の縄文期石錐との異質性が観察される。33は、曲り田遺跡中の堤田出土の黒曜石製石錐で、先端から側縁が明瞭に磨れているものである。34・35は曲り田例で、いずれも錐先部に著しく回転磨痕の残る例である。堤田・曲り田例いずれも弥生早期の所産と考えており、石材を対象とした回転磨痕であることは明らかである。このように、北部九州においては縄文的な打製石錐が、水田稲作受容頭初期においては、石製穂摘具などの石製品への穿孔具として用いられたことは明らかである。しかも、同時に、磨製穿孔具が使用されている。このことは同じ穿孔作業の中でも作業段階の違いを示すものと考えたい。ただ、この種打製石錐が、石製穂摘具製作が盛行する間ずっと連続して用いられる様相は認められない。これは、九州においては、仕上げ段階での小型磨製穿孔具の使用が少なくとも中期まで認め得ることで、その様相が首肯できる。畿内で九州第1類のような小型穿孔具がみられないのも、打製石錐の石製穂摘具用穿孔具としての使用が普遍化したためであろう。

畿内では、当初期の小型磨製穿孔具を受け容れるに到らないままに、石製穂摘具のみは見よう見まねで製作入手せざるを得なかった。その段階で製作技術を伴わないままに、縄文期からの打製石錐を転用して穿孔具に採用していった状況が看取される。そしてこの様相は、石製穂摘具全体の北部九州例との違いの一環としてとらえ得ると考える。

## 5) 環状石斧用穿孔具をめぐって

環状石斧そのものの分布・時期を再考してみよう。朝鮮半島では、西北半部の無文土器文化にかなり普遍的に伴っており、南半部無文土器文化にはそれほど顕著ではない。日本の縄文早期の例は一応別として、晩期における分布は、北陸を中心として中部地方あたりまでにほぼ限られるようである。九州域でこの期の確実な環状石斧例は皆無とってよい。この状況から、朝鮮半島から日本海を渡って直接北陸沿岸へ伝播した可能性も無視は出来ない。弥生期の環状石斧は、九州で弥生前期後半以降～中期に集中して20数例、四国で10例以下、本州畿内以西で30数例、長野県を中心とした中部地方で30数例、関東で数例、山形県では弥生後期までの間に6例が知られている。この分布状況をみると、中部地方・山形県あたりはかなり特異な状況が看取される。このあたりの環状石斧集中の状況は、縄文晩期から連続したもののようである。

九州において、環状石斧が水田稲作受容期頭初において存在しないことは、受容する側に環

状石斧を必要としない理由があったのか、それとも、頭初の文化伝播は環状石斧を伴わない地域からの波及であったのか、両方とも可能性がある。今後のより詳細な分析によりその説明が為されるところであろう。また、他の所謂大陸系磨製石器群の受容様相と異なることも既に述べた。

環状石斧等の穿孔具とされる池上・四ツ池例や、九州第2類は、いずれも九州第1類よりも時期的な後出性がみられ、環状石斧そのものの弥生期出現状況と一致するようである。このことは、水田稲作文化受容の頭初（曲り田期）と異なった、いわば第2波的な文化の小波及が存在したことを暗示している。ただかなり小規模なものと考えられる。この文化内容としては、環状石斧とその穿孔具の他に、所謂松菊里型住居跡<sup>(21)</sup>の存在、つまみ形の土製紡錘車、板付遺跡にみられる有孔石斧<sup>(22)</sup>などを考えている。ちなみに、第3の波及ははかなり大きくて、相互的な性格を有している。即ち、弥生前期末頃の南部朝鮮無文土器に直接的に形態を結びつけ得る「朝鮮系無文土器」<sup>(23)</sup>出現期であろう。環状石斧そのものの土器共伴状況からみると、現状ではこの第3波の方が良いかもしれぬが、大型穿孔具の存在を考えると、第2小波によるものと推測される。なお、板付出土有孔石斧の孔はその両面穿孔の形態・大きさからみて、九州第1類の小型穿孔具を使用したものと判断される。

## 6) 磨製穿孔具の歴史的意義

以上述べてきたように、水田稲作受容期における磨製穿孔具は、九州内における形式的な差異、畿内と九州との様相の差異が明らかとなった。更に、今後の問題点としての、環状石斧導入過程の特異性も指摘し得た。また、磨製穿孔具そのものの使用技術の復原も行なってみた。次には、その歴史的な位置付けを行なわねばならない。

日本の縄文時代から弥生時代に突入する時期に、多くの新しい文化要素が指摘されてきた。水田稲作・金属器・土器・大陸系磨製石器群・紡織技術等々である。しかし、これらの諸要素は、近年の成果にみるとうり、全く突如として弥生期頭初に出現するという類ではないものが多いことが明らかになりつつある。具体的には、稲作そのものも、その耕作法は別としても、粃圧痕等から縄文晩期には確実視されており、扁平片刃石斧的なものは礫石原、原山<sup>(24)</sup>でも出土している。また、石のみ状の柱状石斧や、柱状の抉入となるかと思われる弥生的そのものの片刃石斧なども礫石原遺跡出土品の中にみられる。土器は、縄文と弥生間に一線を引くことさえ困難な程の連続性がみられる。紡織技術については、既に論じた通り、弥生早期に画期は認められるものの、縄文晩期には平織布圧痕が確認され、紡錘車も連続している。

このような状況の中で、磨製穿孔具はまさに曲り田期以降の、言わば弥生的遺物として、縄文的様相と切り離し得る全く新しい要素を有する文化的遺物、と位置付けられる。これは、ま

た、有孔磨製の石製穂摘具、石製紡錘車、有孔石斧などと同列の歴史的意義を有すると言える。これら新時代遺物は、換言すれば、明確な海外からの頭初期水田稲作文化に伴う、数少ない確実な文化要素である、ということである。

ただ、この小論中で海外例を詳論し得なかった事は、上記の論拠を危うくするかもしれない。しかし、見るからに小遺物であり、殊に中国の報告には全く図示されていない状況を見ると、筆者の未だ知り得ていないかなりの数が存在することは、推測に難くない。また、日本国内にも今回集成した以上にかなり出土していることも充分考えられる。

以上、取敢えずこの異種石器について集成を試みた次第である。池上遺跡報告者、西谷氏論文を始めとする諸先駆的研究に対して、屋上屋を架す愚を行なうだけに終わったが、今後の国内・海外例資料収集の契機となればと念願する次第である。諸賢の後教示・御叱正を、お願いしたい。

(1985年2月19日)

- 註1 福岡県教育委員会『曲り田遺跡 II』中巻 1984
- 2 河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」考古学集刊 第3巻2号 1965
- 3 橋昌信『十郎川 二』福岡市教育委員会 1982 この報告中では「磨製石錐」の名称が与えられている。
- 4 唐津市教育委員会『菜畑』1982
- 5 福岡市教育委員会『板付——市営住宅建設にともなう発掘調査報告書—1971~1974』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集 1976
- 6 福岡市教育委員会『板付』1981
- 7 福岡県夜須町教育委員会が1983年に圃場整備事業に伴って発掘調査を行なった。現在報告書準備中で、近日刊行予定である。この穿孔具の実見・実測に際し、快く便宜を計られた佐藤正義氏に感謝の意を表したい。尚、示した所属時期は現時点での筆者の見解であり、整理が完了した時点で改めて検討し確認したい。
- 8 浜田信也 松井和幸他『焼ノ正遺跡』立岩周辺遺跡発掘調査報告書 第4集 1983
- 9 中山平次郎「飯塚市立岩焼ノ正の石庖丁製造所址」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告』9 1934
- 10 井上裕弘『八王寺遺跡群』碓井町教育委員会 1984
- 11 木下修『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第7集 1978
- 12 木下修『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第11集 1979
- 13 第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』15号 1970  
第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』17号 1971
- 14 大阪府文化財センター『池上遺跡』第3分冊の1 石器編 1977
- 15 弥生時代環状石斧については出土地名表が下記文献に作製されている。その後の出土状況を併察してもこのような大勢は変わらない。  
山口譲治作製・木下修協力「Tab.7—3 弥生時代環状石斧出土地名表」『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集 福岡市教育委員会 1976

- 16 西谷正「朝鮮の環状石斧用穿孔具について」『朝鮮学報』 第99・100輯 1981
- 17 渡辺正気「関東州文家屯の石器」『九州考古学』3・4 1958 九州大学蔵品で、玉製片刃石斧 環玉等多くとともに採集されている。
- 18 佟柱臣「仰韶・崑山工具の工藝研究」『文物』 1978—11  
澗溝・林山砦・百家村の遺跡、の報告は各々、『考古』1959—10、『考古通説』1958—2、『考古』1965—4によるが、穿孔具の実測図は掲載されておらず、詳細は明らかでない。
- 19 蜂屋晴美「終末期石器の性格とその社会」『古文化論叢——藤澤一夫先生古稀記念論集』 1985 石錐先端部欠損部径と石製穂摘具紐孔の最小径・上面径・回転使用痕径の関係を示して、石錐の穿孔使用対象を決定している。
- 20 福岡県教育委員会『曲り田遺跡』I 1983 p.178に示したものである。
- 21 福岡県田川郡赤村所在合田遺跡では1984年夏に、板付Ⅰ式併行期の松菊里円形住居跡に酷似する住居跡が調査され、北九州市八幡西区門田遺跡（梅崎恵司他『門田遺跡』北九州市教育文化事業団1979）では3軒の同類住居跡がみられ、更に福岡市有田・小田部遺跡、行橋市下稗田遺跡でもその変形と考え得るタイプが発見されている。別に詳論を準備中であるので、ここでは指摘に留める。
- 22 森貞次郎・岡崎敬「1 福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1972
- 23 後藤直「朝鮮系無文土器」『三上次男博士頌寿記念論集』 1979
- 24 長崎県礫石原遺跡の扁平片刃的な石斧、石のみ状の細身柱状石斧、柱状片刃石斧については、九州大学蔵品の中で実見した。原山出土の擦り切り孔の石製穂摘具や扁平片刃的な石斧とともに、機会を得て考察を加えたいと切望している次第である。

追註) 本論脱稿後、下関市教育委員会『綾羅木郷遺跡』1981 の中に、磨製穿孔具出土例を見出した。水島稔夫氏指摘のS-808をはじめとして、S-1163・S-1220・S-1405等を含めた4点は確実に穿孔具であり、更に、S-291・(579頁の)41の2点も可能性が強い。また、図示されないが、砥石転用品の中に環状石斧用穿孔具が在るらしい。これらは綾羅木Ⅲ～Ⅳ期（弥生前期後葉～中期前半）のもので、磨製穿孔具九州第2類の時期に相当するが、S-1405は九州第1類の典型例に酷似する。

国分直一氏はこれらの多くを性的シンボル（陽形）とするが、筆者は穿孔具と断定するものである。

## 4. 出土鉄片の金属学的調査 (II)

日吉製鉄史同好会 佐々木稔, 村田朋美, 伊藤 薫

### 1. いきさつ

前年度の調査報告第9集で、16号住居跡の床面近くで出土した板状鉄斧様鉄器の表面から、小さく採取した鍍片の金属学的調査結果を報告し、素材の地金は鉄鉱石を原料とする鋼で、鍛造品であるとの推定を述べた。<sup>(1)</sup>材質をさらに明確にする目的で、再度小鍍片を採取し、調査を行ったが、その中間結果を以下に報告する。

### 2. 鉄器試料と調査方法

上述の「石崎曲り田遺跡-II」(中巻)に、試料鉄片が夜白期のものであることがほぼ確実と述べられており、現在のところわが国最古の鉄器といえる。形状は幅4cm弱の板状鉄斧の頭の部分と推定されている。<sup>(2)</sup>厚さは約4mmである。この頭部外縁の端部から小さく鍍片を採取した。これを樹脂に埋め込み、鉄片頭部の縦断面が現れるように研磨した。顕微鏡観察を行ってから、鍍層中の珪酸塩質の異物をEPMA等で分析した。

### 3. 調査結果と考察

鍍片断面のマクロ組織を、写真1に示す。模式図にあるように、黒鍍層が残っていて、鍍試料としては決して悪くないように見える。内部には大きな空隙が生成し、そこでは赤鍍が成長している。このような内部空隙の生成による膨みと、金属鉄が鍍に変わったときの体積膨張を考慮すれば、もとの鉄片の厚みは3mm以下ではなかったかと思われる。

鍍層の代表的なマイクロ組織を示すと、写真2, 3のようである。マクロ組織では黒鍍層に見えた部分も赤鍍が細脈状に入っていて、黒鍍は島状に分断されている。地中での保存環境を反映しているのかも知れない。

細脈状に入った赤鍍の中には、微小な暗灰色の結晶片が多数包含されている。これらは珪酸塩鉱物で、鉄器がさびる過程で周囲から二次的に混入してきたものと、もとの鉄地金の中にあつた珪酸塩質非金属介在物の2種が考えられる。そこでこれらの珪酸塩鉱物をEPMAで丹念に分析してみた。代表的な結果の2例を、写真4, 5に示す。前者の反射電子像(BSE)で

見られる結晶の中に、K, Al, Siが検出されるものと、Na, Al, Siが検出されるものがある。これらは長石類の破片と判定される。明らかに二次的混入物である。後者の写真5は、上述の写真3bの囲み部分を分析したものである。ここでは長石類の他にCa, Al, SiならびにCa, Mg, Al, Siを含む鉱物が存在する。これらはざくろ石の類ではないと思われる。鑄片断面で分析した珪酸塩質鉱物には長石類が圧倒的に多く、ざくろ石類は少なかった。

上述の珪酸塩質鉱物のほかに、形状と組成の異なる小結晶が2個見出された。その1例を写真6に示す。※印を付した横長の暗灰色の鉱物は、加工を受けて変形した鋼中非金属介在物に形状がよく似ている。また周りの鑄も黒鑄で、二次的な混入物である可能性も少ない。この結晶の含有元素をエネルギー分散型X線分析装置で調べたのが右側の図で、SiとFeが検出されている。介在物であればFeO-SiO<sub>2</sub>系、天然鉱物であればFe分の多いめのう(SiO<sub>2</sub>)<sup>(3)</sup>のようなものが考えられる。結晶が小さすぎて、どちらとも判定できない。

古代の中国で開発された炒鋼法では、鋼製造の過程で石灰質の造滓材(貝灰漆喰)が使用されている。したがって鋼中に残留するスラグ(それは珪酸塩質の介在物として見出される)は、一般にCaO-FeO-MgO-K<sub>2</sub>O-Na<sub>2</sub>O-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系の珪酸塩である。その一例を示したのが、写真7である。これは門田遺跡の27号甕棺墓(弥生中期後半と推定)から出土した鉄戈の鑄片を分析した結果で、試片は本調査対象の、鉄器鑄片試料と同程度の大きさであり、その黒鑄層の中からわずか1個見付かった介在物である。Ca, Fe, K, Al, Siが強く検出されているので、CaO-FeO-K<sub>2</sub>O-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系の珪酸塩であることがわかる。従来の分析例からいって、鉄戈に使用された地金は炒鋼と判定することができる。

鉄戈の例を挙げた理由は、介在物の組成から鋼の製造法(精製法といった方が理解しやすいかも知れない)が推定できること、そしてこれと同様組成の介在物がもし本調査対象の鉄器鑄片に見出されるならば、使用地金は炒鋼であり、舶載の経路を検討する上で基礎的な資料になると考えたからである。

残念ながら、今回採取の鑄片からは介在物を見付け出すことができなかった。しかしこれは使用された鉄地金が清浄であることを表わしている。このような清浄な鋼は、精製の処理を行わない限り製造できるものではない。縄文晩期と推定されるこの鉄器の鋼製造法を解明することは、きわめて重要な意味をもっている。さらに調査を続ける予定である。

## 4. まとめ

16号住居跡の床面近くで発掘された小型鉄斧様鉄器の頭部に相当する箇所から鑄片を小さく採取して、金属学的調査を行なった。鑄片の内部には長石類やざくろ石類の多数の破片が見出されたが、非金属介在物は発見されず、もとの鋼は非常に清浄な鋼であると推定された。しか

し介在物が見付からないことによって、鋼の製造方法の解明は不成功に終わった。今後の調査が必要と考える。

#### 引用文献

- 1) 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告『石崎曲り田遺跡Ⅱ』(1984.3), p.429
- 2) 同上書p.425
- 3) 佐々木稔, 村田朋美: 「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」『季刊考古学』No.8, (1984.7), 雄山閣

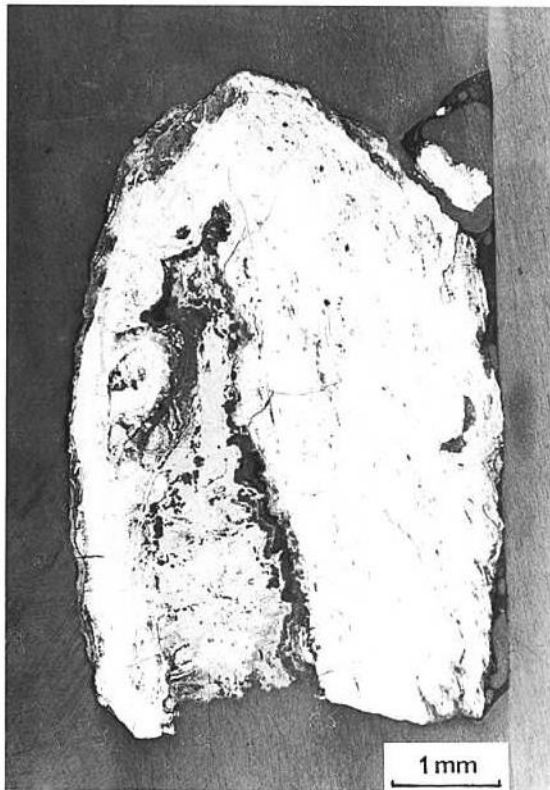
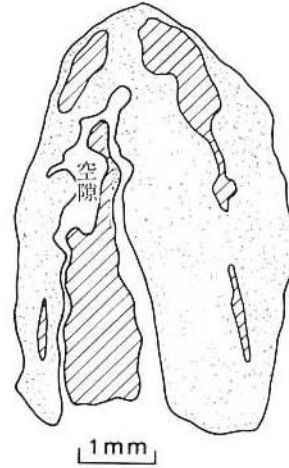
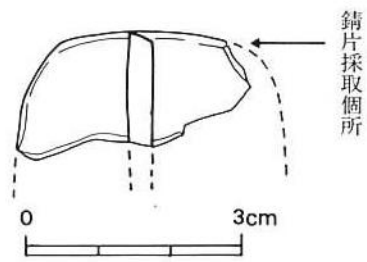
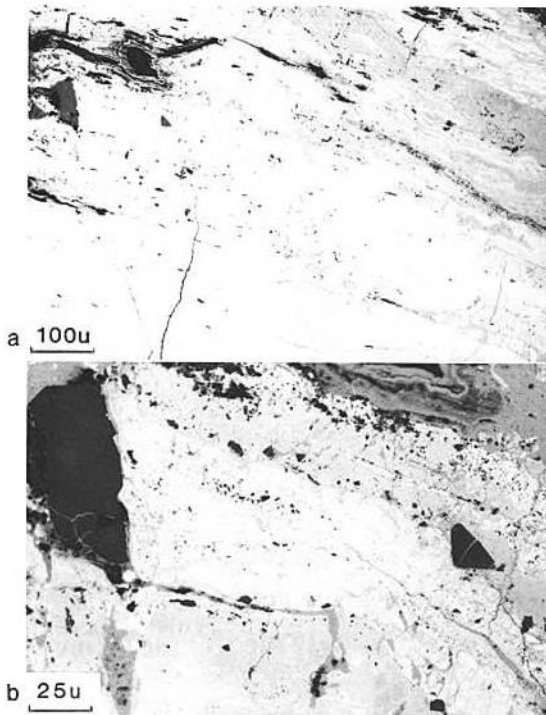


写真1 採取した鋳片の断面のマクロ組織

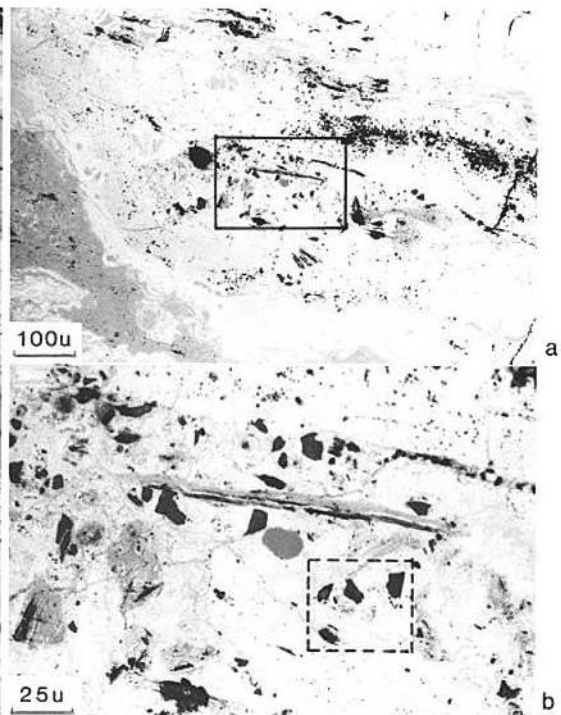


斜線部は赤錆，黒点部は黒錆



a) や、明るい灰色は黒錆層。灰色の赤錆が細脈状に多数入り込んでいる。  
b) 上の写真の左上部分拡大。珪酸塩鉱物の小破片が赤錆層中に分散している。

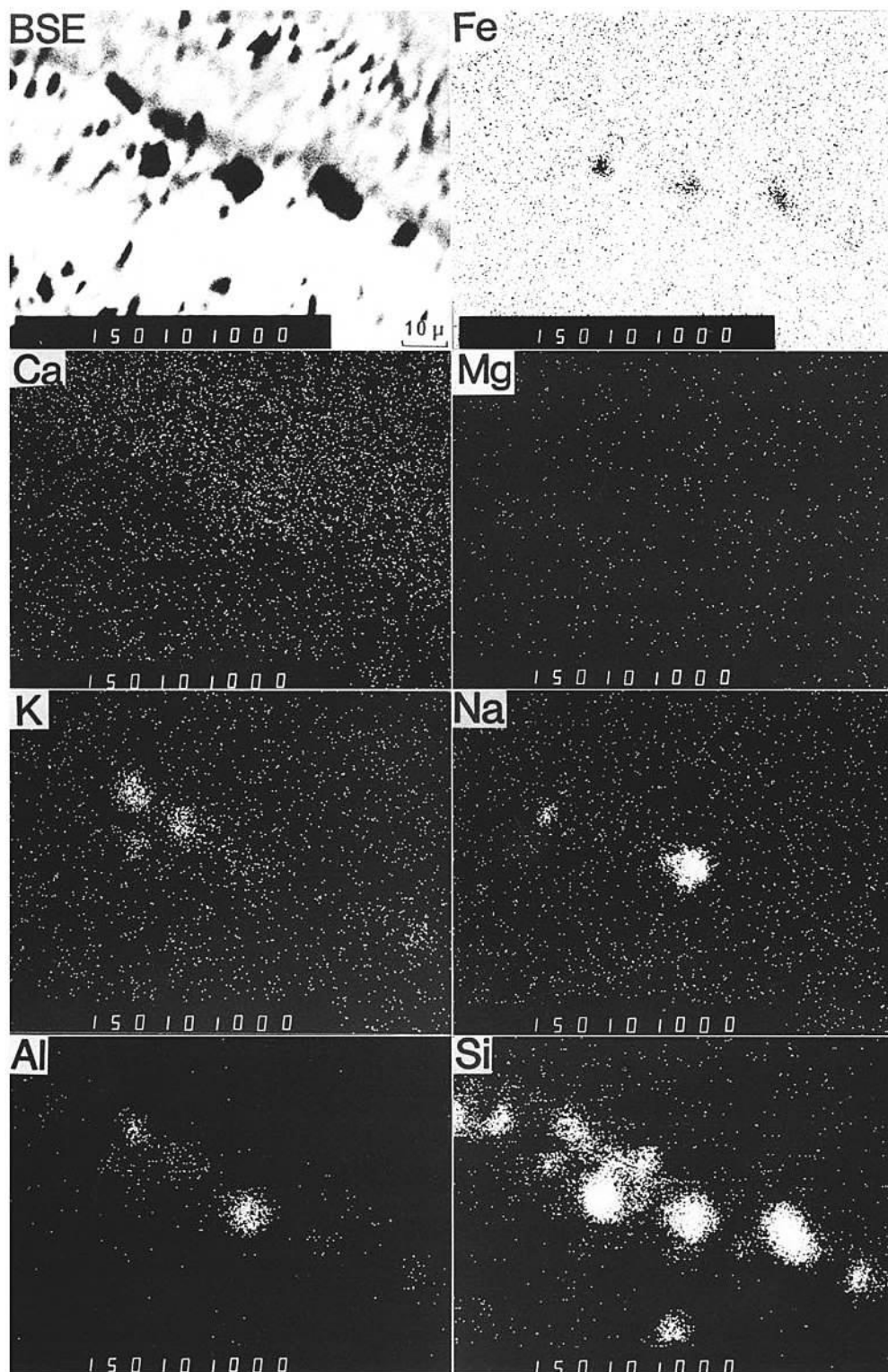
写真2 鋳片のミクロ組織



a) 赤錆化した部分の空隙(亀裂)と珪酸塩鉱物の破片(暗灰色)。  
b) 上の写真の囲み部分を拡大。点線の囲み部分はEMPAで分析(写真5参照)。

写真3 鋳層中の岩石鉱物の破片

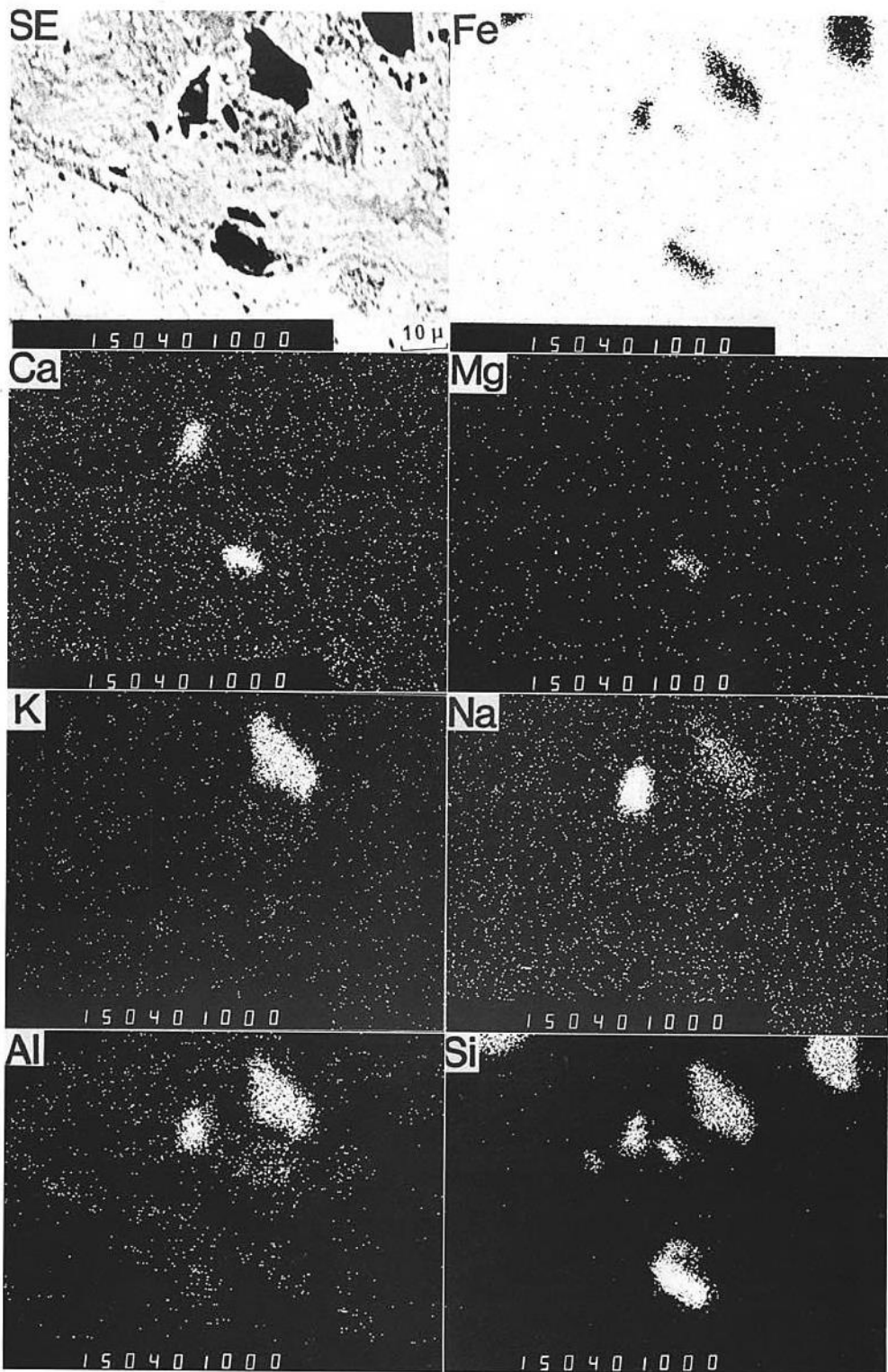




BSE) 反射電子像。

K, Al, Si ならびに Na, Al, Si が検出される 2 種の珪酸塩鉱物がある。いずれも長石類と推定。

写真 4 錆層中岩石鉱物破片の EPMA 像 (I)



SE) 2次電子像。

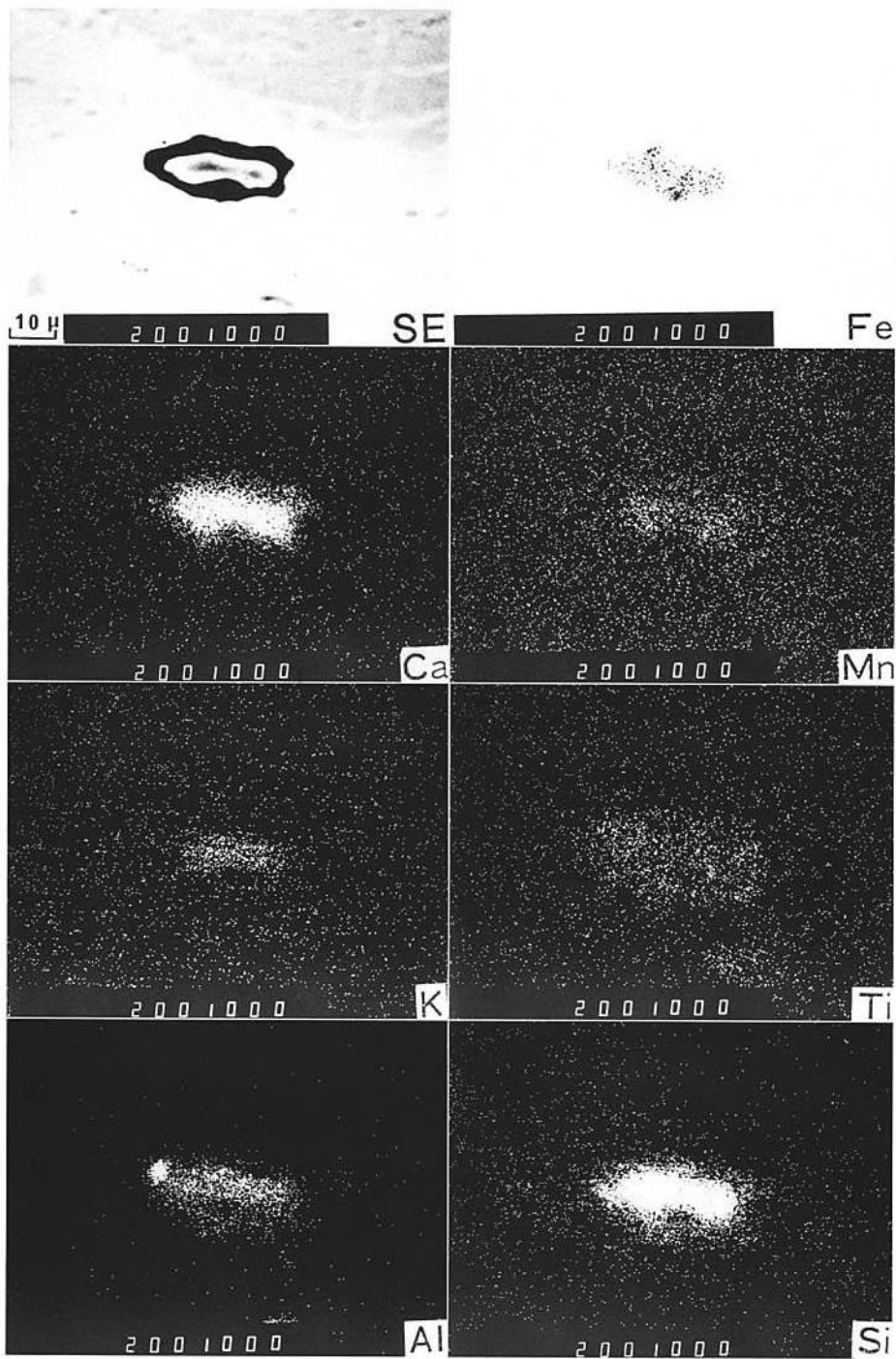
長石類のほかCa, Al, SiならびにCa, Al, Mg, Siが検出される結晶がある。  
ざくろ石の類(たとえば $3\text{CaO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 3\text{SiO}_2$ )ではないかと思われる。

写真5 錳層中岩石鉱物破片のEPMA像(Ⅱ)



※印は非金属介在物に似た形状をもつ鉱物。SiとFeが検出されている(エネルギー分散型X線分析法による)。

写真6 非金属介在物に似た形状の鉱物結晶



炒鋼に共通して見られるCaO-FeO-K<sub>2</sub>O-AlO<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系の非金属介在物。少量のMnOとTiO<sub>2</sub>を含んでいる。なおAlが強く検出される個所には空隙にめり込んだアルミナ研磨材がある。

写真7 鉄戈鍔片中の非金属介在物のEPMA像  
(鉄戈は門田27号甕棺出土)

### Ⅲ. おわりに

板付・菜畑・曲り田遺跡等における最近の調査結果は、これまで縄文晩期後半期と考えられていた段階で既に水稲耕作をはじめとして弥生文化を構成する諸要素が整っており、弥生時代早期と規定すべきものであることを示している。

以上のことについて「日本における稲作の開始と発展」というテーマをとりあげ、土器論を中心としながら、縄文時代晩期から弥生時代前期末までの全般的な問題を論じた。

さらに「紡錘車の研究——我国稲作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開——」、「磨製穿孔具集成」というテーマをとりあげ、弥生文化成立にとっての大きな要因である大陸・朝鮮との関係について、外来的要素が確實といえる紡錘車・穿孔具を論じた。

曲り田遺跡においてはきわめて良好な資料に恵まれたこともあり、弥生文化成立期の諸問題についてかなり具体的に論点を深められたのではないかと考えている。しかしながら時間的制約もあって、各テーマともややしりすぼまりの傾向にあることは否めない。これらの点に関しては追補・修正すべき点は今後検討を加えていきたい。

又当初は、単孔石包丁の系譜、弥生時代早期に特徴的な刃部・稜等にやや丸味を残した扁平片刃石斧・鑿形の方柱状石斧等（例えば第17図に示した原山遺跡出土の扁平片刃石斧等）の問題もとりあげる予定であったが、今回は断念せざるを得なかった。今後機会があったら論じるべき問題であろう。

鉄器の金属学的調査については佐々木稔・村田朋美・伊藤薫氏により継続中である。素材の地金は鉄鉱石を原料とする鋼で鍛造品であることは判明しているが、佐々木氏等はさらにすすんで鋼の製造法解明まで分析を行ないたいとのことであり、今後の調査結果に期待したい。

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集

石崎 曲り田遺跡 III

昭和60年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 隆文堂印刷株式会社  
北九州市門司区畑田町1番1号